

政治、恋愛、教育

メアリ・ウルストンクラフトの書簡体文学

Politics, Love, and Education

Mary Wollstonecraft's Epistolary Narrative

平倉 菜摘子

Natsuko HIRAKURA

早稲田大学大学院教育学研究科

博士学位申請論文

2022年3月

## 目次

目次	1
序論	6
<b>第1部 手紙と文学、手紙の文学</b>	<b>10</b>
<b>第1章 ウルストンクラフトの〈手紙〉</b>	<b>10</b>
1 ウルストンクラフトの私的書簡	13
1-1 妹宛ての手紙	13
1-2 恋人宛ての手紙	15
1-3 夫宛ての手紙	19
2 ウルストンクラフトの公的書簡	23
3 ウルストンクラフトの書簡体文学	27
<b>第2章 書簡体の語り</b>	<b>33</b>
1 文学的書簡と書簡体文学	33
2 書簡体の語りに関する理論的研究	37
2-1 アルトマンの「書簡性」研究	37
2-2 カウフマンの「恋愛の書簡の言説」研究	41
<b>第3章 フランス革命期における女性の公開書簡</b>	<b>46</b>
1 公開書簡というジャンル	46

2	フランス革命論争とイギリス女性作家たち	50
2-1	アナ・レティシア・バーボールドの公開書簡	53
2-2	キャサリン・マコーリの「男性的」な語り	56
2-3	ヘレン・マライア・ウィリアムズの手紙ルポルタージュ	59
<b>第2部 ウルストンクラフトの手紙文学</b>		64
<b>第4章 論敵への手紙—『人間の権利の擁護』</b>		64
1	教育者の語り	65
2	機知・揶揄	71
3	騎士道精神批判	77
3-1	ジャーナリスト的戦略	80
3-2	ジェンダー・ロールの反転	84
<b>第5章 恋人への手紙—『北欧からの手紙』</b>		92
1	北欧旅行の目的と成果	95
2	「男性性」の多義性	101
3	多声的な女性の語り	109
3-1	文学的モチーフ	111
3-2	歴史的モチーフ	113
4	母の語り	117
4-1	母娘の連帯感	120
4-2	私的な声から公的な声へ	122

第6章 娘への手紙—『マライア』	128
1 ウルストンクラフトとコンダクト文学	130
1-1 父から娘たちへの手紙	132
1-2 母から娘たちへの手紙	135
2 マライアの教育書簡	138
3 マライアの公開書簡	144
結論	157
注	163
引用文献 (Works Cited)	180
参考文献 (Works Consulted)	200

- ・ 本論文におけるウルストンクラフトの著作からの引用は、ジャネット・トッド及びマリリン・バトラー (Janet Todd and Marilyn Butler) 共編、『メアリ・ウルストンクラフト全集』 (*The Works of Mary Wollstonecraft*, 1989) に拠り、本文中の (            ) 内に巻番号及び頁数を入れて示す。邦訳は原則として筆者による。
- ・ 本論文におけるウルストンクラフトの書簡からの引用は、ジャネット・トッド (Janet Todd) 編、『メアリ・ウルストンクラフト書簡集』 (*The Collected Letters of Mary Wollstonecraft*, 2003) に拠り、本文中の (            ) 内に頁数を入れて示す。邦訳は筆者による。
- ・ 本論文で取り上げる作品のうち、邦訳のあるものは以下のように表記する。
  - ① *Thoughts on the Education of Daughters*. 1787. 『娘達の教育に関する考察』
  - ② *A Vindication of the Rights of Men*. 1790. 『人間の権利の擁護』

- ③ *A Vindication of the Rights of Woman*. 1792. 『女性の権利の擁護』
- ④ *Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*. 1796.  
『北欧からの手紙』
- ⑤ *The Wrongs of Woman; or, Maria*. 1798. (未完、死後出版)  
『女性の虐待、あるいはマライア』(初出の後は『マライア』と略記)
- ・ 本論文で取り上げる作品のうち、邦訳のないものは以下のように表記する。
- ⑥ *Mary, A Fiction*. 1788. 『メアリ』
- ⑦ *Original Stories from Real Life*. 1788. 『実生活実話集』
- ⑧ *The Female Reader*. 1789. 『女性読本』
- ⑨ *An Historical and Moral View of the Origin and Progress of the French Revolution*.  
1794. 『フランス革命の起源と発展に関する歴史的・道徳的考察』  
(初出の後は『フランス革命論』と略記)
- ⑩ “The Cave of Fancy.” 1798. (未完、死後出版) 「夢幻の洞窟」
- ⑪ “Letter on the Present Character of the French Nation.” 1798. (未完、死後出版)  
「フランス国民の現状に関する書簡」
- ⑫ “Fragment of Letters on the Management of Infants.” 1798. (未完、死後出版)  
「幼児の扱いに関する書簡の断片」

## Abbreviations

- GI* Imlay, Gilbert. "Wollstonecraft's Commission from Imlay." Mary Wollstonecraft, *Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*, edited by Tone Brekke and Jon Mee, Oxford UP, 2009, pp. 135-36.
- LB* Wollstonecraft, Mary. "Letter to the Danish Prime Minister, Count Bernstorff." Mary Wollstonecraft, *Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*, edited by Tone Brekke and Jon Mee, Oxford UP, 2009, pp. 137-39.
- L* *The Collected Letters of Mary Wollstonecraft*. Edited by Janet Todd, Allen Lane, 2003.
- MM* Wollstonecraft, Mary. *Mary, A Fiction and The Wrongs of Woman; or, Maria*. Edited by Michelle Faubert, Broadview Press, 2012.
- W* *The Works of Mary Wollstonecraft*. Edited by Janet Todd and Marilyn Butler, Pickering and Chatto, 1989. 7 vols.

## 序論

メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-97) は 18 世紀末のイギリスで活躍した多才な著述家である。女性の自立を史上初めて体系的に論じた『女性の権利の擁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792) の出版により、早くから社会思想史に確固たる足跡を残した彼女は、やや遅れて文学史においてもフェミニズム文学の母、あるいは小説家メアリ・シェリー (Mary Shelley, 1797-1851) の母として名を馳せることになった。もともと、ジャネット・トッド (Janet Todd) 及びマリリン・バトラー (Marilyn Butler) の編集によるウルストンクラフト全集の刊行から 30 年を経た現在においても、研究の主流は依然として原フェミニズム思想を含む広義の社会思想と言っても過言ではない。<sup>1</sup> また、文学的な観点からの研究に関して、フェミニズム文学の母としてのウルストンクラフトが後世の女性作家に与えた影響を指摘するものが目立つ。<sup>2</sup> すなわち、ウルストンクラフト研究においては、第 1 の主題ともいえるべき社会思想はそれ自体で存在し得るが、第 2 (以下) の主題である文学に関しては、第 1 主題なしには成り立たないという構図が成立しているように思われる。

もちろん、第 1 主題たる社会思想、とりわけ原フェミニズム思想の創始者としてのウルストンクラフトの重要性は論を俟たない。また、第 1 主題と第 2 主題を同等に扱う研究—ウルストンクラフトの社会思想と文学を、彼女の「革新的な人生」(Todd, *Revolutionary Life*) に集約させる形で論じる、伝記的あるいはライフ・ライティング的な研究—が盛んであることを忘れるわけにはいかないだろう。<sup>3</sup> しかしながら、文学を軸とした研究、とりわけウルストンクラフトの文体やレトリック等、広義の語り (narrative) に的を絞った研究となると、層が厚いとは言い難い。<sup>4</sup>

本博士論文は、原フェミニズム思想の創始者、及びフェミニズム文学の母という側面が強調されることの多いウルストンクラフトの著作を、ヨーロッパにおいて長

い伝統を持つ書簡体文学 (epistolary literature)、及び書簡体の語り (epistolary narrative) という観点から考察することにより、文学史における彼女の位置づけに新たな光を当てようとする試みである。

ウルストンクラフトが生きた 18 世紀は「手紙の時代 (Age of Letters)」(Goodman 2009) と呼ばれ、イギリスを含むヨーロッパ諸国では文通を基盤とする公共圏 (public sphere) が活気づき、「手紙 (文芸) 共和国 (Republic of Letters)」(Goodman 1994; Cook 1996) や、北アメリカを含む「手紙 (文芸) 帝国 (Empire of Letters)」(Bannet 2005) ともいうべき様相を呈していた。前世紀まで特権階級の占有的なコミュニケーションの手段であった手紙は、一般市民のための模範文例集の流通や郵便制度の拡大により、広く社会に浸透していく。また、18 世紀のメディア革命ともいうべき印刷文化の隆盛により、手書きの手紙は活字という新たな媒体を得て、新聞、定期刊行物、伝記、小説といった文学ジャンルの誕生と発展を促す (King 2018)。この文学的潮流の中で、従来、公的な言説の産出に参与することが難しかった女性たちも、私的な言説とされる手紙を自己表現の場としつつ、次第に手紙の形式を借りた言説を公的な場に送り出すようになる。ウルストンクラフトはこの時代における「もっとも傑出した手紙の書き手の 1 人」(Todd, Introduction, L ix) であった。

18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのイギリス女性作家と手紙・書簡体文学に関する代表的な研究としては、メアリ・A・ファヴレット (Mary A. Favret) の『ロマン主義的文通—女性、政治、手紙のフィクション』(*Romantic Correspondence: Women, Politics and the Fiction of Letters*, 1993)、及びニコラ・J・ワトソン (Nicola J. Watson) の『革命とイギリス小説の形式 1790-1825 年—傍受された手紙、中断された誘惑』(*Revolution and the Form of the British Novel, 1790-1825: Intercepted Letters, Interrupted Seductions*, 1994) が挙げられる。前者はフランス革命論争を機にイギリス女性作家が書簡形式を借りて政治的言説に参入する経緯を明らかにしたものであり、後者はイ



ギリス女性作家の著述活動がジャンルとしての書簡体小説に変質をもたらした経緯を詳細に検証している。上記 2 作は政治思想的立場を異にする一連の女性作家を論じる中で、ウルストンクラフトも取り上げている。ファヴレットはウルストンクラフトの『北欧からの手紙』(*Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*, 1796) に 1 章を割き、この書簡体旅行記のビジネス性を論じている (Favret, *Romantic Correspondence* 96-132)。また、ワトソンはジャン=ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-78) の『新エロイーズ』(*Julie; ou, La Nouvelle Héloïse*, 1761) における感受性のプロットを換骨奪胎したイギリス女性作家の 1 人としてウルストンクラフトを取り上げ、彼女の未完の遺作『女性の虐待、あるいはマライア』(*The Wrongs of Woman; or, Maria*, 1798) を中心に論じている (Watson 23-68)。いずれもフランス革命期のイギリス女性作家の著述活動を俯瞰する上で必須の古典的研究であるが、ウルストンクラフトの手紙・書簡体文学に的を絞って総合的に論じた研究は、管見の限り存在していない。

本博士論文では、ウルストンクラフトの手紙・書簡体文学を私／公、あるいはノン・フィクション／フィクションに二分するのではなく、宛先・受取人 (addressee) を軸にして論じる。不在の「あなた」への呼びかけを前提とする書簡体の語りによって、ウルストンクラフトがあるときは直接的に、またあるときは語り手を通じて特定の他者との関係を模索しつつ、独創的な〈声〉を確立する経緯を明らかにしたい。

本博士論文は以下の通り、2 部 6 章から構成される。

第 1 部では手紙と文学の関係、及び手紙の文学というジャンルについて考察する。第 1 章ではウルストンクラフトの手紙を 3 種類に分けて検証し、手紙の執筆 (letter-writing) という行為がウルストンクラフトの著述 (writing) の基盤をなしていることを確認する。第 2 章では書簡体の語りに関する歴史的・理論的研究を概観

し、ウルストンクラフトの書簡体の語りを検証する上で有用な観点を浮き彫りにする。第3章では公開書簡 (open letter) というジャンルの歴史的意義を検証した上で、フランス革命論争におけるイギリス女性作家の活動に光を当てる。代表的な例として、詩人・教育者のアナ・レティシア・バーボールド (Anna Letitia Barbauld, 1743-1825)、歴史家のキャサリン・マコーリ (Catharine Macaulay, 1731-91)、そして詩人・小説家のヘレン・マライア・ウィリアムズ (Helen Maria Williams, 1759-1827) を取り上げ、この3人からウルストンクラフトが継承した要素を検証する。

第2部ではウルストンクラフトの書簡体作品を個別に分析する。第4章では〈論敵への手紙〉として『人間の権利の擁護』 (*A Vindication of the Rights of Men*, 1790) を取り上げ、ウルストンクラフトがこの公開書簡において政治家エドマンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) に対峙する中で構築した新たな文学的人格を、教育者の語り、機知・揶揄、そして騎士道精神批判という3つの観点から考察する。第5章では〈恋人への手紙〉として『北欧からの手紙』を取り上げ、実在の恋人宛ての私的書簡と並行して綴られたこの書簡体旅行記にウルストンクラフトが文学的虚構を織り込み、かつ語り手に男性性と女性性の混在する〈声〉を与えることで、公開書簡の要素を含む独創的な恋愛書簡文学を創り上げたことを実証する。第6章では〈娘への手紙〉として『マライア』を取り上げ、ウルストンクラフトが同時代の慣習的なコンダクトブック (conduct book) に頻出する〈親が子に宛てた教育目的の手紙〉という形式を換骨奪胎し、革新的な女子教育思想を展開していることを明らかにする。その上で、この教育書簡をある種の公開書簡に昇華するにあたり、彼女が駆使した語りの技法を検証する。

結論として、〈論敵への手紙〉〈恋人への手紙〉〈娘への手紙〉に見られる書簡体の語りの連続性・発展性を指摘し、ウルストンクラフトの文学的な成長を明らかにする。

## 第1部 手紙と文学、手紙の文学

第1部では手紙と文学の関係、及び手紙の文学というジャンルについて考察する。第1章ではウルストンクラフトの手紙を3種類に分けて検証し、手紙の執筆という行為がウルストンクラフトの著述の基盤をなしていることを確認する。第2章では書簡体の語りに関する歴史的・理論的研究を概観し、ウルストンクラフトの書簡体の語りを検証する上で有用な観点を浮き彫りにする。第3章では公開書簡というジャンルの歴史的意義及びフランス革命論争におけるイギリス女性作家の活動を検証し、ウルストンクラフトが彼女たちから継承した要素を明らかにする。

### 第1章 ウルストンクラフトの〈手紙〉

現在もっとも浩瀚な『メアリ・ウルストンクラフト書簡集』(*The Collected Letters of Mary Wollstonecraft*, 2003)には354通の手紙が収められている。これらはウルストンクラフトが特定の相手に宛てて書き、先方に届いた手紙であり、彼女の死後、夫ウィリアム・ゴドウィン(William Godwin, 1756-1836)を始めとする歴代の編集者によって収集され、出版に至ったものである。もちろん、これらは彼女が生前に書いた手紙の一部をなすに過ぎない。このほかに、宛先・受取人に届いたものの、当人あるいは近親者によって処分された手紙がある。その中には、ウルストンクラフトが1790年代初頭に「理性的な欲望」(L 206)を抱いたスイス人画家ヘンリ・フューズリ(Henry Fuseli, 1741-1825)宛ての手紙の一部のように、受取人に読まれずに終わったものも存在する(Todd, Introduction, L xv-xvi)。また、処分に至らずとも、紛失や盗難等の末路を辿った手紙もあり得よう。さらに、現存する手紙にしても、ゴド

ウィンによる一部削除が施されたものも目立つ (L 235, 236, 270, 271, 274, 279, 314, 315, 316, 319, 320, 321, 329)。38年の人生においてウルストンクラフトが書いた手紙の全貌は、憶測の域を出るものではない。

とはいえ、この書簡集に収められた 354 通は、ウルストンクラフトと多様な宛先・受取人 (addressee) との関係のみならず、彼女自身と手紙の執筆という行為の関係についても多くを教えてくれる。また、同書簡集には収められていないが、後述の通り、公的機関に保管されている手紙もある。さらに、生前に特定の人物に送った手紙とは別に、ウルストンクラフトが手紙の形式を用いて、すなわち “you” に呼びかける形で書いた文章 (テキスト) も存在する。

ここで、手紙という著述物ないしはジャンルを、書き手と宛先・受取人との関係から ①私的書簡 (familiar letter)、②公的書簡 (formal / official letter)、③書簡体文学 (epistolary literature, epistolary fiction / non-fiction) の3つに大別してみよう。

上記①は、手紙の書き手と宛先・受取人が親しい (familiar) 間柄にあることを前提としている。社会学の用語を援用すれば、書き手が自らの私的領域 (private sphere)、特に家族の内的空間を軸とする親密圏 (intimate sphere) に属す相手に送る手紙である。ヨーロッパの主要言語であれば親称 (仏: tu, 伊: tu, 西: tú, 独: du) で呼ぶ相手、すなわち家族や親しい友人、恋人等に宛てて書くような打ち解けた手紙がこれに相当する。なお、英語に関しても、初期近代英語 (Early Modern English) の二人称には敬称の “you” に対して親称の “thou” が存在しており (Brown and Gilman 253)、後述の通り、18世紀にも “thou” (主格) や “thee” (目的格) が親称の呼びかけとして用いられる場合があった。<sup>5</sup>

上記②は、書き手からみて私的領域 (特に親密圏) に属さない相手に宛てた手紙である。ヨーロッパの主要言語であれば基本的に敬称 (仏: vous, 伊: Lei, 西: usted, 独: Sie) で呼びかける相手、例えば雇用関係にある人や公的機関に属す人、あるいは

未だ面識のない人に宛てた手紙がこの部類に入る。英語では“Sir/Madame”と呼びかける場合も多い。これらは「私的書簡」の範疇に入らないという点で、ひとまず「公的書簡」と訳すことにする。もちろん、日本語で「公的書簡」と言えば、通常は政府や会社等の公的機関が個人に宛てた手紙を指すが、ここでは個人が公人や公的機関に宛てた“formal”な、すなわち「儀礼的な」手紙も「公的書簡」と捉えることにしたい。なお、①②はいずれも相手からの返信を前提として書かれるという点で、文通の一環をなしている。

上記③の場合、手紙の書き手と呼びかけられる相手との間柄は、私的・公的、すなわち親称・敬称いずれの場合もあり得る。また、呼びかけられる相手は特定の個人に留まらず、一般の人々や、書き手の頭の中にしか存在しない人物（虚構）の場合もあり得る。書き手にとっての“you”が誰であれ、これらの手紙は書き手から“you”に直接送られることはなく、公的機関（出版社、新聞社等）を通じて出版（publish）されることを前提として書かれる。すなわち、これらは始めから“public”になること—〈公衆〉に読まれ、〈公〉のものとなること—を念頭に置いて書かれる手紙である。再び社会学の用語を援用すれば、これらは公共圏（public sphere）に送り出される手紙ともいえよう。<sup>6</sup>とすれば、これらも「公的書簡」と呼び得るが、手紙の書き手と“you”の間に原則として文通が成立しないという点で、上記②と同一のものとは言い難い。ゆえに、本論文では、始めから〈公〉のものとなることを前提に書かれた③をひとまず「書簡体文学」と称することにする。なお、18世紀においては①②が基本的に自筆であったのに対し、③は印刷された状態で読者のもとに届いたという違いも指摘しておく必要がある。

もっとも、手紙という著述物ないしはジャンルを上記のように分類することへの批判も多々あろう。手紙とはノン・フィクションの著述物であり、ゆえに①②のみが相当するという考え方もあるであろうし、私／公の境界線についても多くの疑問

を誘発することは間違いない。そもそも手紙を私／公に分けることが可能なのか、仮に可能だとしても、その作業にいかなる意味があるのかという根本的な問いが生じる。こうした批判や疑問について、ウルストンクラフトの手紙を手がかりとして考えることにしたい。

## 1 ウルストンクラフトの私的書簡

本節では、ウルストンクラフトの私的領域（主に親密圏）に属す人々のうち、2人の妹、恋人、そして夫に宛てられた手紙をそれぞれ検証する。

### 1-1 妹宛ての手紙

妹のイライザ・ビショップ (Eliza Bishop, 1763-c. 1829) 及びエヴェリーナ・ウルストンクラフト (Everina Wollstonecraft, 1765-1843) に送られたウルストンクラフトの手紙は、前述の書簡集に収められた 354 通のうち 49 通を占めている。上の妹イライザは産後鬱がもとで早くから夫と別居しており、下の妹エヴェリーナは生涯を通して独身であった。<sup>7</sup> 母親は早くに亡くなっていたため、長女ウルストンクラフトは家庭を顧みない父親や長兄エドワード (Edward Wollstonecraft, 1757-1807) に代わり、妹たちの面倒を見ることになる。「あなたたちにとっての母親になる」(L 139) という責任感から、妹宛ての手紙は説教調になる傾向が強いが、自らがどれほど苛酷な状況に置かれていても、妹たちに対しては希望を捨てず前向きに生きるようにという激励を、具体的な指示とともに綴ることが多い。その典型的な例が、ウルストンクラフトが貴族子女のガヴァネスとしてアイルランドに滞在していた時期の手紙に見られる。

Your situation has made me very uneasy – but I did not dwell on it when I saw no

remedy – now I have an offer to make you, will you come to Dublin, if I can get you into a reputable school?... Pray write to me directly – This plan delights me, do not raise any objection – and try in the intrim [sic] to perfect yourself in english [sic] and fancy works – I am not very well and I have many things to tell you – but the hope of seeing you has driven them out of my mind... (L 97)

ガヴァネスを辞して帰国したウルストンクラフトは、ロンドンで書評や翻訳の仕事をしてながら著述家の道を歩み始める。この時期の妹たち宛ての手紙には、彼女たちを学校教師やガヴァネスとして自立させる傍ら、末弟チャールズ (Charles Wollstonecraft, 1770-1817) を職に就けるために奮戦する様子も綴られている (L 138-39, 141-42, 151-52, 177-78, 179-80, 197, 199-201)。

ウルストンクラフトが革命下のフランスに飛び立った後、イライザとエヴェリーナはフランス語の勉強に励みつつ、姉からの招待の手紙を心待ちにしていたが、英仏間の戦争勃発により、文通がままならなくなる (L 248-49)。ようやく届いた姉からの手紙には、「私と子どもは元気です」(L 261) とあり、「メアリ・イムレイ」(L 262) という見慣れない署名が添えられていた。ウルストンクラフトはフランス滞在中に出会ったアメリカ人ギルバート・イムレイ (Gilbert Imlay, 1754-1828) と情熱的な恋愛関係に陥り、娘ファニー (Fanny Wollstonecraft, 1794-1816) を出産していたのである。<sup>8</sup> 学校教師やガヴァネスとして惨めな暮らしを余儀なくされていた妹たちは、姉が子連れでロンドンに戻ったのを知り、再び頼りたいと願う。しかしながら、その姉から「第三者の存在は家庭生活の幸福を壊してしまうものです」(L 290) という手紙が届いたことを契機に、態度を硬化させる (L 291, n. 656)。実のところ、「家庭生活の幸福」はウルストンクラフトの強がりであり、イムレイは既に「旅回りの劇団の若い女優」(Godwin, *Memoirs* 93) と関係を結んでいたのだが、イライザとエヴェ

リーナはその事情を知らず、姉が急に自分たちを見捨てたように感じたのである。とはいえ、イムレイと別れたウルストンクラフトが同僚ゴドウィンと恋愛関係に陥り、結婚を目前に控えた時期も、実家の家族（酒浸りの父、若い後妻、弟妹たち）を支えようと努める様子が妹たち宛ての手紙から浮かび上がる（L 403-05）。当時の女性には珍しく、男性保護者なしでポルトガル、アイルランド、フランス、北欧と大規模な旅を続けたウルストンクラフトが、女性職業作家という「新たな種族の最初の人」（L 139）となった後も、長女・長姉としての自覚を持ち、責任をまっとうしようとした様子が、国内外から妹たちに宛てて綴った手紙に顕著である。

## 1-2 恋人宛ての手紙

ウルストンクラフトがイムレイに宛てた手紙は、前述の書簡集に収められた 354 通のうち 78 通を占めている。その多くには、18 世紀中葉に隆盛を極めた感受性小説（*novel of sensibility / sentimental novel*）とも見紛うような語彙や表現が頻出する。研究者の間ではよく知られている通り、1793 年 4 月にパリでイムレイと出会う前のウルストンクラフトは、初の小説『メアリ』（*Mary, A Fiction*, 1788）において感受性を色濃く織り込んだテキストを試みる一方（Conger 35-60; 大石, 「優柔で、不安な女性の慈善」 1-14）、自らが書評子を務める文芸誌においては、同時代の作家、特に女性小説家が好んで用いる感受性言語を、「男性的」な理性や知性に欠ける幼稚で嘆かわしいものとして批判していた。その典型的な例が、著者不詳の小説『苦行』（*The Self-Tormenter; A Novel. In three vols. 12mo. p. 722. Price 9s. sewed. Wilkies. 1789*）に寄せた以下の書評（1789 年 6 月）に見られる。

A series of complicated incidents are thrown together in this novel to exhibit unnatural characters in strange situations. The language is affected, and the plot a most absurd



fabrication, in which fancy does not make amends for the absence of sense, nor interest force us to forget how far probability is lost sight of in a ridiculous display of false sensibility. (*W* 7: 119)

周知の通り、感受性は 18 世紀イギリスの思想・文化・文学に多大な影響を及ぼした概念である。主に英語圏の研究が明らかにしている通り、ウルストンクラフトの生涯及び全著作は、人間性を高める「善き／真の感受性」と人間性を墮落させる「悪しき／偽りの感受性」の関係、及び感受性言語とジェンダー的特性の関係を追求することに費やされたと言っても過言ではない (Barker-Benfield 1-36; Conger 1994; Myers, “Mary Wollstonecraft’s Literary Reviews” 82-98; O’Neill 107-23; Todd, *Sensibility* 110-28)。詳細は本論文で段階的に論じることとし、本節ではイムレイと出会う前のウルストンクラフトが「感受性」の悪しき面を「女性性」と結びつける当時の文学・文化的潮流に無縁ではいられなかったという点、及びそのような「女性的感受性」に満ちた言語から自身は距離を置こうとしていた点を確認するに留める。

ゴドフリー・フランク・シンガー (Godfrey Frank Singer) によれば、18 世紀中葉の書簡体感受性小説 (sentimental novel in letters) は若い未婚のカップルが繰り広げる恋愛・求婚 (amours and courtship) や、既婚のカップルによる嫉妬を孕んだ情事 (affairs) を描くことが多いが (Singer 134)、イムレイと出会って間もない頃 (1793 年 4 月から 5 月) に書かれたウルストンクラフトの手紙には、未婚のカップルを主人公とする書簡体小説のような、幸福感あふれる臨場感や躍動感が垣間見られる。

Yet, I shall not (let me tell you before these people enter, to force me to huddle away my letter) be content with only a kiss of DUTY – you *must* be glad to see me – because you are glad – or I will make love to the *shade* of Mirabeau, to whom my

heart continually turned . . . Hush! here they come – and love flies away in the twinkling of an eye, leaving a little brush of his wing on my pale cheeks. (*L* 223-24)

1793年9月、革命下のパリで恐怖政治が始まる。敵国人として投獄される恐れがあったウルストンクラフトを、イムレイは妻としてアメリカ大使館に届け出る。これは大使発行の証明書によってイムレイのアメリカ市民権をウルストンクラフトにも適用し、彼女を保護するための合理的措置であり、正式な婚姻を意味するものではなかった (*L* 230, n. 540; Todd, *Revolutionary Life* 239; Verhoeven 183; Wardle 192-93)。もとより、女性を男性の所有物とみなす慣習的な法律婚を是としなかったウルストンクラフトは、罪悪感なくイムレイと同居できる身分になったことを歓迎する。イムレイが仕事でパリを留守にするようになると、1日も早く一緒に暮らせることを願い、愛情あふれる手紙 (1793年12月) をしたためる。

Recollection now makes my heart bound to thee; but, it is not to thy money-getting face, though I cannot be seriously displeased with the exertion which increases my esteem, or rather is what I should have expected from thy character. – No; I have thy honest countenance before me – Pop – relaxed by tenderness; a little – little wounded by my whims; and thy eyes glistening with sympathy. – Thy lips then feel softer than soft – and I rest my cheek on thine, forgetting all the world. (*L* 234)

現存する私的書簡において、ウルストンクラフトが上記のように親称で呼びかける相手は、イムレイの他にはごくわずかである。<sup>9</sup> 彼女はイムレイへの手紙の中では気軽に「おしゃべり (chat, prattle)」 (*L* 236, 244) を楽しみつつ、それまでの自分とは打って変わったような言葉遣いをするようになる。

You have, by your tenderness and worth, twisted yourself more artfully round my heart, than I supposed possible. – Let me indulge the thought, that I have thrown out some tendrils to cling to the elm by which I wish to be supported. – *This is talking a new language for me!* – But, knowing that I am not a parasite-plant, I am willing to receive the proofs of affection, that every pulse replies to, when I think of being once more in the same house with you. – God bless you! (L 245; my emphasis)

ウルストンクラフトが異国で自分を救ってくれたイムレイとの関係におとぎ話のような要素を見出し、「私にとっては新しい言葉」を生み出すことに文筆家としての喜びを覚えるのももつともであろう。

その後、イムレイとの関係が変化するにつれ、ウルストンクラフトの「新しい言葉」には陰りが差し始める。特に 1794 年以降、去り行くイムレイに宛てて書かれた一連の手紙には「愛する人に捨てられた女性の嘆き」が顕著である。これは西洋古典文学（特に悲劇や叙事詩）における伝統的なモチーフだが、それを「愛する人から引き離された女性の嘆き」という形で発展的に継承し、さらに彼女たちの嘆きに書簡体という語りの形式を与えたのは、ローマ詩人オウィディウス（Publius Ovidius Naso, 43BC-AD17）であるとされている（Duncan F. Kennedy 217-18）。ウルストンクラフトの手紙に響くオウィディウス流の「女性の嘆き（female laments）」（Todd, *Revolutionary Life* 362）に関しては、本論文第 5 章で詳細に論じる。

この時期のイムレイ宛てのウルストンクラフトの手紙に顕著な、書き手の孤独な内面の本質を表現するような趣は、ルソーの自伝的作品、『告白』(*Les confessions*, 1782) や『孤独な散歩者の夢想』(*Les rêveries du promeneur solitaire*, 1782) をも思わせる。

Fatigued during my youth by the most arduous struggles, not only to obtain independence, but to render myself useful, not merely pleasure, for which I had the most lively taste, I mean the simple pleasures that flow from passion and affection, escaped me, but the most melancholy views of life were impressed by a disappointed heart on my mind. Since I knew you, I have been endeavouring to go back to my former nature, and have allowed some time to glide away, winged with the delight which only spontaneous enjoyment can give. – Why have you so soon dissolved the charm? (L 277)

ウルストンクラフトが公表した作品に顕著な社会的自我と、手紙（私的書簡）における自我の対立というロマン主義的な構図は、後世の読者を強く惹きつけた。しかしながら、イムレイ宛ての恋文がウルストンクラフトの手紙（私的書簡）の代表格として読み継がれてきた背景には、生前には主に理論的著作で名を知られていた彼女を、死後に「感受性の女性」として演出・編集したゴドウィンの存在があることを忘れてはならない。<sup>11</sup>

### 1-3 夫宛ての手紙

では最後に、そのゴドウィンに宛てたウルストンクラフトの手紙を概観してみよう。彼への手紙は、前述の書簡集に収められた 354 通のうち 113 通を占めている。ウルストンクラフトは 1795 年 6 月、イムレイとの関係に起因する自殺未遂（おそらくアヘンチンキ服毒）の直後に北欧に赴き（Todd, *Revolutionary Life* 286-87）、同年 10 月に帰国する。イムレイが手配したロンドンの住居にとりあえず身を寄せたものの（L 326, n. 691）、彼との関係に再び絶望し、2 度目の自殺未遂（パットニー橋から投

身) を起こす (L 327, n. 693)。救出された彼女はフィンズベリー・スクエア (Finsbury Square) にある友人クリスティ夫妻 (the Christies) 宅で心身の回復を待ち、1 ヶ月後にはそこを出て自らの住居を構え (L 331, n. 700)、イムレイに激情的な手紙 (私的書簡) を送る一方 (L 334-36)、『北欧からの手紙』を書き上げてその年の末に出版する (Godwin, *Memoirs* 101)。1796 年 1 月に同僚ゴドウィンと再会した彼女は、3 月にイムレイ宛ての最後の手紙を書く (L 338-39)。4 ヶ月後にはゴドウィンと文通を始め (L 342)、まもなく彼の家の近く、ジャッド・プレイス 16 番地 (16 Judd Place) に転居し、『マライア』の草稿を書き始める。ゴドウィンとの間に交わされた手紙の大半は使用人が持参したため、住所や郵便消印が記されていない (L 343, n. 716)。また、その多くは現代のソーシャル・メディアによる意思疎通を想起させるような、メモ書きに近いものである。例えば、「この天気では、食事に出かけることはできそうにないわ。帰宅の折に私の家に寄ってくださらない？お返事は要らないわ、きっと来てくださるでしょうから」(L 356) といった調子の手紙が 2 人の間を頻繁に行き来するようになる。

ウルストンクラフトの妊娠を機に 2 人は結婚し、ポリゴン 29 番地 (29 Polygon) に新居を構える。結婚後、一度だけ長期旅行に出かけたゴドウィンは、我が家の妻と義理の娘ファニー、そして妻のお腹の中の「ウィリアム」(L 416, n. 890) に愛情深い手紙を送っている。ウルストンクラフトも彼に応え、「ウィリアム坊や」(L 416) が元気なこと、この子の誕生を心待ちにしていることを伝えている。実際に誕生するのは後にメアリ・シェリーとなる女兒だが、夫妻は胎児が男の子だと考えていたのである。不在の夫に宛てた妻の手紙には、イムレイ宛ての手紙を特徴づけていた「女性の嘆き」は感じられない。もちろん、気分の振幅が大きいウルストンクラフトは、後にゴドウィン宛ての手紙でも激しい言葉を用いるようになるが、相手の不在の機会が限られていたこと、また母国で友人や同僚に囲まれて生活していたこと

もあり、異国における悲劇的な状況下で自我を表出するような手紙は見当たらない。

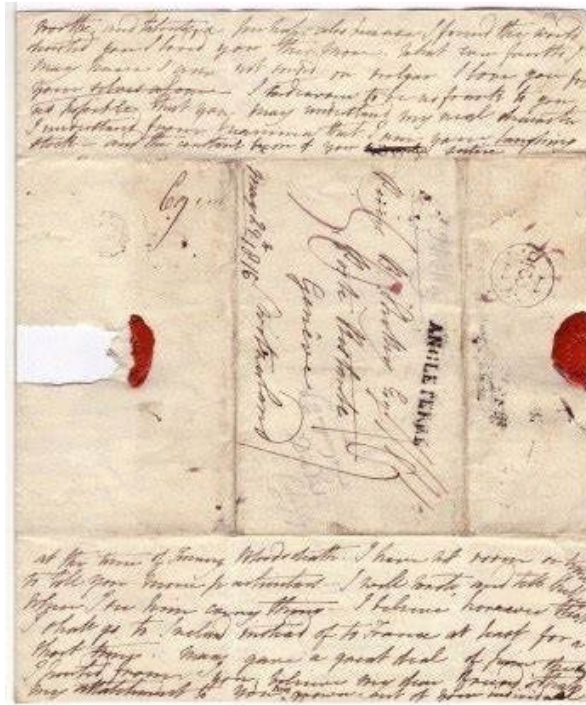
なお、ウルストンクラフトは状況に応じ、家族や友人・知人に対して「メアリ・イムレイ」(L 248, 262, 288, 338, 341)、「イムレイ夫人」(L 291, 292)、あるいは「メアリ・ゴドウィン」(L 411, 425, 434, 435)等、当時恋愛・婚姻関係にあった男性の庇護下にあることを示す署名を用いている。こうした手紙においては、落ち着いた、相手との適度な距離感を保った文体が見られる。自立への希求や、書くことで身を立てる女性という「新たな種族の最初の人」としての自意識がいかに強いウルストンクラフトといえども、世間体をわきまえる必要性を痛感していたことの証左といえよう。

以上の通り、ウルストンクラフトの私的書簡には、「あなた (you)」がいるからこそその「わたし (I)」という手紙上の人格、及びそれに適した文体が次々に現れる。同じ相手に宛てて書く場合でも、当然ながら、状況によって「わたし」が「あなた」に見せたいと願う自己は変化する。たとえ書き手が自己耽溺に陥る場合があったとしても、手紙は常に特定の「あなた」という他者を意識して綴られるのであり、ダイアログの一部をなしていることが前提となっている。この点が、日記におけるモノログ的な語りとの決定的な違いであると考えられる。<sup>12</sup>

もっとも、ウルストンクラフトの私的書簡には、モノログと見紛うような文章も珍しくはない。宛先・受取人に対する関心・配慮にもまして、自らの考えを文章によつて的確に表現しようとする旺盛な意欲が垣間見える。日常生活における手紙の執筆を、彼女は文章修行の一環と捉えていた節がある (Todd, Introduction, L xii)。例えば、ウルストンクラフトの私的書簡には、同時代の女性に顕著な日常生活の描写 (庭、室内装飾、買い物、ドレス、お茶会等) やゴシップ的な要素はほとんど見られない。彼女は手紙において日々の生活や自らの感情を単に描写するより、それ

らを劇的に表現する (dramatize) 傾向が強かった (Todd, Introduction, L xii)。ウルストンクラフトはまた、限られた紙面にできるだけ多くのことを表現しようとしたが、常に書き足りない思いに駆られ、署名の後、頻繁に長い追伸を添えている (L 262-3, 299, 333)。

ここで当時の郵便事情を確認しておこう。当時の人々は封筒を使用せず、紙に文面を書いて折りたたみ、表に出た部分に宛先・受取人を書いていた (図1)。<sup>13</sup>



(図1)

手紙の用紙が1枚のものはシングル・レター (single letter)、2枚のものはダブル・レター (double letter) と呼ばれ、郵便料金は基本的に受取人払いであった。ゆえに、手紙の書き手の中には、節約のため、複数の受取人を念頭に置いて大きな紙に数件の用事を書き、シングル・レターとして差し出す人もいた (星名 125)。また、特権階級 (国会議員等) は郵便料金を免除されていたため、一般の人々は彼らの署名入りの手紙 (frank) に自分の手紙を同封させてもらう形で、受取人に料金を支払わせ

ずに済む方法もあった(L 20, n. 48)。ウルストンクラフトも 20 代の頃、何度か “frank” の恩恵にあずかろうと試みている (L 20, 26, 30, 37, 91)。そのような機会に恵まれない人は、あらかじめ秘密のマークや文字を決め、それらを手紙の表面に書くことによって連絡する場合もあった。受取人はそれらを読み取って内容を理解し、手紙の受け取りを拒否して料金の支払いを免れたのである (星名 126)。手紙の執筆という行為を重要視していたウルストンクラフトは、秘密のマークに頼ることはなかったが、受取人への気遣いを常に忘れず、シングル・レターに収めるために「紙面の一番下まで (to the bottom of my paper)」(L 28, 35)、あるいは表面にまで書くことも少なくなかった (L 61, n. 137)。その点で、彼女の私的書簡は、18 世紀における模範的な手紙、すなわち「端的、視覚的、ほどよく詳細で、ほどよく距離を保った」(Todd, Introduction, L xi) 書き方からは程遠い。ウルストンクラフトは当時文通の基本とされていた紙面上の「おしゃべり」を楽しむ術を知らないわけではなかったが、新しい宛先・受取人を得るたびに、自らに文章の訓練を課していたように思われる。その傾向は、宛先・受取人が私的領域から公的領域へと拡大するにつれ、必然的に強まっていく。次節でその点を検証してみよう。

## 2 ウルストンクラフトの公的書簡

ウルストンクラフトの公的書簡に分類し得る手紙のうち、代表的なものは、ロンドンの出版業者ジョゼフ・ジョンソン (Joseph Johnson, 1738-1809) 宛ての手紙と、デンマーク首相ベアンストーフ伯爵 (Andreas Peter Bernstorff, 1735-97) 宛ての手紙であろう。前者は前述の書簡集に 17 通が収められており、後者 (1 通) は現在デンマーク政府外交文書課に保管されている。<sup>14</sup> 後者に関しては、第 5 章で詳細に論じることにしたい。

では、ウルストンクラフトとジョンソンの関係を概観しよう。彼に出会う前のウ



ウルストンクラフトは、20代半ばでロンドン北部のニューイントン・グリーン (Newington Green) に小規模の学校 (私塾) を開く。当時、学校教師は「上級召使 (upper servant) の一種」(W 4: 25) に過ぎず、高等教育を修めていない人間が務めることも稀ではなかった。彼女は妹2人と親友ファニー・ブラッドの協力を得て学校を経営し、自らも教師として働く (Todd, *Revolutionary Life* 56-58)。また、この時期に出会った非国教牧師リチャード・プライス (Richard Price, 1723-91) の影響を強く受け、理性・知性を重視した宗教観・教育観を抱くようになる (McKendry 146-54)。経営難で学校を閉じた後は友人の勧めで教師経験を文章にまとめ、初の著作『娘達の教育に関する考察』(*Thoughts on the Education of Daughters*, 1787) を上梓する。出版の労を取ったのが、ジョン・エイキン (John Aikin, 1747-1822) の言葉を借りれば、「書籍出版業の父」(Fallon 29) と呼ばれたジョンソンであった。その後、本章第1節でも言及した通り、アイルランド貴族子女のガヴァネスを務めて帰国したウルストンクラフトは、ジョンソンのもとで書評や翻訳の仕事をしながらか文章修行を積み、『人間の権利の擁護』を始めとする革新的な著作で名声を高めていく。彼の書店で出会う文人や思想家、政治家、芸術家との知的交流がウルストンクラフトにとって高等教育の役を果たしたと考えられよう。

ジョンソン宛てのウルストンクラフトの手紙はほぼすべてが「拝啓」(“Sir” “Dear sir” “My dear sir”) という言葉で始まり、仕事 (著作の執筆、書評、翻訳等) の進捗状況や、必要な資料の依頼等が、敬称にふさわしい、適度な距離を保った文体で綴られている。とはいえ、愛情深い父や兄に恵まれなかったウルストンクラフトに「予期せぬ親切」(L 159) を与えてくれたジョンソンは、「雇い主というより恩師 (mentor)」(Lyndall Gordon 126) に近い存在であったことは間違いない。ウルストンクラフトは彼が手配してくれたテムズ河南岸の「小さな家」で著述の仕事に邁進し、「孤独に疲れるとジョンソンさんのところに行き」、彼の書店で出会う人々との交流に知的な

楽しみを見出していく (L 141)。

ジョンソン宛ての手紙には、彼に感謝と信頼を捧げつつ、ウルストンクラフトが職業作家としての自覚とプライドを確立していく様子を読み取ることができる。例えば、『実生活実話集』(*Original Stories from Real Life*, 1788)の序文について、「あなたのご判断はだいたいにおいて理に適っていますけれど、とても賛同できません。ですから変更は加えませんでした」(L 142)と自らの意を押し通している。また、同じ手紙の中で、ジョンソンから依頼されたイタリア語翻訳に言及し、その職務を遂行できないと判断した理由を、次のように述べている。「もし手書きの原稿でなければ、こんなに簡単に怖気づいたりしなかったでしょう。でも、読みにくい筆跡や綴りの間違い、省略等は、仕事に着手する上で障害となります。自分がきちんとできないであろうことに取り組むのは耐え難いのです。無駄な試みに時間を失ってしまいますから」(L 143)。自分のイタリア語の知識の有無より、著者の筆跡や原稿の不備に不満がある、また、やっても無駄と思えることに貴重な時間を使いたくないという意見を、上司である編集者・出版者に堂々と主張しているのである。プロの仕事をするための条件を認識しつつあるといえるだろう。さらに、ジョンソンが創刊した文芸誌『分析的評論』(*Analytical Review*)の書評欄を担当することになったウルストンクラフトは、毎月大量の新刊を読む中で、程度の低い作品を「ゴミ (trash)」(L 156)と呼び、書評の仕事を進めるにあたって「私には主題を熟慮する権利があると思います」(L 157)と宣言している。ジョンソンの期待・要求に応え、驚異的な量の書評や翻訳をこなしつつ、自らの思考を鍛え、文章修行に励むウルストンクラフトの姿が、これらの手紙から浮き彫りになる。

ジョンソンを介してウルストンクラフトが広げた知的人脈ネットワークに関しては、聖ポール大聖堂の界隈にあったジョンソンの出版社兼書店が、「既存体制に対する批判的姿勢をもちながらも、集団的大衆行動と直結する急進主義運動とは明白に一線を

画した」(梅垣, 「1790年代イギリス」〈後〉 125) 存在であったことを想起する必要があるだろう。もともとイギリス国教の家庭に生まれ、少女時代には「(ウィンザー)大聖堂にいつも出かけています。礼拝が大好き」(L 33) と語っていたウルストンクラフトは、ニューイントン・グリーンでの学校教師時代にプライスと懇意になり、理性的非国教的な姿勢を身につけていたが、ジョンソン・サークルの知識人たちとの交流がその傾向に拍車をかけたのである (Fallon 29-38; McKendry 146-54)。

ジョンソンの出版社から『人間の権利の擁護』及び『女性の権利の擁護』を世に送り出したウルストンクラフトは、ヨーロッパはもとより、アメリカでも広く名を知られるようになる。しかしながら、〈公〉向けの自我が急速に確立するこの時期、彼女はジョンソン書店に出入りしていたスイス人画家フューズリへの「理性的な欲望」(L 206) を持て余し、彼の妻との三人婚 (ménage à trois) を提案してすげなく断られ、憔悴してもいた。ジョンソンに宛てて、「私は動物に過ぎません。本能的な感情が理性の示唆を黙らせてしまうことが、なんと多くあることか」(L 205) と自嘲気味に切り出し、感受性小説を思わせるような、ダッシュ (一) を多用した自己憐憫に満ちた手紙を書き送っている。

Your note – I can scarcely tell why, hurt me – and produced a kind of winterly smile, which diffuses a beam of despondent tranquility over the features. I have been very ill – Heaven knows it was more than fancy – After some sleepless, wearisome nights, towards the morning I have grown delirious. – Last Thursday, in particular, I imagined – was thrown into great distress by his folly; and I, unable to assist him, was in an agony. My nerves were in such a painful state of irritation – I suffered more than I can express – Society was necessary – and might have diverted me till I gained more strength... (L 205-06)

ジョンソンはウルストンクラフトにとって、ある意味で安心して愚痴をこぼすことのできる上司ともなっていたことが窺えよう。

上記の通り、ジョンソン宛ての手紙からは、新人作家ウルストンクラフトが彼のもとで大量の知識を急速に吸収し、〈公〉に向けて書く意識を高めていく様子が浮き彫りになる。同時に、その新たに芽生えた〈公〉向けの自我と、より深層にある〈私〉に属する自我との境界線の揺れ動きに戸惑い、苦しむ彼女の姿も浮かび上がる。仕事上の上司という、ヨーロッパ語であれば基本的には敬称で呼びかける相手に対し、ある時点では親しげに“my dear friend” (L 216) と呼びかけ、その後また距離を置こうとする様子 (L 222) からも、「私的書簡」と「公的書簡」の境界線がそれほど明確なものではないことが見て取れよう。この点に関しては、本章の最後で改めて考察することにした。

### 3 ウルストンクラフトの書簡体文学

実在する特定の個人に宛てた手紙（私的書簡、公的書簡）の他に、ウルストンクラフトは始めから〈公〉に宛てた手紙、すなわち書簡形式を用いた作品も5つ書いている。このうち、全編書簡形式で書かれ、生前に完成作品として出版されたのは『人間の権利の擁護』及び『北欧からの手紙』である。前者は副題『エドモンド・バーク閣下宛て書簡』(*A Letter to the Right Honourable Edmund Burke*) が示す通り、公開書簡 (open letter) という形式を採った政治論争の書であり、後者は名を特定しない“you”に宛てた一連の手紙からなる旅行記である。<sup>15</sup>

一方、完成に至らなかった3作品はゴドウィンの編集により『「女性の権利の擁護」の著者遺稿集』(*Posthumous Works of the Author of A Vindication of the Rights of Woman*, 1798, 4 vols.) に収められた。このうち、もっとも早い時期 (1793年2月) に書かれたのは「フランス国民の現状に関する書簡」 (“Letter on the Present Character of the

French Nation”)である。これは1792年12月に渡仏したウルストンクラフトがロンドンのジョンソンに送った書簡形式の論考であり、一連のルポルターージュとして書き始められたものの、結局序文のみで終わってしまったという経緯がある（*W* 6: 443-46）。革命が辿った軌跡を分析する上で、ウルストンクラフトがもっとも重要と捉えた要因に関する興味深い洞察が織り込まれている（平倉、「『不完全な文明化』の先に」 39-41）。続く『マライア』は大部分が書簡形式で書かれた小説である。ゴドウィンによる「はしがき」（“Preface”）や詳細な注に加え、末尾にはウルストンクラフトの遺した結末のヒント（複数）が並べられており、それに対するゴドウィンの解説も添えられている。そして最晩年に着手された「幼児の扱いに関する書簡の断片」（“Fragment of Letters on the Management of Infants”）は目次と第1の手紙の断片のみが遺されている。これは当時の幼児の死亡率の高さが慣習的な育児法に起因することを喝破したウルストンクラフトが、自らの成功例を基に「簡素さ（simplicity）」（*W* 4: 459）に基づく幼児用プログラムを綴ろうと試みたものである（Alan Richardson 37-38）。<sup>16</sup>

本章ではウルストンクラフトの〈手紙〉を3種類に分類して概観してきた。ここで再度、それらをまとめてみよう。私的書簡とは私的領域（特に親密圏）に属す人々に宛てられた手紙であり、公的書簡とは公的領域（私的領域以外）に属す人々に宛てられた手紙である。この2種類の手紙はいずれも文通の一環として書かれる。一方、書簡体文学は〈公〉となること、〈公〉のものとなることを前提として書かれた手紙である。ウルストンクラフトが手がけた書簡体文学を改めて整理してみると、①『人間の権利の擁護』は実在する特定人物に宛てた公開書簡（政治書簡）、②『北欧からの手紙』は実在か虚構か定かではない特定人物に宛てた書簡集という装いを採る旅行記、③「フランス国民の現状に関する書簡」は一般化された読者に呼びか

ける書簡形式のルポルタージュ、④『マライア』は虚構の特定人物に宛てた書簡形式の回想録が作品の大部分を占める小説、⑤「幼児の扱いに関する書簡の断片」は一般化された読者に呼びかける書簡形式の教育書、である。文学ジャンルの的には、私的書簡と公的書簡、及び書簡体文学のうち①③⑤はノン・フィクション、②は創作的ノン・フィクション、④はフィクションと考えられる。また、私／公の観点からみれば、私的書簡のみが私的領域に属し、他はすべて公的領域に属すと考えられる。もっとも、書簡体文学のうち、死後出版の③④⑤は著者ウルストンクラフトの同意を得ずに公表されたという事情を重視すれば、本来、私的領域に留まっているべきものとも考えられよう。

しかしながら、手紙という著述物において、私／公、あるいはノン・フィクション／フィクションの間にそれほど明確な境界線が存在するのだろうかという問いが改めて浮かび上がる。ここで再び、「私的書簡」「公的書簡」という区分を考えてみよう。本章ではウルストンクラフトの手紙の基盤をまずは私的領域に求め、それに属さないものを公的領域に振り分けるという手法で検証してきた。また、「私的」「公的」に属すと思われる手紙を、それぞれ“private letter”“public letter”ではなく、“familiar letter”“formal/official letter”という語で捉えようと試みてきた。なぜか。それは、18世紀における“private”及び“public”という語や概念の複雑さに鑑みてのことである。なお、ファヴレットは“open letter, public letter, private letter, familiar letter, friendly letter”等を定義づけたり、差異化したりせずに自由自在に使用しているが、本論ではあえてこれらの境界線に着目してみたい。

ジョン・ブルーア (John Brewer) によれば、18世紀イギリスにおける“public”という語には、「ローマ法の意味における、政策及び国家に関連した〈公〉(publick)、一般の利益 (general good)、そして公開性 (publicity) に関連する定義」が見出せる一方、“private”という語には固定的な定義がなく、「publicではないもの (what the

public is not)」を指すに留まっていた (Brewer 8)。すなわち、〈公〉という概念が先にあり、〈私〉という認識は後から生まれたのである。これを手紙という著述物に適用すると、“private letter” (私的書簡) とは “public letter” (公的書簡) ではない手紙、ということになる。つまり、本章における手紙の分類の仕方は、18 世紀における “public” “private” の認識と方向性が逆なのである。上記の説に倣うのであれば、手紙という著述物を (社会的に) 検証するにあたっては、まず「国家を含む公的権力」に宛てた、あるいは「広く公開された」手紙を公的書簡として抽出し、その範疇から外れるものを私的書簡として分類すべきということになる。

もともと、「まさに 18、19 世紀の特徴の 1 つは、この非対称性の位置を転倒して〈私〉を首位とみなし、〈公〉を〈私〉でないものにするための努力が繰り返された点にみることができるかもしれない」 (Brewer 9) のであれば、本章におけるウルストンクラフトの手紙の分類の仕方にも一理あると考えられよう。前述の書簡集に収められた 354 通の大部分は、ウルストンクラフトの私的領域に属すると思われる相手に宛てられており、公的領域に属すると思われる相手に宛てた手紙の中にも、私的な要素 (親称の使用、個人的な打ち明け話) が入り込んでいる。その意味では、この書簡集には真正の公的書簡は収められていないと言っても過言ではないかもしれない。そもそも、公的書簡の保管場所は基本的には公的機関であり、〈公〉の所有となった以上、〈私〉である個人のもとには返還されない。あるいは、第 3 章で検証する通り、公的書簡が公開書簡 (open letter) を兼ねる場合、それは公開性を備えた書簡 (政治文書) として出版され、文字通り “public” 〈公衆〉のもとに届く。この〈公衆〉には、公開書簡の書き手、すなわち “private” 〈私〉である個人も含まれるため、書き手は自らの公的・公開書簡を、一読者として読むことが可能になる。しかしながら、この場合、件の公的・公開書簡は、それを書いた個人の書簡集に収められることはないだろう。

このように考えてくると、手紙という著述物を“public”と“private”に分類すること—そのいずれを基本とするにせよ—の難しさが改めて浮き彫りになる。ウルストンクラフトが38年の人生において書いた手紙を、宛先・受取人を軸にして考えるにしても、彼女にとって親密圏に属す人々との心理的・物理的距離が、それ以外の人々との距離より遠くなる場合もある。同様に、公的領域に属す人々が、親密圏の人々よりはるかに親しい存在となることもある。そもそも、人間は生まれ落ちて以来、私的領域（親密圏）から徐々に公的領域に参入する経緯で、「未知の人々」が「親しい人々」になり、その逆も体験していく。「未知の人々」が親密圏を代表する「家族」になる一方、もともと「家族」であった親密圏の人々が「他者」になることもある。このような状況に鑑みると、ウルストンクラフトの手紙を“public”と“private”、あるいは“formal, official”と“familiar”に分けることには、かなりの困難を伴うであろう。

逆に言えば、この限界を踏まえた上で、手紙の書き手と宛先・受取人との間の距離感、すなわち、“private”と“public”の境界線の揺らぎを吟味することにより、我々は手紙の書き手が特定の他者との関係を模索しつつ、“I”という意識を形作る経緯を読み取ることができる。なお、留意すべきは、この“I”の意識があくまでも手紙の上での意識・自我・主観性、すなわち書簡的な人格（epistolary persona）であるという点だ。では、この書簡的な人格と現実の生活における人格はどのような関係にあるのだろうか。前者は後者に、あるいは後者は前者に、いかなる影響を与え得るのか。また、手紙の書き手は、自らが構築した書簡的な人格を、現実の生活のみならず、想像上・虚構の世界に適用することも可能になるのではないか。仮に可能であるとすれば、本章でひとまず3種類に分類したウルストンクラフトの手紙のうち、私的・公的書簡と書簡体文学の間の境界線もきわめて曖昧なものになると言わざるを得ない。



このように考えてくると、手紙という著述物ないしジャンルは、私／公、あるいはノン・フィクション／フィクションという観点のみでは十分に把握し切れなといえるだろう。では、ウルストンクラフトの手紙は他のいかなる軸によって論じ得るのだろうか。この問いを、次章では書簡体の語り（epistolary narrative）という観点から考えてみることにしたい。

## 第2章 書簡体の語り

手紙とは何らかの宛先・受取人 (addressee) を必要とする著述物ないしジャンルである。しかしながら、書き手と宛先・受取人の関係については、私／公、あるいはノン・フィクション／フィクションの間に境界線を引くことが難しい。さらに、自分に宛てた手紙という例を考えれば、書き手と宛先・受取人の間の境界線そのものが希薄となる。本章では、手紙というテキストに内在するこの曖昧性あるいは越境性という性質を、手紙における言語や文体、すなわち書簡体の語りという観点から検証する。

### 1 文学的書簡と書簡体文学

まず、書簡体の語りにおける歴史的背景を概観してみよう。序論で言及した通り、「手紙の世紀」と呼ばれた18世紀において、手紙は一般市民のための模範文例集の流通や郵便制度の拡大により、広く社会に浸透していく。この模範文例集は文学的書簡 (literary epistle/letter) の場合も、書簡体文学 (epistolary literature) の場合もあり得た。以下、両者の境界線 (の曖昧性・越境性) を検証することにより、ウルストンクラフトの時代の書簡体の語りの一面に光を当ててみたい。

文学的書簡とは、文学的価値が高いとされる手紙 (私的書簡、すなわち文通の一環をなす) のことであり、一般的には著者の死後、第三者によって公表 (印刷) されたものを指す。代表的な例としては、17世紀フランスのセヴィニエ侯爵夫人マリー・ド・ラビュタン＝シャンタル (Marie de Rabutin-Chantal, marquise de Sévigné, 1626-96) の書簡集が挙げられる。社交的な会話を写し取ったような優美で軽やかな文体は同時代の称賛の的となり、夫人の死後、これらの手紙は段階的に出版され、児童生徒の作文の手本として学校でも用いられた (Tancock 7-17)。

もつとも、著名な政治家や文学者の場合、手紙（私的書簡）の形式を採りながら、常に〈公〉を意識して書くことは稀ではない。例えば、18世紀の詩人アレグザンダー・ポープ（Alexander Pope, 1688-1744）は、第三者による恣意的な編集出版を防ぐため、生前のうちに自らの手紙を収集し、後世の評判を考慮して文面に手を加え、自ら編集出版した（*W* 7: 322, n. a）。このように、実在する特定の人物に宛てられてはいても、その先にいる不特定多数の読者の反応を強く意識して書かれた場合、手紙（私的書簡）は〈公〉のものとなることを前提として書かれた手紙、すなわち書簡体文学に限りなく近づくといえよう。また、前章で確認した通り、18世紀における私／公の境界線が現代に比してはるかに流動的であったことに鑑みれば、この時代に書かれた手紙（私的書簡）の多くは、程度の差こそあれ、作品としての側面を備えていたとも考えられる。なお、ウルストンクラフトはセヴィニエ侯爵夫人の手紙に見られる「飾り気のないエレガンス」を高く評価する一方、ポープの手紙に顕著な「流麗な美辞麗句」は「官服のようで壮麗でぎこちなく」、彼の優しさは「生氣のない虚栄心（vapid vanity）」のようだと批判している（*W* 7: 322）。

一方、書簡体文学はヨーロッパで長い伝統を持つ文学ジャンルである。新約聖書の書簡（Epistles）に端を発する神学的な内容を持つものや、哲学的な思索を書簡体で綴るエッセイ等も多いが、文学史において書簡体文学と言え、一般的には書簡形式で書かれた創作（epistolary fiction）、特に18世紀に隆盛を極めた書簡体小説を指す（Beebee 1999）。例えば、一世を風靡した作品として、モンテスキュー（Charles de Secondat, baron de Montesquieu, 1689-1755）の『ペルシア人の手紙』（*Lettres persanes*, 1721）、サミュエル・リチャードソン（Samuel Richardson, 1689-1761）の『パミラ』（*Pamela; or, Virtue Rewarded*, 1740）及び『クラリッサ』（*Clarissa; or, The History of a Young Lady*, 1748）、ルソーの『新エロイズ』、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）の『若きウェルテルの悩み』（*Die*

*Leiden des jungen Werthers*, 1774)、フランシス・バーニー (Frances Burney, 1752-1840) の『エヴェリーナ』 (*Evelina; or, The History of a Young Lady's Entrance into the World*, 1778)、そしてピエール・ショデルロ・ド・ラクロ (Pierre Choderlos de Laclos, 1741-1803) の『危険な関係』 (*Les liaisons dangereuses*, 1782) 等が挙げられよう。「18世紀のひとつかどの著者はある時点でみなこの形式を用いた」 (Singer 155; Favret, *Romantic Correspondence* 219, n. 43) という指摘が示す通り、1780年代にイギリスで出版された新作小説の約54%が書簡体小説だったという (Raven 32)。ウルストンクラフトも翻訳や書評の仕事を通じ、このジャンルに親しんでいた。<sup>17</sup>

フランス革命期 (1790年代) に入ると、書簡体小説の隆盛には陰りが見え始め、1799年を迎える頃には新作小説のわずか11%を占める程度になるが (Raven 32)、それでも書簡形式はジャコバン小説 (Jacobin novel) と呼ばれる新たな文学的潮流の中に確固たる足跡を残している。このジャンルは階級やジェンダーといった既成の価値観を転覆する要素を多く含み、社会的弱者や反体制派を体現する登場人物による熱烈な一人称の語り (その多くは書簡体) を特徴とする。女性作家の手になる主な作品のうち、書簡形式で書かれたものとしては、シャーロット・スミス (Charlotte Smith, 1749-1806) の『デズモンド』 (*Desmond*, 1792)、イライザ・フェニック (Eliza Fenwick, 1767-1840) の『秘密』 (*Secresy; or, The Ruin of the Rock*, 1795)、メアリ・ヘイズ (Mary Hays, 1779-1843) の『エマ・コートニーの回想』 (*Memoirs of Emma Courtney*, 1796)、メアリ・ロビンソン (Mary Robinson, 1757-1800) の『ウォルシンガム』 (*Walsingham; or, The Pupil of Nature*, 1797) 等が挙げられる。<sup>18</sup> これらは急速に保守反動化するイギリスにおいて危険視され、非難・揶揄の対象となった。<sup>19</sup> ウルストンクラフトの『マライア』も、ジェイムズ・ギルレイ (James Gillray, 1756-1815) の戯画「新道徳」 (*NEW MORALITY*, 1 August 1798) に有害図書の1冊として描かれている (図2)。<sup>20</sup>



(図2)

以上から明らかな通り、ウルストンクラフトは書簡体小説が隆盛を極めていた 18 世紀後半に文学作品にも比せられるような手紙（私的書簡）を書き、ジョンソンの刊行した文芸誌の書評子として玉石混交の書簡体小説を大量に読み込み、ヨーロッパ書簡体文学の翻訳にも携わる形で文章修行を積んだ作家である。彼女はまた、「手紙の世紀」最後の 10 年間、フランス革命勃発により書簡が急激に政治性を帯びる時期に集中して作品を公表した作家でもある。すなわち、ウルストンクラフトは文通の一環としての手紙にも、また、〈公〉に向けた手紙である書簡体文学というジャンルにも、書き手・読み手双方の立場から精通していたのである。では、これらの手紙に共通する書簡体の語りとはいかなるものであろうか。次節でその構造を検証してみたい。

## 2 書簡体の語りに関する理論的研究

書簡体の研究史はアマンダ・ギルロイ及び W・A・ヴァーホウヴェンの著作に詳しいが (Amanda Gilroy and W. M. Verhoeven 2000)、本節では、その中で特にウルストンクラフトの書簡体を分析するにあたり有益な視座を提供してくれる 2 人の議論に焦点を当てることにする。1 人は “epistolarity” という用語・概念を創始したジャネット・ガーキン・アルトマン (Janet Gurkin Altman)、もう 1 人はその概念を起点としてフェミニズムの議論を確立したリンダ・S・カウフマン (Linda S. Kauffman) である。以下、それぞれの著作を概観してみよう。

### 2-1 アルトマンの「書簡性」研究

アルトマンは『書簡性—ある形式への手引き』 (*Epistolarity: Approaches to a Form*, 1982) において、“epistolarity” の暫定的な定義を「手紙の形式的特性を、意味を創り出すために用いること (the use of the letter’s formal properties to create meaning)」 (Altman 4) としている。<sup>21</sup> 彼女の分析の対象は、この定義がもっともよく当てはまると思われるジャンル、すなわち書簡体小説であり、6 章にわたって主に 18 世紀フランス、イギリスの作品を論じつつ、書簡体小説の形式的な特徴を浮き彫りにしている。上記の 6 章のうち、本論文に重要な示唆を与えてくれるのは、第 4 章「書簡体言説 (Epistolary Discourse)」であろう。他の章に比して、この章にはフィクション以外の手紙 (私的・公的書簡) や書簡形式を用いた旅行記等にも適用可能な洞察が含まれている。<sup>22</sup>

アルトマンによれば、書簡体言説を他の言説 (回想録、日記、修辞、演劇等) と分け隔てる 3 つの特徴は、① “I” と “you” の関係の特殊性 (*Particularity of the I-you*)、② 現在形 (*A present tense*)、③ 時制的複価 (*Temporal polyvalence*) である (Altman 117-18)。以下、それぞれの概要を見てみよう。

まず、“I”と“you”の関係の特殊性とは、「書簡体言説における“I”が常に特定の“you”をパートナーに持つこと」(Altman 117)であり、その定義の後に次のような注釈が加えられている。

(Epistolary narrative is thus distinguished from both memoir and diary narrative, where there is no reified addressee, or from rhetorical works, where the addressee is anonymous and could be anyone.) In letter language, moreover, the addressee plays a role; he is able, and is expected, to initiate his own utterance. Such reciprocity whereby the original *you* becomes the *I* of a new utterance is essential to the maintenance of the epistolary exchange. (Altman 117)

書簡体の語り、「具体的な宛先・受取人を持たない」回想録や日記の語りとは一線を画すという一節は、日記に関してはある程度納得できる。しかしながら、回想録に関しては、特定の人物に宛てて書かれ、実際にその人物に遺される場合も少なくない。例えば、ウルストンクラフトの『マライア』では、娘に宛てた長い手紙という形で主人公の回想録が綴られていく。また、上記の注釈では「修辭的作品」における宛名・受取人は「匿名、ゆえに誰でもなり得る」とされているが、きわめて修辭的な『人間の権利の擁護』は、実在する特定の人物(バーク)に宛てられている。アルトマンの注釈は、ウルストンクラフトの書簡体文学には当てはまらないように思われる。

もっとも、上記でアルトマンが想定しているのは伝統的な書簡体小説、すなわちフィクションであり、しかも「相互関係」を重視していることから、ジャン・ルーセ(Jean Rousset)の言葉を借りれば「二声／二重唱(duo)」、もしくは「多声／合唱(voix multiples)」の形式であると考えられる(Rousset 78, 83)。<sup>23</sup>これに対し、ウル

ストンクラフトの書簡体文学はいずれも “I” から “you” に宛てた一方通行の手紙であり、いわゆる「一声／独唱 (une voix)」(Rousset 83) の形式を採っている。上記のアルトマンの注釈に一声／独唱型を含めた場合、“I” が特定の “you” に宛てて書くものであれば、それが回想録であれ、修辭的作品であれ、書簡体の語りという枠組みの中で考えることは可能であろう。

一方、“I” にとっての “you” が不特定の人物であった場合、すなわち宛名・受取人が「匿名、ゆえに誰でもなり得る」という状況であった場合、たとえ「あなた」に宛てて綴られた著述であっても、アルトマンの定義に倣えば、それは書簡の言説ではないことになる。とすれば、ウィリアムズの『フランスからの手紙』(*Letters Written in France, 1790-96*) や、ウルストンクラフトの「フランス国民の現状に関する書簡」及び「幼児の扱いに関する書簡の断片」のような、名を特定しない（一般化された） “you” に宛てて綴られた書簡という形式を採る作品は、書簡体言説ではなく、単なる一人称の語りということにならざるを得ない。

しかしながら、これらの作品ではタイトルのみならず本文にも “letter(s)” という語が多用されており、特にウィリアムズの書簡体旅行記／ルポルターージュには、“you” に語りかける言葉が頻出する。「昨日、あなたのお手紙を受け取りました。私がフランス民衆の歓喜を描写する際、熱を込め過ぎだとあなたは非難するけれど（後略）」(Williams, *Letters Written in France* 91)、「私の親愛なるお友達のあなた、(中略)郵便配達人がドアを叩く音に抑え切れない感情が湧き上がり、見慣れた筆跡に身が打ち震え、歓喜のあまり、幸せのお守りのように見える封を破る力を失いかけたことのあるあなた」(Williams, *Letters Written in France* 129) 等は、たとえこの「あなた」が特定の相手を指すのではないにせよ、相手の存在を想定して書かれる書簡体言説以外の何物でもないように思われる。また、ウルストンクラフトの『北歐からの手紙』も名を特定しない “you” に宛てた書簡という装いを採っているが、読み進める



うちに、この“you”は“I”にとって特定の人物であることが読者にもわかるように構成されている。このような場合は、書簡体言説として認められるということだろうか。ウルストンクラフトの書簡体文学における「“I”と“you”の関係の特殊性」に関しては、本論文で段階的に分析していきたい。

アルトマンによる書簡体言説の3つの特徴のうち2つ目は、それが現在形で書かれるという点である。「日記の書き手同様、手紙の書き手は現在を起点とし、そこから過去と未来の両方を見る」(Altman 117-18)という。この点においては、現在を起点とする日記や手紙と、過去を起点とする回想録の間には大きな違いがあるといえよう。ただし、特定の相手に宛てて自らの半生を語る手紙、すなわち書簡形式の回想録の場合、自らの人生を振り返って書く部分は過去を起点とするが、相手に対して自らの現況を綴ったり、相手の今後について尋ねたりする場合は、現在が起点になっていると考えられる。すなわち、手紙の書き手であっても過去を起点とする語りは可能であり、また、回想録の書き手であっても現在を起点とする語りが可能であるといえる。

書簡体言説の3つ目の特徴に関しては、次のように記されている。

The temporal aspect of any given epistolary statement is relative to innumerable moments: the actual time that an act described is performed; the moment when it is written down; the respective times that the letter is dispatched, received, read, or reread. (Such time lags distinguish epistolary from theatrical dialogue.) (Altman 118)

上記は書簡体言説のみならず、「書かれ、発送され、受け取られ、読まれ、再読される」言説すべてに適用できそうだが、手紙の物質性をよく捉えている。もっとも、アルトマン本人が別の章で言及しているソール・ベロウ (Saul Bellow, 1915-2005) の

『ハーツォグ』(Herzog, 1964)の例に見られるように、特定の相手に宛てて書かれても、発送されない手紙、ゆえに受取人に届かない手紙という存在を忘れるわけにはいかないだろう(Altman 34-43)。『ハーツォグ』の同名の主人公は、正気ではなくなりつつある(かもしれない)ことを自覚している文学者である。彼は折に触れて憑かれたように「新聞に、公職に就いている人々に、友人や親戚に、しまいには死者に」(Bellow 1)宛てて(しばしば頭の中で)手紙を書きまくるが、そのうち実際に発送されるのはわずか3通である。元妻や友人等、物理的に手紙を送ることが可能な相手はともかく、亡きニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900)宛ての手紙(Bellow 318-20)となると、発送されないこと、受取人に届かないことが前提の書簡体の語りであるといえよう。また、この小説ではハーツォグが特定の人物に宛てて手紙を書き始めるや否や、その相手が想起させる時代、すなわちハーツォグにとっての過去が蘇るというフラッシュバックの手法が多用されている(Altman 36-37)。このように、手紙の書き手が現在と過去を行き来し、しかもその手紙が原則として受取人に届かない場合、アルトマンが提示する書簡体言説の3つの特徴のうち、2つまでが否定されたことになる。言い換えれば、ハーツォグの書くようなものも手紙と認めるならば、書簡体の語りの主軸は、アルトマンが提示する3つの特徴のうち、「I」と“you”の関係の特殊性に絞られるということになるだろう。

## 2-2 カウフマンの「恋愛の書簡の言説」研究

では次に、アルトマンの“epistolary”の概念を基盤として独自のフェミニズムの議論を展開したカウフマンの『欲望の言説—ジェンダー、ジャンル、書簡体フィクション』(*Discourse of Desire: Gender, Genre, and Epistolary Fictions*, 1986)を概観してみよう。アルトマンの議論の主眼が書簡体の語りの構造を明らかにすることであり、その分析対象が主に18世紀フランス及びイギリスの書簡体小説であったのに対

し、カウフマンの関心は「恋愛の書簡の言説 (amorous epistolary discourse)」(Kauffman 26) にあり、彼女が分析する 8 つの作品は、時代・地域・ジャンルともきわめて多岐にわたる。

特筆すべきは、カウフマンが俎上に載せる「恋愛の書簡」が、基本的には女性から男性に宛てた手紙であるという点だ。「女性の恋文」に（本書のタイトルにもなっている）「欲望の言説」を読み取り、そこに既成の概念・体制を転覆する力を認めるという意味で、カウフマンの議論は優れてフェミニズム的である。これは特に、中世フランスの尼僧エロイーズ (Héloïse) や 19 世紀イギリスのシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) の文学的書簡（実在の相手に宛てて綴った恋文）を扱った章に顕著である (Kauffman 63-89, 159-201)。

しかしながら、留意すべきは、カウフマンが分析対象とする「女性の恋文」のうち、実際に女性によって書かれたのは上記の 2 作品と末尾の『新ポルトガル文』(*Novas Cartas Portuguesas*, 1972) のみであり、それ以外の「女性の恋文」はすべて男性（詩人・作家）によって創り出されたという点だ。オウィディウスやリチャードソン、ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916)、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) が生み出した虚構の「女性の恋文」が、エロイーズやシャーロット・ブロンテの恋文、あるいは現代ポルトガルの女性作家たち (Maria Isabel Barreño, Maria Teresa Horta, Maria Velho da Costa) の手になる虚構の恋文と同列に扱われているのである。すなわち、本書におけるフェミニズムは、女性（詩人・作家）を主軸に据えた社会的・歴史的なものというより、文学理論的なものであるといえよう。<sup>24</sup>

また、カウフマンの分析対象には、前述の『新ポルトガル文』にインスピレーションを与えた 17 世紀の『ポルトガル文』(*Les lettres portugaises*, 1669) のような、事実と虚構の境界線、及びジェンダー的特性の境界線がきわめて曖昧な書簡集も含まれている。初版時には文学的書簡（実在したポルトガル尼僧の恋文のフランス語訳）

として世に送り出され、長年にわたり愛読されてきたこの「女性の恋文」は、20世紀に入ると、翻訳者ギュラーグ（Gabriel-Joseph de Lavergne, vicomte de Guilleragues, 1628-85）による創作（書簡体文学）である可能性が指摘され、大論争を巻き起こすに至った（Kauffman 92-93）。

カウフマンによれば、論争の種の1つは国家の威信である。ポルトガル文学のフランス語訳として世に出たものが、実はフランス文学に他ならなかったとなれば、ポルトガルの人々が自国の誇りを取り戻そうと奮起するのは当然であろう。論争のもう1つの種は、「芸術／技術（art）」対「天賦の才（*génie*）」という伝統的な構図である。すなわち、『ポルトガル文』を構成する5通の恋文に、強烈な感情の自然な奔出（天賦の才）を見出す人々と、逆に細心の注意を払って書かれた痕跡（芸術性・人工性）を認める人々が対立したのである。しかしながら、一文学書簡／書簡体文学がこれほど大きな、しかも長く続く論争を喚起したもっとも大きな理由は、カウフマンも指摘する通り、「男性的な著述／書き方（*masculine writing*）」と「女性的な著述／書き方（*feminine writing*）」の違いを明示する上で、この作品が頻繁に引用されるに至ったという事実であろう（Kauffman 94）。言い換えれば、「恋愛の書簡」に留まらない、書き言葉におけるジェンダーという普遍的な問題が、この作品の解釈をめぐってあぶり出されたのである。

『ポルトガル文』を文学的書簡（ポルトガル尼僧による私的書簡）であると考え、人々は、これらの手紙が「女性的」な声を持っていると主張する。その特徴は「混乱、情熱、感情の激しさ」（Kauffman 94）である。逆に、「燃える情熱」より「冷たい打算」を女性に結びつけるルソーは、『ポルトガル文』は男性によって書かれたという説に「持てるすべてを賭ける」と断言している（Kauffman 95）。いずれにせよ、「女性的」な言葉とは、否定的な発想から生まれていることに留意すべきであろう。女性は男性のように理性的に考えることができないから感情的に書く、あるいは、

男性のように強い感情を持つことができないから打算的に書く、という考え方である。言い換えれば、男性が「女性のように書く」にあたっては、自らの「男性的」な言葉を意識して控え、当人が「女性的」と信じる要素を、模倣や想像力を駆使して自らの言葉に織り込んでいくということになる。

『ポルトガル文』の受容史は、書簡体の語りとジェンダーのきわめて複雑な関係を浮き彫りにしている。しかしながら、議論の焦点が「女性の恋文」の書き手に絞られており、ジェンダーを逆にした場合が看過されている点は留意すべきであろう。例えば、『ポルトガル文』を男性の作品だと主張するルソーが『新エロイーズ』で創り出したジュリ (Julie) の手紙や、ジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) が『ドン・ジュアン』 (*Don Juan*, 1819-24) で織り上げたジュリア (Julia) の書簡詩 (Canto I, stanzas 193, 194) のような、文学的価値の高い「女性の恋文」に比する「男性の恋文」を、女性 (詩人・作家) は生み出してきたのか。男性が「女性的」な言葉を模倣・創作するのと同等のレベルで、女性が「男性的」な言葉を模倣・創作することは可能だったのか。<sup>25</sup> 言い換えれば、理性・知性・論理性を象徴することの多い「男性的」な言葉を、教育の機会が限られていた女性 (詩人・作家) たちは、いかにして身につけたのか。あるいは、身につけようとしたのか。

このように考えてくると、カウフマンの「恋愛の書簡の言説」研究は、男性 (詩人・作家) による「女性的」な書簡体言語の創作に光が当てられているという点で、女性作家ウルストンクラフトによる「男性的」な書簡体言語の模索・構築という観点を逆照射してくれよう。同時に、文章修行中のウルストンクラフトが痛烈に批判した同時代の女性作家による書簡体小説、すなわち女性の手になる虚構の「女性の恋文」と、後に自らが大量に書くに至る現実の「女性の恋文」との関係、さらに、その現実の恋文に自ら虚構を織り込む文学的手腕についても、多くの示唆を与えてくれよう。

これまで見てきた通り、「18世紀におけるもっとも傑出した手紙の書き手の1人」であったウルストンクラフトは、多様な宛先・受取人に宛てて日常的に手紙（私的・公的書簡）を綴ることで書簡的な人格を確立する傍ら、書評や翻訳の仕事を通じて大量の書簡体文学（小説、教育書、旅行記等）を批評することで、書簡体の語りを持つ文学的な力を強く認識するに至ったと思われる。では、その彼女は、書簡体の語りを用いて、〈公〉に向けてどのような手紙を書いたのか。名目上の宛先・受取人として誰を設定し、どのようなメッセージを〈公〉に向けて送ろうと試みたのか。実在する特定の人物に宛てて書いた手紙（私的・公的書簡）と〈公〉への手紙とはいかなる関係にあるのか。また、同時代の書簡体文学に見られる書簡体の語りからは何を継承したのか。

以上の問いに答えるにあたり、本論文の以下の章においては、ウルストンクラフトが書簡体の語りを用いて書いた作品のうち、完成作品である『人間の権利の擁護』と『北欧からの手紙』、及び未完作品のうち、ある程度まとまった量の草稿が現存する『マライア』を分析の対象に取り上げる。従来は組み合わせて論じられることの少ないこれらの作品を、書簡体の語りという共通の軸を持つ作品として捉え、それぞれを〈論敵への手紙〉〈恋人への手紙〉〈娘への手紙〉として読み解く。この検証を通じ、これらの手紙が特定の人物に宛てると見せかけて、その実は〈公〉に向けて書くという公開書簡の伝統・手法を戦略的に用いていることを明らかにしたい。その中で、ウルストンクラフトが一作ごとに書簡体の語りをより巧みに使いこなし、文学者として成長する経緯を浮き彫りにしたい。

### 第3章 フランス革命期における女性の公開書簡

ウルストンクラフトの『人間の権利の擁護』はイギリスにおけるフランス革命論争の一環として公表された政治文書である。初版は匿名で出版されたため、著者は男性であると想定されていたが (Todd, *Revolutionary Life* 166)、成功後まもなく著者名を明記した第2版が出版されると、世間は驚愕した。<sup>26</sup> もちろん、ウルストンクラフト以前にも、当時「男性的」とされていた政治の世界で著述活動を行う女性はいたが、フランス革命論争という文脈において、論敵バークに宛てた公開書簡という形で直接的かつ激烈な反論を行った女性はウルストンクラフトが初めてだったのである。<sup>27</sup>

1780年代には教育書や児童文学といった「女性的」な分野での著述活動に留まっていたウルストンクラフトが、『人間の権利の擁護』におけるバークへの反論を機に政治的な問題意識を先鋭化させ、その経験が『女性の権利の擁護』における議論に繋がった経緯はよく知られている (梅垣 『女性の権利を擁護する』 127-41)。しかしながら、『人間の権利の擁護』における公開書簡という形式の意義や、それがウルストンクラフトにもたらした文学的な影響についてはほとんど顧みられることがない。以下、本章では公開書簡というジャンルの歴史的背景を概観した上で、フランス革命期のイギリス女性作家たちが書簡形式の文書を用いて「男性的」な政治の世界に参入する経緯を検証する。この作業を通じて、ウルストンクラフトが同時代の女性作家たちから継承した要素を明らかにしたい。

#### 1 公開書簡というジャンル

公開書簡とは、ファヴレットの定義によれば、「著名な個人 (prominent individuals) 宛ての書簡という装いを採る政治批判の書」 (Favret, *Romantic Correspondence* 113)

である。公開書簡の書き手は「王侯貴族や統治者に対し、親しい者として語りかけ、次いでその政策や言動を攻撃する」(Favret, *Romantic Correspondence* 114)。「私的なパンフレット、あるいは新聞・雑誌への掲載」という形で発表されたこれらの書簡は、「幅広い層の読者に対し、書簡の書き手の激しい抗議 (outcry) に加わるよう呼びかける」(Favret, *Romantic Correspondence* 114) ものであった。すなわち、一個人が自らの苦情を共同体の問題に昇華するにあたり、公開書簡はきわめて有用な政治的道具として機能したのである。とりわけ革命下のフランスにおいては、拘禁令状 (lettre de cachet) が暴政の象徴として捉えられる一方、公開書簡は「市民の代表政府の象徴であり、寛容で公正な法律、そして情報伝達の体系の証左」(Favret, *Romantic Correspondence* 9) でもあった。<sup>28</sup>

公開書簡は理想的にはすべての人間に対して開かれていたため、労働者階級や女性たちの中にも書き手が現れる。もっとも、王侯貴族や統治者を名指しで批判する手紙となれば、当時広く流通していた一般市民向けの模範文例集に頼るわけにはいかない。また、急進性を帯びた内容を、公衆 (public) を巻き込むためのレトリックに満ちた文体で書くためには、ある程度の教育が必要となる。さらに、そのような手紙を表した場合の身の危険も覚悟しなければならない。実際、公開書簡の書き手の中には政治犯として投獄され、ギロチン台に送られる人が少なくなかった。例えば、1792年にフランス内務大臣ジャン=マリー・ロラン (Jean-Marie Roland, 1734-93) の名で提出されたルイ 16 世宛ての書簡は、彼の妻でジロンド派の女王と呼ばれた教育者マノン・ロラン (Manon Roland, 1754-93) の手になるものとされている (Favret, *Romantic Correspondence* 9)。国王に対し、自らの意向を覆すよう要求したこの書簡は、フランス国内はもとよりイギリスでも広く知られるようになる (Favret, *Romantic Correspondence* 114) が、ロランはこの書簡が契機となって内務大臣の職を失い、妻マノンも後に政治犯として投獄され、ギロチン台の露と消えることになる。<sup>29</sup> また、



『女性及び女性市民の権利宣言』(*Déclaration des droits de la femme et de la citoyenne*, 1791)で知られる劇作家オランプ・ド・グージュ(Olympe de Gouges, 本名 Marie Gouze, 1748-93)は、1792年にマクシミリアン・フランソワ・マリー・イジドール・ド・ロベスピエール(Maximilien François Marie Isidore de Robespierre, 1758-94)に宛てた書簡を公表する。あえて親称の“tu”を用い、ロベスピエールに「マクシミリアン」というファースト・ネームで呼びかけることで、グージュは彼との親密さを打ち出している(Favret, *Romantic Correspondence* 114, 236, n. 43)。もちろん、両者は知己ではなく、著者と宛先・受取人の親しさは演出されたものだが、グージュは公開書簡の真の想定読者である公衆を代表して「マクシミリアン」を批判するという立場をとることで、公衆との間に一種の同盟関係を結ぼうと試みたのである。彼女も後にギロチン台に送られることになるが、マノン・ロラン同様、書簡形式を用いることで公的な声を創り出すことに成功したといえよう。

イギリスにおいても、フランス革命の是非を問う政治論争において、公開書簡を含む書簡形式の文書が重要な役割を果たしている。この革命論争の震源となったバークの『フランス革命の省察』(*Reflections on the Revolution in France*, 1790, 以下『省察』)は、非国教牧師プライスの『祖国愛についての講話』(*A Discourse on the Love of Our Country*, 1789)への反論として書かれたものである(Deborah Kennedy 53)。フランス革命は「イギリス名誉革命(Glorious Revolution, 1688)の反復であり、ゆえにフランス人も自由と立憲君主政体を樹立する」(大石, 「境界線上のルポルタージュ」166)というプライスの革命解釈を、バークは巧みな修辞で論難する。その際、彼は書簡形式を用いているが、宛先・受取人はプライス本人ではない。フランスに住む若い友人に宛てた書簡という形式を採り、その中でプライス反論を展開するのである。その意味で、『省察』はマノン・ロランやグージュの公開書簡とは様相をやや異にしている。

バークは『省察』の序文で、この書は「パリ在住のある大変若い紳士と著者の間で交わされた一書簡が機縁となっている」(Burke, *Reflections* 3) と述べ、個人的な感情と見解の吐露について詫びるところから本文を始めている。

I will not give you reason to imagine, that I think my sentiments of such value as to wish myself to be solicited about them. They are of too little consequence to be very anxiously either communicated or withheld. . . . In the first letter . . . I wrote neither for nor from any description of men; nor shall I in this. My errors, if any, are my own. My reputation alone is to answer for them. (Burke, *Reflections* 3-4)

ファヴレットによれば、バークはこの手紙を私／公、あるいは秘匿／公開の境界線上に巧妙に位置づけている。パリ在住の若い友人に送るつもりで書かれた手紙という体裁を整えることで、未熟な生徒を教え導く経験豊かな師として自身を描き出す。「送るつもりで」書かれた個人的な手紙は、『省察』という大著として出版され、〈公〉の議論の対象となる。バークは「文通相手に革命から生まれたばかりのきわめて若い精神としての役を割り当て、自身は由緒あるイギリスを代表して語るという立場をとり、現在フランスに見られるある種の未熟さを修正するためのモデルとしてイギリスを登場させる」(Favret, *Romantic Correspondence* 25-26) のである。「個人的な手紙」はゆえに「政治的アレゴリー」(Favret, *Romantic Correspondence* 26) として機能しているといえよう。

大石によれば、バークの『省察』は「80 点以上にのぼるフランス革命賛否両論を1、2 年以内にイギリス国内に巻き起こした」(大石, 「境界線上のルポルタージュ」165)。革命に共感する人々がバークの偏見や虚構性、変節ぶりを非難する一方、彼を擁護し、イギリス国内の急進派を批判する声も噴出する。<sup>30</sup> こうした論争の多く

が、「意見と立場を違える陣営のいずれかに宛てて書かれた手紙」（大石、「境界線上のルポルタージュ」 167）という形式を採って行われた。このうち、もっとも早く公表されたバークへの反論の1つがウルストンクラフトの『人間の権利の擁護』である。<sup>31</sup>

では、ウルストンクラフト以外の「急進的」な女性作家たちはいかなる形でバークに反論しつつ、フランス革命への賛意を表明したのであろうか。フランスにおいてはギロチン台と背中合わせであった公開書簡という危険な形式を、イギリスで採用したのはウルストンクラフトのみだったのか。「男性的」な領域に参入するにあたり、イギリスの女性作家たちはいかなる戦略を講じたのか。そして、ウルストンクラフトのバーク宛て公開書簡は彼女たちの著作とどのような関係にあるのか。このような問いを考えるにあたり、重要な示唆を与えてくれるのが、『人間の権利の擁護』初版（1790年11月末）と第2版（同年12月中旬）の間に公表された1枚の戯画である。次節でこの点を検証してみよう。

## 2 フランス革命論争とイギリス女性作家たち

フランス革命初期、すなわち革命の目的がイギリスのような立憲君主政体樹立であると一般的に思われていた1790年前後、イギリス国民は概ねフランス革命に好意的であった。ゆえに、『省察』においてその革命を感傷性・虚構性に満ちた修辞で論難したバークは、急進派からの激烈な反論を招くのみならず、頻繁に戯画化された（Nicholas K. Robinson 1996）。中でも、「文学的鞭打ち刑を受けるドン・ディスマロ」（*Don Dismallo Running the Literary Gantlet*, 1 December 1790）は、革命論争に参入した女性作家を描いた稀な作品の一つであり、その表象には特筆すべきものがある（図3）。<sup>32</sup>



(図 3)

ハリエット・ゲスト (Harriet Guest) やデボラ・ケネディ (Deborah Kennedy) によれば、上記ではドン・デスマロ (道化師姿のバーク) を、この時点のイギリスにおけるフランス革命賛成者たちが罪人用の鞭 (cat-o-nine-tails, 「9尾の猫鞭」と呼ばれるこぶつきの9本の縄をつけた鞭) で懲らしめている。プライスや劇作家リチャード・ブリンズリ・シェリダン (Richard Brinsley Sheridan, 1751-1816)、政治家ホーン・トック (Horne Tooke, 1736-1812) といった男性と並び、女性が3人描かれている (なお、中央の女性2人は擬人化された正義及び自由の女神)。左端のウィリアムズは「感受性の時代」を代表する詩人・小説家である。また、バークの左隣で「9尾の猫鞭」を振り上げているのは詩人・教育者のバーゴールド、そして画面右端の女性は歴史家マコーリである (Guest, *Small Change* 225; Deborah Kennedy 73)。口々にバークをからかっているが、女性が政治活動に関与しており、しかもバークほどの戯画化を施されていないという点は特筆に値しよう。

デボラ・ケネディも指摘する通り、18世紀イギリスの戯画における女性表象は匿名性が高く、名指しで揶揄されるのは王族や女優、あるいはデヴォンシャー公爵夫人ジョージアナ・キャヴェンディッシュ (Georgiana Cavendish, Duchess of Devonshire, 1757-1806) のような、政治に深入りした女性に限られていた (Deborah Kennedy 73-74)。しかしながら、上記の戯画におけるウィリアムズ、バーボールド、マコーリの表象には、キャヴェンディッシュに対するような憎悪が見られない。むしろ、3人の女性はバークに「折檻している (chastising)」という点で、「礼節 (propriety)」の雰囲気さえ漂わせている (Deborah Kennedy 73-74)。政治という「男性的」な領域に参入するための資格がこの3人には備わっていることを暗示しているようにも見受けられる。なお、ウルストンクラフトの『人間の権利の擁護』初版が匿名でなければ、あるいは実名入りの第2版の出版がもう少し早ければ、彼女はバークにもっとも激的な「折檻」を加える女性として、他の3人とともに「9尾の猫鞭」を振るう姿を描かれていたことであろう。

上記の戯画はまた、ウィリアムズ、バーボールド、マコーリの3人が、ウルストンクラフトより先に何らかの形でバークに反論し、フランス革命への賛意を表明していたという事実を示唆している。バークへの「折檻」の度合いから見て、バーボールドがもっとも激しい、あるいは直接的な反論を書いたと思われる。しかしながら、3人とも、上記の戯画が描かれた時点では未だ『省察』への反論を公表していなかった。とすれば、彼女たちはバークの何に「折檻」しているのであろうか。以下、バーボールド、マコーリ、ウィリアムズが行ったバークへの反論を検証することにより、新人作家ウルストンクラフトがこの3人から継承した要素を浮き彫りにしていきたい。

## 2-1 アナ・レティシア・バーボールドの公開書簡—非国教徒の立場から

バーボールドは非国教徒アカデミーで教鞭をとる父ジョン・エイキン (John Aikin, 1713-80)<sup>33</sup> の指導のもと、幼い頃から男性並みの古典教養を身につけた女性である。彼女はアカデミー卒業生の夫ロシュモン・バーボールド (Rochemont Barbauld, 1749-1808) と共に設立した学校で子どもたちの教育に邁進する傍ら、著述活動にも従事するが、1780年代までは当時の「女性らしさ」の範疇から外れることなく、主に詩や教育書、児童文学の分野で高い評価を得ていた (Taylor, *Feminist Imagination* 183)。ウルストンクラフトはアイルランドでのガヴァネス時代、ジョンソンに宛てた手紙でバーボールドの新しい教育計画について尋ねており (L 95)、アイルランドに赴く前に執筆した自身の初の著作『娘達の教育に関する考察』や、帰国後に男性名 (“Mr Creswick”) で出版した女性読者のための選集『女性読本』 (*The Female Reader*, 1789) においても、バーボールドの作品を好意的に引用している (W 4: 10, 57, 167-68, 184-85, 189, 221-22, 225-28, 304-5, 306, 323, 343-45)。バーボールドの著述活動にウルストンクラフトが並々ならぬ関心を抱いていたことは、ほぼ確実と思われる。

そのバーボールドは、1790年3月2日、議会在が非国教徒の公職就任の禁止を定めた法律 (Corporation and Test Acts) の廃止案を3回続けて却下したことを契機に、きわめて理論的なパンフレット「地方自治体令及び審査法廃止反対者への声明」 (*An Address to the Opposers of the Repeal of the Corporation and Test Acts*, March 3, 1790) を公表し、政治の領域に足を踏み入れた。その中で、名指しこそしないものの、パークのフランス革命弾劾演説に言及し、これに反論している (Deborah Kennedy 53-54)。このパンフレットは国会議員 (必然的に国教徒) に対する「紳士諸君 (Gentlemen)」という呼びかけで始まり、著者は常に「我々 (we)」という人称で語り、「一非国教徒 (A DISSENTER)」という署名が末尾に添えられている (Barbauld 262, 281)。マノン・ロランやゲージュの公開書簡がそれぞれルイ16世やロベスピエールといった特

定の個人宛てであったのに対し、バーボールドの公開書簡はイギリス国教徒という特権的集団に宛てて書かれている。

では、同時代の書評子に「尊敬に値する」(Barbauld 262)と言わしめたバーボールドの才能が注ぎ込まれた公開書簡を概観してみよう。特徴の1つは、多彩な比喻を用いた、知的な揶揄である。審査法廃止に反対する国会議員(国教徒)たちに、公開書簡の書き手は次のように問いかける。

Does the simple removal of the Test Act involve its [Church of England's] destruction? These were not *our* thoughts. *We* had too much reverence for your establishment to imagine that the structure was so loosely put together, or so much shaken by years, as that the removal of so slight a pin should endanger the whole fabric. (Barbauld 265)

自分たちを小さなピンに、相手を織物全体に喩えた、強烈な皮肉である。同時に、社会的弱者でありながら独自の知的ネットワークを持つ非国教徒の潜在的な力を、フランス革命期のイギリス国教会がとりわけ危険視していたという事実が上記の一節から浮かび上がる。

また、この公開書簡には随所に巧みなレトリックが仕掛けてある。例えば、書き手は次の一節でイギリス国家(the State)に男性的な、またイギリス国教会(the Church)に女性的な人格を付与し、国家を父、国教会を義理の母と見なして、自らの正当な権利を要求する。

We could wish to be considered as children of the State, though we are not so of the Church. She must excuse us if we look upon the alliance between her and the State as

an ill sorted union, and herself as a mother-in-law... We claim no share in the dowery of her who is not our mother, but we may be pardoned for thinking it hard to be deprived of the inheritance of our father. (Barbauld 266)

我々が必要としているのは父（国家）の正当な遺産、すなわち公職に就く権利や大学で学ぶ権利であり、義理の母（国教会）の持参金は不要であるという、こちらも強烈な皮肉を利かせた一節である。バーボールドは家父長制度を前提としたジェンダー的構図を採用することにより、一般読者の警戒心を解きつつ、公開書簡の宛先・受取人、すなわち国会議員と国教徒を兼ねる人々に対しては、その2つの社会的身分・権利は本来同一でも同等でもないことを喚起しているのである。

さらに、この公開書簡のもっとも重要な特徴として挙げられるのは、バーボールドが匿名性を最大限に利用して、「男性的」な論理性や正義感を基盤とする語りを展開している点であろう。以下の一節で書き手は、非国教徒が審査法廃止に関して用いた「要求 (claim)」という語に対する批判—「お願いする (ask for a favour)」、あるいは「請願 (petition)」という語を用いるべきであったという批判—に対して、次のように凜と主張する。

No, Gentlemen, we wish to have it understood, that we *do* claim it as a right. It loses otherwise half its value. We claim it as men, we claim it as citizens, we claim it as good subjects. We are not conscious of having brought the disqualification upon ourselves by a failure in any of these characters. (Barbauld 266-67)

自分たちの正当な権利をあくまでも「要求」するという姿勢もさることながら、注目すべきは、バーボールドがここで「人間 (men)、市民 (citizens)、臣民 (subjects)」



の1人になり切って書いている点、そしてそれらが「男性」を含意する点であろう。

書評子がこの公開書簡の書き手を男性と見なしたのももっともである。<sup>34</sup>

上記の声明は、直接的には審査法廃止法案却下を巡る、イギリス国内の宗教・社会・政治問題を扱ったものである。しかしながら、前述の通り、最後の数ページにはバークが行った議会演説（1790年2月5日付）に対する反論が含まれている。彼が国内の非国教徒を軽んじ、審査法廃止に反対し、その理由として『祖国愛についての講話』を挙げ、フランス革命を賛美するプライスを批判したことに対する反論である（Barbould 278-81）。すなわち、バークに対するバーボールドの反論は、『省察』そのものではなく、『省察』を生み出す契機となったプライスの講演に対するバークの議会演説に対してなされたのである。

上記の通り、バーボールドはこの公開書簡において、匿名を用いて自らが女性であることを隠し、「男性 vs. 男性」という構図を創り出した。この「男性的」な書簡的人格によって、女性作家にも「男性的」な領域（政治、哲学、宗教等）への参入が容易になる。また、バーボールドのように男性並みの教育を受けた女性にして初めて可能という条件つきではあるものの、論理性や正義感を基盤とした雄弁な語りや、知的な揶揄というレトリックも可能になる。バーボールドがこの公開書簡で駆使した文学的戦略は、ジョンソンのもとで文章修行中の新人作家ウルストンクラフトに多くの示唆を与えたことであろう。また、バークのプライス批判に対する反論という構図も、プライスを恩師と心得ていたウルストンクラフトにある種の指針を与えたと思われる。

## 2-2 キャサリン・マコーリの「男性的」な語り

マコーリは18世紀イギリスを代表する歴史家の1人である。比較的裕福な家庭に生まれ、10代から20代にかけて父の書齋でギリシア・ローマ時代の歴史書に読み耽

り、共和主義に興味を抱くようになった彼女は、1760年に医師・助産師のジョージ・マコーリ（George Macaulay, 1716-66）と結婚し、自国の歴史を書き始める（*ODNB*）。当時、歴史書を著すことは「女性らしさ」の範疇を超える振舞と見なされていたが、マコーリを才媛として称賛する声も少なくなかった。<sup>35</sup>

そのマコーリが20年をかけて執筆した『イングランド史』全8巻（*History of England from the Accession of James I to That of the Brunswick Line, 1763-83*）は、イングランド内戦（*English Civil War, 1642-49*）を共和主義的な観点から描き出した大著であり（*Wiseman 181*）、バークの政治的立場に相對するものであった（*L 185, n. 414*）。前述の戯画でもマコーリは自身の『イングランド史』を擁護している。すなわち、戯画の作者にとってのマコーリはフランス革命賛美者というより17世紀の清教徒革命の擁護者であり、その観点からバークに「折檻」させていると考えられよう。もっとも、この戯画が公表された時点でのマコーリは、その直前に出版された『教育に関する書簡』（*Letters on Education, 1790*）の著者としての知名度の方が高かった（*Wiseman 193-95*）。慣習的なタイトルや女性の友人に宛てた手紙という形式は18世紀に隆盛を極めたコンダクトブックを想起させるが、副題『宗教的・形而上的主題に関する所見』（*Observations on Religious and Metaphysical Subjects*）が示す通り、その内容は「男性的」な領域に及んでいる。

ウルストンクラフトは（当時の慣習に倣い、匿名で）『教育に関する書簡』に長い書評を寄せ、この「男性的（*masculine*）で熱情的な作家」（*W 7: 309*）が、傑出した知性を教育という主題に向けたことを称賛している。<sup>36</sup> この書評の掲載が1790年11月であったという事実に鑑みると、ウルストンクラフトは本書を読み込み、書評を手がけた直後に『人間の権利の擁護』に着手したか、あるいは、2つの仕事に同時に取り組んだと思われる。いずれにせよ、『教育に関する書簡』に「女性の著作にはめったに見られない健全な理性と深い思索」（*W 7: 321-22*）を見出したウルストンクラ

フトが、自らの『人間の権利の擁護』において、マコーリのように「男性的」な主題を、「男性的」な文体・レトリックで論じようとした可能性を否定することは難し  
いだろう。もっとも、著名な歴史家マコーリは「男性的」な教育書簡を実名で出版  
することができた。一方、新人作家ウルストンクラフトは、まずは匿名という手段  
によって「男性的」な領域に足を踏み入れたと考えられる。

なお、『人間の権利の擁護』第2版より後ではあるが、前述の戯画の公表後まもなく、マコーリはバークの『省察』への直接的な反論を出版している。『エドモンド・  
バーク閣下によるフランス革命の省察に関する所見—スタノップ伯爵閣下宛て書簡』  
(*Observations on the Reflections of the Right Hon. Edmund Burke, on the Revolution in  
France. In a letter to the Right Hon. Earl of Stanhope, 1790*) は、友人スタノップ伯爵  
(Charles Stanhope, 3rd Earl Stanhope, 1753-1816) に宛てた書簡という形式を採って  
いる。「愛国者、哲学者、そして人間の諸権利の揺るぎない友」(Macaulay, *Observations  
5; Guest, Small Change 215-16*) としてのスタノップが、自らの議論を歓迎してくれる  
と見込んでのことだった。これは、「フランスの一友人に宛てた書簡」という形式を  
採ってイギリス国内の革命賛成者を徹底的に攻撃したバークに対する、意趣返しと  
も考えられよう。マコーリは本書で、歴史学という「男性的」な学問領域の強みを  
生かし、「女々しい」演劇性・虚構性に満ちたバークを「男性的」な事実の検証で論  
破しているのである (Favret, “Writing the French Revolution” 80-81)。

上記の点を整理すると、マコーリによるバークへの反論は、彼の議会演説に対し  
ては『イングランド史』、彼の『省察』に対しては『スタノップ伯爵宛て書簡』であ  
ると考えられる。後者はバーク本人に宛てた公開書簡ではないが、革命論争の一環  
をなす書簡形式の政治文書である。また、マコーリの著作のうち、ウルストンクラ  
フトの『人間の権利の擁護』にもっとも直接的な影響を与えたのは、「男性的」な主  
題と文体を持つ『教育に関する書簡』であったと考えられる。

### 2-3 ヘレン・マライア・ウィリアムズの手紙

ウィリアムズは「感受性の時代」を代表する詩人・小説家である。『詩集』(Poems, 1786)によって一躍名声を博した彼女は、ウィリアム・ワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)の初の出版作品、「ミス・ヘレン・マライア・ウィリアムズが悲痛な物語に涙をこぼす様をみて」(“Sonnet on Seeing Miss Helen Maria Williams Weep on a Tale of Distress,” 1787)に詠われたことでもよく知られている(Deborah Kennedy 36-38)。

そのウィリアムズは、1789年のバスティーユ牢獄陥落をテーマとする詩を自らの小説『ジュリア』(Julia, 1790)に挿入するなど、早くからフランス革命の熱狂的な賛美者であった(Williams, Julia 2: 218-23)。1790年の夏、ウルストンクラフトより2年半程早く渡仏した彼女は、長きにわたりパリに居住して革命の進展を観察し、その記録を全8巻に及ぶ『フランスからの手紙』として母国イギリスに送り続ける。前述の戯画でウィリアムズがバークに「折檻」する女性の1人として描かれているのは、『省察』のわずか2週間後に出版された『フランスからの手紙』第1巻が、暴政から解放された人々の様子を感じ動的に描き出す革命礼賛の書であったため、『省察』への反論と見なされたことを示唆している。<sup>37</sup> しかしながら、この第1巻は副題『1790年夏、イングランドの一友人宛て。フランス革命に関する様々な逸話、及びデュ・F夫妻の回想録を含む』(in the Summer of 1790, to a Friend in England; Containing Various Anecdotes Relative to the French Revolution; and Memoirs of Mons. and Madame du F---)が示す通り、1790年夏に執筆され、『省察』出版時には既に完成していたため、バークに対する直接的な返答ではない(Deborah Kennedy 73, 75)。もっとも、第2巻以降では革命礼賛と並行してイギリス国内の反革命派に対する批判が強まる。<sup>38</sup> 「一友人に宛てた手紙」という体裁を整えつつ、特定の人々を批判するという文学的戦略は、バークが『省察』で採用した方法に酷似している。

では、『フランスからの手紙』第1巻が当時のウルストンクラフトに与えた影響はいかなるものであったのか。この問いに関しては、彼女が(匿名で)寄せた書評(1790年12月)が参考になる。これは前節で検証したマコーリの『教育に関する書簡』の書評の翌月に相当する。時期的にみて、刊行されたばかりの『省察』を読み、義憤に駆られて『人間の権利の擁護』を書き始めたウルストンクラフトが、その最中に出版された『フランスからの手紙』を読み、書評を書くに至ったと思われる。すなわち、両者は並行して執筆された可能性が高い。

この書評は、「女性には一種の慣習として、手紙を書くコツ (the knack of epistolary writing)、すなわち、気取らない、自由な方法で、紙面でおしゃべりする才能を持つことが認められている」(W 7: 322) という一文で始まる。書評子は続けて、『フランスからの手紙』をそのような才能に恵まれた「好ましい作家」による、「興味深い、気取りのない (unaffected) 手紙」であると評している (W 7: 322)。また、同作家による「フランス革命の省察」は「真に女性的 (truly feminine)」であり、あらゆるページに彼女の「優しい心」が「柔らかな感情に忠実である」ことが示されていると述べている (W 7: 322)。ウルストンクラフトは本書以前にもウィリアムズの文体に「女性的な甘やかさ (feminine sweetness)」や「真正の、気取りのない敬虔さ (genuine unaffected piety)」を認めていた (W 7: 252)。この時点では未だ面識のなかったウルストンクラフトにとって、ウィリアムズは気取りのない、よき女性的感受性を体現する存在であったと思われる。もっとも、『フランスからの手紙』に顕著なこのジェンダー的特性は、『人間の権利の擁護』には直接的には反映されていない。その影響がもっとも色濃く認められるのは『北欧からの手紙』である。詳細は本論文第5章で検証する。

『フランスからの手紙』の書評において、ジェンダー的特性以外の注目すべき点は、「作品の一般的な特徴を読者自身に判断してもらうために」(W 7: 322)、書評子

が引用した部分に見られる。

I promised to send you a description of the federation: but it is not to be described!  
One must have been present, to form any judgment of a scene, the sublimity of which depended much less on its external magnificence than on the effect it produced on the minds of the spectators. (*W*7: 322)

上記の一節は、『フランスからの手紙』第1巻における第2の手紙の冒頭である。その直前、第1の手紙では、革命1周年記念式典（1790年7月14日）の様子が劇的に描き出されている。前年のバスティーユ牢獄襲撃事件が、600人以上の音楽家によって克明に再現される中、「聴衆の呼吸が困難になり、あらゆる心臓が恐怖で凍り付いたようだった」（Williams, *Letters Written in France* 63-64）ことを伝える手紙には、臨場感・緊迫感が漲っている。これは、バークの『省察』に顕著な、対岸の火事を高みから見物するような態度ときわめて対照的である。『フランスからの手紙』は、いわば火事現場に飛び込んだ人間による迫真のルポルタージュであり、そのエネルギーが、間接情報より自らの直感や経験に信を置くウルストンクラフトに強い影響を与えたと思われる。<sup>39</sup> 「現場にいること」の重要性を示す上記の一節を書評に引用したウルストンクラフトは、間接情報に頼って『省察』を書いたバークに対する批判を念頭に置いていたとも考えられよう。暴政から解放され、感動の涙を流す人々と現場で接し、彼らの人生を気取りのない、真に「女性的」な感受性言語に変換して母国に伝えるウィリアムズの『フランスからの手紙』は、「美辞麗句と幼稚な感受性」(*W*5: 58)を操るバーク宛ての公開書簡を執筆中のウルストンクラフトにとって、力強い援軍となったと思われる。

これまで見てきた通り、ウルストンクラフトは『人間の権利の擁護』執筆にあたり、同時代の女性作家から多くの影響を受けたと考えられる。以下、パークに「折檻」する女性作家 3 人からウルストンクラフトが継承したと思われる要素を改めて確認してみよう。

詩人・教育者バーボールドの公開書簡は、(一部の) 国会議員に宛てて「一非国教徒」が自分たちの正当な諸権利を「要求」するものである。彼女は匿名を用いて女性であることを隠し、「男性 vs. 男性」という構図を創り出した。そしてその構図に「特権的身分 vs. 社会的弱者」という要素を加え、自らを後者の代表として描き出し、論理性や正義感を基盤とした「男性的」で雄弁な語りを展開したのである。機知に富んだ揶揄や、「我々は(正当な社会的諸権利を) 人間として、市民として、臣民として要求する」という力強い語りは、当時「女性的」な領域での著述に留まっていたウルストンクラフトに、匿名による公開書簡という形式の持つ潜在的な力を自覚させたと思われる。既にジョンソンのもとで大量の書評を手がけていた彼女は、「男性的」とされる領域(宗教、哲学、科学等)にも果敢に取り組んでいた。男性並みの特権的な教育を受けたバーボールドによる公開書簡は、新人作家ウルストンクラフトに、独学でその地点を目指そうという気持ちを奮い立たせたことであろう。

歴史家マコーリの『教育に関する書簡』は、女性の友人に宛てた手紙という形式を採るが、女子教育の書ではない。『イングランド史』を共和主義の観点から執筆した歴史家が、主題の矛先を教育に向けたのである。すなわち、教育の対象は「人間」であり、ウルストンクラフトが書評で指摘したように、「性に特有の違いはない(No characteristic difference in sex)」(W7: 314)という観点から書かれている。著述家としてのキャリアを女子教育書で始めたウルストンクラフトは、マコーリの『教育に関する書簡』を熟読することによって、当時「男性的」とされていた概念や主題が本来は「人間的」とされるべきであること、ゆえに自分にもより広い領域での著述活

動が可能であることを信じるに至ったと思われる。尊敬するマコーリに続き、「男性的＝人間的」な主題に関する議論を、「男性的＝人間的」な文体・レトリックを用いて行うというウルストンクラフトの強い意欲が、『人間の権利の擁護』を生み出すことになったと考えられる。<sup>40</sup>

詩人・小説家ウィリアムズの『フランスからの手紙』は、革命の現場に飛び込んだ詩才豊かな女性が、刻々と変化するフランスの社会や人々の様子を母国宛てに書き綴った渾身のルポルタージュである。「男性的」な観点からの記述に陥りがちな当時の革命手記の中で、あえて「女性的」な感受性を前面に押し出した同書は、ウルストンクラフトにとっても「真の女性らしさ」を湛えた、優れた作品と映った。しかしながら、同書が当時のウルストンクラフトに与えたもっとも大きな影響は、歴史上の大事件の目撃者による現場からの中継という側面であろう。バークの『省察』が間接情報を基にしており、しかも細部まで計算され尽くした叙述であることに鑑みれば、「現場にいること」や実践、経験を重んじるウルストンクラフトが、ウィリアムズのルポルタージュに一次史料としての価値を認めたことは驚くに値しない。

上記の通り、ウルストンクラフトはバーク宛て公開書簡の執筆にあたり、自らの知的訓練の成果に加え、同時代の女性作家の強みや戦略を継承し、それらを創造的に発展させたと考えられる。彼女はこの試みを通じて、匿名から実名へ、「女性的」な領域から「男性的＝人間的」な領域へと著述の範囲を拡大していくことになる。



## 第2部 ウルストンクラフトの書簡体文学

第2部ではウルストンクラフトの書簡体作品を個別に分析する。第4章では〈論敵への手紙〉として『人間の権利の擁護』を取り上げ、ウルストンクラフトがこの公開書簡において政治家バークに対峙する中で新たな文学的人格を構築していく経緯を検証する。第5章では〈恋人への手紙〉として『北欧からの手紙』を取り上げ、実在の恋人宛ての私的書簡と並行して綴られたこの書簡体旅行記にウルストンクラフトが文学的虚構を織り込み、かつ語り手に男性性と女性性の混在する〈声〉を与えることで、公開書簡の要素を含む独創的な恋愛書簡文学を創り上げたことを実証する。第6章では〈娘への手紙〉として『マライア』を取り上げ、ウルストンクラフトが同時代の慣習的なコンダクトブックに頻出する〈親が子に宛てた教育目的の手紙〉という形式を換骨奪胎し、革新的な女子教育思想を展開していることを明らかにする。その上で、この教育書簡をある種の公開書簡に昇華するにあたり、彼女が駆使した語りの技法を検証する。

### 第4章 論敵への手紙—『人間の権利の擁護』

本章では、『人間の権利の擁護』においてウルストンクラフトが行ったバーク批判の内容及び方法を検証する。公開書簡という形式を用いてバークの「主要原則」(W 5: 5)に対峙しつつ、ウルストンクラフトはいかに自らの言語・文体を模索し、新たな境地を切り開いていったのか。議論をより効果的に行うにあたり、彼女が試みた文学的戦略を、教育者の語り、機知・揶揄、騎士道精神批判、という3つの観点から検証する。バークという、「文学的才能によってこの国で注目されるようになった」

(*W* 5: 7) 政治家を仮想敵に得たからこそ可能になったともいえる、ウルストンクラフトの新たな語りを明らかにしたい。

## 1 教育者の語り

公開書簡である『人間の権利の擁護』の主要目的が『省察』の論破 (refutation) であることは論を俟たない。「敵と正面から向き合い、同じ土俵で戦おうとする」(*W* 5: 29) ウルストンクラフトの姿には、確かに「義憤に駆られて決闘を挑む女剣士」(清水・後藤・梅垣 iv) のような趣がある。『女性かつ急進的知識人』という、伝統的社会秩序にとっての『二重のアウトサイダー』(梅垣, 「研究史」 236) としてバークの『省察』に論戦を挑んだウルストンクラフトは、彼の思想を主な標的としたが、同時に彼の言語・文体にも矛先を向けた。高等教育の成果ともいえる修辞学を駆使して読者を翻弄するバークに対し、そのような教育の恩恵に与れなかったウルストンクラフトは、ほぼ独学で身につけた言語・文体をむしろ武器として戦いに挑んだのである。<sup>41</sup> バークの文章に顕著な「美辞麗句と幼稚な感受性」に対する軽蔑がこみ上げてくるのを感じ、「中断して気持ちを落ち着かせる」場面もあるものの、彼女は最後まで勇敢に戦い抜いている (*W* 5: 58)。

しかしながら、注目すべきは、敵を倒すこと—相手の論の誤りを非難し、攻撃すること—を目的として書き始められたにもかかわらず、本書におけるウルストンクラフトの語りには、教育者としての面が垣間見えるという点である。トマス・ペイン (Thomas Paine, 1737-1809) やジェイムズ・マッキントッシュ (James Mackintosh, 1765-1832) がバークの『省察』に冷ややかで危険な偽善性しか認めなかった事実に鑑みれば、「書簡の全体的な傾向から見て、あなたは自惚れが強いにしても、善良な人だと考えるべきでしょう」(*W* 5: 7) というウルストンクラフトの言葉には、揶揄も込められていようが、相手の善いところを認めようとする教育者としての資質が

感じ取れる。『人間の権利の擁護』は、初期の教育書や児童文学という因襲的・保守的なジャンルからの脱皮という文脈で捉えられることが多いが(梅垣,「解説」267)、教育実践者(学校教師、ガヴァネス)として世に出たウルストンクラフトは生涯を通じて社会全体の教育、底上げを目指していたのであり、パークに対する公開書簡にもその姿勢の片鱗が認められるのはむしろ当然といえるかもしれない。裁判官のように客観的事実をもとに相手に処罰を加えたり裁いたりするのではなく、相手の誤りを指摘し、反省を促しつつ、自らも道徳的規範という役割を果たすため節制するという姿勢は、ガヴァネスの経験を基に書かれた『実生活実話集』における母親代わりの教育者メイスン夫人(Mrs Mason)とも共鳴している。<sup>42</sup>

では、『人間の権利の擁護』におけるウルストンクラフトの教育的な語りを具体的に見てみよう。特筆すべきは、二人称の語り、すなわち“you”を主語にした語りの多用である。論争の書である以上、「わたし」を全面的に押し出してもよさそうなものだが、重要なのは「あなた」の言動を明らかにして批判・説諭を試みることであり、そのため“you”を主語とした語りが多く、読者は(かなり辛辣な語りの)二人称小説を読んでいるかのような印象を受ける。<sup>43</sup>「あなたは皮肉を込めて民主主義者の一貫性を非難します」(W 5: 21)、「あなたはさらに論を進めて、プライス博士の意図を誤って伝え始めます」(W 5: 25)、「そのとき、あなたは計画的に行動したのです」(W 5: 28)等のたたみかけるような調子は、名目上の宛先パークを飛び越えて、読者にパークと一体になったかのような錯覚を起こさせる。ファヴレットも指摘する通り、「内部の読者(手紙を宛てられた人物)から外部の読者(名指しされていない公衆)への転換」(Favret, *Romantic Correspondence* 113)は公開書簡によくみられる戦略である。ウルストンクラフトは二人称の語りを駆使して、伝統的体制擁護というパーク的精神構造が生み出す悪徳の危険性を描き出すことにより、パーク及びその先にいる読者に反省と自己刷新を求めていると考えられる。

第3章第1節で言及した通り、バークに『省察』の執筆を促したのは、非国教牧師プライスの『祖国愛についての講話』であった。プライスは隣国フランスで起こった革命をイギリス名誉革命の反復と捉え、ゆえにフランス人も自由と立憲君主政体を樹立するという展望を寿いだのである (Bruyn 165)。この解釈を否定するバークは、『省察』でプライスを「政治的説教師」(Burke, *Reflections* 53) と揶揄し、彼のフランス革命賛美を慇懃無礼な文体で非難した。これに対し、ウルストンクラフトは二人称の語りを多用して次のように述べる。

In reprobating Dr Price's opinions you might have spared the man; and if you had had but half as much reverence for the grey hairs of virtue as for the accidental distinctions of rank, you would not have treated with such indecent familiarity and supercilious contempt, a member of the community whose talents and modest virtues place him high in the scale of moral excellence . . . Granting, for a moment, that Dr Price's political opinions are Utopian reveries, and that the world is not yet sufficiently civilized to adopt such a sublime system of morality; they could, however, only be the reveries of a benevolent mind . . . if a glimpse of the glad dawn of liberty rekindled the fire of youth in his veins, you . . . might have pardoned his unseemly transport. (*W* 5: 18)

上記の一節には、本来敬うべき相手に思い上がった態度を採る人物に対し、自らの言動を振り返るよう働きかける教育者の声が聞き取れる。ただし、恩師ともいうべきプライスを擁護するにあたり、ウルストンクラフトはバークをたしなめるだけでなく、彼に譲歩する姿勢も見せている。すなわち、バークが批判する通り、聖職者たるプライスの政治的意見はユートピア的な夢想到に留まっていること、また彼に

はフランス革命への期待が高じて我を忘れたかのように振舞う面があることを認めているのである。その上で、言動がどうあれ、プライスの精神構造の基盤をなすのは高い道徳性であることを指摘し、それをバークの非道徳性と対比させている。フランス王妃の美しい双眸に魅惑され、その実像—民衆の窮乏を省みようともしない、道義性や責任感に欠けた女性—を見過ごすバークに対し、社会的弱者の救済に生涯を捧げた非国教牧師プライスの高潔な人柄を強調することで、公開書簡の宛先バーク及びその先にいる幅広い層の読者に向けて、真の尊敬にふさわしい人間性とは何かを問いかけているのである。

ウルストンクラフトはまた、イギリス王室に対するバークの日和見主義的な態度にも義憤を覚えていた。1788年に国王ジョージ3世（George III, 1738-1820）が精神に異常をきたし、いわゆる摂政危機が起こった際、即位を狙う皇太子から大蔵省主計長官（Paymaster-General）の地位を呈示されたバークは、ジョージ3世に回復の見込みがないことを証明すべく精神科病院から統計資料をかき集めた上、全能の神が王を狂気に陥れ、「王座から追放した」（*W* 5: 27, n. c）と主張したのである（Todd, *Revolutionary Life* 163）。この折のバークの議会演説（1789年2月9日）—ジョージ3世を鞭打たれたキリストに喩えたもの（*W* 5: 26, n. a）—について、ウルストンクラフトは二人称の語りを用いて次のように述べる。

*Then you could in direct terms . . . exclaim without any pious qualms – ‘Ought they to make a mockery of him, putting a crown of thorns on his head, a reed in his hand, and dressing him in a raiment of purple, cry, Hail! King of the British!’ Where was your sensibility when you could utter this cruel mockery, equally insulting God and man? Go hence, thou slave of impulse, look into the private recesses of thy heart, and take not a mote from thy brother’s eye, till thou hast removed the beam from thine own. (*W**

5: 26)

イギリスの伝統的体制をあれほど賛美していたバークが、私利私欲に駆られて狂気の国王を見捨て、彼を退位に追い込む陰謀に加担し、あまつさえそれが神意であると主張したのである。ウルストンクラフトは君主制賛美者ではなかったが、バークの非人間性には驚愕した。上記の一節で彼女は新約聖書を引用し、文字通り説教を試みている。「衝動の奴隷」と呼びかけている箇所は、聖書の原文では「偽善者 (hypocrite)」である。「偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除くがよい。そうすればはっきり見えるようになって、兄弟の目から塵を取り除くことができるだろう」(Matt. 7: 5)。ウルストンクラフトにとって「あらゆる偽善者の中で、私の魂がもっとも怒りを感じてはねつけるのは宗教的偽善者」(W 5: 26) だった。「神も人間も同じように侮辱」するバークに聖書の言葉で説教を垂れたのは、教育者としての語りの中に、牧師プライスへのオマージュを織り込んだ面もあると考えられよう。

過ちを犯した相手を裁いたり処罰したりするのではなく、過ちの原因を探し、自らの弱さを克服するよう導く教育者としての資質がもっとも顕著なのは以下の一節であろう。狂気に陥った国王から大急ぎで「世襲的特権のすべてを剥ぎ取る」ことを望み、国王の「譎妄状態が慢性の狂気に定着するかどうかを時が決するまで待つことができなかった」バークに対し、ウルストンクラフトは改めて理性の重要性を持ち出す (W 5: 27)。

Where then was the infallibility of that extolled instinct which rises above reason? was it warped by vanity, or *hurled* from its throne by self-interest? To your own heart answer these questions in the sober hours of reflection – and, after reviewing this gust of passion, learn to respect the sovereignty of reason. (W 5: 27)

「これらの問いに答えよ」「理性の主権を敬うことを学べ」とは、まさに生徒に対する教師の語りを思わせる。第1章第1節で言及した、私的書簡で妹たちに説教めいた指示をするときの声にも近い。老獪な政治家バークに対し、上記のような淡々とした命令文で理性を敬うよう呼びかけるとは、匿名出版とはいえ肝の据わった著者である。なお、『人間の権利の擁護』には全編を通して「貴下 (Sir)」という呼びかけが使われており、書簡の形式としては相手に敬意を払っているが、上記の一節に顕著な通り、“I” と “you” の精神的な関係は対等といえよう。“Sir” という呼びかけはバーク本人が『省察』で用いたものであり、ウルストンクラフトは公開書簡というスタイルとともに、呼びかけの方法も踏襲したと考えられる。『人間の権利の擁護』に “Sir” は 25 回登場するが、相手に対する尊敬の念を示すというより、読者の注意喚起が必要な箇所に投入されたり、揶揄を込めて用いられたりしている。後者に関しては次節で詳しく検証する。

『人間の権利の擁護』の最後の 5 頁には “Sir” が登場しない。特に最後の 2 頁に入ると、ウルストンクラフトは一人称の語りを最小限に抑え、二人称の語りを強烈に響かせていく。以下の一節では一人称が完全に身を引き、〈理性〉とバークの想像上の対話が二人称で語られる。

Your reason may have often been the dupe of your imagination; but say, did you not sometimes angrily bid her be still, when she whispered that you were departing from strict truth? Or, when assuming the awful form of conscience, and only smiling at the vagaries of vanity, did she not austere bid you recollect your own errors, before you lifted the avenging stone? Did she not sometimes wave her hand, when you poured forth a torrent of shining sentences, and beseech you to concatenate them – plainly

telling you that the impassioned eloquence of the heart was calculated rather to affect than dazzle the reader, whom it hurried along to conviction? (*W* 5: 59)

バーク本人の「煌めく文章の奔流」を思わせるような擬人法や比喻を織り込み、さらに当の相手に対する皮肉も効かせた上記の一節は、純粹な説論・説教とは言い難い。それでも、「理性に対する甚だしい反感」(*W* 5: 10)を持つバークに対し、神から与えられた理性の声をなぜ無視し続けるのかと問いかけるウルストンクラフトの語りには、粘り強い教師の精神が感じ取れよう。バークが『省察』で露呈した非人間性は本質的なものではなく、神が人間に与えた理性の声を無視し続けた結果であり、ゆえに理性の声に（再び）耳を傾ければ、人間性を取り戻すことができるという信念も窺える。論争を主眼とする『人間の権利の擁護』において、論敵の思想・言語と果敢に戦う「女剣士」ウルストンクラフトは、同時に、相手の過ちの原因を探り、反省を呼びかけ、相手の向上可能な能力を信じる教育者としての声をも響かせているのである。

## 2 機知・揶揄

前節ではウルストンクラフトがバークの雄弁の奥にある虚栄心を見抜き、機知に富んだ揶揄を織り込みつつ、教育者としての責任感を持って語りかける様子を検証した。本節では彼女がこの機知・揶揄の表現に本腰を入れて取り組み、バーク自身の「煌めく文章の奔流」を模倣しつつ、文筆家として新たな境地を切り開いていく経緯を検証する。

前節で検証した通り、ウルストンクラフトは『人間の権利の擁護』においてバークという名目上の宛先・受取人を超え、本命のターゲットたる読者にメッセージを送っている。バークの『省察』を読んだ人に対しては読後感の再検討を迫り、未読



の人に対しては概略を説明しつつ、場合によっては警告を呼びかけるという多層的な語りは、『人間の権利の擁護』が書評として書き始められた可能性もあるという事情も影響していよう (Todd, *Revolutionary Life* 163)。特定の実在人物に宛てた公開書簡というジャンルは、書き手がその人物をある意味で犠牲・生贄に供することで、周囲にいる人々（読者）との知的交流を図る祭儀のような様相も呈している。

『省察』に端を発する革命論争において、急進主義者たちに犠牲・生贄として祭り上げられたバークは、それだけ大きな影響力をイギリス国民に対して持つ人物だった。当時の政治文化で重んじられた雄弁術 (oratory)、すなわち機知あるレトリックを即興で繰り出す手腕とそれを可能にする教養の深さで知られていた彼は、「議会を相手に数時間の即席演説すらできる」(半澤 399) 政治家だったのである。このバークを標的とした公論に参加するにあたり、ウルストンクラフト自身も機知あるレトリックを駆使しつつ、教養を示すべく古典からの引用や言及を試みている。

イギリスの伝統的体制を賛美するバークは、『省察』でフランス革命における教会財産の没収及び聖職者の特権剥奪を「犯罪行為」(Burke, *Reflections* 107) として罵倒し、財産・所有権 (property) の擁護に熱烈な雄弁を披露していた。これに対し、ウルストンクラフトはシェイクスピアの『ハムレット』(Hamlet, 1603) の台詞を織り込んだ揶揄で応酬する。

But you return to your old firm ground. – *Art thou there, True-penny?* Must we swear  
to secure property, and make assurance doubly sure, to give your perturbed spirit rest?  
Peace, peace to the manes of thy patriotic phrensy. (*W* 5: 37)

「そんなところにいるのか、相棒？」(Ham. 1.5.158) とは、『ハムレット』第1幕第5場に登場するユーモラスな台詞である。先王である父の亡霊が現れ、王子ハムレッ

トに復讐を誓わせ、姿を消す。父王が叔父に殺害されていたこと、その叔父が自分の母を娶り、現王の座に収まっていることに衝撃を受けつつも、亡霊という存在に対して懐疑的なハムレットは、その夜一緒にいた友人たちに亡霊を見たことを内密にするよう誓わせる。その彼の耳に、地下から「誓え (Swear)」という父王 (亡霊) の声が聞こえてくる。これに対するハムレットの台詞が、「そんなところにいるのか、相棒？」である。つまりウルストンクラフトは、無念さのため自らの「地盤 (old firm ground)」<sup>44</sup> に落ち着くことが叶わず、この世にさまよい出て息子に「誓え」と繰り返す亡霊の姿にバークをなぞらえているのだ。

バークの「地盤」である「財産 (property)」はフランス革命によって危機に晒されている。その無念さから『省察』を書くに至った彼に対し、ウルストンクラフトは「あなたの狼狽した精神を落ち着かせるために (to give your perturbed spirit rest)」、我々は財産の保全を誓わなければならないのかと問うている。この表現は、『ハムレット』の前出に続く場面で「誓え」と繰り返す亡霊に対するハムレットの台詞、「鎮まれ、鎮まれ、心乱れた亡霊よ (Rest, rest, perturbed spirit)」(1.5.190) を模したものだ。ウルストンクラフトはこの“Rest, rest”に応えるかのように、自らの言葉で「汝の愛国的熱狂の御霊に平安あれ (Peace, peace to the manes of thy patriotic phrensy)」と付け加えている。ここには、バークがプライスのフランス革命賛美を「若気の熱気 (juvenile warmth)」「熱狂 (enthusiasm)」(Burke, *Reflections* 65)、「激情発作 (sally)」(Burke, *Reflections* 66)、「非人間的で不自然な狂喜 (inhuman and unnatural rapture)」 「邪な陶醉 (unhallowed transports)」(Burke, *Reflections* 67)、「手放しの有頂天の発作 (fit of unguarded transport)」(Burke, *Reflections* 72) などと軽蔑したことへの意趣返しも込められていよう。幾重にも揶揄が織り込まれた一節である。

上記の一節をさらに深読みすると、実体の定かではない亡霊という現象にバークを配し、その亡霊に悩まされる王子・息子に自らを喩えるウルストンクラフトの文

学的戦略が浮かび上がる。「生前犯した罪の数々が焼き清められる」(1.5.12-13) まで夜はさまよい歩き、昼は業火に取り巻かれているという亡霊は、カトリックの煉獄(purgatory)からの使者と考えられよう(Barton 34)。一方、ハムレットの留学先はドイツのヴィッテンベルク大学、すなわちマルティン・ルター(Martin Luther, 1483-1546)が教鞭をとっていたプロテスタントの牙城である(1.2.113)。プロテスタント信仰において煉獄は存在しない。<sup>45</sup> ゆえに『ハムレット』の基調をなす復讐譚を、カトリック亡霊としての父とプロテスタント教育を受けた息子の対峙として読むこともできよう(Kastan 2014)。アイルランド出身のバークが生涯に渡ってカトリック寄りの心情を持っていたことは当時よく知られていた。<sup>46</sup> ウルストンクラフトは『ハムレット』を引用することで公論にふさわしい教養を示しつつ、イギリス国教会を崇敬するバークにカトリック亡霊の役をあてがい、自らをプロテスタント寄りの息子としてさりげなく描き出すことで、表面上はバークの過剰な財産擁護を批判した一節の中に宗教的な揶揄をも織り込んでいると考えられる。

『人間の権利の擁護』には『ハムレット』以外にも『夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*, 1600)、『リチャード3世』(*Richard III*, 1597)、『リア王』(*King Lear*, 1608)といったシェイクスピア作品が引用されている(W 5: 9, 29, 43, 60)。これは「公論に参画する『男性の筆』の必須要素」(後藤・清水 224)とされた機知あるレトリックや古典的教養を広く読者に示すための試みであると同時に、『省察』に見られる演劇性の強い語りや、劇場通いを好んだバークに対する、揶揄を込めた挑戦とも考えられよう。<sup>47</sup> 国内の悲惨な現実から目を逸らし、劇場という虚構世界での出来事や異国の王妃の悲運に涙を流すバークの姿をウルストンクラフトは次のように描き出す。

Misery, to reach your heart, I perceive, must have its cap and bells; your tears are reserved . . . for the declamation of the theatre, or for the downfall of queens, whose

rank alters the nature of folly, and throws a graceful veil over vices that degrade humanity; whilst the distress of many industrious mothers, whose *helpmates* have been torn from them, and the hungry cry of helpless babes, were vulgar sorrows that could not move your commiseration, though they might extort an alms. (*W* 5: 15-16)

想像力が生み出す虚構の美的世界に耽溺するバーク、特権階級を存続させるために人間性を奪われる国民、その苦しみを凝視するウルストンクラフトという構図が上記の一節から浮かび上がる。彼女はバークのみならず、『省察』の演劇的な世界に幻惑され、現実から浮遊した人々（その多くは特権階級であろう）をも揶揄しつつ批判しているのだ。「お芝居や隣国の王妃の悲運に涙を流している暇があったら、あなた（がた）の目の前で苦しんでいるイギリス国民の声に耳を傾けてください」、「義務として施しを与えるという消極的な姿勢ではなく、真の同情をもって彼らの人間性を尊重してください」と訴える彼女の声が聞こえてくる。『省察』におけるバークの「激情に駆られた熱弁」(*W* 5: 10) や演劇性・虚構性の強い文体が、真理と簡潔さを信条とするウルストンクラフトの胸に「軽蔑」(*W* 5: 58) を湧き上がらせ、その「反駁の精神」(*W* 5: 53) に火をつけたことは間違いない。

しかしながら、同時に、バークの「煌めく文章」が彼女にとって抗い難い魅力を持っていたことを否定するのも難しいだろう。『人間の権利の擁護』においてウルストンクラフトは、毒には毒をもって制すべしといった感のある文学的戦略を試みているのである。「あなたの専制的原理を包み込んでいる壮麗な衣装が剥ぎ取られた姿」(*W* 5: 37) を本人に見せたいと願う彼女は、彼から剥ぎ取った「壮麗な衣装」を自分が身にまとうことにより、バーク本人にその滑稽さを見せつけているようにも感じられる。以下の一節でウルストンクラフトはバークの仰々しい文体を揶揄しつつ、自らもその文体を模倣することで揶揄の効果を上げるという離れ業を演じている。

It is impossible to read half a dozen pages of your book without admiring your ingenuity, or indignantly spurning your sophisms. Words are heaped on words, till the understanding is confused by endeavouring to disentangle the sense, and the memory by tracing contradictions. After observing a host of these contradictions, it can scarcely be a breach of charity to think that you have often sacrificed your sincerity to enforce your favourite arguments, and called in your judgment to adjust the arrangement of words that could not convey its dictates. (*W* 5: 50)

『省察』はバークが「自分の判断を持ち込んで言葉を並べた」ために、「実際に語られたことが伝達されなくなった」書物であるとウルストンクラフトは揶揄している。彼は真理を追究する哲学者ではなく、また、実際に語られたことを誠実に伝達しようとする（真の）ジャーナリストでもなく、事実を自分の色で染め上げる政治家であり、しかもその言語表現を芸術の極みにまで高めた文学者でもあるというウルストンクラフトの理解が感じ取れよう。彼女はその理解を、バーク本人のみならず、その先にいる不特定多数の読者に向けても発信している。すなわち、『省察』という書物の性格を上記のように示すことで、バークの華麗で演劇的な文体に圧倒されず、常に批判精神をもって読むよう、読者に注意を呼びかけているのである。

これまで見てきたように、『人間の権利の擁護』においてウルストンクラフトは、バークの雄弁や馥郁たる文体・レトリックに反発しながらも、それを模倣して相手を揶揄することで、新たな言語表現を切り開いてきた。公開書簡の相手に「自分とは意見の合わない、熟練した作家」(*W* 5: 53)、しかもある種の毒を持つ人物を得たことで、ウルストンクラフトは「反駁の精神」をもって自らの思考力・文章力の限界に挑み、その殻を破ることができたのである。私的書簡を含め、ウルストンクラ

フトのこれまでの作品にほとんど見られないこの機知・揶揄というレトリックは、バークという仮想敵を得たからこそ実現した文学的果実であるといえよう。

### 3 騎士道精神批判

前節ではウルストンクラフトが「修辞の花々」(W 5: 9)で飾られたバークの文体を模倣しつつ、機知あるレトリックや揶揄という新たな言語表現を切り開いていく形を検証した。本節では、バークの『崇高と美の観念の起源についての哲学的探究』(*A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*, 1757, 以下『崇高と美』)におけるジェンダー化された道德観の源泉が「古の騎士道 (antient chivalry)」(Burke, *Reflections* 76)にあることを見抜いたウルストンクラフトが、バーク批判のために用いた戦略的な語りを検証する。

周知の通り、バークの『崇高と美』は〈崇高〉に男性性を、〈美〉に女性性を付与した美学論である (Kelly, *Revolutionary Feminism* 98; Bohls 144)。ウルストンクラフトは以下の一節において『崇高と美』に言及し、バークの道德理論が貴婦人やその予備軍に及ぼす影響を、揶揄を込めた文体で描き出す。

You may have convinced them that *littleness* and *weakness* are the very essence of beauty; and that the Supreme Being, in giving women beauty in the most supereminent degree, seemed to command them, by the powerful voice of Nature, not to cultivate the moral virtues that might chance to excite respect, and interfere with the pleasing sensations they were created to inspire. Thus confining truth, fortitude, and humanity, within the rigid pale of manly morals, they might justly argue, that to be loved, women's high end and great distinction! they should "learn to lisp, to totter in their walk, and nick-name God's creatures." Never, they might repeat after you, was any man, much

less a woman, rendered aimable by the force of those exalted qualities, fortitude, justice, wisdom, and truth; and thus forewarned of the sacrifice they must make to those austere, unnatural virtues, they would be authorized to turn all their attention to their persons, systematically neglecting morals to secure beauty. (*W* 5: 45)

上記の一節でウルストンクラフトが指摘するように、バークによれば小ささと弱さこそ美の本質であり、その体現ともいべき女性（貴婦人）は相手に心地よいセンセーション（身体的反応）を呼び起こすように創られている。〈崇高〉と異なり、〈美〉は尊敬の念を喚起するものではない。ゆえに女性たちは、尊敬の基盤たる道徳—女性にとって「謹厳で不自然な徳」—を涵養すべきではない。このようなまことしやかなジェンダー化によって、バークは女性から剛毅さ、正義、叡智、真理といった徳を理論的に奪ったのである。

そのバークは『省察』において、フランス革命によって「騎士道の時代が過ぎ去り」「ヨーロッパの栄光が永遠に消え失せた」ことを嘆いている (*Burke, Reflections* 76)。彼によれば、ヨーロッパ文明の基盤は「身分と女性に対する高雅な忠節、誇り高い服従、尊厳な信従、心情の恭順」 (*Burke, Reflections* 76) であり、ここで筆頭に挙げられた「身分と女性に対する忠節」、すなわち騎士道精神をフランス王妃マリー・アントワネット (*Marie Antoinette, 1755-93*) 賛美という形で雄弁に表している。ヴェルサイユ行進 (1789年10月6日) を経て家族もろともテュイルリー宮殿に幽閉された王妃が、積み重なる不幸を「自らの身分と血筋に恥じぬ振舞いで、また信仰と勇気をもって知られた君主の息女たるにふさわしい振舞いで平静に耐え抜いておられる」 (*Burke, Reflections* 75) ことを賞賛するバークは、皇太子妃時代の彼女を回想しつつ、その姿を騎士道精神たっぷりに描き出す。

It is now sixteen or seventeen years since I saw the queen of France, then the dauphiness, at Versailles; and surely never lighted on this orb, which she hardly seemed to touch, a more delightful vision. I saw her just above the horizon, decorating and cheering the elevated sphere she just began to move in, – glittering like the morning-star, full of life, and splendor, and joy. Oh! what a revolution! and what an heart must I have, to contemplate without emotion that elevation and that fall! Little did I dream when she added titles of veneration to those of enthusiastic, distant, respectful love, that she should ever be obliged to carry the sharp antidote against disgrace concealed in that bosom. (Burke, *Reflections* 75-76)

隣国の王妃に熱烈な忠節を捧げるバークは、その一方、ヴェルサイユ行進を取り囲んだ女性たちの言動を「下劣極まる女ども (the vilest of women) の汚れた姿をした地獄の気狂い女の、口にするのも忌まわしいありとあらゆる事柄 (abominations)」(Burke, *Reflections* 73) と罵倒する。この一節に騎士道精神の原理—高貴な女性への崇敬と、労働者階級の女性への軽蔑が表裏一体であること—を読み取ったウルストンクラフトは、後者の擁護をしつつ、バークの人間性に疑問を呈す。

Probably you mean women who gained a livelihood by selling vegetables or fish, who never had had any advantages of education; or their vices might have lost part of their abominable deformity, by losing part of their grossness. The queen of France – the great and small vulgar, claim our pity; they have almost insuperable obstacles to surmount in their progress towards true dignity of character; still I have such a plain downright understanding that I do not like to make a distinction without a difference. (*W* 5: 30)



騎士道精神（に染まったバーク）が女性を貴婦人（*lady*）とそれ以外の（崇敬に値しない）女（*woman*）に二分するのに対し、ウルストンクラフトは両者には本質的な違いがないと述べている。騎士道精神によって崇敬の対象とされるのであれ、その対象から外れて軽蔑の視線に晒されるのであれ、女性は常に男性によって客体化・周縁化されてきた。ウルストンクラフトはフランス革命によってヨーロッパの中世物語（*romance*）と騎士道の精神が衰退しつつあることを認め、「この精神が消滅した分、理性が広がるでしょう」と示唆している（*W* 5: 29）。古来より男性によって〈貴婦人〉と〈女〉というカテゴリに二分されたヨーロッパの女性たちに、統一性と主体性を与えたいという希望が垣間見える。ではこの希望を拠り所としてバークへの反駁に挑むにあたり、ウルストンクラフトはいかなる戦略を用いたのであろうか。

『人間の権利の擁護』には大きく分けて2種類の戦略が認められる。1つは、上流階級の女性の実態を明らかにした上で、バークの崇敬する騎士道精神が実は彼女たちの人間性を墮落させているという事実を指摘する、ジャーナリスト的な戦略である。もう1つは、前節で検証した機知・揶揄のレトリックを応用し、芝居好きなバークにある役をあてがうことで、彼が見過ごしている現実に（読者もろとも）目を開かせるというものである。以下、この2種類の戦略を詳しく検証してみよう。

### 3-1 ジャーナリスト的戦略

著述生活に入る前、アイルランド貴族のガヴァネスとして上流階級の女性の生活を目の当たりにしていたウルストンクラフトは、その不毛さに驚き呆れ、「私は貴婦人に生まれつくという不運に与らなかつたことを神に感謝します」（*L* 114）と妹宛ての私的書簡に漏らすほどであった。『人間の権利の擁護』の以下の一節にはその響きを感じられる。

I do not intend to be sarcastically paradoxical when I say, that women of fashion take husbands that they may have it in their power to coquet, the grand business of genteel life, with a number of admirers, and thus flutter the spring of life away, without laying up any store for the winter of age, or being of any use to society. Affection in the marriage state can only be founded on respect – and are these weak beings respectable? Children are neglected for lovers, and we express surprise that adulteries are so common! A woman never forgets to adorn herself to make an impression on the senses of the other sex, and to extort the homage which it is gallant to pay, and yet we wonder that they have such confined understandings. (*W* 5: 23)

愛人たちからの懇懃な忠節を期待し、常に着飾ることを生活の要としている上流階級の女性は、子どもの世話もせず、貴族の社会的義務 (*noblesse oblige*) も果たさず、日々漫然と生きている。ウルストンクラフトの目には、こうした女性は神から与えられた理性を涵養せず、従って徳を身に着けることができず、ゆえに人間性から程遠い存在と映ることは言うまでもない。問題はこういう女性を創り出してしまう騎士道精神と、それに対し戦う武器を女性自身が持たないことだ。ウルストンクラフトはパーク宛て公開書簡を通じ、男女の読者に注意喚起を試みる。

Even in France, Sir, before the revolution, literary celebrity procured a man the treatment of a gentleman; but you are going back for your credentials of politeness to more distant times. – Gothic affability is the mode you think proper to adopt, the condescension of a Baron, not the civility of a liberal man. Politeness is, indeed, the only substitute for humanity; or what distinguishes the civilised man from the unlettered savage? (*W* 5: 17)

バーク、ウルストンクラフトともに精通していたスコットランド啓蒙思想によれば、人間社会が原始的 (primitive) から田園的 (pastoral)、農耕的 (agricultural)、商業的 (commercial) へと発展し、文明 (civilisation) の度合いが高まり、洗練された (polished) 社会になるにつれ、女性を尊重する風潮も高まる (O'Neill 36-49, 89-123)。野蛮状態 (savagery) と文明社会を区別するものとして礼節を挙げる点で、バークとウルストンクラフトは意見の一致をみていると考えられよう。しかしこの礼節の捉え方において、両者には根本的な違いがあると思われる。

バークにとっては、礼節が騎士道—上記の一節にある「ゴシック時代の温和な物腰」—に相当することは明らかであろう。これに対し、ウルストンクラフトにとっては、騎士道で示されるのは中世封建制に由来する「儀礼的な謙遜」、すなわち、上位の者が儀礼として下位の者に見せる「温和な物腰」である。騎士道とは、形式上は男性が（上流階級の）女性に忠節を捧げるが、内実は男性が女性を保護しつつ支配するというシステムに他ならず、パターンリズムに繋がる。これをウルストンクラフトが礼節と認められないのはもったもみであろう。彼女が求めるのは、上記の一節にある通り、「自由な人間の礼儀正しさ」、すなわち対等な人間同士の間にも生まれる、相手への尊敬を示すための礼儀正しさである。フランス王妃に「儀礼的な謙遜」を示す一方、勤勉な労働者の女性を「下劣極まる女ども」と評するバークに、ウルストンクラフトは根本から発想の転換を迫っている。彼女たちは女性という一つの性であり、それは人間の一部をなしている。対等な人間が互いに尊敬を示す社会、そこに生まれる礼節こそ、徳と両立可能なものである。残念ながら、ヨーロッパ文明はそこまで到達していない、という彼女の認識が読み取れよう。<sup>48</sup>

では、中世的な騎士道が消滅すると、女性にはどのような変化が見込めるのだろうか。ウルストンクラフトはバークに対する揶揄を込めてその想像図を描き出す。

Instead of gaming they might nourish a virtuous ambition, and love might take place of the gallantry which you, with knightly fealty, venerate. Women would probably then act like mothers, and the fine lady, become a rational woman, might think it necessary to superintend her family and suckle her children, in order to fulfill her part of the social compact. (*W* 5: 24)

上記の一節でウルストンクラフトは、騎士道より上位に愛を位置づけている。騎士道由来の懇懃さではなく、神から与えられた理性に基づく愛を人生・生活の要とすることで、女性は自らの社会的責任をまっとうし、人間としての徳を身に着けることができるというのである。つまり、ウルストンクラフトにとって騎士道は百害あって一利なしの「ゴシック風の美の観念 (gothic notions of beauty)」(*W* 5: 10) と同種のものであり、ゆえにその衰退をもたらした (1790 年時点での) フランス革命は、ヨーロッパの夜明けを告げる喜ばしきものであったのだ。

『省察』においてバークは、啓蒙と理性を信奉する革命主義者がフランス国王夫妻から王位を含む諸特権を剥奪し、彼らをただの「男」「女」の地位にまで貶めたことを大仰に嘆く。これに対しウルストンクラフトは、表面上は彼の嘆きに同意しつつ、啓蒙と理性の正しさを主張する。

“On this scheme of things a king *is* but a man; a queen *is* but a woman; a woman *is* but an animal and an animal not of the highest order.” – All true, Sir; if she is not more attentive to the duties of humanity than queens and fashionable ladies in general are. I will still further accede to the opinion you have so justly conceived of the spirit which begins to animate this age. – “All homage paid to the sex in general, as such, and without distinct views, is to be regarded as *romance* and folly.” Undoubtedly; because such homage

vitiates them, prevents their endeavouring to obtain solid personal merit; and, in short, makes those beings vain inconsiderate dolls, who ought to be prudent mothers and useful members of society. (*W* 5: 25)

上記の一節でウルストンクラフトは『省察』の該当箇所を書き写し、相手の言い分を認めると見せかけて自らの主張をするというレトリックを用いている。「啓蒙と理性なるこの新征服帝国 (this new conquering empire of light and reason)」(Burke, *Reflections* 77) の体系がいかにヨーロッパ文明を破壊しつつあるか、その暁に出現する社会がいかなるものであるかを警告調で描き出すバークに対し、ウルストンクラフトは「まったくその通り」、あなたが警戒して描き出す社会こそ、我々人間が目指すべき社会であり、騎士道精神によって女性が人形にされる危険のない社会だと切り返しているのである。

### 3-2 ジェンダー・ロールの反転

18世紀において、理性に基づく正義、叡智、真理といった徳は「男性的 (manly)」と表現され、女性、特に貴婦人にはふさわしくない資質と見なされていた。しかしながら、ウルストンクラフトの考えによれば、これらこそまさに男女を問わず身につけるべき徳である。そこで彼女はこれらの徳を欠いているバークを「男らしくない (unmanly)」「女々しい (effeminate)」存在として描き出し、自らは「男性的」な徳の擁護者として語るという戦略を試みる (Kelly, *Revolutionary Feminism* 97; Todd, *Revolutionary Life* 163; 梅垣, 「解説」 248)。トッドの言葉を借りれば、「慣習的なジェンダー・ロールを反転」(Todd, *Revolutionary Life* 163) させ、バークという権威主義者に女性の役を割り振って客体化・周縁化しつつ、匿名の著者である自分に男性、すなわち人間としての人格を付与することで、ウルストンクラフトはそれに見合っ

た言語や文体を模索し、新たな〈声〉を切り開いていくのである。

『省察』においてプライスに「下品で馴れ馴れしく、傲慢で侮蔑的な」(W 5: 18) 態度をとったパークに対し、ウルストンクラフトはこの非国教牧師の人氣が「あなたの虚栄心を傷つけたのかもしれませんがね」(W 5: 17) とほのめかす。そしてプライスの「体現された徳と年輪を重ねた叡智」(W 5: 19) こそが人々の尊敬を集めているのだと指摘した上で、あなたのような徳や叡智に欠けた人間にプライスを批判・揶揄する資格があるのかと問い詰め、「男らしくない (unmanly) 皮肉や幼稚な (puerile) 思い上がりは捨て去りなさい」(W 5: 19) と言い切る。ウルストンクラフトは『人間の権利の擁護』において、当時の定石通り “man” を「人間」「男性」の両方の意味で用いているが、“unmanly” に関しては「人間らしくない」ではなく、「男らしくない」という意味で用いていると考えられる。「人間らしくない」の意には “inhuman” という語を充てているからだ。つまり、上記の一節にウルストンクラフトが込めたメッセージは、プライスを侮辱したパークは非人間的とまではいかないが、理性のコントロールが効かず、虚栄心に満ちた言動に及んだという意味で、「男らしくない」「幼稚な」人間ということであろう。「捨て去りなさい」という命令文も本章第1節で検証した教育者の語りを思わせる。

別の箇所でもウルストンクラフトは『省察』の内容から離れ、パークに対し、個人的にやましい言動がなかったかどうか反芻するよう呼びかける形で、その先にいる幅広い層の読者にパークの「男らしくない」振舞いを暴露してみせる。

I beseech you to ask your own heart, when you call yourself a friend of liberty, whether it would not be more consistent to style yourself the champion of property, the adorer of the golden image which power has set up? – And, when you are examining your heart, if it would not be too much like mathematical drudgery, to which a fine imagination very

reluctantly stoops, enquire further, how it is consistent with the vulgar notions of honesty, and the foundation of morality – truth; for a man to boast of his virtue and independence, when he cannot forget that he is at the moment enjoying the wages of falsehood; and that, in a skulking, unmanly way, he has secured himself a pension of fifteen hundred pounds per annum on the Irish establishment? Do honest men, Sir, for I am not rising to the refined principle of honour, ever receive the reward of their public services, or secret assistance, in the name of *another*? (*W* 5: 13)

この恩給に関して当時事情に通じていたのは、イギリス国内の急進派のごく一部であったと目されている (Blakemore 86-88)。「自分の徳と独立心を自慢する」とあるのは、バークが経済改革法案を提出した際の下院演説 (1780) で、改革に必要な徳と独立心を訴えたことを指す (*W* 5: 13, n. a)。上記の一節は「男らしくない」やり方で「欺瞞的報酬」を入手したバークに対する痛烈な批判であると同時に、『省察』に賛意を示した読者の目を見開かせる戦略としても気が利いていよう。「貴下」という呼びかけが限りなく皮肉に聞こえる一節である。

ウルストンクラフトはまた、騎士道精神によって人間的に墮落させられた貴婦人たちの側にバークを配置することで、彼が「男らしさ」「人間らしさ」からいかに遠く隔たっているかを描き出す。

Even the Ladies, Sir, may repeat your sprightly sallies, and retail in theatrical attitudes many of your sentimental exclamations. Sensibility is the *manie* of the day, and compassion the virtue which is to cover a multitude of vices, whilst justice is left to mourn in sullen silence, and balance truth in vain. (*W* 5: 8)

過度の感受性に耽溺し、感嘆の声を上げて芝居に熱中し、ある種の同情心は持っているものの、それを用いて目の前の現実—社会的不正義—を見ようとしない、すなわち人間的な徳に欠ける貴婦人たちの姿は誰かに似ていませんか、と問いかけるウルストンクラフトの声が聞こえてきそうである。第1章第1節でも言及した通り、ウルストンクラフトの生涯及び全著作は、人間性を高める「善き／真の感受性」と人間性を墮落させる「悪しき／偽りの感受性」の関係、及び感受性とジェンダー的特性の関係を追求することに費やされたが、彼女がバークの中に認めた感受性は「抑制されていない本能的な諸感情に由来する感傷主義・官能主義の一形態」(O'Neill 112)から生じる悪しき種であり、これは当時の考え方に倣えば「女々しい」資質であった。<sup>49</sup> バーク宛て公開書簡の本命のターゲットである幅広い層の読者の中には、上記の一節に戯画化されたバークの姿を認める人もいたことであろう。聡明な読者の中には、バークの「女々しさ」が持って生まれたものではなく、貴婦人に騎士道的な忠誠を捧げているうちに相手の「女々しさ」に同化し、バーク自身も正義から目を逸らすという「男らしくない」人間になってしまったという皮肉な経緯を読み取る人もいたかもしれない。さらに進んで、騎士道精神が相手の女性のみならず、それを捧げた男性自身をも人間的に墮落させるものであるという警告を受け取る読者もいたとすれば、ウルストンクラフトの真のメッセージが伝わったことになるろう。

上記の通り、ウルストンクラフトにとってバークが「男らしくない」最大の理由は、正義に対する彼の態度が、無視または隠蔽であるという点に尽きる。もちろん、彼の視点に立てば、イギリスの伝統的体制を死守することこそ正義なのだが、その伝統的体制に非人間的な奴隷制が含まれていることは、ウルストンクラフトも本書で指摘している (*W* 5: 14)。<sup>50</sup> 貴族・聖職者の特権維持を熱烈に擁護するバークは、一方で貧民に対しては「最も専制的な精神 (the most tyrannic spirit)」(*W* 5: 55) を垣間見せている。『省察』においてバークは次のように熱弁を振るう。



They must respect that property of which they cannot partake. They must labour to obtain what by labour can be obtained; and when they find, as they commonly do, the success disproportioned to the endeavour, they must be taught their consolation in the final proportions of eternal justice. Of this consolation, whoever deprives them, deadens their industry, and strikes at the root of all acquisition as of all conservation. He that does this is the cruel oppressor, the merciless enemy of the poor and wretched. (Burke, *Reflections* 246)

上記の一節に憤慨したウルストンクラフトは、「これは謙虚さと神の意志への服従というもっともらしい形式をとった、見下げ果てた無慈悲な詭弁だ」(W 5: 55)と切り返す。そして、「あなたは貧民を現世でより幸せにすることが可能なのです。彼らから慰めを剥奪しておいて、来世であなたがそれを彼らに無償で与えなくても」(W 5: 55)と痛烈な揶揄を浴びせる。ウルストンクラフトにとってバークは、社会的不平等・不正義を看過するだけでなく、上記のような詭弁でそれを覆い隠す、まったくもって「男らしくない」人間なのである。

「謙虚さと神の意志への服従というもっともらしい形式」をとりつつ、内実は(現世における)民衆の不幸を再生産するシステムの維持に汲々としているバークに対し、ウルストンクラフトは真の「男らしさ」を次のように描き出す。

To endeavour to make unhappy men resigned to their fate, is the tender endeavour of short-sighted benevolence, of transient yearnings of humanity; but to labour to increase human happiness by extirpating error, is a masculine godlike affection. (W 5: 53)

上記の一節でウルストンクラフトは、人々に不幸を自分の運命として甘受させる形で現状維持に努めることは「近視眼的」「一時的」、つまりその場しのぎの処方箋に過ぎないと指摘している。これが、社会に深く巣食う不正義という悪徳の根本的な治療につながらないのは言うまでもない。ウルストンクラフトによれば、我々人間に必要なのはその場しのぎという「やわな努力 (tender endeavour)」<sup>51</sup>ではなく、誤りを根絶して人間の幸福を増大すべく骨を折ること、文字通り「労働」することである。そしてそれは、人間には過酷な難行であると同時に、「男らしく神々しい愛情」、すなわち神にも等しい、全人類的な愛情だと述べている。『人間の権利の擁護』全編を通し、「男らしい」「人間らしい」を“manly”という語で表現してきたウルストンクラフトは、ここで初めて“masculine”という語を用いている。“godlike”と並列させる語として、「人間らしい」という意味を含む“manly”を使うわけにはいかなかったのだろう。また、キリスト教において“He”と表象される神を形容するためには、“manly”より男性性を際立たせる“masculine”がふさわしいと判断したとも考えられる。いずれにせよ、“masculine godlike affection”という語の組み合わせには、バークへの強い批判が読み取れる。彼にとって愛情の基盤は優しさだが、それは人間的な徳を包み隠す「女々しい」資質でもあり、ゆえに正義とは相容れないものだった。翻って、ウルストンクラフトの考える愛情とは、神が人間に与える人類愛にも等しいものであり、その基盤は「誤りを根絶すること」、すなわち正義なのである。

ウルストンクラフトが『人間の権利の擁護』で採用したジェンダー・ロールの反転という戦略は、女性として客体化・周縁化された自己から脱し、主体としての自己を取り戻す、あるいはそれを初めて手に入れるための試みでもあった。バークに「女々しい」役割をあてがい、自らに「男らしい」「人間らしい」文学上の人格を付与することで、実際にそのような言語、文体、表現を切り開いていくことが可能になる。匿名出版という戦略を取ったこともあり、ウルストンクラフトは権威主義者

に対するアウトサイダーとしての立場に加え、感受性過多で「女々しい」詭弁者に対する、真理と正義を愛する「男らしい」理性を持った人間としての立場で戦うことができた。そしてその過程で、彼女は実際に「男らしい」文学的人格を獲得したのである。

本章では、『人間の権利の擁護』において、ウルストンクラフトが公開書簡の宛先・受取人バークと対峙しつつ、自らの考えを深める経緯、及びその議論を効果的に行うための文学的戦略を検証した。匿名という手段によって自らが女性であることを隠し、「男性 vs. 男性」という構図を創り出してそこに「権威主義者 vs. アウトサイダー」という要素を加え、自らを後者の代表として表象する方法は、バーボールドが非国教徒としての立場で書いた公開書簡を想起させる。また、当時「男性的」と認識されていた、理性に基づく正義、叡智、真理といった肯定的な資質が、本来は「人間的」なものであるという認識と主張は、マコーリの『教育に関する書簡』に導かれた面が強いといえよう。さらに、大上段に構えた演説で著名な政治家バークに対し、常に現場の、すなわち自らを含む社会的弱者の声を誠実に〈公〉に届けようとするウルストンクラフトの姿勢には、ウィリアムズの『フランスからの手紙』の影響が認められる。『人間の権利の擁護』は、同時代の女性作家が様々な戦略で試みたバークへの反論、及びフランス革命への賛意表明を発展的に継承していると考えられる。

また、論敵の反駁を主要目的とする公開書簡でありながら、相手を教え諭すような語りと、相手の機知あるレトリックを模倣しつつその過剰性を揶揄する語りを擦り合わせたテキストは、底知れぬエネルギーを秘めた混沌ともいうべき様相を呈している。本書以前に公表されたウルストンクラフトの作品には、これほど圧倒的な語りや文体は見られない。匿名という手段によって、相手の「女々しさ」を批判す

る形で自らは「男性的」な論理や文体の構築を試みることができたのも、バークの『省察』という書物の性格ゆえであった。『人間の権利の擁護』が他の誰でもなく、バークという政治家に宛てた公開書簡であることの重要性が浮かび上がる。本書で正面からバーク批判に挑戦したことをきっかけに、ウルストンクラフトは「思想家としての脱皮」（梅垣，「解説」 267）を遂げると同時に、文筆家としても新たな境地を切り開いたといえよう。

## 第5章 恋人への手紙—『北欧からの手紙』

本章ではウルストンクラフトが『北欧からの手紙』において「ある女性が恋人の男性に宛てた手紙」という構図に旅行記、歴史的・哲学的考察等の要素を織り込みつつ、名目上の宛先・受取人の先にいる〈公〉、すなわち幅広い層の読者に宛てて送ろうと試みたメッセージ、及びそれを効果的に行うために用いた文学的戦略を明らかにする。

まず、1790年の『人間の権利の擁護』から1796年の『北欧からの手紙』に至るウルストンクラフトの著作を概観しておこう。初の理論的著作の成功後、彼女は『女性の権利の擁護』及び『フランス革命論』においても、神由来の理性を涵養することで獲得できる「男性的 (manly)」な徳の体現者としての姿勢を貫いている。初版に実名を明記した『女性の権利の擁護』は、自らが女性であることを明らかにした上で、あえて「男性性」を打ち出した著作であるといえる。タイトルから想起されるような、女性の連帯に向けての呼びかけも皆無ではないが、むしろ「女々しく」「子どもじみた」女性たちに対する厳しい批判が目立つ。理性を基盤とする徳を涵養しつつ、社会的正義を追求する「男性的」なウルストンクラフトにとって、自らの理性を働かせず、男性の理性に依存している女性たちは、連帯の対象としての前提条件を欠いているといえよう。そのような女性たちはまず、「より男性的 (masculine) になること」、すなわち当時「男性的」と認識されていた才能や徳を涵養することによって「人間性を高貴にする」ことが必要であった (W5: 74)。ウルストンクラフトはまた、こうした女性たちに「優しい言葉遣い、情にもろい心、繊細な感情、趣味の洗練といった表現は弱さという言葉とほとんど同じ意味である」こと、そして「憐れみの対象に過ぎない人たちや、憐れみと大して変わらぬ恋愛の対象に過ぎない人たちは、やがて軽蔑の対象となるであろうということ」を納得させたいという (W5:

75)。すなわち、『女性の権利の擁護』は、一足先に「男性的」な徳を身につけた女性哲学者／思想家 (female philosopher) による女性教化の書ともいうべき様相を呈している。

「女性」と「哲学者／思想家」という、当時相容れないものとして認識されていた 2 つの人格を統合させようと試みつつ、主に後者の観点から語るという姿勢は、次作『フランス革命論』にも顕著である。しかしながら、同書には女性教化の要素は見られないといってよい。それは、同書の主眼が母国イギリスの読者にフランスの現状を報告しつつ、両国の社会の比較、ひいてはヨーロッパ社会の発展に関する考察を行うことに置かれているためであり、ジェンダーに関わる要素を最小限に留めたのはウルストンクラフトの戦略的意図であると考えられる。ウィリアムズの『フランスからの手紙』同様、ウルストンクラフトの『フランス革命論』もルポルタージュとしての性格を備えているが、ウィリアムズが明白に女性という視点に立って革命を解釈しているのに対し（大石、「境界線上のルポルタージュ」168）、ウルストンクラフトは女性的属性を示さない言語、当時の考え方で言えば「男性的」な理性の言語を用いて、フランス革命の歴史的・道徳的考察を試みていると考えられる。

上記の通り、ウルストンクラフトは『人間の権利の擁護』で培った「男性的」な一現代で言えば、男性性に加えて両性具有的な人間性 (humanity) を基盤とする一視点を『女性の権利の擁護』及び『フランス革命論』で貫いたが、後者の 2 年後に出版された『北欧からの手紙』では、語り手のジェンダー的特性に大きな変化が見られる。ある女性が恋人と思しき男性に宛てた 25 通の手紙で構成される『北欧からの手紙』においては、語り手の主観的な、女性としての語りテキストに色濃く織り込まれるのである。ウルストンクラフトのこの変化の背景には、第 1 章第 1 節で言及した通り、革命下のフランスにおけるイムレイとの恋愛、そして出産という女性特有の経験が大きな影響をもたらしていることは論を俟たない。もっとも、『北欧か

らの手紙』がイムレイ宛ての手紙（私的書簡）を単に編集したものではなく、それらをヒントにしつつも、ウルストンクラフトが始めから〈公〉に向けて書いた書簡体文学であることは、既にファヴレット等が実証している（Favret, *Romantic Correspondence* 100-04; Hirakura, “From ‘I’ to ‘You’” 1-10; Todd, *Revolutionary Life* 367-68）。

『北欧からの手紙』における、ウルストンクラフトの「男性的」な語りから「女性的」な語りへの変化には、同時代の読者も敏感に反応している。例えば、小説家志望のアミーリア・オルダーソン（Amelia Opie, nee Alderson, 1769-1853）はウルストンクラフトにファンレターを書き、「（それ以前の著作で）哲学者が引き起こした冷たい畏怖の念は、女性が呼び起こした優しい共感の気持ちの中に消えてしまいました」（Favret, *Romantic Correspondence* 100; Poovey 83; Todd, *Revolutionary Life* 368-69）と伝えている。同時代の書評にも、妻や母としての著者の自己表象に一定の評価を与えるものが多かった（Brekke and Mee xxiii-xxiv）。また、第1章第1節でも言及した通り、後に夫となるゴドウィンがウルストンクラフトを好ましい女性として意識するきっかけが、本書における「感受性の女性」という自己表象にあったという伝記的背景も、後世の読者にある種の先入観を与えている感は否めない（Godwin, *Memoirs* 95）。

しかしながら、『北欧からの手紙』で取り上げられている題材の大半は哲学や法律、経済、そして商業であり、これらは当時「男性的」と認識されていた領域である。また、同時代の女性の旅行記の多くが「ジェンダー的に制限された視点」（O'Brien 193）を打ち出していたことに鑑みれば、語り手が旅先で出会う人々に「男性の質問」（*W* 6: 248）を浴びせつつ、当時ヨーロッパ文明の及ばぬ未開地とされていた北欧の様子を読者に伝える本書は、「情報を与える」旅（“informative” travel）という「きわめて男性的な伝統」を反映した旅行記という指摘ももつともであろう（Perkins 302）。<sup>52</sup> こ

ここで留意すべきは、「男性的」という概念に対するウルストンクラフト本人の考え方の変化である。彼女は『人間の権利の擁護』で培った人間的という意味での「男性的」な自己意識を『女性の権利の擁護』及び『フランス革命論』においても貫いているが、『北欧からの手紙』においては、その概念に多義性を認めざるを得なくなっているように思われる。

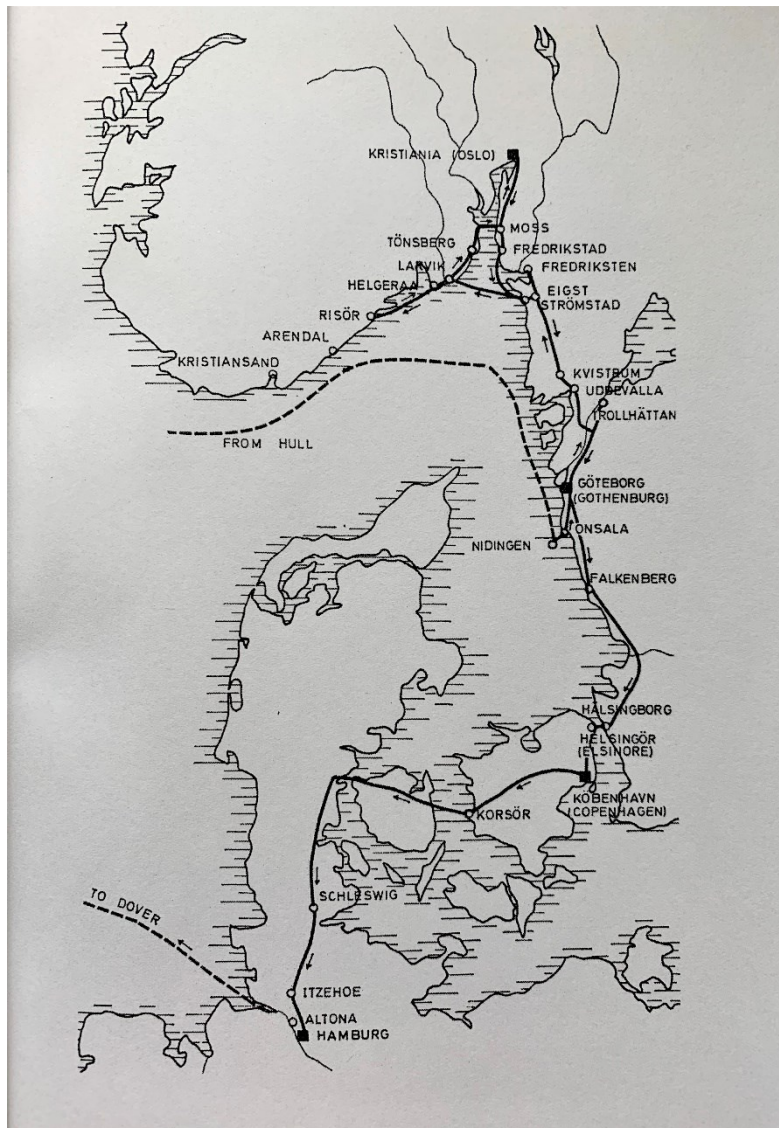
以下、本章ではウルストンクラフトの北欧旅行の目的及び成果を確認した上で、『北欧からの手紙』の語り手の「男性性」、続いてその「女性性」を検証する。この作業により、『北欧からの手紙』という作品が、『人間の権利の擁護』、『女性の権利の擁護』、及び『フランス革命論』を書いたウルストンクラフトにして初めて可能な、きわめて独創的な恋愛書簡文学／公開書簡であることを明らかにしたい。

## 1 北欧旅行の目的と成果

まず、ウルストンクラフトの北欧旅行の目的を確認しよう。それは、イムレイの代理人として、彼の貨物船が行方不明になった事件の調査を進めることであった。当時、革命下のフランスに対してイギリスが海上封鎖の措置を取っており、イムレイはそれをかいくぐってフランスとの貿易を続けるために、中立の立場をとる北欧諸国の貿易商を利用していた。1794年8月、イムレイとイエーテボリ（スウェーデン語: Göteborg, 英語: Gothenburg）の貿易商エライアス・バックマン (Elias Backman) は、フランス船をノルウェー船籍に装い、穀物買い付けのためにフランスの銀を積んでイエーテボリに向かわせる。しかしながら、ノルウェー人船長ペーデル・エレフセン (Peder Ellefsen) の指揮する同船は目的地に到着せず、姿を消した。デンマーク王立委員会が調査に着手し、エレフセンは1795年2月に逮捕されたが、家族が高額の保釈金を払ったため、すぐに保釈された。エレフセンはノルウェーのアーレンダール (Arendal) で積荷を下ろしたと推測されていたが、事件は解決していなかつ



たため、イムレイはウルストンクラフトを自らの代理人に任命し、補償請求を目的として北欧に送り出したのである (Brekke and Mee xiii-xvii; Favret, *Romantic Correspondence* 97-98; Todd, *Revolutionary Life* 240, 303)。なお、委任状における代理人の身分は「我が親友にして妻、メアリ・イムレイ」(Favret, *Romantic Correspondence* 98; *GI* 135; Todd, *Revolutionary Life* 303; Wardle 225) であった。彼女は 1795 年 6 月にイングランド北部のハル (Hull) を出発し、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、そしてドイツ北部へと旅を続け、同年 10 月に帰国することになる (図 4)。<sup>53</sup>



(図 4)

イムレイの代理人としての任務の内容とウルストンクラフトの旅程の関係を明らかにしたのは、イエーテボリ知事を長年務めた歴史家ペール・ニーストロム (Per Nyström) である。彼の画期的な論考『メアリ・ウルストンクラフトの北欧への旅』(1980) を引き継ぐ形で、『北欧からの手紙』ペンギン版 (1987) の編集者リチャード・ホームズ (Richard Holmes)、及びピカリング版 (1989) の編集者トッド及びバトラー (Todd and Butler) が解説を試みているが、ウルストンクラフト本人が旅行の任務や成果について書き残した文書の存在は長年にわたり確認されておらず、事件の全貌は想像の域を出なかった。事件に見通しをつけたのは、1 通の手紙 (公的書簡) である。これは第 1 章第 2 節でも言及した通り、北欧旅行中のウルストンクラフトがデンマーク首相ベアンストーフ伯爵に宛てたものであり、イムレイの代理人としての任務遂行に支障が生じたため、首相に直訴した経緯が読み取れる (Todd, *Revolutionary Life* 343)。<sup>54</sup>

注目すべきは、「メアリ・イムレイ」という身分で北欧に赴いた彼女が、この書簡を「私自身の名前、メアリ・ウルストンクラフトとして自己紹介させてください」と始め、「道徳作家 (moral writer) としての私の人格は広く認められておりますため、真実の隠蔽や策略の類に私が関わろうなどと疑う人はいないと申し上げてもお許しいただけるかと存じます」と述べていることだ (LB 137)。もちろん、書面には「イムレイ夫人 (femme Imlay)」(LB 139) という形式的な署名も見られるが、あえてその枠を超え、「私自身の名前」と「道徳作家」という人格を強く打ち出しているところに、北欧旅行中に起こったウルストンクラフトの心境の変化を読み取ることができよう。

また、上記のデンマーク首相宛て書簡には、エレフセンが船長としてイムレイに雇われ、パリで仕入れた銀を港町ル・アーヴル (Le Havre) まで運んだ経緯が綴られている。ウルストンクラフトは銀がエレフセンの部屋に保管されているのを見たこ

と、彼が友人の助けを借りて銀を船に運んだことを伝え、「閣下、私がエレフセンに最後の命令を与えたのです。イムレイ氏は前日パリに向けて出発していましたから」(LB 138)と明言している。すなわち、彼女は北欧に赴く前からエレフセンと面識があったばかりか、既にイムレイの代理人として一好むと好まざるとにかかわらずこの事件に関与していたのである。

上記の事実に鑑みると、ウルストンクラフトが(一度目の)自殺未遂の直後という危機的な状況にありながら、なぜ多くの困難が伴う北欧行きを承諾したのかという問いに新たな光を投げかけることができよう。これまでこの問いに対しては、①代理人としての任務を遂行することでイムレイの心を取り戻そうとした、②転地療養として北欧行きが望ましいと思われた、③イムレイとの関係がどのような結末を迎えても、自分と娘の経済的自立のためには多数の読者が見込める旅行記の執筆・出版が必要だった、等の理由が考えられてきた(Favret, *Romantic Correspondence* 234, n. 8; Hirakura, "From 'I' to 'You'" 3; Wardle 225)。これらに加え、デンマーク首相宛ての書簡からは、④自らが部分的に関与した(せざるを得なかった)事件に関する責任を果たそうとした、⑤エレフセンの横領という罪を放置せず、社会的正義を行おうとした、という理由も浮かび上がる。ウルストンクラフトはまさに「道德作家」として、すなわち、『人間の権利の擁護』で自らに付与した「男性的」な人格に対する自覚と誇りを持って、北欧行きを決心したと考えられよう。

リン・ハント(Lynn Hunt)によれば、18世紀ヨーロッパの女性たちが「普遍的で平等で生得的な人権」の行使から排除された第一の理由は、彼女たちが「本質的に父親か夫に依存する」存在であり、ゆえに「道德的自律性(moral autonomy)を決して完全には持ち得ない」とみなされたからであった(Hunt 28)。すなわち、ウルストンクラフトが北欧旅行中に自らを“moral writer”として強く認識するに至ったのは、自分は「道德的自律性を決して完全には持ち得ない」女性ではなく、「男性的」(人

間的) な道徳的自律性を十分持っている人間であり、むしろそれを持っていないイムレイを「男性的」ではないと捉えたということであろう。後述する通り、イムレイの「男性性」は商業・ビジネスに結びつくものであり、ウルストンクラフトはそれを悪しき男性性と見なしたと考えられる (Holmes, Introduction 33; Kelly, *Revolutionary Feminism* 177)。

では、「我が親友にして妻」を北欧に送り出したイムレイの最大の関心事である、船舶及びフランス銀の補償請求という旅の目的が達せられたか否かを確認しよう。ノルウェーのリーセール (Risør/Risor) でエレフセンに対峙したウルストンクラフトは、積荷横領に関する部分的な自白を彼から引き出したものの、補償金の支払いは不可能という事実を突きつけられる。その経緯をデンマーク首相に伝える彼女の言葉には、ビジネスの損失に対する苛立たしさもさることながら、デンマーク＝ノルウェー王国の裁判制度に対する道徳的な怒りが顕著である。

[Ellefsen] had been spurred on by his attorneys, the pest of the country. Their plan, I perceive, was to weary us out by procrastination. The suit has already been pending a twelvemonth, and the want of such a considerable sum in trade, as well as the expenses incurred by the detention of the vessel, which it has been proved he endeavoured to sink, is a very serious injury to us, not to dwell on the vexatious circumstances attending the failure of a commercial plan. I am very well convinced that an English jury would long ago have decided in our favour not suffering justice to be insulted in the manner it has been with impunity; but the judges are timid. (LB 138-39)

現存するイムレイ宛ての手紙 (私的書簡) には、上記の経緯に関する言及はない。ウルストンクラフト本人が言及を避けたのか、言及したものの、その手紙が紛失し

たのか、あるいはそれを編集する際にゴドウィンが公表には不適切と考えて破棄したのか、いずれの可能性もあり得る。ともあれ、上記の公的書簡のおかげで、イムレイの代理人としてエレフセンに対峙したウルストンクラフトが、事態の打開を図るためにデンマーク首相―「正義を愛することで知られているお方」(LB 139)―に直訴したという事実が浮き彫りになったのである。

上記の書簡を送った後、彼女は実際にデンマーク首相と面会する。現存するイムレイ宛ての手紙(私的書簡)ではこの面会が言及されていないため、ウルストンクラフトが直訴した内容に対する首相の反応は、『北欧からの手紙』の記述から想像するしかない。

He is a worthy man, a little vain of his virtue *à la Necker*, and more anxious not to do wrong, that is to avoid blame, than desirous of doing good; especially if any particular good demands a change. Prudence, in short, seems to be the basis of his character; and, from the tenour [sic] of the government, I should think inclining to that cautious circumspection which treads on the heels of timidity. He has considerable information, and some finesse; or he could not be a minister. (W 6: 331)

上記の人物像は、北欧旅行前半の好意的な評価(W 6: 276, 6: 290, 6: 322)と対照的だ。また、上記の1つ前の手紙で語り手は、国王や摂政王太子を抜け目なく操るベアンストーフ伯爵を「黒幕として姿を隠すことのほとんどない、本当の主権者」(W 6: 330)と呼び、首相としての手腕を認めていたが、その評価にも変化の兆しが見える。上記の一節にある「臆病」とは、ウルストンクラフトがデンマーク首相宛ての書簡でノルウェーの判事たちを描写するのに用いた言葉であることを想起しよう。社会的正義をなすのが職務でありながら、臆病なためにそれを怠る判事同様、デンマーク

首相も臆病さや用心深さが先立ち、正義を行う勇氣、すなわち「男性的」な資質を欠いているという告発の声がここに織り込まれていることが感じられる。

ウルストンクラフトが「道德作家」としての自覚を持って横領事件を直訴したにもかかわらず、デンマーク首相は、少なくともこの面談の時点では、問題に善処したとは考えにくい。彼女はエレフセンから補償金を引き出すことができなかつたばかりか、デンマーク首相の協力も得られなかつたことになる (Todd, *Revolutionary Life* 343, 350)。すなわち、イムレイの代理人としての任務に失敗した上、「道德作家」としての矜持も打ち砕かれてしまったのだ。北欧旅行の成果は、「旅行記執筆のための素材を手に入れたことを除けば」 (Todd, *Revolutionary Life* 350)、惨憺たるものであったといえよう。

## 2 「男性性」の多義性

本節では、イムレイ宛てのウルストンクラフトの手紙（私的書簡）に綴られた旅行の実際の経緯と、『北欧からの手紙』のテキストとの乖離を検証することにより、従来の研究では看過されがちな語り手の「男性性」に光を当て、その多義性を浮き彫りにしたい。

リーセールへ向かう途上、『北欧からの手紙』の語り手はラルヴィク (Larvik) で「様々な種類の法律家集団の真っ只中」 (W 6: 290) に身を投じる。具体的な議論の内容は明かされないが、彼らの「悪徳で歪んだ顔つきを見、法に疎い人を当惑させ続ける詭弁を聞いて眩暈がし、気分が悪くなった」語り手は、当地で「正と悪を混同して道德を害しているのは、不正によって才覚を研ぎ澄ませた」法律の専門家だと断言する (W 6: 290)。そして、デンマーク首相宛ての書簡を彷彿とさせる言葉を書き連ねる。

But till trials by jury are established, little justice can be expected in Norway. Judges who cannot be bribed are often timid, and afraid of offending bold knaves, lest they should raise a set of hornets about themselves. The fear of censure undermines all energy of character; and, labouring to be prudent, they lose sight of rectitude. Besides nothing is left to their conscience, or sagacity; they must be governed by evidence, though internally convinced that it is false. (*W* 6: 290)

デンマーク＝ノルウェー王国における判事が臆病ゆえに社会的正義をまっとうできないという指摘・批判は、エレフセンによる横領事件を踏まえてのウルストンクラフトの強い憤りが原点となっていることは言うまでもない。しかしながら、事件から具体性を取り去り、義憤を一般化することによって、『北歐からの手紙』の語り手は旅の舞台となった土地の社会構造を検証しつつ、故国イギリスの陪審員裁判制度を高く評価する「道徳作家」としての姿勢を読者に垣間見せている。

ラルヴィクからリーセールに入った語り手は、「商業以外には雇用がなく、それも密輸取引が利益の根幹であるため、最低限の誠実な感情もすぐに鈍くなってしまう」(*W* 6: 295) 当地の人々を次のように描き出す。

What, indeed, is to humanise these beings, who rest shut up, for they seldom even open the windows, smoaking [sic], drinking brandy, and driving bargains? I have been almost stifled by these smoakers [sic] . . . though there is a shrewdness in the character of these people, depraved by a sordid love of money which repels me, still the comparisons they force me to make keep my heart calm, by exercising my understanding. (*W* 6: 296)

デンマーク首相宛ての書簡に記された経緯を知る現代の読者は、上記の「閉じこもっている人たち」がエレフセンの弁護士、または関係者であることを容易に想像できる。語り手はエレフセンの船の積荷については一言も触れず、関係者の「人間らしくない」振舞いをたばこやブランデーといった小道具で描写する一方、閉め切った部屋で窒息しそうになっている自分が頭を働かせている様子を読者に印象付けている。

「富が唯一の追求すべき対象」(W 6: 296)であるリーセールを発ち、テンスベル(Tönsberg/Tønsberg) 経由でクリスチャニア(Kristiania/Christiania, 現オスロ Oslo)に入った語り手は、商業への不信感をさりげなく表明する。

A few months ago the people of Christiania rose, exasperated by the scarcity, and consequent high price of grain. The immediate cause was the shipping of some, said to be for Moss; but which they suspected was only a pretext to send it out of the country: and I am not sure that they were wrong in their conjecture. – Such are the tricks of trade! (W 6: 304)

クリスチャニアの人々の推測が的を射ていることは言うまでもない。本節冒頭で述べた通り、ウルストンクラフトの旅行の理由が、まさにイムレイの穀物国外輸送に関わる事件であったのだ。しかしながら、『北欧からの手紙』の語り手は舞台裏の事情には触れず、当地の人々の推測が「間違っているかどうかについては確信が持てない」という控えめな言及に留めている。イムレイが読めば、自分に対する当てつけであることが瞬時にわかるだろう。ウルストンクラフトは「商業の巧妙な手口」を読者に徐々に開示しつつ、その当事者としての人物像を“you”に投影させていく。



You may think me too severe in commerce; but from the manner it is at present carried on, little can be advanced in favour of a pursuit that wears out the most sacred principles of humanity and rectitude. What is speculation, but a species of gambling, I might have said fraud, in which address generally gains the prize? I was led to these reflections when I heard of some tricks practised by merchants, mis-called reputable, and certainly men of property, during the present war, in which common honesty was violated. (*W* 6: 304)

上記の一節で語り手は“you”の反応を予期しつつ、その先にいる不特定多数の読者に対して商業批判を展開している (Favret, *Romantic Correspondence* 110)。「賭け」あるいは「詐欺」の一種でしかない「投機」や、「貿易商たちの行う手口」という表現は、イムレイ及びその同業者が深く関わっているビジネスの真髄を言い当てていると考えられよう。<sup>55</sup>

ウルストンクラフトはエレフセンと対峙したリーセール滞在前後から、封鎖破りに加担するような貿易商の「親友にして妻」という身分に対する複雑な思いを整理し、「道徳作家メアリ・ウルストンクラフト」という人格を拠り所とし始める。次節で論じる通り、この時期、イムレイに送られた手紙（私的書簡）には娘ファニーの両親として自分たちの絆を強調する言葉が並んでいるが、『北欧からの手紙』の語り手は“you”に詐欺めいたビジネスに従事する男性としての役を割り当て、その人間性の墮落を強調するようになる (Guest, *Small Change* 305-06)。

商業精神と分かち難い金銭欲が人間性を墮落させている土地は、北欧に限らない。語り手は自らと“you”の故国を引き合いに出して警鐘を鳴らす。

England and America owe their liberty to commerce, which created a new species of power to undermine the feudal system. But let them beware of the consequence; the tyranny of wealth is still more galling and debasing than that of rank. (*W* 6: 309)

自身も中流階級出身の職業作家であるウルストンクラフトは、上記の一節にある通り、封建制度を覆す力となった商業精神の重要性を基本的には認識している。<sup>56</sup> とはいえ、彼女は『フランス革命論』において既に「商業の破壊的な影響力」に言及し、もっとも有害なのは、貴族階級に注がれている尊敬の分け前に与ろうとする人々が莫大な金銭を蓄えることによって「富の貴族階級」を創出し、それが「人間を墮落させる」ことだと述べていた (*W* 6: 233)。彼女はまた、同書において商業による人口増加が国民の大半を農夫 (husbandmen) よりむしろ製造業者 (manufacturers) にしてしまい、その結果、(製造業を支える)「分業 (division of labour)」が「知性 (mind) を完全な休止状態に陥らせる」と指摘しているが (*W* 6: 233)、これはアダム・スミス (Adam Smith, 1723-90) の『国富論』(*The Wealth of Nations*, 1776) における分業論に対する明らかな批判である (*W* 6: 234, n. a; Keane 118)。第4章第3節でも言及した通り、スコットランド啓蒙思想に精通していたウルストンクラフトは、人間社会が原始的、田園的、農耕的、商業的の4段階を経て洗練された社会に到達するという歴史観に照らし合わせ、人間が過度の商業精神や洗練性に毒されることなく、道徳的美徳を涵養するためにはどうすべきかについて思索を巡らせたのである (平倉, 『不完全な文明化』の先に) 41-45)。

商業に対するウルストンクラフトの嫌悪感は、詐欺めいたビジネスに深入りしたイムレイが家族としての責任を放棄するという、彼女にとっては人間性を失ったとしか思えない態度に出たことによって増大する。しかしながら、『北欧からの手紙』にはそのような私的・個人的な要素は織り込まれない。語り手はフランス革命の影

響が及び始めたばかりの北欧社会を観察し、商業精神が封建制度を揺るがす原動力となることを確認すると同時に、それが行き過ぎた場合、世襲財産を基盤とする封建制度よりも人間性を墮落させることになるという文明諸国の先例に思いを馳せ、“you”の先にいる幅広い層の読者に警告を発するのである。ここでもウルストンクラフトは私的・個人的な要素をテキストから遠ざけ、語り手の「道徳作家」としての人格を浮き彫りにしている。

コペンハーゲンからドイツのハンブルクに移った語り手は、商業精神と分ち難く結びついた金銭欲が世襲財産よりも人間性を墮落させるという批判を先鋭化させる (Holmes, Introduction 33; Kelly, *Revolutionary Feminism* 181)。

Mushroom fortunes have started up during the war; the men, indeed, seem of the species of the fungus; and the insolent vulgarity which a sudden influx of wealth usually produces in common minds, is here very conspicuous, which contrasts with the distresses of many of the emigrants, “fallen – fallen from their high estate” – such are the ups and downs of fortune’s wheel! . . . Still good-breeding points out the gentleman; and sentiments of honour and delicacy appear the offspring of greatness of soul, when compared with the grovelling views of the sordid accumulators of *cent. per cent.* (*W* 6: 340)

2冊の『権利擁護論』で批判の対象となっていた貴族階級が、上記の一節ではにわか成金との対比により、高貴な魂の持ち主として評価されている。エレフセンやデンマーク首相との交渉が成功裏に終わっていれば、もう少し明るいトーンで描かれたであろう北ドイツの人々や社会は、旅の目的を失い、異国をさまようウルストンクラフトの目には、商業精神によって墮落した人間性の象徴として映ったことは想像

に難くない。彼女は自らを没落した亡命者の側に引き寄せ、『北欧からの手紙』の語り手に、にわか成金の卑しい見識を存分に批判させるのである。

もともと、この語り手は常にモノローグで語るわけではない。旅の最終地点となったアルトナ (Altona) で、フランス風食堂を営む紳士との会話を以下のように描写している。

The gentleman whom I have already mentioned, is often diverted by our declamations against commerce, when we compare notes respecting the characteristics of the hamburgers. “Why, madam,” said he to me one day, “you will not meet with a man who has any calf to his leg; body and soul, muscles and heart, are equally shrivelled up by the thirst of gain. There is nothing generous even in their youthful passions; profit is their only stimulus, and calculations the sole employment of their faculties.” (*W* 6: 342)

『北欧からの手紙』における直接話法は、上記の一節の他には短いものが 2 つ見られるだけである (*W* 6: 273, 282)。初出の「奥様」という呼びかけには、語り手のジェンダーを読者に再確認させるとともに、語り手に自らを客観視させることで議論を立体化しようとするウルストンクラフトの意図も透けて見える。商業批判が常に語り手から発された場合、読者は (イムレイ同様) 「またか」と溜息をつきかねない。しかしながら、語り手に話しかけるフランスからの亡命者—高い道德性を備えた紳士であり、商業批判を共有する仲間—という存在があれば、“I” は “we” となり、意見を同じくする者が力を合わせて “you” に立ち向かうことができるのである。

以下の一節で語り手は、亡命者の紳士と「道德作家」の自分が声を揃えるという姿勢で、すなわち善き「男性性」を備えた者同士が手を組むという形で、商業精神が人間の道德性を根本から破壊するものであるという主張を “you” に突き付ける。

Perhaps you may also think us too severe: but I must add, that the more I saw of the manners of Hamburg, the more was I confirmed in my opinion relative to the baleful effect of extensive speculations on the moral character. Men are strange machines; and their whole system of morality is in general held together by one grand principle, which loses its force the moment they allow themselves to break with impunity over the bounds which secured their self-respect. A man ceases to love humanity, and then individuals, as he advances in the chase after wealth; as one clashes with his interest, the other with his pleasures: to business, as it is termed, every thing must give way; nay, is sacrificed; and all the endearing charities of citizen, husband, father, brother, become empty names. But – but what? Why, to snap the chain of thought, I must say farewell.

(*W* 6: 342)

行き過ぎた商業精神は、人間（man）から人類愛や個人を愛する力を奪い、「市民、夫、父、兄弟」の愛情あふれる思いやりが消滅すると語り手は批判している。当時、商業を生業とする女性が一般的ではなかったことに鑑みれば、上記の一節で「大規模な投機」と関連のある商業の担い手が男性として一般化されていることは驚くにあたらない。しかしながら、語り手が随所で自らと“you”の私的・個人的な関係をほのめかしている以上、『北欧からの手紙』の読者が、商業精神によって「市民、夫、父、兄弟」としての思いやりを失くした男性を“you”に重ねることは十分にあり得るだろう。北欧旅行中、イムレイ宛ての手紙（私的書簡）でウルストンクラフトは彼の人間性、道徳性、そして父親としての責任感に強く訴えているが、上記の一節はその感情の迸りに近く、私的・個人的な声が『北欧からの手紙』のテキストを侵食し始めている。ウルストンクラフトは行き過ぎた「思考の連鎖」、すなわちイムレ

イへの個人攻撃にヴェールをかけるために、「ここできようなら」と語り手に手紙を打ち切らせる。思考の連鎖から我に返り、“you”の先にいる読者を次の手紙（旅の続き）に誘うことで、「道徳作家」による商業批判、すなわち、善き「男性性」の体現者による悪しき「男性性」批判という姿勢を語り手に保たせるのである。

本章冒頭でも述べた通り、18世紀における女性の旅行記にはジェンダー的に制限された視点が顕著だが、『北欧からの手紙』では語り手の「男性的」な視点が強く打ち出されている。そしてこの「男性性」は、それ以前のウルストンクラフトの理論的著作において用いられていた特性と異なり、多義性を帯びている。彼女は語り手を通じ、「男性性」の肯定的な面として道徳性を、否定的な面として商業性を浮き彫りにしている。<sup>57</sup> 「男性性」には人間性を高めるものと、それを墮落させるものがあり得るが、そもそもそうした資質にジェンダー的特性を付与することが妥当といえるのかと自問する声がテキストに織り込まれているようにも感じられる。ある女性が恋人の男性に宛てた手紙という形式を採る『北欧からの手紙』は、後述の通り「女性の嘆き」という文学的モチーフを随所に散りばめつつも、ウルストンクラフトが語り手を通じて「男性性」の多義性を吟味する姿勢が顕著な作品といえるだろう。

### 3 多声的な女性の語り

本節ではファヴレットの論考に依拠しつつ、『北欧からの手紙』の語り手が意識的に響かせている女性的な語りにも焦点を合わせ、その多様性を浮き彫りにする。語り手の私的・個人的な声が女性全体の公的な声へと昇華し、『女性の権利の擁護』の語り手が躊躇せざるを得なかった「女性の連帯」という発想へ広がっていることを指摘したい。

『北欧からの手紙』の語り手は冒頭から自らの女性性を明示している。男性ばか

りの船員に囲まれた 11 日間の船旅を終えて北欧上陸を果たした折、「1 人の女性の姿を見たときにはやはりほっとしました。盗みや殺人やほかの怖いこと、船員たちなら口にするような、女性が想像するのもおぞましいことを考えたりしたわけではなかったのですが」(W 6: 245) と漏らし、行く先々で自分が「立派な婦人」(W 6: 246) や「観察眼の鋭い女性」(W 6: 248) と認められたことを誇らしく思い、「単独でやってきた女性」(W 6: 269) であるために土地の人々の好奇心に悩まされつつも、その親切をありがたく感じていることを、“you” を通して読者に打ち明ける。その一方で、語り手は手紙の宛先・受取人である“you”の無情ぶりを強調し、自身を「不幸な恋人、妻、母」として描き出すことで読者の意識を女性の悲哀に向けている。

第 1 章第 1 節でも言及した通り、「愛する人に捨てられた女性の嘆き」は西洋古典文学（特に悲劇や叙事詩）における伝統的なモチーフだが、それを「愛する人から引き離された女性の嘆き」という形で発展的に継承し、さらに彼女たちの嘆きに書簡体という語りの形式を与えたのは、ローマ詩人オウィディウスであるとされている。彼の『ヘーローイデス』(*Heroides*, 15 BC-AD 2) は『名高き女性たちの手紙』(*Epistulae Heroidum*) としても知られるラテン語詩集であり、ギリシア神話上の男女が愛する人に宛てて綴った 21 通の手紙からなる。第 1 書簡から第 15 書簡までは、ペネロペ(Penelope)やディドー(Dido)といった神話上の女性やサッフォー(Sappho)のような歴史上の女性がそれぞれ愛する男性に宛てた一方通行の手紙／単独書簡(single epistle)であり、相手の男性の冷淡さに対する悲しみや激情が綴られる(Isbell xvi-xvii)。これに対し、後に加えられた第 16 書簡から第 21 書簡は 3 組の男女が交わす往復書簡(double epistle)である。『恋の技法』(*Ars Amatoria*, 2 BC-AD 2)の著者でもあるオウィディウスが創作したこれらの書簡詩は、中世以降、恋愛書簡の手本として翻訳・翻案され続け、18 世紀の書簡体小説にも多大な影響を及ぼした。

「『捨てられた女の嘆き』が古典的な文学形式として定着する背景には、各地を旅

して功を求める男と、その男に恋焦がれ、ひたすら待ちわびる女という類型を許容し、あるいは歓迎する、社会的現実があっただろう」（横山 313）という指摘は正鵠を得ている。

オウィディウスに端を発する、男性（詩人・作家）による「女性の嘆き」が完全な創作であるのと対照的に、『北欧からの手紙』に響く「女性の嘆き」は、ウルストンクラフトがイムレイ宛ての手紙（私的書簡）に綴った感情の迸りを基盤としていることは論を俟たない。<sup>58</sup> ただし、同時代のヘイズが私的な恋文をそのまま自らの小説『エマ・コートニーの回想』に転用したのとは異なり、ウルストンクラフトは始めから「出版を念頭に置いて」（*W* 6: 241, 346）綴った『北欧からの手紙』において、私的・個人的な「女性の嘆き」に自己劇化や虚構の要素を加えているとトッドは指摘している（Todd, *Revolutionary Life* 317）。<sup>59</sup> 以下、“I”の語りに織り込まれた過去の文学作品や歴史上の人物に着目し、「女性の嘆き」というモチーフを多声的に響かせるウルストンクラフトの文学的手腕を検証してみよう。

### 3-1 文学的モチーフ

第8の手紙で、語り手は「生まれつきの激しい愛情」や「魂の熱さ」を“you”に向けて吐露するが、その最中にマライア (Maria) という女性に言及する (*W* 6: 280)。

For years have I endeavoured to calm an impetuous tide – labouring to make my feelings take an orderly course. – It was striving against the stream. – I must love and admire with warmth, or I sink into sadness. Tokens of love which I have received have rapt me in Elysium – purifying the heart they enchanted. – My bosom still glows. – Do not saucily ask, repeating Sterne’s question, ‘Maria, is it still so warm?’ Sufficiently, O my God! has it been chilled by sorrow and unkindness – still nature will prevail – and



if I blush at recollecting past enjoyment, it is the rosy hue of pleasure heightened by modesty; for the blush of modesty and shame are as distinct as the emotions by which they are produced. (*W* 6: 280)

上記のマライアは、ロレンス・スターン (Laurence Sterne, 1713-68) の『トリストラム・シャンディ』 (*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, 1759-67)、及び『感傷旅行』 (*A Sentimental Journey*, 1768) に登場する薄幸の女性である。恋人に捨てられて正気を失い、ペットの山羊や犬を連れて笛を吹きながら山野を放浪する美しい村娘マライアの姿は、同時代の読者の深い共感を呼び起こした。<sup>60</sup> 上記の引用場面におけるスターンを真似た問いかけは、『感傷旅行』の終盤、語り手ヨリック (Yorick) が涙に濡れたハンカチをマライアに差し出したところ、悲しみに暮れる彼女はそれを川で洗って自分の胸で乾かすと申し出たため、ヨリックが「君の心はまだそんなに暖かいのか、マライア」 (Sterne, *Sentimental Journey* 109) と呟く場面に基づいている (Kelly, *Revolutionary Feminism* 188)。スターンの分身ともいえるヨリックの真の関心は「感傷的 (sentimental) なものだけでなく、性的なものにもあった」 (Goring xvi) とすれば、ヨリックの言葉を引用することによって、テキストに性的な含みをもたらされる。したがって、『北欧からの手紙』における哀れなマライアへの言及も、恋人に捨てられて正気を失い、山野を放浪するというイメージに加え、“I” という女性のセクシュアリティを読者に喚起する。

上記に引用した一節で、“I” は「もし私が昔の喜びを思い出して顔を赤らめるとしたら、それは慎み深い気持ちに高められた喜びの薔薇色なのです」と語っている。「昔の喜び」とは、性的な快楽を暗示しているが、それを恥の領域に追いやることなく、慎み深さと結びつけて “you” に開示しているのである (Kelly, *Revolutionary Feminism* 188)。女性の身体的な経験を織り込んだ文体や語りは、20 世紀の批評理論

を援用すれば、〈エクリチュール・フェミニン〉に繋がる要素を孕んでいるといえよう。<sup>61</sup> 「あなたの中に入ってくるあなた的一部分であって、あなたを膨らませ、あなたを励まして、言語の中にあなたの女性としての文体を記述させるもの (la partie de toi qui entre en toi t'espace et te pousse à inscrire dans la langue ton style de femme)」 (Cixous 49) を著作で公にすることは、それまで道徳哲学者として「男性的」な言語・文体による著述を心がけていたウルストンクラフトにとって、初めての経験であった。もちろん、イムレイに宛てた手紙 (私的書簡) には性的な要素を含んだ愛情深い表現が頻出する (L 263-4, 265-66, 267, 268)。しかしながら、『北欧からの手紙』においてウルストンクラフトはそのような女性性を私的・個人的なものとして隠蔽するのではなく、あえて “I” の語りにも織り込んで公にしたのである。

### 3-2 歴史的モチーフ

スターンの作品からの引用によってテキストに女性の嘆きや性的な含みを忍ばせたウルストンクラフトは、第 18 の手紙において、イギリス生まれの北欧の王妃マチルダ (Caroline Matilda, 1751-75, デンマーク語: Caroline Mathilde) への共感を “I” に存分に語らせている。「哀れなマチルダ! ここに来て以来、あなたのことが頭から離れません」 (W 6: 321) と綴る “I” は、同時代の人々にとっては毀誉褒貶相半ばするマチルダを、不当に貶められた女性として描き出す。

I am now fully convinced that she was the victim of the party she displaced, who would have overlooked, or encouraged, her attachment, had her lover not, aiming at being useful, attempted to overturn some established abuses before the people, ripe for the change, had sufficient spirit to support him when struggling in their behalf. Such indeed was the asperity sharpened against her, that I have heard her, even after so many years

have elapsed, charged with licentiousness, not only for endeavouring to render the public amusements more elegant, but for her very charities, because she erected amongst other institutions, an hospital to receive foundlings. Disgusted with many customs which pass for virtues, though they are nothing more than observances of forms, often at the expence of truth, she probably ran into an error common to innovators, in wishing to do immediately what can only be done by time. (*W* 6: 322)

トッドも述べているように、イギリス国王ジョージ3世の妹マチルダは15歳でデンマーク＝ノルウェー王国のクリスチャン7世 (Christian VII, 1749-1808) に嫁いだが、この王は現代用語で言うところの統合失調症を患っていた。<sup>62</sup> 宮廷で冷遇されたマチルダは侍医ヨハン・フリードリッヒ・ストルーエンセ (Johann Friedrich Struensee, 1737-72) を引き立て、共に国を統治するようになる (Todd, *Revolutionary Life* 368)。北欧史の中には、ドイツ人ストルーエンセの独断的な手腕、及びデンマークの政治的慣習や社会的伝統に対する彼の無理解が国民の憎悪を煽ったとするものもあるが (橋本編 『デンマークの歴史』 121; ヘルムス 204-06)、ウルストンクラフトは「世のために旧弊の打破を試みた」人物という肯定的な評価を“T”にさせている。<sup>63</sup> 王妃マチルダは大衆の娯楽を優美なものにすべく尽力し、捨て子の収容所を設立するなど、慈善活動に勤しんだものの、ストルーエンセとの恋愛関係が強調され、後世に至るまで放縦というレッテルを貼られた (Brekke and Mee xxi)。これに憤る“T”は、「美德として通用している多くの慣習は様式の固執に過ぎず、真実をないがしろにしていることが多々あります」と指摘し、それを嫌悪したマチルダが改革者に共通の過ち、すなわち、「時間をかけてしか達成できないことを直ちに成し遂げようとする過ち」を犯したのだろうと推測している。時期尚早というモチーフは、フランス革命が辿った軌跡を思索する形で『北欧からの手紙』に色濃く反映されているが (*W*

6: 346)、ここではマチルダという女性の人生を通して一段と強く浮き彫りにされている。自由主義的な考えを持ち、周囲の人間より優れていたマチルダは、当時鬱屈した思いを抱えつつも自らの主義に忠実に生きていたウルストンクラフトにとって、「ある種の分身」(Todd, Introduction, *Mary, Maria, Matilda* xix) となった。イギリス小説の父の 1 人、サミュエル・リチャードソンは、美德を備えた登場人物が悪漢の犠牲となる物語、いわゆる「迫害される乙女 (virtue in distress)」のモチーフを用いることで読者の共感を喚起しつつ、彼らが自然に正義感を育むことができるよう導いたが (Goring xxi-xxii)、ウルストンクラフトもマチルダを時代・社会の犠牲者として描き出すことで読者の共感を引き出していると考えられよう。

ウルストンクラフトはまた、国王という夫がありながら侍医と情を通じたマチルダの女性性を、“I” の語りを通じて次のように擁護している。

Many very cogent reasons have been urged by her friends to prove, that her affection for Struensee was never carried to the length alledged [sic] against her, by those who feared her influence. Be that as it may, she certainly was not a woman of gallantry; and if she had an attachment for him, it did not disgrace her heart or understanding, the king being a notorious debauchee, and an idiot into the bargain. (*W* 6: 322)

マチルダは色恋に溺れる女性ではなく、たとえストルーエンセに「愛情 (attachment)」を抱いたとしても、自らの心や知性を汚すことにはならないと上記の一節は主張している。しかしながら、18 世紀において “attachment” という語は明らかな性的関係を意味していた (Sterne, *Sentimental Journey* 291, n. 115)。すなわち、『北欧からの手紙』の語り手は、「国王は名うての放蕩者で白痴だった」ため、マチルダがストルーエンセと姦通 (adultery) を犯したとしても、その行動は大目に見て然るべきだとい

う。慣習的な結婚制度からの逸脱を容認し、女性の精神的・身体的自立を擁護する“T”の語りは、次作『マライア』のヒロインの台詞を胚胎している。『女性の権利の擁護』では精神の領域に留まっていた女性の自立への希求が、『北欧からの手紙』においては身体にも拡張されているのである。

女性の身体の自立性という、家父長制度を根底から揺さぶりかねない急進的な思想の萌芽に加え、ここでもう1つ特筆すべきは、ウルストンクラフトが王妃という存在に対して、階級差より性差（ジェンダー）を優先し、女性としてのマチルダに深い共感を寄せていることである。『女性の権利の擁護』では上流階級の女性たちを「社会全体に腐敗を拡げる」「もっとも憐れむべき存在」（*W* 5: 75）と退けていたウルストンクラフトは、『北欧からの手紙』ではセクシュアリティを含む女性性への共感を明確に打ち出すことによって階級差を曖昧にし、女性というカテゴリーの見直しを行っているといえよう。

これまで見てきたように、『北欧からの手紙』の“T”の語りには、虚構のマライアと実在のマチルダ、そして“T”自身の思索と行動が交錯し、「女性の嘆き」というモチーフが多声的に響いている。ウルストンクラフトは、それまでは恋人（事実婚の夫）との間でのみ露わにすることができた私的な、すなわち私性（*privacy*）と深く結びついている内密で性的な声を、事実と虚構の間を縫うような語りの特徴とする書簡体文学の枠組みの中で、初めて公の声に昇華させることができたのである。そしてその魅力的な自己表象や語りは幅広い層の読者の共感を得るに至った。道徳哲学者としてのそれまでの語りからやや距離を置き、女性としての視点が明確な語りを実験的に生み出すことによって、ウルストンクラフトは文筆家として新たな段階に入ったといえるだろう。

#### 4 母の語り

本節では『北欧からの手紙』の語り手“*I*”に付与された女性性のうち、母性に焦点を合わせる。北欧旅行中、恋人としての「エロティックで火照った身体」(Jacobus 72)は母としての身体に変化していき、語り手が自分と幼い娘を“*we*”として表象する度合いが高まっていく。テキストに充満する母と娘の生が女性全体の生へと引き上げられ、これから生まれてくる女性たちへの共感に繋がっていく経緯を検証したい。

イムレイ宛てのウルストンクラフトの手紙(私的書簡)に見られる娘ファニーへの言及を追ってみると、出産前は“*the little twitcher*”(L 236)や“*a poor little animal*”(L 240)などの表現が用いられているが、出産後は堰を切ったように“*my*”を冠した表現があふれるようになる。出産から6日後、友人に宛てた手紙はその典型的なものである。

It is true, at first, [my nurse] was convinced that I should kill myself and my child; but since we are alive and so astonishingly well, she begins to think that the *Bon Dieu* takes care of those who take no care of themselves. . . let me tell you that I have got a vigorous little Girl . . . I feel great pleasure at being a mother – and the constant tenderness of my most affectionate companion makes me regard a fresh tie as a blessing. There – have I not talked sufficiently of myself and my child – (L 253)

母となった喜びを綴る中で、ウルストンクラフトは娘との連帯感を“*my*”という所有格を繰り返し用いて表している。上記の数日後も、娘が母乳を飲む際に男の子のように強く吸うので、「この子はいずれ『女性の権利の擁護』の第2部を書くだろうと父親が言っています」(L 254)などとはしゃいだ様子を見せている。健やかに賢く

成長していくファニーへの愛情に包まれたウルストンクラフトは、自分の自然な育て方がよいのだらうと誇らしげに報告する。「豊富な母乳だけで娘を育てている」(L 254) という記述には、〈エクリチュール・フェミニン〉に通じるものがあるといえよう。<sup>64</sup> イムレイとの身体的な関係や妊娠、出産、子育ての経験を手紙(私的書簡)に綴る中で「私にとっての新しい言葉」(L 245)を生み出したウルストンクラフトは、その「新しい言葉」を『北欧からの手紙』のテキストに織り込み、〈公〉にするという試みに着手できたのである。

出産から3ヵ月後、ウルストンクラフトはイムレイ宛ての手紙でファニーを初めて“our little girl”(L 258)と呼んでいる。その後も、天然痘を克服した娘を“our little Hercules”(L 263)と描写し、親としてイムレイとの連帯感を反映させている。彼の父性を際立たせる“your child”(L 267)や、自分と娘が彼に属していることを“your girls”(L 270)という表現で訴えている面も見逃せない。もちろん、娘と2人きりで過ごす長い時間を手紙に認める中で、もっとも多く用いられる所有格は“my”だが、ファニーが「私たちの」「あなたの」娘でもあるという意識は十分働いていると考えられる。

これに対し、出産後半年を過ぎた1794年12月頃から、ウルストンクラフトは苛立ちを表し始める。可愛い娘の心が「花開いていく」(L 271)成長過程をイムレイが見られないことを残念がり、「彼女の相手をして踊り続け、くたくたになってしまいました」(L 273)と、1人で育児をしなければならない辛さを吐露し、戻ってきてくれないなら私にも考えがあると強い口調でイムレイに訴える。

And, let me tell you, I have my project also – and, if you do not soon return, the little girl and I will take care of ourselves; we will not accept any of your cold kindness – your distant civilities – no; not we. (L 274)

いつまでも帰ってこない彼に対して “the little girl and I” が結束し、“we” という連帯感が増していく様子が浮き彫りになる。不在の夫の代わりに幼い娘を胸に抱きしめるウルストンクラフトは、「財産を追求したければ、どうぞ自由に。それはあなたの問題ですから。幼い娘と私は、家族として 3 人で暮らせるのでなければ、あなたからの援助なしで生きています」(L 275) と宣言する。2 年前、『女性の権利の擁護』で女性の経済的自立を訴えたとはいえ、現在のウルストンクラフトは敵国に身を置き、厳しい寒さの中、革命が恐怖政治へ移行する様を目の当たりにしながら、ほぼ孤立した状態で子育てをしているのだ。その彼女が、自分たちと一緒に暮らす気のないイムレイからは援助を受け取らず、自活すると決心したのである。もっとも現実的な手段は本の執筆であった。1795 年に入り、1 回目の自殺未遂から蘇生した彼女が、イムレイの依頼を受け入れて北欧に旅立った際も、この機会に高収入が見込める本を書いて、娘と自分を経済的に支える必要があることははっきりしていた。それゆえ、北欧の旅の記録には読者を誘い込む仕掛けを随所に施したのだと考えられる。前節では「女性の嘆き」というモチーフが響いている様子を検証したが、本節で論じる通り、『北欧からの手紙』においては「女性の嘆き」がさらに「母の嘆き」に深化する経緯をも観察することができる。

1795 年の春以来、イムレイ宛ての手紙（私的書簡）でファニーが “our” という所有格つきで言及されるのはわずか 1 回、北欧旅行からイギリスに戻る途上のことである (L 324, n. 690)。旅の終わりにドイツかスイスで落ち合うという約束を破ったイムレイに宛てて、“our interesting child” の成長を見ればあなたも喜ぶだろうと思っていたのに、と苦い感情が吐露されている。これに対し、手紙（私的書簡）と並行して書かれた（と思われる）日誌 (Holmes, “Notes” 279) を母体とする『北欧からの手紙』には、娘を “our” と表象する箇所はない。父親の属性を際立たせる “your” も



見当たらない。紙面を埋めるのは、“my”という所有格である。語り手は自らを不幸な母親として描き出すことで「母の嘆き」というモチーフをテキストに響かせつつ、“my child and I”や“we”という表現を多用し、女性の連帯感を強く打ち出している。以下、詳しく検証してみよう。

#### 4-1 母娘の連帯感

ここでは語り手の“*I*”が傍らの娘に言及しつつ、“*you*”に対して母としての悲しみを打ち明ける場面、次いで旅行中、娘と一時的に離れた“*I*”が回想の中で娘への愛情を綴る場面を検証する。

第1の手紙において語り手は、岩間から顔を出しているスマイルを目に留め、「よい前触れ」(W 6: 247)と思い、“*you*”からもらった手紙に包んでとっておこうとする。心の慰めにはならなかった手紙の辛い思い出で目頭が熱くなるものの、それは4月のわか雨のように消え去り、“*I*”はスマイルがシェイクスピアの『夏の夜の夢』において「乙女たちが恋の三色堇と呼ぶ」(MND 2.1.168)花であることを“*you*”に思い出させる。同時に、自分の幼い娘が無邪気にはしゃいでいること、「前触れや悲しい思い出などどこ吹く風で、娘には花や恋心よりも野イチゴの方が嬉しかったのです」(W 6: 247)と、“*you*”のためにこれまで流した涙と娘への愛情を織り交ぜて綴っている。同じ手紙の少し先で、語り手は傍らで静かに眠る娘に口づけ、その薔薇色の頬に涙をこぼし、「我を忘れて叫びたくなるほど感情が打ち震え、感動で胸が張り裂けそう」(W 6: 248)になる母としての自分を描き出す。旅が始まったばかりの段階では、読者はまだ“*I*”と“*you*”の関係についてヒントを与えられていないが、上記のような一節に接することで、“*I*”の語りにも織り込まれた母としての悲しみに敏感に反応するようになっていく。

風雨に晒されつつ、夜遅くにノルウェーの宿に着いた“*I*”は、心地よいベッドに

身を沈めて長旅の疲れを癒す中で、スウェーデンの知人宅に預けてきた幼い娘を夢に見る。

... and opening the window to admit the sweetest of breezes to fan me to sleep, I sunk into the most luxurious rest: it was more than refreshing. The hospitable sprites of the grots surely hovered round my pillow; and if I woke, it was to listen to the melodious whispering of the wind amongst them, or to feel the mild breath of morn. Light slumbers produced dreams, where Paradise was before me. My little cherub was again hiding her face in my bosom. I heard her sweet cooing beat on my heart from the cliffs, and saw her tiny footsteps on the sands. New-born hopes seemed, like the rainbow, to appear in the clouds of sorrow, faint, yet sufficient to amuse away despair. (*W* 6: 293)

洞窟に住む心温かな妖精が枕の周りを舞う中、“I” は自分の胸に「私のかわいい天使」が顔をうずめるのを感じる。彼女の「甘えるような鼓動」が崖から聞こえ、その「小さな足跡」が砂の上に見える。<sup>65</sup> 北欧の雄大な自然と自らが見た夢を溶け合わせたような美しい描写である。それまで娘と離れたことのなかった語り手は、彼女の不在を強く感じつつも、夢に現れた面影のおかげで新たな希望が生まれ、かすかにではあっても「絶望を紛らせる」ことができた。絶望の生みの親ともいうべき “you” に対し、娘への愛情のみが自分を支え、前に進ませてくれるという強い気持ちを示しているのである。

ノルウェーでの仕事が済み、スウェーデンに戻ることになった語り手は、娘との再会を思い描いて胸を躍らせる。仕事に拘束されている間はできるだけ娘のことを考えないようにしてきたものの、子牛が草地で跳ね回るのを見るたびに「私の可愛いおてんばさん (my little frolicker)」(*W* 6: 299) を思い出したと綴る “I” は、娘を

溺愛するだけの母親ではなく、責任を持って仕事に臨む女性としての自分を “you” に思い出させている。それでも、スウェーデンに近づくにつれ、「娘が元気なことを確かめたくてたまらなかったので、最後の駅では特に気をもみました」(W 6: 315) など、母親としての愛情が過酷な旅を続ける原動力となっている様子を随所で垣間見せるのである。

#### 4-2 私的な声から公的な声へ

ここでは母の嘆きが “you” に対する私的・個人的なものから不特定多数の読者に向けて公的な資質を帯びていく経緯を明らかにしたい。

3 ヶ月半に及ぶ北欧滞在中、娘と共に過ごす時間と離れて過ごす時間を交互に経験した語り手は、“you” の仕事の一環として北欧にやって来たにもかかわらず、“you” が自分たちから遠のいていくことに憤りを覚え始める。娘と自分の陥った状況が自分たちだけの問題ではないことに思いを馳せた “I” は、“you” に対しての私的・個人的な嘆きを女性全体の嘆きに昇華させて読者の心に訴えようとする。

You know that as a female I am particularly attached to her – I feel more than a mother’s fondness and anxiety, when I reflect on the dependent and oppressed state of her sex. I dread lest she should be forced to sacrifice her heart to her principles, or principles to her heart. With trembling hand I shall cultivate sensibility, and cherish delicacy of sentiment, lest, whilst I lend fresh blushes to the rose, I sharpen the thorns that will wound the breast I would fain guard – I dread to unfold her mind, lest it should render her unfit for the world she is to inhabit. – Hapless woman! what a fate is thine! (W 6: 269)

母としてだけではなく、1人の女性として娘に深い絆を感じている語り手は、『女性の権利の擁護』を思わせる語彙で女性の隷属的な状況を描き出す。しかしながら、その現状を改善するための思索・行動へと話を進めるのではなく、「娘の知的な精神 (mind) を開くことが怖い」と“you”に打ち明ける。教育を受けた結果、娘が「自分の住むはずの世界に馴染めなくなる」ことが怖いというのである。『女性の権利の擁護』では、人間は性別を問わず神から与えられた才能を磨き、社会に有用な存在となるべきであるという直截的なトーンが支配的であった。これに対し、『北欧からの手紙』の語り手は、心に傷を負った女性、1人で娘を育てる母という社会的弱者としての立場を強調している。知性を磨いた女性は、“you”のような男性によって動かされている社会には受け皿がないことを示唆し、読者の共感を喚起しているのである。その受け皿の必要性や、いかにしてそれを実現するかについては多くを語らず、読者を“I”と幼い娘、そして不実な“you”の物語に誘い込むことで、読者自らがこの不幸な母娘の力になるための方法を考えるように仕向けていると言ってもよいだろう (Favret, *Romantic Correspondence* 112)。

娘の将来を憂い、知性を育むのが怖いと吐露した語り手は、幸せそうな家族への羨望も隠さない。村で垣間見たある父親と子どもたちの様子に心を打たれた“I”は、自分は料理をするのが嫌いなのに、「家族のために家でポタージュを作っている母親が羨ましい」(W 6: 315)と“you”に打ち明ける。そして、自分は“you”と異なり、娘を見捨てることはないが、「不幸な母親だけが感じることのできる思い」に駆られ、「急激な苦痛 (pang) を胸に覚えた」と綴っている (W 6: 315)。心の痛みを表す語は多いが、ここで用いられている“pang”はとりわけその度合いが強い。<sup>66</sup> 『北欧からの手紙』に流れる「女性の嘆き」というモチーフが、この1語に凝縮されていると言っても過言ではないだろう。そしてそれは恋人や妻、あるいは1人の女性としての嘆きではなく、父親に見捨てられた幼い娘を憐れむ「母の嘆き」なのである。

「母の嘆き」は同時代の女性作家に馴染みの深いモチーフだが、ここで留意すべきは、『北歐からの手紙』の「母の嘆き」には、例えばシャーロット・スミスのような一種のおしつけがましさが感じられないことであろう。15歳で結婚させられ、放蕩癖のある夫の借金返済と9人の子どもの養育費捻出のために執筆活動を始めたスミスは、作品に付した序文に私生活に関わる事実を綿密に綴ることでパトロンや読者の同情を喚起しつつ、悲しみを基調とする詩や小説を次々に世に送り出した(Blank 1-5)。いわば、「序文(=現実)が作品(=文学)の読みを大きく規定する」(新見 244-45)という、特異かつ戦略的な手法を駆使して人気作家となったのである。

これに対し、ウルストンクラフトの「現実」は、イギリスの法律に照らせば未婚の母という難しいものであった。スミスのように序文で私生活を暴露し、読者の同情を引いて作品を買ってもらおうとする戦略は、たとえ持ち前の矜持を考慮に入れないとしても、現実的ではなかったのである。私生活の公表がウルストンクラフトにもたらしたであろう読者の反応は、同情ではなく非難であったことは想像に難くない。したがって、彼女が『北歐からの手紙』で“T”に語らせた「母の嘆き」は、自伝的な要素を残しつつも、特定の個人というより、むしろ女性全体の声であると考えられよう。つまり、この作品は『女性の権利の擁護』等の著作で女性のモラルを説きながらフランスで私生児を出産した母の嘆きとして読まれてはならず、父親の愛情を得られない不憫な娘を持った母親の魂の軌跡として読まれるべきだったのである。その目的に向けて、ウルストンクラフトは戦略を立てる必要があった。

当時の小説や旅行記に辛口の書評を寄せていた彼女は、たとえ高収入が見込めようとも、読者を墮落させかねない感傷過多な作品を著すわけにはいかなかった。例えば、1789年5月の書評でウルストンクラフトは『ランスドンの牧師』(*The Vicar of Lansdowne*, 1789)の著者レジーナ・マライア・ダルトン(Regina Maria Dalton, 1764-1845)

に対し、「経験に裏打ちされた警告にこの女性が耳を傾けるならば、我々は彼女にペンを捨てるよう助言する」(W 7: 104) という厳しい裁断を下している。また同年7月には、ヘスタ・リンチ・ピオッツィ (Hester Lynch Piozzi, 1740-1821) の旅行記の文体を、「ありふれた小説や頭の空っぽなおしゃべりに出てくるような、子どもじみた女っぽい言葉遣い (childish feminine terms) しか見当たらない」(W 7: 127) と切り捨てている。したがって、このような「駄作」をウルストンクラフト本人が公表することは考えられなかった。とはいえ、持ち味の教え諭すような語りだけでは、知性と感受性あふれる女性が苦境に陥りつつも人生を切り開いていく物語を、読者の共感に訴えるような形で書くことは難しい。新機軸となる文体や語りが必要だったのである。

そこでウルストンクラフトは、スミスとは一線を画す形で「女性の嘆き」を読者に届ける方法を編み出した。道徳哲学者のトーンは生かしたまま、イムレイやファニーとの暮らしを手紙(私的書簡)に綴る中で生み出した新たな語彙や文体、語りをテキストに忍び込ませたのである。つまり、「女性の嘆き」を前面に押し出すのではなく、文学的・歴史的なモチーフも交えてテキストに織り込むことで、読者の興味を引きつけようとしたのだ。未知の世界を読者に報告する旅行記という枠組みと、湧き上がってくる想念をその場で相手に伝えようとする書簡形式を最大限に活用しつつ、女性としての語りを効果的に響かせた『北欧からの手紙』によって、ウルストンクラフトは読者層の拡大に成功した (Favret, *Romantic Correspondence* 128)。この作品により、彼女は読者を教え諭す道徳哲学者の資質を保ちつつ、読者に読む快樂を提供する文筆家に成長したといえるだろう。

本章の前半では『北欧からの手紙』を生み出す契機となった北欧旅行の公の面に焦点を合わせ、ウルストンクラフトが語り手 “I” を通じて「男性的」という概念の

多義性を吟味する経緯を検証した。当時「男性的」な領域とされていた商業・ビジネスを目的とする旅行にイムレイの代理人として臨んだウルストンクラフトは、旅を続ける中で、商業・ビジネスが体現する「男性性」が人間性を墮落させるものであることを痛感する。それは、自らが理論的著作で称賛していた道徳的な「男性性」とは相容れないものであった。ゆえにウルストンクラフトは、旅行中にデンマーク首相宛てに認めた書簡において自らの「道徳作家」としての人格を強調し、よい意味での男性性を備えた旅人であることを相手に印象付けようとしたのである。その上で、帰国後ロンドンの自宅で執筆した『北欧からの手紙』においては、名目上の宛先・受取人“you”の商業性を浮き彫りにする一方、語り手“I”の道徳性を強調し、この書簡体旅行記の真の宛先・受取人である不特定多数の読者に向けて、人間性を墮落させる商業や金銭欲を厳しく批判した (Favret, *Romantic Correspondence* 110, 120)。すなわち、『北欧からの手紙』は、〈善き男性性を体現する道徳作家から、悪しき男性性を体現する商人に宛てた手紙〉という、公開書簡の機能を備えていると考えられよう。

本章の後半では語り手の女性性に焦点を合わせ、ウルストンクラフトがこの作品にオウィディウス流の恋愛書簡の要素を織り込む一方、手紙の書き手“I”の側に立つてこの物語を読むよう読者を誘導する文学的手腕を浮き彫りにした。パーク宛て公開書簡では「男性 vs. 男性」という構図を創り出し、権威主義者に対するアウトサイダーの立場から苦情を申し立てたウルストンクラフトは、『北欧からの手紙』では〈ある女性がある男性に宛てた手紙〉という枠組みの中で、その女性の私的・個人的な問題を女性全体の問題として提起している。「私にとっての新しい言葉」、すなわち身体性・性的な面も含めた女性性、特に母性をテキストに織り込むことで、ウルストンクラフトは「愛する男性に捨てられた女性」という伝統的な文学的モチーフを換骨奪胎し、「妻（恋人）と娘を捨てた男性」に対して「捨てられた母と娘」

が結束する経緯を〈公〉に向けて巧妙に劇化した。言い換えれば、〈ある女性がある男性に宛てた手紙〉の中に、「女性（たち） vs. 男性（たち）」という構図を創り出したのである。『北欧からの手紙』は、私的・個人的な恋愛書簡という体裁を整えつつ、〈女性（たち）から男性（たち）への手紙〉という公開書簡の機能も兼ね備えた、きわめて独創的な書簡体文学であると言うことができるだろう。



## 第6章 娘への手紙—『マライア』

第4章では〈論敵への手紙〉として『人間の権利の擁護』を、第5章では〈恋人への手紙〉として『北欧からの手紙』を取り上げ、ウルストンクラフトが現実世界における論敵バーク、恋人イムレイをそれぞれの作品における名目上の宛先・受取人“you”に配し、彼らに対峙する形で自らの文学的な人格を創り上げる経緯を検証した。彼女はいずれの作品においても書簡体の語りを効果的に用いて“I”と“you”の関係を構築しつつ、その枠外にいる不特定多数の読者を“I”の味方に引き入れようとしている。匿名出版の『人間の権利の擁護』でいわば正義のヒーローを演じ、喝采を浴びたウルストンクラフトは、その「男性的」な文学的人格を『女性の権利の擁護』及び『フランス革命論』でも貫いた。続く『北欧からの手紙』においては、旅行記という枠組みに公開書簡—道徳性や洞察力という善き「男性性」(人間性)を備えた旅人が、商業や金銭欲という悪しき「男性性」を体現する人物を批判する—の機能を加え、さらにオウィディウス流の「女性の嘆き」を織り込んだ語りを展開し、読者を魅了する。この作品はまた、未知の世界の情報を母国の人々に伝える「男性的」で有益な旅行記であると同時に、行き場を失った女性が異国をさまよいつつ、その辛さを母国の人々に書き送るという点で、放浪者・亡命者(exile)の手記という様相も呈している(Hirakura, “The Portrait of a Family” 233-36)。すなわち、『人間の権利の擁護』における書簡体の語りがいわば「男性的」な単旋律だったのに対し、『北欧からの手紙』における書簡体の語りは「男性性」と「女性性」が共存する多声的な響きに満ちており、それが幅広い層の読者獲得に繋がったといえよう。

上記を踏まえ、第6章では〈娘への手紙〉として『マライア』を取り上げる。この作品における書簡体の語りは、『人間の権利の擁護』及び『北欧からの手紙』におけるそれと3つの点で大きく異なっている。以下、それらの点を概観してみよう。

第1に、『人間の権利の擁護』及び『北欧からの手紙』がいずれも現実世界における男性を“you”に仕立てた（創作的）ノン・フィクションであったのに対し、『マライア』は同名の主人公による〈娘への手紙〉と三人称の語りが混在した未完のフィクションである。<sup>67</sup> この作品における〈娘への手紙〉は、正確には主人公が「わが最愛の娘」に宛てて綴った「回想録（memoirs）」だが、現存する草稿においては当の娘には届かないことになっている（*W* 1: 123）。この長い手紙／回想録を実際に読むのは作品内部の他の登場人物と作品外部の人々、すなわち『マライア』という作品の読者である。プロット上、作品の内部と外部の読者はほぼ同時にこの〈娘への手紙〉を読み進めることになる。また、『人間の権利の擁護』及び『北欧からの手紙』においては、公開書簡や一声／独唱型の書簡体文学の特質上、名目上の宛先・受取人“you”には声を与えられていなかった。一方、『マライア』においては、〈娘への手紙〉を読む登場人物には声を与えられている。ゆえに、外部の読者はこの手紙に対する自らの反応を虚構人物の反応と常に突き合わせながら『マライア』という作品を読み進めていくことになる。

第2に、『人間の権利の擁護』及び『北欧からの手紙』の語り手“I”は、名目上の宛先・受取人である“you”との関係を模索しつつ、「男性的」あるいは「女性的」な文学的人格の構築を試みることができた。これに対し、『マライア』では、〈娘への手紙〉の書き手のジェンダーが確固たるものとして設定されている。しかも、それは単なる「女性性」に留まらず、「母性」を前面に押し出した文学的人格である。すなわち、『マライア』における書簡体の語りは、『北欧からの手紙』における多声的な語りのうち、「母の語り」を継承したものと考えられる。

第3に、『人間の権利の擁護』及び『北欧からの手紙』における名目上の宛先・受取人として設定されていたのは、語り手“I”より経験を積んだ、あるいは対等の人物（大人）であった。ゆえにこの2作品は相手を（政治的に）批判する公開書簡と

しての機能を持ち得たのである。これに対し、『マライア』に登場する手紙／回想録は宛先・受取人が「生後わずか4ヵ月の子」(W1: 88)に設定されているため、公開書簡にはなり得ない。主人公マライアはこの手紙／回想録が「娘を教え導き、母親(の自分)が避ける術を知らなかった悲惨さや横暴さから娘を守ってくれるかもしれない」(W1: 90)と思い、行方不明の娘に呼びかける形で言葉を綴り続ける。その点で、この〈娘への手紙〉は同時代のコンダクトブックに頻出する〈親が子に宛てた教育目的の手紙〉という機能を備えていると考えられる。

本章では、『マライア』草稿の約半分の長さを占める〈娘への手紙〉の教育書簡としての側面に着目し、慣習的な形式に革新的なメッセージを織り込んだウルストンクラフトの文学的手腕を浮き彫りにする。まず、ウルストンクラフトとコンダクトブックの関わりを検証し、『女性の権利の擁護』におけるコンダクトブック作家への直截的な批判が『マライア』における〈娘への手紙〉に発展的に継承されていることを実証する。その上で、この〈娘への手紙〉が〈論敵への手紙〉や〈恋人への手紙〉と異なり、三人称の語りの中に埋め込まれた理由を考察し、ウルストンクラフトが上記の教育書簡をある種の公開書簡として機能させるために試みた語りの技法に光を当てたい。

## 1 ウルストンクラフトとコンダクト文学

まず、ウルストンクラフトとコンダクトブックの関わりを概観しよう。コンダクトブックの原義は「(男性)学者や公務員、軍人の言動や業績の記録」(*OED*, 初出は1856年; Jones 239, 244)だが、イギリス文学においては18世紀に隆盛を極めた女性の振舞(コンダクト)についての教訓的な読み物を指すことが多い。家庭内での女性の義務や宗教的な修養の必要性を説くこれらのテキストの総称として、最近ではコンダクト文学(*conduct literature*)という表現も用いられる(Jones 238)。

コンダクト文学には説教集、書簡集、歴史書、詩集、散文物語等の多様なジャンルが含まれる。これらのテキストは書き手の性別を問わず、特定の「女性らしさ」を定義し、それを教え込むという特徴を備えていた (Jones 239)。ウルストンクラフト本人も教育実践者としての経験を織り込んだ『娘たちの教育に関する考察』、『実生活実話集』、『女性読本』等のコンダクト文学で著述家としてのキャリアを始めたことはよく知られている (Ferguson 246)。特にデビュー作の『娘たちの教育に関する考察』は「聖書からの引用、日曜日の遵守の訴え、娯楽への戒め、理神論批判、召使いを蔑視するような言説」が顕著であり、「見るからにオーソドックス」である (梅垣, 「娘達の教育について」 267)。彼女は独創的な思想を展開するより、できるだけ売れる本を目指し、「通説を繰り返すことで一般的な読者の好みに合わせている」 (Alan Richardson 26) という指摘ももつともである。<sup>68</sup>

そのウルストンクラフトは、『女性の権利の擁護』において大きな変化を遂げた。すなわち、女性に内在するとされた「自然」な女性らしさが実際には外部の力によって定められていることを喝破し、こうした眉唾物の「女性らしさ」を教え込む強力な社会的装置の 1 つであるコンダクト文学を批判したのである。彼女が特に批判の矛先を向けたのは当時極めて強い影響力を持っていた 3 つのテキスト、ルソーの『エミール』 (*Émile; ou, de L'Éducation*, 1762)、ジェイムズ・フォードイス (James Fordyce, 1720-96) の『若い女性のための説教集』 (*Sermons to Young Women*, 1766)、及びジョン・グレゴリ (John Gregory, 1724-73) の『父から娘たちへの遺贈』 (*A Father's Legacy to His Daughters*, 1774) であった (W 5: 147-62, 162-66, 166-70)。それぞれの著作には量と文体において明確な違いが見られるが、女性の美徳に関する認識は共有している。それは、よき娘、妻、そして母としての役割を果たすことこそ女性の美徳であるという性差別的な認識である。ウルストンクラフトは上記 3 名の著者のうち、ルソーとフォードイスに対しては一貫して厳しい態度を貫いているが、グレゴ

リに対しては留保つきの記述が目立つ。以下、グレゴリに対するウルストンクラフトの考え方の変化を検証することで、彼女が彼のコンダクト文学から継承した要素を明らかにしたい。

### 1-1 父から娘たちへの手紙

『父から娘たちへの遺贈』は、エディンバラ大学医学部教授であったグレゴリが自らの老衰を自覚し、既に母親を亡くしている娘たちのために著した書物である。

「はしがき」(“Preface”)には、この本は〈公〉に向けて書いたのではなく、ただ娘たちが愛らしい (aimable) 女性に育ってくれることを願ってペンを執ったと述べられている (Gregory, “Preface” iii)。著者の死の翌年に出版された『父から娘たちへの遺贈』は瞬く間に評判になり、出版後2年で6,000部を売り上げ、フランス語、イタリア語、ロシア語に翻訳され、19世紀に入っても版を重ねた (Moran 8)。

ウルストンクラフトは自らの『女性読本』の序文でグレゴリを「好ましい作家」(W 4: 56) と紹介した上で、作品冒頭にも彼の別の著作から男女の性差を強調する一節を掲載し (W 4: 67)、『父から娘たちへの遺贈』からも大量に引用していた (W 4: 67, 68, 69-70, 71, 72, 75, 120)。その彼女が、『女性の権利の擁護』では「尊敬すべきグレゴリ博士」について「私は彼の心情は尊敬するが、彼の有名な著書『父から娘たちへの遺贈』はまったく認めない」(W 5: 97) と言い切っている。「グレゴリ博士の『父から娘たちへの遺贈』には父親らしい配慮がいきわたっているので、私は敬愛の念を持ってこの書を批判する仕事を始めよう」(W 5: 166) と読者に断ってから、ウルストンクラフトはこの書物の危険性を浮き彫りにしていく。

『父から娘たちへの遺贈』は「宗教 (Religion)」「振舞 (Conduct and Behaviour)」「娯楽 (Amusement)」「友情、恋愛、結婚 (Friendship, Love, Marriage)」という章からなる。このうち、ウルストンクラフトがもっとも問題視し、『女性の権利の擁護』

で強く批判したのは、振舞に関するグレゴリの助言である。たとえ愛する娘たちが社会で爪弾きにされないようにとの配慮から出たものであっても、感情を表に出さないようにとか、元気に踊るのは構わないが、夢中になるあまり「おまえたちの性（につきもの）の繊細さ（the delicacy of your sex）を忘れてたりしないように」（Gregory 26）といった忠告は、ウルストンクラフトの目には、著者が若い女性に「偽装／猫かぶり（dissimulation）」を勧めていると映った（*W* 5: 97）。そして、「いやしくも賢明な母親ならば、このようなけしからぬ警告を子どもに徐々に教え込んで若い人の自然な率直さ（natural frankness）を抑えたりはしないでであろう」（*W* 5: 97）と続けている。若い女性の振舞に関するグレゴリの助言には「非常に気の利いたものも沢山ある」が、ウルストンクラフトが「それをまったく認めない」のは、グレゴリが推奨するような振舞は、知性（understanding）を伴わなければ「下品な装飾」でしかないからである（*W* 5: 167）。「あれこれと立ち居振る舞いを指示すること」の方が「理性を働かせるよう指導する」ことよりはるかに容易だという事実を、ウルストンクラフトは読者に喚起しようとする（*W* 5: 167）。

女性らしくない（unfeminine）とされることは慎重に避けねばならないと信じるグレゴリは、若い女性が隠さなければならないのは、感情や身体の丈夫さにもまして、良識や学識であると娘たちに説いて聞かせる。

Be even cautious in displaying your good sense. It will be thought you assume a superiority over the rest of the company. – But if you happen to have any learning, keep it a profound secret, especially from the men, who generally look with a jealous and malignant eye on a woman of great parts, and a cultivated understanding.  
(Gregory 15)

女性は男性の意に添うことをまず心がけ、出過ぎた真似は慎むべきだという上記の意見に、ウルストンクラフトは真っ向から反論する。女性は男性に合わせるのではなく、自らが信じる真実や美徳によって行動すべきなのだ。

There would be no end to rules for behaviour, if it be proper always to adopt the tone of the company . . . Surely it would have been wiser to have advised women to improve themselves till they rose above the fumes of vanity; and then to let the public opinion come round – for where are rules of accommodation to stop? The narrow path of the truth and virtue inclines neither to the right nor left – it is a straightforward business, and they who are earnestly pursuing their road, may bound over many decorous prejudices, without leaving modesty behind. (*W* 5: 168)

上記の一節には、グレゴリによる「娘たちの教育 (instruction)」(Gregory, “Preface” iii) が実際には処世術でしかないというウルストンクラフトの認識が読み取れよう。若い女性たちに必要なのは「表面的な助言」(*W* 5: 167)ではなく、虚栄心を捨て去るようという助言・忠告であり、それが受け入れられれば真に慎ましやかな振舞が生まれるはずだという信念も窺える。

表層的なマナーより道徳を重視するウルストンクラフトにとって何より軽蔑すべきは、『父から娘たちへの遺贈』を「初めから終わりまで貫いている欺瞞の体系 (system of dissimulation)」(*W* 5: 168)であった。これは、「女性はこういうように、ああいうように、いつも見えるべきだ (Women are always to seem to be this and that)」という考え方である (*W* 5: 168)。彼女は上記に続いて『ハムレット』第1幕第2場の一節 (*Ham.* 1.2.76) を引用し、「だが、美徳は、ハムレットの言葉で女性に呼びかけるであろう。一見えるって！見えるとか見えぬとか、そのようなことは、こちらの知ったことで

はない」(W 5: 168; 白井 191) と揶揄している。グレゴリ博士に引けを取らない教養を示しつつ、『女性の権利の擁護』の読者に対し、ハムレットの台詞に託して、「人がどう見るか、などということは超越せよ！」(W 5: 168; 白井 191) と言い切っているのである。

ウルストンクラフトがグレゴリの『父から娘たちへの遺贈』をルソーやフォードアイスの著作と並ぶ悪しきコンダクト文学の 1 つに取り上げたのは、同書が「女性の中でも特に立派な人たちの注意を引く多くの魅力」を持っているためであり、「女性の世界における道徳とマナーにもっとも有害な効果を与えてきたと思われる意見をもっともらしく支持する議論」を看過するわけにいかないと判断したからであった(W 5: 166)。初期の教育書でグレゴリを「好ましい作家」と捉えていたウルストンクラフトは、自らも危うく騙されかけたからこそ、グレゴリの書物の「魅力」の危険性を明らかにし、未来の読者たちに警告を与えようとしたのであろう。そしてその「魅力」には、助言の内容もさることながら、「やさしく親しみやすい文体」で「愛妻の思い出を大切にする彼の気持ち」を効果的に表現し得る書簡体の語りも含まれていると考えられる(W 5: 166)。では、グレゴリ流のパターナリズムとは一線を画する形で〈娘への手紙〉を書くにあたり、ウルストンクラフトが参考にしたのはどのようなコンダクト文学であろうか。

## 1-2 母から娘たちへの手紙

『マライア』における〈母が娘に宛てた教育目的の手紙〉という形式は、セアラ・ペニントン (Lady Sarah Pennington, 1720-83) の『不幸な母親が不在の娘たちに与える助言』(An Unfortunate Mother's Advice to her Absent Daughters, 1761) に端を発していると考えられる。ウルストンクラフトは同作品から、「真の幸福は知的な心 (mind) の中にだけ存在する」(Pennington 21)、「有益な習慣を若いうちに身につけよ」



(Pennington 22) という助言を含む一節を『女性読本』に引用している(W 4: 122-23)。この部分だけを見ると、いかにも有徳の母親が娘たちの身を案じて著した書物のように思われるが、実際のところ、ペニントンは姦通の咎で娘たちから引き離されている (Todd, Introduction, *Female Education* xv)。すなわち、ペニントンの〈娘たちへの手紙〉は、グレゴリのように配偶者に先立たれた不幸な父親が娘たちの身を案じるという立場ではなく、姦通という、当時の法律では罪に相当する過ちを犯した母親が、いわば反面教師の立場から娘たちに助言を与えるという枠組みを採っているのである。<sup>69</sup>

ペニントンは同作品において、「欺瞞と虚偽に満ちた世界」(Pennington 10) を生き抜くための助言を娘たちに授けようと試みる。彼女たちが母の二の舞を演じないで済むように、自らのあらゆる過ちを「包み隠さず開示する」(Pennington 50) ののである。とはいえ、ペニントンは基本的に家父長社会を甘受しなければならないという立場から語っているため、結婚制度を非難するどころか、その鑄型に自らをはめ込むために、究極の女性らしさを身につけよという指示を娘たちに与えている。例えば、夫の振舞がいかに受け入れ難いものであっても、「あまり頻繁に不協和音を奏でるようなことはせず、見過ごしてあげなさい。そのように快活に応じること (cheerful Compliance) が結婚の絆を強めるのです」(Pennington 58-59) と説く。さらに、夫を管理する妻などと世間に思われたいですむように、次のような助言を授ける。

A Woman can never be seen in a more ridiculous Light, than when she appears to govern her Husband; if unfortunately, the Superiority of Understanding is on her Side, the apparent Consciousness of that Superiority betrays a Weakness that renders her contemptible in the Sight of every considerate Person, and may, very probably, fix in his Mind a Dislike never to be eradicated. Lest it should ever be to you

necessary, remember, that in this Case some Degree of Dissimulation is commendable, so far as to let the Defect seem unobserved. When he judges wrong, never flatly contradict, but lead him insensibly into another Opinion, in so discreet a Manner, that it may seem entirely his own, and let the whole Credit of every prudent Determination rest on Him, without indulging the foolish Vanity of claiming any Merit to yourself. (Pennington 67-68)

女性に「ある程度の偽装／猫かぶり」を勧める上記の助言は、グレゴリが娘たちに与えた助言の母親版ともいえよう。

ここで生じる疑問は、たとえコンダクト文学の存在意義が既存の社会体制に適応する従順な女性を育てることにあるにせよ、ペニントンは不幸な自分よりさらに自己犠牲的な生き方を娘たちに強いることに矛盾を感じなかったのかという点である。また、未だ慣習的なコンダクト文学の枠組みの中にいたウルストンクラフトが、ペニントンの著作から引用するにあたり、この女性を「不幸な母親」にした理由である姦通という振舞に関して黙している点も留意すべきであろう。

『女性読本』にペニントンの作品を引用したウルストンクラフトは、翌年 1790 年 4 月、〈母から娘たちへの手紙〉という形式をとった別の教育書簡、『趣味の基礎』(*Rudiments of Taste*, 1789) を書評で取り上げている。この作品を徹底的に批判するウルストンクラフトの筆致からは、グレゴリやペニントンの作品においては魅力を湛えていた〈親が子に宛てた教育目的の手紙〉という形式が、著者によってはまったくつまらないものとなり得るという認識が浮かび上がる。

It is not easy to discover why the author has chosen to term this crude desultory production *Rudiments of Taste*; and, how a person of common discernment could

address such advice to children, is passing strange! In short, these letters, though they have a specious title, are however superficial and unconnected, without any of that interest which animates a *father's legacy to his daughters*, though they were written by a woman who talks of female sensibility; – to say the truth, they rather appear to be coldly fabricated for the public eye, than the effusions of maternal tenderness, as the preface would lead us to suppose; nay, we should not even have guessed that they were written by a woman, without this intimation. (*W* 7: 237)

グレゴリの『父から娘たちへの遺贈』を優れたコンダクト文学の例として引き合いに出しつつ、ウルストンクラフトは、上記『趣味の基礎』の著者には母親らしさが見られないことを読者に注意喚起している。「公向けに冷たく計算された」これらの手紙は「母性の優しさの迸り」に欠けているという指摘は、裏を返せば、〈母から娘への手紙〉という形式をとった教育書簡の多くが優しさを湛えていたことを暗示している。もっとも、ペニントンの例に明らかな通り、そのような母性の優しさが家父長制度への服従やパターナリズムの許容を前提としていることは言うまでもない。ウルストンクラフトはこの点に異議を唱えようとしたのではないだろうか。すなわち、『マライア』において彼女は「不幸な母親が娘たちの身を案じて綴った手紙」という形式を借用しつつ、従来のコンダクト文学とは一線を画す形で「母性の優しさの迸り」を織り込んだ〈娘への手紙〉を構想したと考えられる。

## 2 マライアの教育書簡

本節では『マライア』における〈母から娘への手紙〉に織り込まれた教育内容の革新性を検証する。まず、この未完小説のあらすじを確認しておこう。主人公マライアは夢見がちな性格が災いして、放蕩者ジョージ・ヴェナブルズ (George Venables)

を道徳的に優れた男性と思い込み、若くして彼と結婚してしまう。まもなく自らの過ちに気づくが、当時の社会規範に則り、ペニントンが著作で説いたような自己犠牲を貫いて夫の横暴に耐えようとする。しかしながら、夫が借金の担保として、妻である自分の身体—しかも夫の子を身籠っている状態で—を友人の男性に提供しようとしたことを知るに及び、「私は夫の姓を捨てます」(W 1: 152)と宣言し、家を出る。彼女は隠れ家を転々とし、その1つで娘を出産するが、じきに夫の魔手にかかり、娘と引き離され、精神科病院に監禁される。独房で娘に宛てた手紙／回想録を書きながら、マライアは看守の女性ジェマイマ (Jemima) 及び別室に監禁されていた若い男性ヘンリー・ダーンフォード (Henry Darnford) との絆を深めていく。娘の死という悲報を機に、マライアはジェマイマの助けを借りて精神科病院を脱出し、後に解放されたダーンフォードとロンドンで同棲を始める。法律上の夫ヴェナブルズがダーンフォードを姦通及び婦女誘拐 (seduction) の罪で告訴したため (W 1: 178)、マライアは法廷に対し、ダーンフォードと自らの行為を擁護する文書を提出する (W 1: 178)。『マライア』のまとまった草稿はここで終わっており、その後にはウルストンクラフトが構想していた結末のヒントが編集者ゴドウィンによって並べられている。

では、『マライア』の主人公が精神科病院の一室で娘に宛てて綴る手紙／回想録を検証しよう。冒頭には、グレゴリの『父から娘たちへの遺贈』を思わせる語彙の中に、母としてのプライドがさりげなく織り込まれている。

Addressing these memoirs to you, my child, uncertain whether I shall ever have an opportunity of instructing you, many observations will probably flow from my heart, which only a mother – a mother schooled in misery, could make. The tenderness of a father who knew the world, might be great; but could it equal that of a mother – of a

mother, labouring under a portion of the misery, which the constitution of society seems to have entailed on all her kind? . . . For my sake, warned by my example, always appear what you are, and you will not pass through existence without enjoying its genuine blessings, love and respect. (*W* 1: 123)

精神科病院に監禁された時点では未だ姦通の罪を犯していないとはいえ、夫によって娘から引き離されたという点で、虚構人物マライアは実在のペニントンに引けを取らないほど「不幸な母親」である。しかしながら、そのマライアが娘に授ける助言は、世間、特に男性の意に沿うような振舞を身につけよ、というものからは程遠い。マライアは上記の一節に認められる通り、「常に自分自身であれ」という助言を娘に与えるのである。人生の真なる祝福である「愛と尊敬」に到達するためには、世間知や処世術ではなく、自らに忠実に、ありのままに生きることが何より重要だというマライアの言葉は、グレゴリやペニントンが娘たちに与えた助言とは一線を画している。

ここで注目すべきは、上記のような助言を娘に与えるマライア本人がいかなる教育を受けてきたかという点だ。自らの判断力を人生の指針とするようマライアを導いたのは、彼女の両親ではない。ウルストンクラフト本人の両親を彷彿とさせる暴君の父も無気力な母も、娘の教育には無関心であった。マライアの性格を育んだのは、「指導者 (instructor)」 (*W* 1: 125) たる叔父である。

He inculcated, with great warmth, self-respect, and a lofty consciousness of acting right, independent of the censure or applause of the world; nay, he almost taught me to brave, and even despise its censure, when convinced of the rectitude of my own intentions. (*W* 1: 126)

この叔父の教えには、18世紀啓蒙思想に顕著な女性の知性を尊重する姿勢が窺われる。もともと「騙すよりは騙される方がまし」、「疑いの餌食になるよりは、理由が不十分でも信じる方がよい」(W 1: 173)という性格を持つマライアは、叔父の薫陶を受け、自らの判断力に信を置く生き方を貫こうとする。したがって、娘への手紙にも世評を気にすることなく、自らの惨めな結婚生活、特にその原因となった夫の虚偽や不実をさらけ出す。

マライアは、娘が「母親を軽蔑することのないように、父親の性格を知るべき」(W 1: 127)だと考えている。若い女性に両親を敬うよう力説する慣習的なコンダクト文学ときわめて対照的に、娘には両親に関する残酷な事実を知ってもらいたいというのである。回想録につきものの告白調に酔いながら過去を振り返るうち、マライアは「恋人より自由を求めて」(W 1: 134)一見まともな男性と結婚してしまった自らの愚かさを悟る。数々の暴挙に耐え兼ね、夫の家を出る覚悟を決めたことについては、娘に対し、次のような自己弁護を試みている。

There may be advocates for matrimonial obedience, who, making a distinction between the duty of a wife and of a human being, may blame my conduct. – To them I write not – my feelings are not for them to analyze; and may you, my child, never be able to ascertain, by heart-rending experience, what your mother felt before the present emancipation of her mind! (W 1: 153)

自分がこの手紙／回想録を書く相手は「妻の義務と人間の義務を区別する人々」ではなく、「わが子のあなた」であるというマライアの言葉には、既存の結婚制度を是とする世間に対してではなく、その弊害に未だ染まっていない未来の人々に対する

希望と期待が垣間見える。同時に、上記の一節には、妻としての義務が人間としての義務、すなわち「知的な精神 (mind) の解放」を抑圧するものであるという告発が込められている。女性は妻である以前にまず人間であるという信念、そして、人間としての義務である知性の陶冶をまっとうできないのであれば、娘には既存の結婚制度という枠組みに入ってもらいたくないという、「不幸な母親」の思いも窺えよう。

第5章第4節でも言及した通り、ウルストンクラフトは『北欧からの手紙』の語り手に託して、「娘の知的な心 (mind) を開くのが怖い。娘が将来住むことになる世界に馴染めなくなるのではないかと」(W 6: 269) と不安を吐露していた。これに対し、『マライア』における「母の語り」では、女性の知性を涵養することの重要性が迷うことなく主張されている。

Yes; eagerly as I wish you to possess true rectitude of mind, and purity of affection, I must insist that a heartless conduct is the contrary of virtuous. Truth is the only basis of virtue; and we cannot, without depraving our minds, endeavour to please a lover or husband, but in proportion as he pleases us. (W 1: 145)

「心を伴わない行動は美德に反する」と信じるマライアにとって、結婚生活においてもっとも受け入れ難かったのは、愛してもおらず尊敬もできない夫が、自然かつ法的な権利として妻の身体を支配しようとする態度であった。当時の財産法においては、夫の庇護下にある妻の身分 (coverture) 及び長子相続権 (primogeniture) という慣習法 (common-law) の概念によって、既婚女性は自立した存在と認識されておらず、また娘は息子と同等の地位や財産権を認められていなかったのである (Packham 207)。この、女性は「夫の財産・所有物 (property)」(W 1: 139, 179) で

あるという認識を当の女性たちに刷り込む小説家や道徳家への嫌悪感を露わにしつつ、マライアは自らの考えを娘に伝えようと試みる。

When novelists or moralists praise as a virtue, a woman's coldness of constitution, and want of passion; and make her yield to the ardour of her lover out of sheer compassion, or to promote a frigid plan of future comfort, I am disgusted. They may be good women, in the ordinary acceptation of the phrase, and do no harm; but they appear to me not to have those "finely fashioned nerves," which render the senses exquisite. They may possess tenderness; but they want that fire of the imagination, which produces *active sensibility*, and *positive* virtue. (*W* 1: 144)

上記の一節でヒロインは、男性の欲望に屈することを義務とする、いわば消極的な感受性・美德と、「想像力の火 (fire of the imagination)」から生じる「主体的な感受性 (*active sensibility*)」や「積極的な美德 (*positive virtue*)」を明確に区別している。すなわち、女性は法的に「夫の財産・所有物」であったとしても、自らの心身の声に反して男性の欲望に応えることは真の美德ではないとマライアは考えているのである。この、自らの心身の声に従うことを可能にする「主体的な感受性」や「積極的な美德」が、当時まだ概念としては希薄であった女性のセクシュアリティの要素を含んでいる点は留意すべきであろう。

ウルストンクラフトは初期作品及び『女性の権利の擁護』において、女性のセクシュアリティにきわめて批判的であった。それは、セクシュアリティが「弱い、偽りの感受性 (*weak, false sensibility*)」(Myers, "Mary Wollstonecraft's Literary Reviews" 90)に囚われた女性—神に与えられた理性を磨かず、表面的なたしなみごとに長けただけの女性—と深く結びついていると考えていたためである。これに対し、『マライア』



では、ヒロインの口を借りて女性のセクシュアリティを「想像力の火」と好意的に捉え、娘（と後世の読者）に「美德の唯一の基盤」である「真実」を大切にするよう力説している（*W* 1: 145）。世の女性たちを美德の真の意味に開眼させることは、ウルストンクラフトのライフワークであった。『女性の権利の擁護』で彼女が女性たちに必要だと考えた美德は人間性の一部であり、性差のない、いわば中性的（gender-neutral）なものであったが、『マライア』ではそれが女性的（gender-specific）なものに変化している。すなわち、ウルストンクラフトは『マライア』において、男女／人間の基本的平等が実現された後に初めて可能となる女性特有の美德（セクシュアリティを含む）といったものを想像し、その美德に忠実なヒロインを創り出したといえよう。そしてこのヒロインが娘に宛てた手紙を通じて「女性特有の悲惨さと抑圧（the misery and oppression, peculiar to women）」（*W* 1: 83）を読者に提示すると同時に、女性特有の美德についても再考するよう読者に働きかけていると考えられる。

では、『マライア』が〈娘への手紙〉という単体作品ではなく、それを中核に据えた小説として構想されたのはいかなる理由によるものだろうか。〈論敵への手紙〉や〈恋人への手紙〉のように、書簡体の語りのみからなる作品ではなく、三人称の語りの中に〈娘への手紙〉を織り込むことで、何が可能になるのか。本章の最後でこの点を検証したい。

### 3 マライアの公開書簡

18世紀の書簡体小説においては、多くの場合、ヒロインが家父長社会の犠牲者として描かれる。男性の手になる『クラリッサ』や『新エロイーズ』はもとより、女性による作品、例えば、第2章第1節でも言及したイライザ・フェニックの『秘密』や、アメリカ建国期の小説家ハナ・ウェブスター・フォスター（Hannah Webster Foster,

1759-1840) の『コケット、あるいはエライザ・ウォートンの物語』(*The Coquette; or, The History of Eliza Wharton, 1797*) でも、親や友人、恋人に手紙を書くヒロインが、最終的には身体的・社会的な死に至る。<sup>70</sup> もちろん、『パミラ』のように「美德の報い」として玉の輿にのるヒロインもいないわけではないが、18世紀の多くの読者の涙を搾り取ったのは、慣習的な美德の有無を問わず、若くして死に至る美しい女性たちの姿であった。

これに対し、『マライア』では、ヒロインは自らを夫や家父長社会の犠牲者と認識しているものの、最後まで相手に屈しない。娘に宛てて「自らの心身に正直であれ」というメッセージを綴ったマライアは、その助言を自らにも適用し、夫に対して、ひいては母国の法律に対して、自らの拠って立つ思想を公言するのである。すなわち、〈娘への手紙〉の外枠となる箇所は、それを書いた後のマライアの戦いを読者に提示するために必要だったのではないか。以下、その戦いを検証することにより、ウルストンクラフトが〈娘への手紙〉にある種の公開書簡の機能を持たせようとしたことを実証したい。

本章第2節で確認した通り、『マライア』の主人公は生後4ヵ月の娘と引き離され、“a private receptacle for madness”(W 1: 119)あるいは“private mad-house”(W 1: 175, 180, 181)と呼ばれる施設に監禁される。これは現代で言えば精神科病院のことであるが、18世紀のイギリスにおいて私立の精神科病院は事実上の無法地帯に近く、賄賂による近親者の不法監禁が横行していた。政府の運営による公立の精神科病院が確立するのは、1808年の庇護法(Asylum Act)以降のことである(MM 205, n. 2)。『マライア』においても、私立の精神科病院は中流階級の人間が(精神病を患ってはいない)近親者を送り込み、その財産を奪うための装置として機能している。<sup>71</sup>

ここで留意すべきは、マライアとダーンフォードはいずれも上記の装置の犠牲者だが、2人の境遇には決定的な違いがあるという点だ。ダーンフォードは当初から「監

禁は長くはかからないだろう」(W 1: 102)とされており、後にジェマイマが同僚から「彼は2日後に解放される」(W 1: 174)と聞いた通り、合法的に自由の身になる。彼を精神科病院に送り込んだ人物は国外逃亡しているという筋書きだ。これに対し、マライアは監禁当初から「生き埋め」(W 1: 92)にされたことを認識している。

〈娘への手紙〉にも、「死が私をあなたから奪ってしまうかもしれません」(W 1: 123)と綴っており、ダーンフォードのようにまもなく解放されるという予感はない。そもそも、自分の監禁が誰によって何のためになされたのかを知らないダーンフォードと異なり、マライアは夫が財産目当てで自分を監禁したという事実を熟知している。脱出を試みたところで、夫によって再び合法的に心身の自由を奪われるであろうことを理解しているのだ。精神科病院に送られたという点ではダーンフォードもマライア同様、被害者だが、彼の監禁が期間限定であるのに対し、マライアは精神科病院の内であろうと外であろうと、「結婚が私を一生牢獄に繋いだ」(W 1: 146)という本人の認識通り、無期監禁状態にある。すなわち、マライアの〈娘への手紙〉は、短期的には精神科病院、長期的には結婚制度に身柄を拘束された人間が現状に到る軌跡を文章化したものであり、二重の獄中記とでもいうべき様相を呈している。

マライアがこの書き物に着手したのは悲しみや悪夢から逃れるためであったが、自らの半生を綴る中でそれが娘の教育に役立つかもしれないと気づき、その思いが「文章に生命を与え、魂が注ぎ込まれた」(W 1: 90)。つまり、マライアが「獄中」でこの文書を書き続けたのは、後世には自分をこのように記憶してほしいといった虚栄心からではなく、娘の役に立ちたいという切実な思いに突き動かされてのことであった。それは、例えば「ポウプの如き虚栄心の塊」(W 7: 363)が後世の目を考えて修正した自画像とは一線を画する、率直な自己開示の産物であり、ここには当時ウルストンクラフトが高く評価していたルソーの『告白』の影響が垣間見える。読者が当惑するほど赤裸々に彼の半生が綴られたこの作品を、ウルストンクラフト

が書評で“memoirs”と呼んでいる点は注目に値しよう（*W* 7: 363）。『マライア』執筆中の彼女が「回想録」とルソー流の「告白録」をほぼ同義語と捉えていたとすると、娘の役に立つためにマライアが書き続ける文章に、自らの恥部を曝け出すことも厭わないという姿勢が顕著であることも頷ける。「私が夫に騙されていたのは事実です」（*W* 1: 149）という認識は、それを見抜くことのできなかった自分にとって痛みを伴う「告白」だが、その経験を有益なものに変えるために、マライアは娘に向けてあえて自らの失敗を列挙するのである。

人生のどの段階で自分は判断を誤ったのか。なぜ精神科病院の独房に閉じ込められることになったのか。身体的自由を奪われた状態でマライアは記憶を辿り、その深遠部まで降りていく。時間的・空間的距離を置くことによって当時の自分や他者の言動を客観視し、それらに新しい意味を見出していく軌跡が、娘宛ての回想録として結晶化する。「これからお伝えするのは、ずっと後になってからわかったことです」（*W* 1: 127）と断りを入れながら、マライアは自らの半生、特に結婚生活に関する記憶を文章化していく。それは、いわば後付けの知識に支えられ、記憶が作られる過程である。

この文章を書き進めていくうちに、マライアは当時の自分がいかに未熟であったかに思い至る。その自覚が綴られた文書はダーンフォードに読まれ、彼の「とても愛情深い手紙」（*W* 1: 172）が添えられて、マライアのもとに戻ってくる。言い換えれば、彼女は〈娘への手紙〉を書いたことで、想定外の読者ダーンフォードと本格的な恋愛関係に入り、看守ジェマイマの友情に支えられ、精神科病院からの脱出に成功した。そして、法的には未だヴェナブルズの妻でありながら、精神的・身体的にはダーンフォードの妻として新たな生活を送ろうと試みる。すなわち、当時の法律上ではマライアは姦通を犯していることになる。

しかしながら、ここで特筆すべきは、マライアがダーンフォードとの関係を新た

な結婚と認識している点だ。彼との再会后、マライアは「自分の赤ん坊の殺人者」たるヴェナブルズのさらなる金銭的な要求をはねつけ、彼をもはや夫とは認めず、精神科病院の一室で、ダーンフォードを「今や夫として」受け入れる (*W* 1: 173)。彼女は後に、手紙の中でもダーンフォードを「聖なる名である『夫』」(*W* 1: 174)と呼んでいる。すなわち、この時点におけるマライアは結婚制度そのものを否定しているわけではなく、結婚が当該の男女の幸せに結びつかない場合、迅速な離婚が必要だという考えを抱いているのである。そもそも、妻マライアの財産を合法的に入手しようと企むヴェナブルズにとって、離婚は問題外といってよい。ゆえに、マライアが批判の矛先を向けたのは、女性の側からの離婚の申し立てを困難にしている、当時の婚姻法であると考えられよう。この婚姻法によれば、夫は妻を姦通の罪で離婚できるが、妻が夫を離婚するには、「近親相姦、重婚、性的不能、身体に危険を及ぼす暴挙」(*W* 1: 179, n. a) という証拠が必要であった。ヴェナブルズに関しては最初の3点は該当しないが、4点目の「身体に危険を及ぼす暴挙」は十分あてはまる。それを証明できれば、マライアが離婚を勝ち取る見込みは皆無とは言い切れない。ただし、それが「卓上離婚 (divorce from bed and board)」という名称の法的別居であった場合、婚姻関係の解消は実現できず、したがって再婚も不可能となる (*W* 1: 181)。マライアが自分に加えられた数々の暴挙を根拠としてヴェナブルズをもはや夫とは認めず、ダーンフォードを新しい夫として迎え入れたのは、既存の婚姻法ではヴェナブルズとの離婚が万が一実現できたとしても、ダーンフォードとの再婚は困難であることを理解していたためであろう。マライアは既存の婚姻法に拠らず、いわば自らの意志で離婚及び再婚を実現しようとしたのだと考えられる。

もっとも、法律を超越するという発想は、マライア本人のものとは言い難い。それは、マライアの〈娘への手紙〉を読んだダーンフォードの見解である (*W* 1: 172)。とはいえ、彼にそのような見解を喚起したのが彼女の〈娘への手紙〉であったこと

に鑑みれば、この発想の源泉はマライアのテキストに織り込まれていたという側面も否定できない。いずれにせよ、重要なのは、既存の法律を超越するという発想が、マライアとダーンフォードの関係が深まるにつれて浮かび上がってきたものであり、2人が最初から法律を超越して生きようとしていたのではないという点だ。言い換えれば、2人は生粋の革命主義者ではない。奸計により精神科病院に監禁された犠牲者同士が、現状を生き抜くために力を合わせて新しい生き方を考え、既存の婚姻法、すなわち男女を不平等な契約で束縛する法律を超越し、知性や感受性という、常時自ら涵養しなければならない資質を軸とした新たな婚姻法を考え出したのである。本章第1節で検証した、姦通の咎で娘たちから引き離された実在の女性ペニントンの慣習的な助言と対照的に、マライアは自らの〈娘への手紙〉に織り込んだ革新的な助言を、ダーンフォードの力を借りて実行に移した。既存の婚姻法を超越し、自らの意志で法律上の夫を退け、新たな男性を夫としたのである。

とはいえ、「女性は自らの心身に正直であれ」という助言を自ら実行に移したマライアが、ダーンフォードとの「再婚」によって、彼が彼女に与えたいと願っていた「自由と愛」(W 1: 172)を手に入れたかということ、大きな疑問符がつく。よく知られている通り、草稿に複数遺された結末のヒントの中には、新しい「夫」たるダーンフォードの不実が発覚するというものが含まれているからだ(W 1: 182-83)。マライアは服毒自殺を図り、朦朧とする意識の中で、ジェマイマが連れてきた幼い娘(実は生きていた)が「ママ!」と叫ぶ声を聴き、「戦いは終わったのね。私は子どものために生きています!」と宣言する(W 1: 184)。仮にこのプロットが最終稿として想定されていたのであれば、マライアにとって結婚生活は、配偶者がいかなる男性であれ、「自由と愛」には繋がらないことになる。その認識を前提とした結末—自分と娘、そして「第二の母親」(W 1: 120)であるジェマイマという、階級差を超えた女性のみからなる共同生活に望みを託す—は、フランス革命の混乱に際し急速に保守反動

化するイギリスにおいて危険視され、非難の対象となった。ギルレイの風刺画において『マライア』が有害図書の1冊に数えられていることは、第2章第1節でも言及した通りである。

しかしながら、『マライア』の革新性は、ラディカル・フェミニズムの萌芽ともいふべき、男性を排した女性だけの共同体の創設という発想に留まるものではない。<sup>72</sup> 巻末のヒントに至る直前、すなわち現存する最終章の第17章には、結婚制度内での男女平等を実現しようとする試みが示唆されている。精神科病院を脱出し、ロンドンでダーンフォードと同棲を始めたマライアに対し、ヴェナブルズの手によって「法律の犬ども」(*W 1: 178*) が放たれる。マライアはダーンフォードの弁護人 (*counsel*) に対し、法廷ではダーンフォードの姦通の告訴 (*charge*) については有罪と認めるものの、婦女誘拐 (*seduction*) については否定するよう指示した (*W 1: 178*)。ここには、ダーンフォードの罪を軽くしたいという願いとともに、女性は男性の所有物ではなく、自分自身の意志を持った人間であるというマライアの強い主張が読み取れる。さらに、彼女はダーンフォードの弁護を自ら引き受けるために、法廷で読み上げられるべき文書を提出する。そしてこの文書こそ、〈娘への手紙〉の中核をなす「女性は自らの心身に正直であれ」という助言が、権威者たる法廷 (判事) に宛てて「女性は自らの心身に正直であるべきだ」という主張となって発信されたものという点で、ある種の公開書簡としての機能を備えていると考えられる。

〈娘への手紙〉の内容がマライアの法廷文書に継承されていることを実証するために、この文書が書かれることになったきっかけを確認しよう。原告の弁護人によれば、ヴェナブルズがマライアを精神科病院に監禁した理由は、「産後、妻の言動がおかしかったこと」、及び「彼女の親族には鬱病 (*melancholy malady*) の血が流れていること」であった (*W 1: 178*)。財産目当てで妻を精神科病院に収監したという真の理由を隠すために、「女性特有の悲惨さと抑圧」の象徴ともいふべき産後鬱を、遺

伝的な精神的疾患に読み替えて公に提示したのである。マライアにとっては、これは虚偽以外の何物でもない。彼女の強い憤りを、語り手は次のように描写する。

A strong sense of injustice had silenced every emotion, which a mixture of true and false delicacy might otherwise have excited in Maria's bosom. She only felt in earnest to insist on the privilege of her nature. The sarcasms of society, and the condemnation of a mistaken world, were nothing to her, compared with acting contrary to those feelings which were the foundation of her principles. (*W* 1: 178)

「不正・不当・不法・不公平 (injustice)」を強く感じたマライアは、自らの「本性 (nature)」を頼みとして、声を挙げることを考える。世評をものともせず、自らの原理原則を基盤とする感情に則って行動することを是とする上記の一節には、女性は他者（特に男性）からどう見られるかに基づいて振る舞うのではなく、自らの意志を基盤として振る舞うべきだという、〈娘への手紙〉の中核をなす助言が響いている。とはいえ、「法律逃れは恥ずべきこと」(*W* 1: 178) と考えたマライアは、夫の“injustice” に対する憤りを文書にまとめ、法廷に提出することにする。このようにして、〈娘への手紙〉で展開された、グレゴリヤペニントン流の慣習的なコンダクト文学に対する批判が、宛先・受取人を法廷（判事）に代えて、ある種の公開書簡として発信されることになる。

マライアは〈娘への手紙〉で培った手法をこの文書でも貫く。すなわち、結婚生活に関する事実を、たとえ痛みを伴う「告白」であったとしても、列挙するのである。ヴェナブルズの虚偽を告発するためにも、マライアは自らの立場を明らかにしなければならない。そしてこの作業を通じ、彼女は法廷、及びその先にいる不特定多数の人々を、結婚によって男性に隷属させられた〈女性〉の味方に引き入れよう



と試みる。

Married when scarcely able to distinguish the nature of the engagement, I yet submitted to the rigid laws which enslave women, and obeyed the man whom I could no longer love . . . I am ready to allow, that education and circumstances lead men to think and act with less delicacy, than the preservation of order in society demands from women; but surely I may without assumption declare, that, though I could excuse the birth, I could not the desertion of this unfortunate babe. (*W* 1: 178-79)

マライアは上記の一節で、「女性を隷属させる法律」、すなわち既存の婚姻法を自分は遵守したこと、また、夫ヴェナブルズが召使の女性に婚外子を生ませたが、それは違法ではなく、ゆえに自分はそれを受け入れたことを、法廷に知らしめる。しかしながら、夫がその婚外子を遺棄したことは許せないと主張している。この婚外子の面倒を見たのもマライア本人であった。夫の非人間性を暴露する一方、社会的弱者に手を差し伸べる自らの道徳性を強調することで、マライアは法廷及びその先の聴衆・読者の共感を呼び起こそうとしている。

前節でも言及した通り、ヴェナブルズはダーンフォードを姦通及び婦女誘拐の咎で告訴した。前者の咎に関しては、同棲という明らかな事実がある以上、マライアもダーンフォードも認めざるを得ない。しかしながら、後者に関しては、マライアは断固としてはねつける。彼女の考えでは、婦女誘拐の罪に問われるべきはむしろヴェナブルズなのである。

I will not enlarge on those provocations which only the individual can estimate; but will bring forward such charges only, the truth of which is an insult upon humanity. In

order to promote destructive speculations, Mr Venables prevailed on me to borrow certain sums of a wealthy relation; and, when I refused further compliance, he thought of bartering my person; and not only allowed opportunities to, but urged, a friend from whom he borrowed money, to seduce me. On the discovery of this act of atrocity, I determined to leave him, and in the most decided manner, for ever. I consider all obligation as made void by his conduct. (*W* 1: 179)

ヴェナブルズは借金と引き換えに、友人に身重のマライアを誘惑するよう唆した。証拠となる手紙はヴェナブルズが暖炉に放り込んでしまったため、法廷に提出できない。もっとも、たとえその証拠を提出できたとしても、既存の婚姻法のもとでは、夫が妻の身体を第三者に売るとは合法と認められるかもしれない。しかしながら、マライアにとってその行為は「極悪非道 (atrocity)」であった。少なくとも、ダーンフォードを婦女誘拐の罪に問う資格が「極悪非道」のヴェナブルズにあるのかどうかを、法廷に問いただきたいという姿勢が上記の一節から読み取れる。

「女性を隷属させる法律」に苦しむ女性たちが、マライアのように声を挙げられないのは、夫の暴挙を耐え忍ぶのが妻の美德であるという考えが彼女たちに植え付けられているためである。マライアはそうした「偽りの道徳」を教え込む人々に批判の矛先を向ける一方、女性は「自らの良心に問い、ある程度は自らの善悪の判断に則って、自らの振舞を統制することを許されるべきである」と主張する (*W* 1: 180)。夫にすべてを委ねるのではなく、妻も一個人として、自らの判断基準を持つべきだという信念が窺える。

マライアはこの文書で夫の非人間性を告発し、世の女性は自らの良心・道徳性に則って行動すべきだと主張する傍ら、自分が母親としての義務を果たしたいと切望する一女性であることを、国に向けて訴えかける。

If I am unfortunately united to an unprincipled man, am I for ever to be shut out from fulfilling the duties of a wife and mother? – I wish my country to approve of my conduct; but, if laws exist, made by the strong to oppress the weak, I appeal to my own sense of justice, and declare that I will not live with the individual, who has violated every moral obligation which binds man to man. (*W* 1: 180)

上記のような意思を表明したマライアの文書は、「女性特有の悲惨さと抑圧」に苦しむ社会的弱者の代表が、イギリスの法律を体現する法廷に宛てた、公開書簡としての機能を携えているといえよう。「女性は自らの心身に正直であれ」と諭す〈娘への手紙〉を書かなければ、マライアは精神科病院に監禁されたまま、「女性特有の悲惨さと抑圧」の犠牲者として死を迎えたであろうことが容易に想像できる。娘に宛てた私的な手紙という体裁をとる教育書簡は、作品内部で様々な読者を得て、最終的には既存の婚姻法を告発する公開書簡を生むに至ったのである。

本章第1節及び第2節においては、『マライア』における〈娘への手紙〉の教育書簡としての機能に着目し、『女性の権利の擁護』における慣習的なコンダクト文学への直截的な批判が、この〈娘への手紙〉に発展的に継承されていることを明らかにした。『女性の権利の擁護』においてウルストンクラフトは、女性が美德を涵養するためには慣習的・性差別的な考え方から解放されねばならないと主張している。男性が望むような自己犠牲的な従順さではなく、「主体的な、自己を広げる美德」(Taylor, *Feminist Imagination* 12) に女性たちが到達することを心から願ったのである。美德に性別はないというウルストンクラフトの主張はきわめて強い影響力を持っており、人間社会の基盤を理解するための新しい道を開くかのように思われた。しかしなが

ら、それは同時に難問ももたらしたといえる。彼女の主張は「女性性を改革するだけでなく、女性性そのものを消滅させる」(Taylor, *Feminist Imagination* 14) ようにも受け止められたのである。この矛盾をどう説明すればよいのか。ウルストンクラフトの後半生は、この問いに対する答えの探求に捧げられたと言っても過言ではない。

その試みの1つが『北欧からの手紙』における「女性性」を生かした新しい語りであり、もう1つが『マライア』における〈母から娘への手紙〉といえるだろう。本章第2節で論じた通り、ウルストンクラフトは『マライア』において、男女／人間の基本的平等が実現された後に初めて可能となる女性特有の美德（セクシュアリティを含む）といったものを想像し、それを涵養することの大切さを未来の人々、特に女性たちに伝えたいと考えた。それを効果的に行うために、グレゴリやペニントンの〈父／母から娘たちへの手紙〉という慣習的なコンダクト文学の形式に「女性性は自らの心身に率直であれ」という革新的な思想を注ぎ込んだのである。

本章第3節では、ウルストンクラフトが『マライア』を〈娘への手紙〉という単体作品ではなく、それを中核に据えた小説として構想した理由を考察した。〈娘への手紙〉に外枠を加えることで、手紙執筆後のヒロインの戦いを読者に提示することが可能になる。マライアは性差や階級差を超えた友情・愛情に支えられ、精神科病院からの脱出に成功するが、結婚制度という牢獄からの脱出は不可能であることに気づく。すなわち、「母から娘たちへの遺贈」として、自らを反面教師とするよう伝える手紙だけでは不十分であることを痛感するのである。そこでマライアはさらなる一步を踏み出し、「女性を隷属させる法律」に光を当て、既存の財産・結婚制度を告発する。悲惨な半生を書き残すという一種の自己満足に留まるのではなく、娘や後世の女性たちのために自らの心身の危険も顧みず法廷に文書を提出するマライアは、権威主義者に真っ向から対峙して『人間の権利の擁護』を書き上げたウルストンクラフトの分身である。『マライア』においてウルストンクラフトが〈娘への手紙〉

を三人称の語りの中に織り込んだのは、「幅広い層の読者に対し、書簡の書き手の激しい抗議に加わるよう呼びかける」ため、すなわち娘宛ての教育書簡（未来への手紙）を一種の公開書簡に昇華させるためであったと考えられる。

『マライア』は未完ゆえ、「小説の素描」（*W* 1: 26）に留まる面は否定できない。しかしながら、リベラル・フェミニズムの先にあるラディカル・フェミニズム的な思想を想像し、その思想に忠実なヒロインを創り出したという点で、そしてそのヒロインに〈娘への手紙〉を綴らせ、かつその手紙のメッセージをある種の公開書簡として機能させるという語りの技法を試みた点で、書簡文学者ウルストンクラフトの真髓を示す作品であるといえよう。

## 結論

本博士論文では、原フェミニズム思想の創始者、及びフェミニズム文学の母という側面が強調されることの多いウルストンクラフトの著作を、ヨーロッパで長い伝統を持つ書簡体文学、及び書簡体の語りという観点から考察することにより、文学史における彼女の位置づけに新たな光を当てようと試みた。

第1章ではウルストンクラフトの手紙を3種類に分けて検証し、手紙の執筆という行為がウルストンクラフトの著述の基盤をなしていることを確認した。第2章では書簡体の語りに関する歴史的・理論的研究を概観し、ウルストンクラフトの書簡体作品を検証する上で有用な観点を浮き彫りにした。第3章では公開書簡というジャンルの歴史的意義、及びフランス革命論争における3人のイギリス女性作家の活動を検証し、ウルストンクラフトが彼女たちから継承した要素を明らかにした。それを踏まえ、第4章では〈論敵への手紙〉として『人間の権利の擁護』を取り上げ、ウルストンクラフトがこの公開書簡においてパークに対峙する中で構築した新たな文学的人格を検証した。第5章では〈恋人への手紙〉として『北欧からの手紙』を取り上げ、イムレイ宛ての私的書簡と並行して綴られたこの書簡体旅行記にウルストンクラフトが文学的虚構を織り込み、かつ語り手に男性性と女性性の混在する〈声〉を与えることで、公開書簡の要素を含む独創的な恋愛書簡文学を創り上げたことを実証した。第6章では〈娘への手紙〉として『マライア』を取り上げ、ウルストンクラフトが同時代のコンダクトブックを換骨奪胎し、革新的な女子教育思想を展開していることを明らかにした。その上で、この教育書簡をある種の公開書簡に昇華するにあたり、彼女が駆使した語りの技法を検証した。以上、第4章から第6章で取り上げた作品のすべてにおいて、ウルストンクラフトが名目上の“you”の先にいる不特定多数の読者を味方につけるために用いた公開書簡の手法を浮き彫りにすることができた。

ここで改めて、書簡体の語りがウルストンクラフトの文学的成長に与えた影響を主にジェンダーの点から確認したい。その上で、ウルストンクラフトの書簡体の語りが後世に与えた影響の一端を探ってみたい。

ウルストンクラフトは匿名出版の『人間の権利の擁護』において、当時の考え方で言えば「男性的」な、すなわち神由来の理性を涵養することで得られる徳によって社会的正義をなそうとする「人間的」な人格を構築することにより、読者に自らの主張の正当性を認めさせようと試みた。続く『北欧からの手紙』では〈恋人への手紙〉という枠組みにオウィディウス流の「男性から引き離された女性の嘆き」や、幼い娘のために生きねばならぬ「母の嘆き」を響かせ、読者の共感を喚起する。さらに、同作品において「悪しき男性性」を体現する商業・金銭欲を“you”に割り当てる一方、自らの「善き男性性」、すなわち正義感や道徳観を浮き彫りにすることで読者を味方に引き入れる。いわば、語り手のジェンダー的特性を意図的に攪乱することで幾重にも広がる多声的な語りを展開し、幅広い層の読者を獲得したのである。

一方、最晩年の『マライア』では、『北欧からの手紙』で展開した「母の嘆き」を基調とする〈娘への手紙〉を作品の中核に据える。ここには「男性的」な声はほとんど聞こえない。とはいえ、娘に宛てた私的な手紙という体裁をとる教育書簡は、作品内部で様々な読者を得て、最終的には既存の婚姻法を告発する法廷文書という、ある種の公開書簡を生むに至った。すなわち、『北欧からの手紙』で展開した「女性的」な声に、『人間の権利の擁護』で培った「男性的」な声—バークが示したような「女性的な／女々しい」一種の対処療法ではなく、社会の不正を見抜き、その抜本的な解決を訴える声—が織り込まれるのである。したがって、語り手のジェンダー的特性という観点からは、〈論敵への手紙〉、〈恋人への手紙〉、〈娘への手紙〉に一定の連続性・発展性が見られるといえよう。

もっとも、ここで改めて浮き彫りになるのは、言語におけるジェンダー（的特性）

という概念の難しさである。本論文ではウルストンクラフトの手紙・書簡体文学を手紙の書き手／語り手 “I” と宛先・受取人 “you” の関係を軸に論じてきたが、英語という言語の性質上、“I” のジェンダー的特性は、語り手が「女性性」を体現する明確な身分・役割（娘、姉妹、妻、母）を与えられていない場合、究極的には “you” との関係の中から相対的に浮かび上がるものとして捉えるしかない。これはヨーロッパの主要言語における一人称単数形（仏: je, 伊: io, 西: yo, 独: ich）の場合ときわめて対照的である。<sup>73</sup> 第1章及び第2章で確認した通り、ウルストンクラフトはフランス語、ドイツ語、イタリア語による著作の書評や翻訳という仕事に加え、ポルトガルやフランス、北欧への旅を通じて、明示的なジェンダー特性を持つヨーロッパ言語に日常的に親しんでいた。それらの言語がウルストンクラフトの思想や文学に与えた影響については、今後の研究課題としたい。

次に、ウルストンクラフトの書簡体の語りが後世に与えた影響の一端を探ってみよう。そもそも、書簡体の語りを持つ作品、特に書簡体小説というジャンルは19世紀初頭には既に凋落の兆しを見せていたが、例外として特筆すべきは、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein; or, The Modern Prometheus*, 1818) であろう。北極探検者ロバート・ウォルトン (Robert Walton) が「親愛なるお姉様」 (Shelley, *Frankenstein* 51) に宛てた手紙で始まるこの小説には、ウルストンクラフトの『北欧からの手紙』を思わせる描写が顕著である (Shelley, *Frankenstein* 51-52; *W* 6: 248)。また、北極圏の描写に加え、旅の途上でウォルトンが見聞した若いロシア人女性のロマンスについての記述も『北欧からの手紙』における若い北欧女性の恋物語を思わせる (Shelley, *Frankenstein* 55-56; *W* 6: 275)。「手紙の書き手と聞き役に徹する受取人」という構図を持つ同時代の書簡体文学において、風景描写と各地で流布している物語を組み合わせた語りは珍しいものではなく、例えばウィリアムズも『フランスからの手紙』においてノン・フィクション (旅行記・ルポルタージュ)



としての枠組みの中にフィクションめいた物語を織り込んでいる (Williams, *Letters Written in France* 115-39)。事実と虚構の境界線を縫うような語りの特徴を生かし、ウルストンクラフトやウィリアムズが旅行記に半ば虚構化された物語を挿入したとすれば、メアリ・シェリーは既に完成していたフランケンシュタインと被造物の話に同時代の北極圏言説を反映させた「北極圏からの手紙」という外枠を与えることで、虚構の物語に多少の真実味を加えようとしたのだと考えられよう (平倉, 『フランケンシュタイン』の書簡性」 20-21)。

もともと、『フランケンシュタイン』は純粋な書簡体小説とは言い難い。書簡形式の根幹は手紙の受取人 “you” が常に意識されているという点にあり、『フランケンシュタイン』でも「親愛なるお姉様」という呼びかけはかろうじて最後まで続く。しかしながら、船が北極圏に達すると、ウォルトンの語りは郵送されるべき手紙としての意義が消滅し、「疑似書簡性 (mock epistolarity)」 (O’Dea 2004) ともいうべき様相を呈し始める。しかも作品末尾に提示される手紙には署名がなく、読者は宙づりの気分させられる。これは、フランケンシュタインと被造物の物語に開いた結末を与えるための文学的戦略ともいえようが、書簡体の語りという観点から眺めると、すっきりしない幕切れという感は否めない。

メアリ・シェリーには書簡体の語りを用いた作品がもう1つある。『フランケンシュタイン』初版の翌年に書かれたものの、父ゴドウィンによって封印され、20世紀半ばにようやく日の目を見た『マチルダ』 (*Mathilda*, 1819/1959) である。<sup>74</sup> 同作品は孤独な若い女性マチルダが自らの死を意識し、「ある人物に宛てて綴った一人称の回想録」として読者に提供される。これは、ウルストンクラフトのマライアが精神科病院の独房で自らの死を予期し、娘に宛てて綴った一人称の回想録を想起させる。両者は「手紙の書き手と聞き役に徹する受取人」という同時代の書簡体小説 (一声／独唱型) の枠組みを共有しているともいえよう。

もつとも、自らの悲惨な結婚生活を克明に描き出し、娘に警告を与えるマライアと、自らの存在自体が愛する父を死に追いやったという罪の意識に苦しむマチルダの語りには、内容的に大きな隔たりがある。また、マライアの一人称回想録は、本来娘に宛てたものが結果的に娘以外の人物に読まれることになるが、マチルダの場合、始めから名目上の“you”以外の読者を想定している。「あなた、ウッドヴィル、優しくて愛情深い友」(Shelley, *Mathilda* 42)に宛てて自らの「悲劇的な歴史」(Shelley, *Mathilda* 41)を書くことにしたマチルダは、同時に「あたかも見知らぬ人たちに対して書くように」(Shelley, *Mathilda* 41)自分の物語を綴ると述べている。「優しくて愛情深い友」はこの物語を綴るための1つの装置に過ぎず、死を目前に控えたマチルダにとっては、「見知らぬ人たち」に広く読んでもらうことの方が重要だという声も聞こえてこよう。

上記で取り上げたメアリ・シェリーの2作品に見られる通り、手紙という形式・枠組みが形骸化しても、「わたし」から「あなた」に宛てた親密な語りは残る。ただし、その場合、特定人物としての「あなた」の存在は希薄になり、作品外部の読者である「あなた」との境界線が揺らぎ出す。いわば、文学的伝達における受話者 (addressee) と受信者 (receiver) が重なり始めるのである。<sup>75</sup> 公開書簡・書簡体文学に不可欠であった名目上の宛先・受取人“you”が消失することにより、小説の語り手が直接〈公〉である“you”に向けて物語を綴るようになったということもできよう。

「手紙の時代」における「もつとも傑出した手紙の書き手の1人」であったウルストンクラフトは、本論文で取り上げた3つの作品において、政治、恋愛、教育を主題とする“I”と“you”のドラマを、読者／観衆を意識しつつ、巧みに描き出した。同時に彼女は、名目上の“you”の先にいる「幅広い層の読者に対し、書簡の書き手の激しい抗議に加わるよう呼びかける」という公開書簡の手法を貫いたのである。

こうした書簡体の語りに自覚的になることで、“you”の1人である我々外部の読者はウルストンクラフトの〈声〉により敏感になり、そこに込められたメッセージをより深く読み取ることができるだろう。

## 注

### 序論

1. 2000年以降に英語圏で発表されたウルストンクラフト研究の動向を概観すると、広義の哲学（倫理学、宗教学、思想史）及び社会科学（政治学、心理学、教育学）に関するものが多数を占めている。これらは18世紀イギリスにおいて道徳哲学（moral philosophy）と呼ばれた分野であると考えて差し支えないであろう（Heydt 2017）。例えば、ウェンディ・ガンサー＝カナダ（Wendy Gunther-Canada 2001）は西洋哲学の正典に対するウルストンクラフトの反逆的な思考と戦略を吟味し、バーバラ・テイラー（Barbara Taylor 2003）は独自の宗教観に彩られたウルストンクラフトの原フェミニズム思想を18世紀啓蒙思想の産物として歴史化しつつ、精神分析的手法を援用して解釈した。全著作に現れる家族の表象にウルストンクラフトの神学的基盤を探り、その変遷が彼女の政治思想に反映されていることを突き止めたアイリーン・ハント・ボッティング（Eileen Hunt Botting 2006）は、ウルストンクラフトとジョン・スチュワート・ミル（John Stuart Mill, 1806-73）の女性の人権論を比較分析し、その普遍性を指摘している（Eileen Hunt Botting 2016）。この他、フランス革命論争におけるエドモンド・バーク（Edmund Burke, 1729-97）とウルストンクラフトの議論をスコットランド啓蒙という共通の思想的基盤で読み解いたダニエル・I・オニール（Daniel I. O'Neill 2007）や、ウルストンクラフトが提唱した男女共学教育論の現代的意義を論じるスーザン・レアド（Susan Laird 2008）、ウルストンクラフトの権利論を共和主義的な政治理論に基づいて検証したレナ・ハルデニウス（Lena Halldenius 2015）、ウルストンクラフトの原フェミニズムが同時代の教育理論に与えた影響を辿るカースティン・ハンリー（Kirstin Hanley 2018）、ウルストンクラフトが切り開いた公共圏への道が後世の女性にもたらした意義を強調するアン・ブルックス（Ann Brooks 2019）等の研究が挙げられる。上記のような単著に加え、サンドリーヌ・バージェス（Sandrine Bergès）らが編集した『メアリ・ウルストンクラフトの社会政治哲学』（*The Social and Political Philosophy of Mary Wollstonecraft*, 2016）及び『ウルストンクラフト的精神』（*The Wollstonecraftian Mind*, 2019）のように、浩瀚な論文集の出版も相次いでいる。なお、ナンシー・E・ジョンソン及びポール・キーン（Nancy E. Johnson and Paul Keen）が編集した『文脈の中のメアリ・ウルストンクラフト』（*Mary*

*Wollstonecraft in Context*, 2020) は歴史学や文学を軸としている。また、2018年にはウルストンクラフト協会 (Wollstonecraft Society) が、2019年にはメアリ・ウルストンクラフト・フェロウシップ (Mary Wollstonecraft Fellowship) が設立された。前者はウルストンクラフトの人権・教育思想を若い世代に伝える公認慈善団体、後者は研究活動を目的とする学会である。日本におけるウルストンクラフトの社会思想的研究の近年の主な著作としては、安達みち代 (2002) 及び梅垣千尋 (2011) を参照。また、清水和子・後藤浩子・梅垣千尋による『人間の権利の擁護』邦訳 (2020) には詳細な解説及び研究史が添えられており、原フェミニズム思想に留まらないウルストンクラフトの社会思想を知る上できわめて有益である。

2. 英語圏においては、女性哲学者 (female philosopher) としてのウルストンクラフト像が同時代及び後世の小説に与えた影響を探るアンドリュー・マクイニス (Andrew McInnes 2016) 及びデボラ・ワイス (Deborah Weiss 2017) を参照。日本においては鈴木美津子 (2005)、阿部美春 (2009)、木村晶子 (2009)、小川公代 (2013) を参照。なお、フェミニズム文学の母としての側面に留まらない観点からウルストンクラフトの文学作品を取り上げた研究としては、『メアリ』 (*Mary, A Fiction*, 1788) を18世紀の感受性文学から派生した「慈善小説」として総合的に論じた大石和欣 (2006) を参照。
3. 〈文学の語り〉と〈歴史の語り〉の二本立てで成り立つジャンルともいえるべき伝記は、近年ではライフ・ライティング (life writing) や創作的ノン・フィクション (creative non-fiction) という概念で捉えられることが多い。これらの定義は流動的だが、基本的には「文学的 (創作的) 手法を用いて歴史的事実を語る」という姿勢で書かれた文学ジャンルの一形態であるといえる。近年における伝記的／ライフ・ライティング的なウルストンクラフト研究においては、従来看過されてきたウルストンクラフト三姉妹の関係に多くの頁を割いたジャネット・トッド (Janet Todd 2000) 以降、家族史の様相を帯びた著作が目立つ。例えば、ウルストンクラフト、ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin, 1756-1836)、メアリ・シェリーを「イングランド初の文人一家」として描き出したジュリー・A・カールソン (Julie A. Carlson 2007)、ウルストンクラフトの長女でありながら、長きにわたり顧みられることのなかったファニー (Fanny Wollstonecraft) を主軸に据え、「ロマン主義時代を生きた最初の一家族の物語」を織り上げたトッド (Todd

2007)、母娘の二重伝記 (dual biography) という形式を採り、映画的ともいえる手法でウルストンクラフトとメアリ・シェリーの人生を交互に綴ったシャーロット・ゴードン (Charlotte Gordon 2015) 等、学術書と小説を融合したような作品が生み出されている。

4. 近年におけるウルストンクラフトの文学的研究に関しては、数は少ないが、意欲的な試みがなされている。例えば、ウルストンクラフトを含むフランス革命期の主要思想家の文体を科学的に検証したジェイン・ホドスン (Jane Hodson 2007)、初期ロマン主義の演劇論争という文脈にウルストンクラフトの自己表象を位置付けたリサ・プラマー・クラフトン (Lisa Plummer Crafton 2011)、感受性言語と政治の問題を論じる中でウルストンクラフトを取り上げたハリエット・ゲスト (Harriet Guest 2013)、ウルストンクラフトがヨーロッパ文学の翻訳を通じて世界市民的な観点を身につける経緯を明らかにしたローラ・カークリー (Laura Kirkley 2015) の研究が挙げられよう。

## 第1章

5. 例えば、シェイクスピアの『夏の夜の夢』 (*A Midsummer Night's Dream*, 1600) において、ヒロインの1人、ハーミア (Hermia) は恋人ライサンダー (Lysander) に親しみを込めて “thou” と呼びかけるが、彼と距離を置く必要がある場合には “you” を用いている (MND 2.2.45; 3.2.191; 河合 44, 71)。このような例は18世紀にも散見される。例えば、ゴドウィンの小説『ケイレブ・ウィリアムズ』 (*Things As They Are; or, The Adventures of Caleb Williams*, 1794) に想を得たジョージ・コールマン (George Colman the Younger, 1762-1836) の戯曲『鉄の櫃』 (*The Iron Chest*, 1796) において、貴族モーティマー (Mortimer) は奉公人ウィルフォード (Wilford) に通常は親称で呼びかけるが、相手が自分の過去を詮索した際には、激昂して “you” を用いている (Colman 28-29)。
6. ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) の定義によれば、「公共圏 (public sphere)」とは「公権力から分離したひとつの公共広場 (forum)」であり、ここで「公衆として集合した私人 (民間人) が、公権力を公論の前に引き出してその正当性の証を求める」ようになる (Habermas 25-26)。「公共広場」の典型は、ヨーロッパの上流階級で繁栄したクラブやサロン、コーヒーハウス等の同人グループ、及び酒場に集う各種の協会である。なお、これらの組織と活動は出版機関に支え

られていた (Brewer 3)。

7. ウルストンクラフトは産後鬱に苦しむ妹イライザを住み込みで看病したものの、彼女が正気を失っていく様子に戦慄を覚える (L 39-43)。「ここ (夫の家) に留まるより教師にでもなった方がまし」 (L 41) というイライザの宣言を聞いたウルストンクラフトは、親友ファニー・ブラッド (Fanny Blood, 1757-85) と妹エヴェリーナの協力を得て、イライザを気性の荒い夫から引き離し、仮名で借りた家にかくまう (L 43-44)。妹の心身を救うための行動とはいえ、これは当時の法律では誘拐に近く、ウルストンクラフトも「新婚女性のために書かれた振舞に関するあらゆる規則に反している」 (L 47) ことを自覚していた。女性の振舞について書かれたコンダクトブックとウルストンクラフトの関係については第 6 章で詳細に論じる。
8. イムレイはニュージャージー州出身の冒険家、投機家。書簡体旅行記『北米西部準州地誌』 (*A Topographical Description of the Western Territory of North America*, 1792)、及び書簡体小説『移住者たち』 (*The Emigrants*, 1793) の著者でもある。ウルストンクラフトは 1794 年 5 月 14 日、港町ル・アーヴル (Le Havre) で出産する。フランス語の出生証明書によれば、この女兒フランソワーズ (Françoise) は「市民ギルベール・イムレイ (Citoyen Guilbert Imlay)」と「市民マリー・ウルストンクラフト、彼の配偶者 (Citoyenne Marie Wolstonecraft [sic] son Epouse)」の「正式な婚姻 (légitime mariage)」により誕生したことになっている (Tomalin 219; Verhoeven 185)。しかしながら、母国イギリスの法律ではウルストンクラフトは未婚のままであり、したがってフランソワーズ (ファニー) は非嫡出子であった。ウルストンクラフトとイムレイの関係、及びそれが彼女の文学・思想に与えた影響については第 5 章で詳細に論じる。
9. 親称としての “thee” の初出は、早世した親友ファニー・ブラッドの弟ジョージ・ブラッド (George Blood, 1760-1840) 宛ての手紙に見られる (L 69)。親友の弟に対する親愛の情が窺える。また、ゴドウィンに対しては、同僚関係のうち “you” を用いているが、恋愛関係が始まると “thee” の使用が増える (L 351, 365, 374, 375, 377)。ただし、妊娠発覚後は、結婚を経て出産に至るまで “thee” は見当たらない。なお、ウルストンクラフトの私的書簡には、神への呼びかけや聖書からの引用としての “thee” や “thy” も散見される (L 103, 173)。このほかに、抽象概念としての「天賦の才 (genius)」に対して “thee” と呼びかける箇所もある (L

125)。

10. ウルストンクラフトは生涯にわたってルソーの思想に両義的な思いを抱いていたが、彼の『告白』や『孤独な散歩者の夢想』における文学的な自己表象には強く心を惹かれていた。詳細は第5章で論じる。
11. ゴドウィンが回想録や遺稿集の編集により、ウルストンクラフトを「感受性の女性」に仕立て上げていく経緯及びその問題点については、Myers, “Godwin’s *Memoirs of Wollstonecraft*” 299-316; Barker-Benfield 368-95; Rajan 511-31 を参照。
12. もちろん、日記にも特定の相手を念頭において綴られたものは存在する。もっとも有名な例はアンネ・フランク (Anne Frank, 1929-45) の『日記』(*Het Achterhuis*, 1947) であろう。彼女は隠れ家で綴り続けた日記において、次の3種類の人々に宛てて言葉を綴っている。①実在する特定の人物 (学校の友人等)、②愛読書に登場する虚構の人物、③アンネ本人が創り出した人物。ただし、彼らからの返信を期待しない、期待できないという意味において、これらの日記はダイアローグの一部をなすことができず、究極的にはモノローグであると考えられよう。
13. 図1はウルストンクラフトの長女ファニーの自筆書簡 (1816年5月29日付)。ジュネーヴ滞在中の異父妹メアリと彼女の恋人パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) 宛てにロンドンから郵送されたもの。オックスフォード大学ボドリアン図書館蔵。トッド著、平倉訳、『死と乙女たち』口絵1参照。
14. このデンマーク首相宛て書簡はリンダル・ゴードン (Lyndall Gordon) の『メアリ・ウルストンクラフト—新たな種族』(*Mary Wollstonecraft: A New Genus*) に初めて掲載され (Lyndall Gordon 271-73)、『北欧からの手紙』オックスフォード版に再掲された (*Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*, edited by Tone Brekke and Jon Mee, Oxford UP, 2009, 137-39)。
15. なお、“Right Honourable”は伯爵以下の貴族の子息やロンドン市長等への敬称である。貴族 (Lord) ではないバークに「閣下」という訳語を用いることについては賛否両論あろうが、本論文では『人間の権利の擁護』邦訳 (清水・後藤・梅垣 2020) に倣い、「閣下」と訳出する。
16. 母親の無知に由来する慣習的な育児法への批判は、『女性の権利の擁護』第13章第5節、及び『北欧からの手紙』に既に顕著である (*W* 5: 261-63, *W* 6: 257-58)。



## 第2章

17. ウルストンクラフトはイングランド北部ヨークシャーで過ごした少女期に、オリヴァー・ゴールドスミス (Oliver Goldsmith, 1728-74) の書簡体小説『世界市民—中国人からの手紙』(*The Citizen of the World; or, Letters from a Chinese philosopher residing in London to his friends in the East*, 1762) を親友ジェイン・アーデン (Jane Arden, 1758-1840) に薦めている (L 16)。また、ロンドンで文章修行を積んでいる時期には、オランダ語から英訳された書簡体小説を縮めて新しく構成し、『若きグランディスン』(*Young Grandison. A Series of Letters from Young Persons to Their Friends. Translated from the Dutch of Madame de Cambon. With Alterations and Improvements*, 1790) として出版し (W 2: 212; Godwin, *Memoirs* 68)、ジョンソンの創刊した『分析的評論』でも頻繁に書簡体小説の書評を手がけている。
18. ジャコバン小説にはこの他、エリザベス・インチボールド (Elizabeth Inchbald, 1753-1821) の『単純なお話』(*A Simple Story*, 1791)、トマス・ホルクロフト (Thomas Holcroft, 1745-1809) の『アナ・セント・アイヴズ』(*Anna St. Ives*, 1792)、ゴドウィンの『ケイレブ・ウィリアムズ』等が挙げられる。なお、“Jacobin” とは歴史的にフランス革命以降に用いられる語だが、ロバート・ベイジ (Robert Bage, 1728-1801) の『美しきシリア女』(*The Fair Syrian*, 1787) など、1789 年以前の作品も内容的にジャコバン小説に含める研究者もいる (Kelly, *The English Jacobin Novel* 20-63)。ウルストンクラフトは上記 4 作品をすべて読んでいる (W 7: 369-70, 439-41; L 399, 422, n. 912, 431)。
19. この時期に保守反動の立場から書かれたのが反ジャコバン小説 (Anti-Jacobin novel) と呼ばれるジャンルである (Grenby 2001)。ウルストンクラフトは死後、ゴドウィンによる遺稿集に収められたイムレイ宛ての情熱的な手紙と急進的な『マライア』草稿、及び同年に出版された赤裸々な回想録が災いして、反体制・非道徳性の権化に祭り上げられ、反ジャコバン小説にきわめて否定的に描かれた。例えば、アミーリア・オピー (Amelia Opie, 1769-1853) の『アデライン・モウブレイ』(*Adeline Mowbray; or, The Mother and Daughter*, 1804) では、結婚せずに恋愛を貫こうとするヒロイン (ウルストンクラフトをモデルとした人物) が使用人に “kept miss” “kept lady” と呼ばれ、屈辱を味わう様子が描かれている。
20. この戯画の正式名称は “NEW MORALITY; - or - The promis'd Installment of the High-Priest of the THEOPHILANTHROPEs, with the Homage of Leviathan and his

Suite”である。1798年8月1日、『反ジャコバン評論』(*Anti-Jacobin Magazine and Review*)誌に掲載された。

21. “Epistolarity”という語は、2022年3月現在、未だ *OED* に収められていないが、近年では書名 (Bower, *Epistolarity and World Literature, 1980-2010*) や学会のテーマ (“Philosophical Letters: A Conference on Philosophy and Epistolarity,” University of Manchester, 2018) に用いられるなど、文学・思想研究において一定の市民権を得た感がある。本論文では「書簡性」という訳語を用いる。
22. なお、手紙に特有な言語表現のことを、アルトマンは「書簡体の語り (epistolary narrative)」「手紙の言語 (letter language)」(117)、「手紙の語り (letter narrative)」(118)と様々に表現しているが、本論文では便宜上、「書簡体の語り」という日本語に統一して議論を進めることにする。ただし、『書簡性』の第4章のタイトルともなっている “epistolary discourse” に関しては、それが書き言葉に留まらないことから、「書簡体言説」と表記する。
23. 書簡体小説は、手紙を書く人物が何人登場するかによって3つの分類が可能になる。書簡体小説に関する優れた論考を書いたジャン・ルーセ (Jean Rousset) は音楽用語を借用し、1人の書き手が1人の相手に手紙を書いている場合は一声／独唱型、2人の人物が手紙を交換する場合は二声／二重唱型、3人以上の人物が入り乱れて手紙を送り合う場合は多声／合唱型と名付けている (Rousset 76-88; 中川 337-38)。
24. 同様の指摘は時実早苗 (2008) にも見られる (30-31)。なお、同書ではカウフマンの “amorous epistolary discourse” を「愛の書簡の言説」(時実 30) としているが、この文脈における “amorous” の定義として適切と考えられるのは “Of, relating to, or characterized by love (now esp. sexual love or desire); involving or characteristic of love or desire” (*OED*) である。カウフマンが分析対象としている「女性の恋文」にも「性愛」「欲望」を想起させる言葉が並ぶ。精神性を含む「愛 (の書簡)」と、それを含まないと考えられる「性愛 (の書簡)」の接点として、本論文では「恋愛 (の書簡)」という訳語を用いる。
25. なお、シャーロット・ブロンテ及びアン・ブロンテ (Anne Brontë, 1820-49) は、それぞれ『教授』(*The Professor*, 1857) 及び『ワイルドフェル・ホールの住人』(*The Tenant of Wildfell Hall*, 1848) において男性の語り手が男性に宛てた書簡形式を採っている (Gilbert and Gubar 317-20)。

### 第3章

26. 『人間の権利の擁護』初版は1790年11月末、第2版は同年12月中旬に出版されたが、具体的な出版日に関しては、研究者によって意見が異なる。以下、代表的な説を列挙すると、①初版11月27日、第2版12月18日(Deborah Kennedy 75)、②初版11月29日、第2版12月18日(Bruyn 164)、③初版11月24～27日、第2版12月14～16日(Botting, “From Revolutionary Paris” 5)である。いずれの説を採用するにせよ、本章で検証する戯画が公表された1790年12月1日は、『人間の権利の擁護』初版と第2版の間に相当することはほぼ確実といえよう。
27. なお、この種の反論を小説という形で最初に行った女性作家はシャーロット・ミスである。彼女は1792年出版の書簡体小説『デズモンド』において、同名の主人公にバークの『フランス革命の省察』を批判させている(Charlotte Smith 182-84, 360-61)。
28. “Lettre de cachet” とは、君主の封印(フランス語の“cachet”は英語の“royal seal”の意)が付いた手紙、すなわち拘禁令状であり、手紙の宛先・受取人を無裁判で投獄・監禁することができた。ウィリアムズは『フランスからの手紙』第1巻の中で“lettre de cachet”に翻弄されるデュ・フォセ夫妻の人生を情感豊かに描き、旧体制の暴政を浮き彫りにしている(Williams, *Letters Written in France* 115-39; Beebee 157-59)。
29. マノン・ロランが獄中で綴った2部構成の手記(革命史覚書と自らの少女時代の回想)は、『ロラン夫人回想録』(*Mémoires de Madame Roland*, 1795)として死後出版された(Walker 403)。彼女は逮捕直後にまず「革命史覚書」を書き始め、その後、友人に託した手記の一部が消失したことを知り、それを契機として「肖像と逸話」、及び自伝である「私的回想録」を書いたという経緯がある(中里 39)。しかしながら、19世紀にはルソー流の自伝作家としての面が強調され、私的回想録のみを収めた版も散見された。年代記作家としてのマノン・ロランを正當に評価しようとする動きが出てくるのは20世紀半ばである。なお、彼女はウルストンクラフト、ウィリアムズの友人でもあった。
30. バークの偏見や虚構性に関しては第4章で詳説する。なお、彼の変節ぶりとは、アメリカ独立(革命)を擁護した彼が、フランス革命を徹底的に批判したことを指す。この、いわゆる「バーク(のコンシステンシー)問題」、すなわち、アメリカ革命を擁護した(前期の)バークとフランス革命を批判した(後期の)バー

クとの間に思想上の変節があったのか否かという問題に関しては、バークにおける「革命」概念の解釈に焦点を合わせた中澤 (2000) を参照。バークにとっては、旧来の「復古的な回転運動」としての革命 (アメリカ)こそが真の革命であり、「旧秩序から新秩序への根本的・原理的な変革」たる近代的革命 (フランス)は偽の革命であると分析している (中澤 346)。

31. なお、ごく最近になって、ウルストンクラフトに先立つ反論、John Scott, *Letters to the Right Hon. Edmund Burke* (11-13 November 1790) の存在も指摘されている (Botting, “From Revolutionary Paris” 17)。また、ウルストンクラフトに続くバークへの反論のうち、ジョゼフ・プリーストリ (Joseph Priestley, 1733-1804) の『バーク閣下宛て書簡』 (*Letters to the Right Honourable Edmund Burke*, 1791) はバークに “you” と呼びかける 13 通の手紙からなる。一方、ジェイムズ・マッキントッシュ (James Mackintosh, 1765-1832) の『フランスの擁護』 (*Vindiciae Gallicae: A Defence of the French Revolution and its English Admirers*, 1791)、及びトマス・ペイン (Thomas Paine, 1737-1809) の『人間の権利』第 1 部 (*The Rights of Man: Being an Answer to Mr. Burke's Attack on the French Revolution*, 1791) は三人称の語りを採用し、「バーク氏」の言動を浮き彫りにする形で反論を展開している。
32. この戯画は 1790 年 12 月 1 日、William Holland によってロンドンで出版された (Deborah Kennedy 228, n. 77)。大英博物館蔵。
33. なお、第 1 章第 2 節で言及したジョン・エイキンとは同名の息子であり、アナ・レティシア・バーボールドの弟にあたる。このジョンは父のアカデミーで教育を受けた後、医学を修め、著述業にも携わり、姉との共著『家族の夕べ』 (*Evenings at Home*, 1792-96) を出版している (Barbauld 290)。理性的非国教徒 (Rational Dissent) とエイキン・バーボールド家の詳細に関しては James and Inkster (2011) を参照。
34. 同時代の書評子は “(author’s) abilities certainly command respect; his conceptions are strong, and his language, in general, elegant and nervous. I could only wish that his sentiments were more moderate, and his charity less confined.” (Barbauld 262) と書いている。著者が女性と知ったこの書評子は「懸念を伴う驚愕 (infinite surprize [sic], not unmixed with concern)」 (Barbauld 262) を覚えた。バーボールドは審査法廃止論争 (repeal debate) に加わった唯一の女性と考えられている。彼女はこの公開書簡を契機として政治的な著述活動を本格化させ、黒人奴隷貿易廃止法案に関する書簡詩「ウィリアム・ウィルバーフォースへの書簡」 (“Epistle to William

- Wilberforce,” 1791) 等を書くことになる。
35. なお、最初の夫を早くに亡くしたマコーリは 1778 年、47 歳で再婚するが、相手の男性が 26 歳も年下であったため、世間のゴシップの的となった (Guest, *Small Change* 195-219)。
  36. なお、マコーリは『イングランド史』を共和主義的な観点から書いているのであり、ジェンダー (の問題) は主眼ではなかったという点は留意すべきであろう (Wiseman 195)。『教育に関する書簡』も、基本的には同様の観点から書かれている。『イングランド史』の著者を「男性的 (masculine)」と形容するウルストンクラフトは、マコーリが受けた古典教育や、歴史書というジャンルも含めてこの語を用いていると考えられる。
  37. 戯画に描かれたウィリアムズの台詞に見られる “shivering lances” という一節は、『フランスからの手紙』第 1 巻結論部の “It is not my intention to shiver lances, in every society I enter, in the cause of the National Assembly” (Williams, *Letters Written in France* 148) からの引用である (Deborah Kennedy 73)。
  38. 『フランスからの手紙』第 3 巻及び第 4 巻 (1793) はルイ 16 世の処刑を嘆き、ロベスピエールを批判する内容だったため、匿名で出版された。なお、これらの巻にはウィリアムズの生涯のパートナーであったジョン・ハーフォード・ストーン (John Hurford Stone, 1763-1818)、及び友人トマス・クリスティ (Thomas Christie, 1761-96) が執筆した手紙も収められている (Deborah Kennedy 97-98)。
  39. ウルストンクラフトは後にゴドウィン宛ての私的書簡で、他者の著作から得た情報に基づいて書く人々に対し、「私自身 (my own)」の感覚や想像力を重視する姿勢を打ち出している (L 358)。
  40. ウルストンクラフトは著者名を明記した『人間の権利の擁護』第 2 版をマコーリに献呈し、「花を欲しがだけの普通の女性」ではなく、「月桂冠を求める」マコーリに賛辞を捧げている (L 185; 梅垣、『女性の権利を擁護する』178-89)。粗削りながら、生命力あふれるウルストンクラフトの著作に感銘を受けたマコーリは、「女性の持つ力と才能についての私の意見を、貴女がさっそく証明してくださった」と返事を認め、上梓したばかりの自らのバーク反論『スタノップ伯爵宛て書簡』を添えて、ウルストンクラフトに送っている (L 186, n. 416)。

#### 第4章

41. 中流階級出身のウルストンクラフトが受けた教育は、当時の女性としては一般的なものであった。9歳から15歳まではヨークシャーで通学制の女子校（a local day-school for girls）に通っている。18世紀に急増したこの種の学校は、中流階級の少女を「職業人の妻」に仕立てることを目的としており、主な科目はフランス語の基礎、裁縫や刺繍、音楽、舞踊、作文であった（Todd, *Revolutionary Life* 11-12）。彼女はこの時期、学友の父親からも個人的に教育を受けている。引っ越し先のロンドンでは隣人の牧師夫妻から読書の手ほどきを受けた。
42. 『実生活実話集』は実話と銘打った創作物語である。ルソーの『エミール』（*Émile; ou, de L'Éducation*, 1762）における少年エミールと（神の如く）遍在する教師の関係が、2人の少女と母親代わりの教育者メイスン夫人の関係に発展的に継承されている。「知識は段階的に、教示（teaching）より事例（example）を通じて与えられるべき」（W4: 359）という主張が、「虚構の挿話と想像上の会話」（Ferguson 248）という枠組みによって可能になったといえる。
43. 二人称小説においては、語り手が二人称（英: you, 仏: vous, tu, 伊: Lei, tu, 西: usted, tú, 独: Sie, du）の視点を用いて物語を綴る。ビュトール（Butor 1957）及びカルヴィーノ（Calvino 1979）を参照。
44. 『人間の権利の擁護』邦訳（清水・後藤・梅垣 2020）では「地盤」（73）となっているが、ここでは「昔から抱いている確固たる立場」の意であると考えられる。
45. イギリス国教会は煉獄の存在を認めておらず、ゆえにカトリック煉獄を真剣に扱う作品は冒瀆罪に抵触する恐れがあった。しかしながら、『ハムレット』の亡霊は、当時隆盛を極めていた復讐悲劇（revenge tragedy）の枠組みで捉えれば、（キリスト教以前の）「古典的伝統に由来するセネカ流の亡霊（Senecan ghost coming from the Classical tradition）」と解釈し得るため、シェイクスピアは難を逃れることができたと考えられる（Masai, et al. 2017）。
46. バークは「イギリス植民帝国の被抑圧者アイルランドの半カトリック家族出身者」（半澤 397）であり、イギリスではアウトサイダーとしての面を持っていた。彼は『省察』において国教会を基盤とする伝統体制を賛美する傍ら、フランスのカトリック教会及び聖職者の擁護に過剰ともいえるほどの頁を割いたため、「隠れカトリック（crypto-Catholic）」（Mitchell ix）という噂の真実性を自ら暴露しかねないほどだったのである。

47. 例えば、1789年10月6日に暴徒がヴェルサイユ宮殿に乱入した事件をバークは想像によって劇的に描き出している。「この眠りからまず王妃が、扉を固める衛兵の声にはっと眼を醒まされました。彼は王妃に対してここを逃れて身をお助け下さいと絶叫しました。そしてこの叫びは彼が捧げ得た忠誠の最後の証でした。人々が彼に襲いかかり、彼は死にました。瞬時に斬り倒されたのです。彼の血煙を浴びた残忍な凶漢と暗殺者の一団は王妃の寝室に突入し、銃剣で寝台を滅多突きにしました。この迫害された女性は辛うじてその直前、そこから、身に纏うものとして殆どなく、人殺し共には知られていない通路を通って、国王にして夫君なる人の足下に助けを求め逃げ去ったのです」(Burke, *Reflections* 71)。このような感傷性・虚構性に満ちたバークの語りには、保守派からも批判の声が上がった。
48. ウルストンクラフトによれば、ヨーロッパに起こった文明は「不完全 (partial)」な状態にあり、「道徳を犠牲にして習俗・礼儀 (manners) を洗練させている」(W 5: 10)。望まれるのは、この文明がさらに発展し、道徳と習俗(礼儀を含む)が両立する社会を創り上げることである。ウルストンクラフトはこの問題を『女性の権利の擁護』及び『フランス革命論』でも考察している(平倉, 『『不完全な文明化』の先に』 2019)。
49. なお、『北欧からの手紙』及び『マライア』でウルストンクラフトは女性と感受性の関係をより深く思索している。詳細は第5章及び第6章で論じる。
50. バークは文通相手のフランス人への助言という形をとりつつ、イギリス国内の急進主義者に向けて、祖先伝来の経験や徳に従い、伝統的秩序を敬い、有機的な国制を維持することが正しき道であると説く。逆に「人間の権利」という「形而上学的御神託 (metaphysic declarations)」がもたらす成果は有機的な国制の破壊であり、植民地人 (colonies) や黒人 (negroes) の反乱であり、それは「軍隊の手で抑えなければならない」と断言する (Burke, *Reflections* 223)。これに対し、ウルストンクラフトは、『省察』以前のバークの政治的言動(アメリカ独立擁護)に言及しつつ、彼の「まことしやかな議論の趣旨全体が、奴隷制を永続的基礎の上に据えてしまう」とその矛盾を問い詰めている (W 5: 14)。
51. 邦訳(清水・後藤・梅垣 2020)では“tender endeavour”が「優しい努力」(111)となっているが、この“tender”には旧約聖書の“tender mercies”の響きが感じられる。“A righteous man regardeth the life of his beast: but the tender mercies of the wicked are cruel” (Prov. 12: 10)。ウルストンクラフトの“tender endeavour”にも

「相手のためにはならない」というニュアンスが含まれていると考えられるため、本論文では「やわな努力」と訳出する。

## 第5章

52. なお、ウルストンクラフト以前にもイギリス人による北欧旅行記は存在した。例えば、ウィリアム・コックス (William Coxe, 1748-1828) の『ポーランド、ロシア、スウェーデン、デンマーク旅行記』(*Travels into Poland, Russia, Sweden, and Denmark*, 1784) は1795年には4版を重ねており、ウルストンクラフトも『北欧からの手紙』でコックスに言及している (*W* 6: 304)。もっとも、彼の旅行記が北欧社会の観察・報告に留まるのに対し、ウルストンクラフトの旅行記は熱烈な語り口で「さまざまな事柄が心や感情に与えた印象を感動が鮮明なうちに伝えること」(*W* 6: 241) を特徴としている (Nyström 33-34; Perkins 302)。
53. 図4に示した北欧の地図は Ryall and Sandbach-Dahlström, *Mary Wollstonecraft's Journey to Scandinavia* (2003) より転載。
54. ベアンストーフ伯爵は当時デンマーク外相だったが、摂政王太子 (後のフレゼリク6世) の下で事実上首相の役割を果たしていた。なお、14世紀以来、ウルストンクラフトが旅をした1795年当時を含め、ノルウェーの王はカルマル連合の名のもとにデンマーク王が兼ねていた。ウルストンクラフトは『北欧からの手紙』において、ノルウェーをデンマークの「姉妹王国 (sister kingdom)」(*W* 6: 272) と呼んでいる。
55. ニュージャージー州出身のイムレイはケンタッキー州の土地投機ビジネスに従事した後、借金の山を残し、法廷への召喚状を無視してアメリカを去っていた (Todd, *Death and the Maidens* 6-7)。
56. もっとも、イムレイが生まれ育ったアメリカ社会においては商業を通じて富と権力を手に入れることが「男らしい (manly)」営みとして称賛されていたのに対し、ウルストンクラフト家が属していたイギリス階級社会においては「商業に従事する (in trade)」人々やその生業がもたらす財産 (新しい金) は一段低く見られていた (Lyndall Gordon 218)。ウルストンクラフトは晩年に至っても「商人との取引という不愉快な仕事」(*L* 407) に言及している。
57. なお、18世紀イギリスの商業文化が「男性的な女性 (masculine women)」と「女性的な／女々しい男性 (effeminate men)」という、既存のジェンダー区分を脅か



す存在を生み出す経緯、及びそれに対する社会の警戒に関しては Guest, *Small Change* 21-48 を参照。

58. ウルストンクラフトがイムレイに宛てた手紙（私的書簡）に、ゴドウィン是一部削除等の編集を施して感傷的で情熱的な書簡を創り上げ、「ゲーテの創作より秀でていと認められよう」（*W* 6: 367）と自画自賛した。18世紀ヨーロッパで一世を風靡したゲーテの書簡体小説『若きウェルテルの悩み』に比すべき文学性を、ウルストンクラフトの恋愛書簡に付与しようとしたのである（Favret, *Romantic Correspondence* 130-31）。
59. ヘイズが自らの手紙（私的書簡）を『エマ・コートニーの回想』に転用する経緯に関しては、梅垣「女性のための歴史とフィクション」125-35を参照。
60. マライアは一種のアイコンとしてもはやされ、彼女を主人公にした続編小説（スピンオフ作品）が多数書かれた。また、彼女は著名な画家ジョゼフ・ライト（Joseph Wright, 1734-97）やアンゲリカ・カウフマン（Angelica Kauffmann, 1741-1807）によって肖像画が描かれ、オペラの主題にもなったという（Sterne, *Sentimental Journey* 133, n. 91）。
61. “Écriture féminine”（女性的エクリチュール）という概念を提唱したエレーヌ・シクスー（Hélène Cixous）は、「抑圧されているものの側から世界の変革を唱えるという立場にたって、男女の性差を強調するという考え方」（松本 359）を明確に打ち出した。彼女は『メデューサの笑い』（*Le rire de la Méduse*, 1975）において、女性たちに自ら（の性）を見つめ、それを書くよう促している。「あなたを書きなさい。あなたの身体の声が聞かれねばならないのです」（Cixous 45）、「女性は自分の肉体によって書かねばならないし、階級や修辞学、勅令や法規といった仕切りに穴をあけるような、難攻不落の言語を創出しなければなりません」（Cixous 55）。なお、女性的エクリチュールとは、上記のような「女性のエクリチュール」だけでなく、男女両性のうちに見出される女性性に基盤を置いたエクリチュールという意味で使われることもあり、定義に曖昧さが内在する。本章では、女性的エクリチュールが女性のみ可能なのではなく、「あらゆる人の内にある女性性に裏打ちされたエクリチュールのことであり、またそれゆえ、男性性と女性性の両方を内に持つ両性具有者である男性と女性の双方によって実践可能なエクリチュール」（松本 368）でもあることを確認するに留める。
62. クリスチャン7世の精神状態に関しては次のような諸説があるが、ここでは日本

語文献の表現に倣うこととする。“mental illness” (Brekke and Mee xx); “mad” (Jacobus 74); “mentally unstable” (Jespersen 57); “unbalanced and sadistic” (Todd, Introduction, *Mary, Maria, Matilda* xix); “mentally retarded” (*W* 6: 321, n. a); 「精神分裂症的な症状」(橋本 120)。

63. 北欧史において、啓蒙主義者ストルーエンセの改革は高く評価できるものの、あまりにも時期尚早だったとするウルストンクラフトの立場に近いものとしては、Jespersen 57-58 を参照。
64. シクスーは『メデューサの笑い』において、女性的エクリチュールと母乳の関係を次のように表している。「女性の中には常に、少なくとも少量の良質の〈母の乳〉(lait-de-mère)が残っています。女性は白いインクで書くのです」(Cixous 48)。なお、フランス革命期のイギリスやフランスでは、乳母による授乳が批判されるようになっていた。ルソーは母乳が子どもによいと主張しており、ウルストンクラフトも、母乳育児をしないことは母親の健康によくないという趣旨の本に好意的な書評を寄せている (*L* 254, n. 599)。
65. 『北欧からの手紙』の愛読者だったパーシー・ビッシュ・シェリーは、後に 22 歳で自ら命を絶ったファニーを悼み、幼い頃の彼女が母ウルストンクラフトによって愛情深く描写されているこの箇所を自らの詩作品に投影させている (Todd, *Death and the Maidens* 254-55)。
66. 例えば、サミュエル・テイラー・コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) は短詩「郷愁—ドイツにて」(“Home-Sick. Written in Germany,”1799) において、異国に暮らす人間が母国に対して覚える、身を切られるような痛みを“pang”と表現している。

## 第 6 章

67. 第 1 章第 1 節で言及した通り、『マライア』執筆時のウルストンクラフトの目の前には 3 歳の娘ファニーがおり、お腹の中には後にメアリ・シェリーとなる胎児がいた。「これまでどんな小説家も、感傷的な苦難 (sentimental distress) の 1 つとしてあえて言及しようとしたことのない、優美ならざる体調不良 (inelegant complaint)」(*L* 393-94)、すなわち妊娠初期の辛さに耐えつつ、ウルストンクラフトは『マライア』を書き進めるが、出産後まもなく命を落とす。未完のまま遺された『マライア』はゴドウィンによって編集出版される。

68. 当時、ウルストンクラフトは主な収入源だったニューイントン・グリーンを閉鎖したことで、経済的に逼迫していた。友人の勧めで書いた『娘達の教育に関する考察』の原稿料 10 ギニーを、彼女は亡き親友ファニー・ブラッドの貧しい家族に与えている (Todd, *Revolutionary Life* 75; L 68, n. 154)。
69. 〈娘への手紙〉という形式は採らなくとも、社会的規範を逸脱した母の人生(罪)が娘の教育として機能する物語はこの時代に多く書かれている。代表的な作品としては、インチボールドの『単純なお話』が挙げられよう。ウルストンクラフトは同作品に書評を寄せた際、著者が「よい教育の利点を示す」という「きわめて有益な道徳」を念頭に置いていたにもかかわらず、虚栄心の強い母と思慮深い娘の対比が不十分であることが遺憾であり、優れた女性作家たちが「女性を組織的に弱体化する男性の偏見の強化によって自分たち自身の知性を毒している」現状に警鐘を鳴らしている (W 7: 370)。
70. 『コケット』はアメリカ生まれの女性がアメリカで発表した最初のベストセラー小説である (Davidson 156)。ヒロインのエライザ・ウォートンは有徳な婚約者を退けて放蕩者と恋愛関係を結び、未婚の身で妊娠し、家族や友人から離れ、宿屋にこもって出産と死を迎える。同時代の実在の女性エリザベス・ホイットマン (Elizabeth Whitman, 1752-88) をモデルとしたこの書簡体小説は、共和国における女性の役割に関する論争に重要な声を提供した (Davidson 186-87)。
71. ウルストンクラフトは『実生活実話集』で既に、精神科病院 (mad-house) に監禁された若い妻の挿話を紹介している。ただし、それは「貧困に立ち向かう勇気を持たなかった」ために裕福な「放蕩老人」と結婚した若い娘が、夫の悪徳と「不機嫌」によって精神科病院に閉じ込められるケースであり、財産横領には相当しない (W 4: 405)。なお、この種の監禁は『マライア』においても「愛らしい狂人」 (W 1: 95) という登場人物に体现されている。
72. 『マライア』にラディカル・フェミニズムの萌芽が見られるという認識は広く共有されており、特に中流階級のマライアと労働者階級のジェマイマの友情・連帯というプロットは早くから注目を集めてきた (川津 249-52)。女性という性階級を抑圧する社会構造の在り方に疑問を突き付けることがラディカル・フェミニズムの根本精神であるとするれば、中流階級と労働者階級の女性が男性による救済を望まず、女性だけのコミュニティを目指すというプロットが注目を集めることも頷ける。もっとも、女性だけの共同体をテーマに据えた小説には、たとえそれが

男性社会の犠牲者が結束したものという設定ではないにしても、サラ・スコット (Sarah Scott, 1723-95) の『ミレニアム・ホール』(Millenium Hall, 1762) のような前例もある。スコットは「ブルーストッキングの女王」(Todd, Introduction, *Female Education* xvi) と呼ばれた著述家エリザベス・モンタギュ (Elizabeth Montagu, 1718-1800) の実妹であり、自身も夫との別居後、文筆に手を染め、6冊の小説をすべて匿名で出版した。『ミレニアム・ホール』は上流階級の独身女性が共同体を作り、地域の人々の生活向上のために尽力するユートピア慈善物語である。男性の語り手が旅行中にある女性共同体に遭遇し、そこで観察したことを知人に書き送るという書簡体旅行記／回想録の体裁を採っている。女性による男性の教育というテーマを含んでいるが、慣習的なコンダクト文学の枠組みで性差別的な美徳が語られるに留まっている (Spencer xi-xv)。

## 結論

73. 例えば、19世紀フランスの女性作家ジョルジュ・サンド (George Sand, 本名 Amantine Lucile Aurore Dupin, 1804-76) は、自らを語り手とする旅行記の中で “je” の後にあえて男性性を示す名詞や形容詞を用いたり、それが行き過ぎと感じられた場合、一人称複数形 “nous” を用いて「人間」を示そうと試みたりしている (Harkness, et al. 2020)。このような明示的なジェンダー的特性を英語の一人称の語りに見出すことは、少なくとも文法上は不可能といえるだろう。
74. 『マチルダ』の草稿には当初、「夢幻の野」(“The Field of Fancy”) という題がつけられていた。これは明らかに、ウルストンクラフトの未完の物語「夢幻の洞窟」(“The Cave of Fancy,” 1798) を意識したものであり、両者は「人生の教えが非現実的な空間で描かれるという枠組み」を共有している (木村 216)
75. 文学作品における発信者 (sender) と受信者 (receiver)、及び発話者 (addresser) と受話者 (addressee) の関係については Widdowson 47-70 を参照。なお、書簡体小説の基本的な枠組みは、発信者が受信者に向けて紡ぐ物語の中に、発話者と受話者が存在する。『フランケンシュタイン』は、外枠を構成する「ウォルトンからマーガレットへの手紙」に対し、「マーガレットからウォルトンへの手紙」が存在しないため、一声／独唱型の書簡体小説と考えられる。このような場合、受話者は限りなく受信者に近い存在となるといえよう。

## 引用文献 (Works Cited)

### 一次文献 (Primary Works)

Aikin, John, and Anna Letitia Barbauld. *Evenings at Home; or, The Juvenile Budget Opened.*

1792-96. 6 vols.

*Analytical Review.*

*Anti-Jacobin Magazine and Review.*

Bage, Robert. *The Fair Syrian, A Novel.* 1787.

Barbauld, Anna Letitia. *Selected Poetry and Prose.* Edited by William McCarthy and Elizabeth Kraft, Broadview Press, 2002.

Barreño, Maria Isabel, Maria Teresa Horta, and Maria Velho da Costa. *Novas Cartas Portuguesas.* 1972. Translated by Helen R. Lane, Doubleday, 1975.

Bellow, Saul. *Herzog.* 1964. With an Introduction by Malcolm Bradbury, Penguin, 2007.

[ベロウ, ソール 『ハーツォグ』 宇野利泰訳, ハヤカワ文庫, 1981年]

*The Bible.* King James Version. American Bible Society, 1993.

Brontë, Anne. *The Tenant of Wildfell Hall.* 1848. Edited by Herbert Rosengarten, Oxford UP,

2008. [ブロンテ, アン 『ワイルドフェル・ホールの住人』 山口弘恵訳, みすず書房, 『ブロンテ全集』 9巻, 1996年]

Brontë, Charlotte. *The Professor.* 1857. Edited by Margaret Smith and Herbert Rosengarten,

Oxford UP, 2008. [ブロンテ, シャーロット 『教授』 海老根宏他訳, みすず書房, 『ブロンテ全集』 1巻, 1995年]

Burke, Edmund. *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and*

*Beautiful.* 1757. Edited by Paul Guyer, Oxford UP, 2015. [バーク, エドマンド 『崇高と美の観念の起源』 中野好之訳, みすず書房, 1999年]

- . *Reflections on the Revolution in France*. 1790. Edited by Leslie Mitchell, Oxford UP, 2009. [バーク, エドマンド 『フランス革命の省察』 半澤孝麿訳, みすず書房, 1978年]
- Burney, Frances. *Evelina; or, The History of a Young Lady's Entrance into the World*. 1778. Edited by Edward A. Bloom, with an Introduction by Vivien Jones, Oxford UP, 2002.
- Butor, Michel. *La Modification*. Les éditions de minuit, 1957. [ビュトール, ミシエル 『心変わり』 清水徹訳, 岩波文庫, 2005年]
- Byron, George Gordon. *Don Juan*. 1819-24. *Complete Poetical Works*, edited by Frederick Page, Oxford UP, 1970, pp. 635-858. [バイロン, ジョージ・ゴードン 『ドン・ジュアン』 東中稜代訳, 音羽書房鶴見書店, 2021年]
- Calvino, Italo. *Se una notte d'inverno un viaggiatore*. Einaudi, 1979. [カルヴィーノ, イタロ 『冬の夜ひとりの旅人が』 脇功訳, 白水社, 2016年]
- Coleridge, Samuel Taylor. "Home-Sick. Written in Germany." 1799.
- Colman, George, the Younger. *The Iron Chest: A Play in Three Acts*. 1796. Woodstock Books, 1989.
- Coxe, William. *Travels into Poland, Russia, Sweden, and Denmark*. 1784.
- Don Dismallo Running the Literary Gantlet*. 1790. *The British Museum*, [www.britishmuseum.org/collection/object/P\\_1868-0808-5976](http://www.britishmuseum.org/collection/object/P_1868-0808-5976).
- Fenwick, Eliza. *Secresy; or, The Ruin on the Rock*. 1795. Edited by Isobel Grundy, Broadview Press, 1998.
- Fordyce, James. *Sermons to Young Women*. 1766.
- Foster, Hannah Webster. *The Coquette; or, The History of Eliza Wharton*. 1797. Edited by Cathy N. Davidson, Oxford UP, 1986. [フォスター, ハナ・ウェブスター 『コケット、あるいはエライザ・ウォートンの物語』 田辺千景訳, 松柏社, 2017年]

- Frank, Anne. *Het Achterhuis*. 1947. [www.annefrank.org/en/anne-frank/diary](http://www.annefrank.org/en/anne-frank/diary).
- Gillray, James. “NEW MORALITY; - or - The promis’d Installment of the High-Priest of the THEOPHILANTHROPES, with the Homage of Leviathan and his Suite.” 1798. *National Portrait Gallery*, [www.npg.org.uk/collections/search/portrait/mw63525](http://www.npg.org.uk/collections/search/portrait/mw63525).
- Godwin, William. *Memoirs of the Author of A Vindication of the Rights of Woman*. 1798. Edited by Pamela Clemit and Gina Luria Walker, Broadview Press, 2001. [ゴドウィン, ウィリアム 『メアリ・ウルストンクラフトの思い出』 白井厚・白井堯子訳, 未来社, 1970年]
- . *Things As They Are; or, The Adventures of Caleb Williams*. 1794. Edited by Gary Handwerk and A. A. Markley, Broadview Press, 2000. [ゴドウィン, ウィリアム 『ケイレブ・ウィリアムズ』 岡照雄訳, 白水社, 2016年]
- Goethe, Johann Wolfgang von. *Die Leiden des jungen Werthers*. 1774. [ゲーテ, ヨハン・ウォルフガング・フォン 『若きウェルテルの悩み』 竹山道雄訳, 岩波文庫, 1951年]
- Goldsmith, Oliver. *The Citizen of the World; or, Letters from a Chinese philosopher residing in London to his friends in the East*. 1762.
- Gouges, Olympe de. *Déclaration des droits de la femme et de la citoyenne*. 1791.
- Gregory, John. *A Father’s Legacy to His Daughters*. 1774.
- Guilleragues, Gabriel-Joseph de Lavergne, vicomte de. *Les lettres portugaises*. 1669.
- Hays, Mary. *Memoirs of Emma Courtney*. 1796. Edited by Marilyn L. Brooks, Broadview Press, 2000.
- Holcroft, Thomas. *Anna St Ives*. 1792. Edited by Peter Faulkner, Oxford UP, 1970.
- Imlay, Gilbert. *The Emigrants*. 1793. Edited by W. M. Verhoeven and Amanda Gilroy, Penguin, 1998.

- . *A Topographical Description of the Western Territory of North America*. 1792.
- . “Wollstonecraft’s Commission from Imlay.” *Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*, edited by Tone Brekke and Jon Mee, Oxford UP, 2009, pp. 135-36.
- Inchbald, Elizabeth. *A Simple Story*. 1791. Edited by J. M. S. Tompkins, with an Introduction by Jane Spencer, Oxford UP, 1998.
- Laclos, Choderlos de. *Les liaisons dangereuses*. 1782. Édition établie, présentée et annotée par Catriona Seth, Gallimard, 2011. [ラクロ, ピエール・ショデルロ・ド 『危険な関係』 伊吹武彦訳, 岩波文庫, 1965 年]
- Macaulay, Catharine. *History of England from the Accession of James I to That of the Brunswick Line*. 1763-83.
- . *Letters on Education. With Observations on Religious and Metaphysical Subjects*. 1790.
- . *Observations on the Reflections of the Right Hon. Edmund Burke, on the Revolution in France. In a letter to the Right Hon. Earl of Stanhope*. 1790.
- Mackintosh, James. *Vindiciae Gallicae: A Defence of the French Revolution and its English Admirers, a Reply to Edmund Burke’s Reflections on the Revolution in France*. 1791.
- Montesquieu, Charles de Secondat, baron de. *Lettres persanes*. 1721. Texte établi, avec introduction, chronologie de Montesquieu, bibliographie, notes et relevé de variantes, par Paul Vernière, Classiques Garnier, 1992. [モンテスキュー 『ペルシア人の手紙』 大岩誠訳, 岩波文庫, 1950-51 年 / 田口卓臣訳, 講談社学術文庫, 2020 年]
- Opie, Amelia. *Adeline Mowbray; or, The Mother and Daughter*. 1805. Edited by Anne McWhir, Broadview Press, 2009.
- Ovid (Publius Ovidius Naso). *Ars Amatoria*. 2 BC-AD 2.
- . *Heroides. Epistulae Heroidum*. c. 15BC-2BC. Translated by Harold Isbell, Penguin,



2004. [オウィディウス 『ヘーローイデス—女性たちのギリシア神話』 高橋宏  
幸訳, 平凡社, 2020 年]
- Paine, Thomas. *The Rights of Man: Being an Answer to Mr. Burke's Attack on the French  
Revolution*. 1791. [ペイン, トマス 『人間の権利』 西川正身訳, 岩波文庫, 1971  
年]
- Pennington, Sarah. *An Unfortunate Mother's Advice to her Absent Daughters: in a letter to  
Miss Pennington*. 1761.
- Price, Richard. *A Discourse on the Love of Our Country*. 1789.
- Priestley, Joseph. *Letters to the Right Honourable Edmund Burke, occasioned by his  
Reflections on the Revolution in France*. 1791.
- Richardson, Samuel. *Clarissa; or, The History of a Young Lady*. 1748. Edited by Angus Ross,  
Penguin, 2004. [リチャードソン, サミュエル 『クラリッサ』 渡辺洋訳, 2011 年,  
eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/html/2115/76756/clarissa.pdf]
- . *Pamela; or, Virtue Rewarded*. 1740. Edited by Thomas Keymer and Alice Wakely,  
Oxford UP, 2008. [リチャードソン, サミュエル 『パミラ、あるいは淑徳の報い』  
原田範行訳, 研究社, 2011 年]
- Robinson, Mary. *Walsingham; or, The Pupil of Nature*. 1797. Edited by Julie Shaffer,  
Broadview Press, 2003.
- Roland, Manon. *Mémoires de Madame Roland*. 1795.
- Rousseau, Jean-Jacques. *Les confessions*. 1782. [ルソー, ジャン=ジャック 『告白』 桑  
原武夫訳, 岩波文庫, 1965-66 年]
- . *Émile; ou, de L'Éducation*. 1762. [ルソー, ジャン=ジャック 『エミール』 今野  
一雄訳, 岩波文庫, 1962-64 年]
- . *Julie; ou, La Nouvelle Héloïse. Lettres de deux amants habitants d'une petite ville au*

- pie des Alpes*. 1761. Introduction, chronologie, bibliographie, notes et choix de variantes par René Pomeau, Garnier, 1988. [ルソー, ジャン=ジャック 『新エロイーズ』 安士正夫訳, 1-4 巻, 岩波文庫, 1960-61 年]
- . *Les rêveries du promeneur solitaire*. 1782. [ルソー, ジャン=ジャック 『孤独な散歩者の夢想』 今野一雄訳, 岩波文庫, 1960 年]
- Scott, Sarah. *A Description of Millenium Hall*. 1762. With an Introduction by Jane Spencer, Virago, 1986.
- Sévigné, Marie de Rabutin-Chantal, marquise de. *Lettres*. Introduction, chronologie, notes et archives de l'œuvre par Bernard Raffalli, Garnier-Flammarion, 1976. [セヴィニエ侯爵夫人マリー・ド・ラビュタン=シャンタル 『セヴィニエ夫人手紙抄』 井上究一郎訳, 岩波文庫, 1987 年]
- Shakespeare, William. *Hamlet*. 1603. Edited by G. R. Hibbard, Oxford UP, 2008. [シェイクスピア, ウィリアム 『新訳 ハムレット』 河合祥一郎訳, 角川文庫, 2003 年]
- . *King Lear*. 1608. Edited by Stanley Wells, Oxford UP, 2008. [シェイクスピア, ウィリアム 『新訳 リア王の悲劇』 河合祥一郎訳, 角川文庫, 2020 年]
- . *A Midsummer Night's Dream*. 1600. Edited by Peter Holland, Oxford UP, 1998. [シェイクスピア, ウィリアム 『新訳 夏の夜の夢』 河合祥一郎訳, 角川文庫, 2013 年]
- . *Richard III*. 1597. Edited by John Jowett, Oxford UP, 2008. [シェイクスピア, ウィリアム 『新訳 リチャード三世』 河合祥一郎訳, 角川文庫, 2007 年]
- Shelley, Mary. *Frankenstein; or, The Modern Prometheus*. 1818. Edited by D. L. Macdonald and Kathleen Scherf, Broadview Press, 2012. [シェリー, メアリ 『フランケンシュタイン』 芹澤恵訳, 新潮文庫, 2014 年]
- . *Mathilda*. 1819 (1959). Edited by Michelle Faubert, Broadview Press, 2017. [シェリー, メアリ 『マチルダ』 市川純訳, 彩流社, 2018 年]

- Smith, Adam. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. 1776. [スミス, アダム 『国富論』 高哲男訳, 講談社学術文庫, 2020年]
- Smith, Charlotte. *Desmond*. 1792. Edited by Antje Blank and Janet Todd, Broadview Press, 2001.
- Sterne, Laurence. *The Life and Opinions of Tristram Shandy*. 1759-67. Edited by Ian Campbell Ross, Oxford UP, 1984. [スターン, ロレンス 『トリストラム・シャンディ』 朱牟田夏雄訳, 岩波文庫, 1969年]
- . *A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick*. 1768. Edited by Paul Goring, Penguin, 2005. [スターン, ロレンス 『センチメンタル・ジャーニー』 松村達雄訳, 岩波文庫, 1952年]
- Williams, Helen Maria. *Julia, A Novel*. 1790. 2 vols.
- . *Letters Written in France*. 1790-96. Edited by Neil Fraistat and Susan L. Lanser, Broadview Press, 2001.
- Wollstonecraft, Mary. "The Cave of Fancy." 1798. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 1.
- . *The Collected Letters of Mary Wollstonecraft*, edited by Janet Todd, Allen Lane, 2003.
- . *The Female Reader*. 1789. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 4.
- . "Fragment of Letters on the Management of Infants." 1798. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 4.
- . *An Historical and Moral View of the Origin and Progress of the French Revolution*. 1794. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 6.
- . "Letter on the Present Character of the French Nation." 1798. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 6.
- . "Letter to the Danish Prime Minister, Count Bernstorff." 1795. *Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*, edited by Tone Brekke and Jon Mee,

Oxford UP, 2009, pp. 137-39.

- . *Letters Written during Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*. 1796. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 6. [ウルストンクラフト, メアリ 『ウルストンクラフトの北欧からの手紙』 石幡直樹訳, 法政大学出版局, 2012 年]
- . *Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*. Edited by Tone Brekke and Jon Mee, Oxford UP, 2009.
- . *Mary, A Fiction*. 1788. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 1.
- . *Mary, A Fiction and The Wrongs of Woman; or, Maria*. Edited by Michelle Faubert, Broadview Press, 2012.
- . *Original Stories from Real Life*. 1788. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 4.
- . *Thoughts on the Education of Daughters*. 1787. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 4. [ウルストンクラフト, メアリ 『娘達の教育について』 清水和子・後藤浩子・梅垣千尋訳, 京都大学学術出版会, 2020 年]
- . *A Vindication of the Rights of Men*. 1790. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 5. [ウルストンクラフト, メアリ 『人間の権利の擁護』 清水和子・後藤浩子・梅垣千尋訳, 京都大学学術出版会, 2020 年]
- . *A Vindication of the Rights of Woman*. 1792. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 5. [ウルストンクラフト, メアリ 『女性の権利の擁護—政治および道德問題の批判をこめて』 白井堯子訳, 未来社, 1980 年]
- . *The Works of Mary Wollstonecraft*, edited by Janet Todd and Marilyn Butler, Pickering and Chatto, 1989. 7 vols.
- . *The Wrongs of Woman; or, Maria*. 1798. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 1. [ウルストンクラフト, メアリ 『女性の虐待あるいはマライア』 川津雅江訳, あぽろん社, 1997 年]

---, translator. *Young Grandison. A Series of Letters from Young Persons to Their Friends.*  
*Translated from the Dutch of Madame de Cambon. With Alterations and Improvements.*  
1790. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 2.

Wordsworth, William. "Sonnet on Seeing Miss Helen Maria Williams Weep on a Tale of Distress." 1787.

## 二次文献 (Secondary Works)

Altman, Janet Gurkin. *Epistolarity: Approaches to a Form*. Ohio UP, 1982.

Bannet, Eve Tavor. *Empire of Letters: Letter Manuals and Transatlantic Correspondence, 1688-1820*. Cambridge UP, 2005.

Barker-Benfield, G. J. *The Culture of Sensibility: Sex and Society in Eighteenth-Century Britain*. U of Chicago P, 1992.

Barton, Anne. Introduction. *Hamlet*, by William Shakespeare, edited by T. J. B. Spencer, Penguin, 1980, pp. 7-54.

Beebee, Thomas O. *Epistolary Fiction in Europe 1500-1850*. Cambridge UP, 1999.

Bergès, Sandrine, and Alan Coffee, editors. *The Social and Political Philosophy of Mary Wollstonecraft*. Oxford UP, 2016.

Bergès, Sandrine, et al., editors. *The Wollstonecraftian Mind*. Routledge, 2019.

Blakemore, Steven. *Intertextual War: Edmund Burke and the French Revolution in the Writings of Mary Wollstonecraft, Thomas Paine, and James Mackintosh*. Fairleigh Dickinson UP, 1997.

Blank, Antje. Introduction. *Women's Writing*, vol. 16, no. 1, 2009, pp. 1-5.

Bohls, Elizabeth A. *Women Travel Writers and the Language of Aesthetics, 1716-1818*. Cambridge UP, 1995. [ボールズ, エリザベス・A. 『美学とジェンダー——女性の旅

行記と美の言説』 長野順子訳, ありな書房, 2004 年]

Botting, Eileen Hunt. *Family Feuds: Wollstonecraft, Burke, and Rousseau on the Transformation of the Family*. State U of New York P, 2006.

---. "From Revolutionary Paris to Nootka Sound to Saint-Domingue: The International Politics and Prejudice behind Wollstonecraft's Theory of the Rights of Humanity, 1789-91." *Journal of International Political Theory*, Dec. 2020, pp. 1-20.

---. *Wollstonecraft, Mill, and Women's Human Rights*. Yale UP, 2016.

Bower, Rachel. *Epistolarity and World Literature, 1980-2010*. Palgrave Macmillan, 2017.

Brekke, Tone, and Jon Mee. Introduction. *Letters Written during Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*, by Mary Wollstonecraft, edited by Tone Brekke and Jon Mee, Oxford UP, 2009, pp. ix-xxviii.

Brewer, John. "This, that and the other: Public, Social and Private in the Seventeenth and Eighteenth Centuries." *Shifting the Boundaries: Transformation of the Languages of Public and Private in the Eighteenth Century*, edited by Dario Castiglione and Lesley Sharpe, U of Exeter P, 1995, pp. 1-21. [ブルーア, ジョン 「これ、あれ、他者—17・18 世紀における公共、社会、私」 ジョン・ブルーア 『スキャンダルと公共圏』 近藤和彦編訳, 山川出版社, 2006 年, 37-82 頁]

Brooks, Ann. *Women, Politics and the Public Sphere*. Policy Press, 2019.

Brown, Roger, and Albert Gilman. "The Pronouns of Power and Solidarity." *Style in Language*, edited by Thomas A. Sebeok, MIT Press, 1960, pp. 253-76.

Bruyn, Frans de. "Edmund Burke." *Mary Wollstonecraft in Context*, edited by Nancy E. Johnson and Paul Keen, Cambridge UP, 2020, pp. 164-72.

Carlson, Julie A. *England's First Family of Writers: Mary Wollstonecraft, William Godwin, Mary Shelley*. Johns Hopkins UP, 2007.

- Cixous, Hélène. *Le rire de la Méduse*. 1975. *Le rire de la Méduse et autres ironies*, préface de Frédéric Regard, Galilée, 2010, pp. 35-68. [シクスー, エレーヌ 『メデューサの笑い』 松本伊瑳子・国領苑子・藤倉恵子編訳, 紀伊国屋書店, 1993年]
- Conger, Syndy McMillen. *Mary Wollstonecraft and the Language of Sensibility*. Fairleigh Dickinson UP, 1994.
- Cook, Elizabeth Heckendorn. *Epistolary Bodies: Gender and Genre in the Eighteenth-Century Republic of Letters*. Stanford UP, 1996.
- Crafton, Lisa Plummer. *Transgressive Theatricality, Romanticism, and Mary Wollstonecraft*. Routledge, 2011.
- Davidson, Cathy N. *Revolution and the Word: The Rise of the Novel in America*. Oxford UP, 2004.
- Eger, Elizabeth, et al., editors. *Women, Writing and the Public Sphere, 1700-1830*. Cambridge UP, 2001.
- Fallon, David. "Joseph Johnson." Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 29-38.
- Favret, Mary A. *Romantic Correspondence: Women, Politics and the Fiction of Letters*. Cambridge UP, 1993.
- . "Writing the French Revolution." Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 77-86.
- Ferguson, Frances. "Theories of Education." Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 246-54.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. Yale UP, 1979.
- Gilroy, Amanda, and W. M. Verhoeven, editors. *Epistolary Histories: Letters, Fiction*,

- Culture*. UP of Virginia, 2000.
- Goodman, Dena. *Becoming A Woman in the Age of Letters*. Cornell UP, 2009.
- . *The Republic of Letters: A Cultural History of the French Enlightenment*. Cornell UP, 1994.
- Gordon, Charlotte. *Romantic Outlaws: Extraordinary Lives of Mary Wollstonecraft and Mary Shelley*. Hutchinson, 2015.
- Gordon, Lyndall. *Mary Wollstonecraft: A New Genus*. Little, Brown, 2005.
- Goring, Paul. Introduction. *A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick*, by Laurence Sterne, edited by Paul Goring, Penguin, 2005, pp. xi-xxxii.
- Grenby, M. O. *The Anti-Jacobin Novel: British Conservatism and the French Revolution*. Cambridge UP, 2001.
- Guest, Harriet. *Small Change: Women, Learning, Patriotism, 1750-1810*. U of Chicago P, 2000.
- . *Unbounded Attachment: Sentiment and Politics in the Age of the French Revolution*. Oxford UP, 2013.
- Gunther-Canada, Wendy. *Rebel Writer: Mary Wollstonecraft and Enlightenment Politics*. Northern Illinois UP, 2001.
- Habermas, Jürgen. *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*. 1962. Translated by Thomas Burger with the assistance of Frederick Lawrence, MIT Press, 1989. [ハーバーマス, ユルゲン 『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究』 細谷貞雄・山田正行訳, 未来社, 第2版, 1994年]
- Halldenius, Lena. *Mary Wollstonecraft and Feminist Republicanism: Independence, Rights and the Experience of Unfreedom*. Pickering and Chatto, 2015.



- Hanley, Kirstin. *Mary Wollstonecraft, Pedagogy, and the Practice of Feminism*. Routledge, 2018.
- Harkness, Nigel, et al., speakers. "George Sand." *In Our Time*, BBC, 6 Feb. 2020, [www.bbc.co.uk/programmes/m000dxsr](http://www.bbc.co.uk/programmes/m000dxsr).
- Heydt, Colin. *Moral Philosophy in Eighteenth-Century Britain: God, Self, and Other*. Cambridge UP, 2017.
- Hirakura, Natsuko. (平倉菜摘子) "From 'I' to 'You': Wollstonecraft's Self Dramatisation in *Letters from Sweden*." *Essays in English Romanticism*, vol. 31, 2007, pp. 1-10.
- . "The Portrait of a Family: Wollstonecraft's *Letters from Sweden*." *Romantic Explorations: Selected Papers from the Koblenz Conference of the German Society for English Romanticism*, edited by Michael Meyer, Wissenschaftlicher Verlag Trier, 2011, pp. 229-38.
- Hodson, Jane. *Language and Revolution in Burke, Wollstonecraft, Paine, and Godwin*. Ashgate, 2007.
- Holmes, Richard. Introduction. *A Short Residence in Sweden*, by Mary Wollstonecraft, edited by Richard Holmes, Penguin, 1987, pp. 9-55.
- . "Notes to Wollstonecraft's *A Short Residence in Sweden*." Mary Wollstonecraft, *A Short Residence in Sweden*, edited by Richard Holmes, Penguin, 1987, pp. 279-95.
- Hunt, Lynn. *Inventing Human Rights*. W. W. Norton and Company, 2007. [ハント, リン 『人権を創造する』 松浦義弘訳, 岩波書店, 2011年]
- Isbell, Harold. Introduction. *Heroides*, by Ovid (Publius Ovidius Naso), translated by Harold Isbell, Penguin, 2004, pp. vii-xxi.
- Jacobus, Mary. *The First Things: The Maternal Imaginary in Literature, Art, and Psychoanalysis*. Routledge, 1995.

- James, Felicity, and Ian Inkster, editors. *Religious Dissent and the Aikin-Barbould Circle, 1740-1860*. Cambridge UP, 2011.
- Jespersen, Knud J. V. *A History of Denmark*. Translated by Ivan Hill and Christopher Wade, 2nd ed., Palgrave Macmillan, 2011.
- Johnson, Claudia L., editor. *The Cambridge Companion to Mary Wollstonecraft*. Cambridge UP, 2002.
- Johnson, Nancy E., and Paul Keen, editors. *Mary Wollstonecraft in Context*. Cambridge UP, 2020.
- Jones, Vivien. "Conduct Literature." Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 238-45.
- Kastan, David Scott. *A Will to Believe: Shakespeare and Religion*. Oxford UP, 2014.
- Kauffman, Linda S. *Discourse of Desire: Gender, Genre, and Epistolary Fictions*. Cornell UP, 1986.
- Keane, Angela. *Women Writers and the English Nation in the 1790s: Romantic Belongings*. Cambridge UP, 2000.
- Kelly, Gary. *The English Jacobin Novel, 1780-1805*. Oxford UP, 1976.
- . *Revolutionary Feminism: The Mind and Career of Mary Wollstonecraft*. Macmillan, 1992.
- Kennedy, Deborah. *Helen Maria Williams and the Age of Revolution*. Blackwell UP, 2002.
- Kennedy, Duncan F. "Epistolarity: the *Heroides*." *The Cambridge Companion to Ovid*, edited by Philip Hardie, Cambridge UP, 2002, pp. 217-32.
- King, Rachael Scarborough. *Writing to the World: Letters and the Origins of Modern Print Genres*. Johns Hopkins UP, 2018.
- Kirkley, Laura. "'Original Spirit': Literary Translations and Translational Literature in the

- Works of Mary Wollstonecraft.” *Literature and the Development of Feminist Theory*, edited by Robin Truth Goodman, Cambridge UP, 2015, pp. 13-26.
- Knott, Sarah, and Barbara Taylor, editors. *Women, Gender and Enlightenment*. Palgrave Macmillan, 2005.
- Laird, Susan. *Mary Wollstonecraft: Philosophical Mother of Coeducation*. Continuum, 2008.
- Masai, Sonia, et al., speakers. “Hamlet.” *In Our Time*, BBC, 28 Dec. 2017, [www.bbc.co.uk/programmes/b09jqtf5](http://www.bbc.co.uk/programmes/b09jqtf5).
- McInnes, Andrew. *Wollstonecraft’s Ghosts: The Fate of the Female Philosopher in the Romantic Period*. Routledge, 2016.
- McKendry, Andrew. “Dissenters.” Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 146-54.
- Mitchell, Leslie. Introduction. *Reflections on the Revolution in France*, by Edmund Burke, edited by Leslie Mitchell, Oxford UP, 2009, pp. vii-xix.
- Moran, Mary Catherine. “Between the Savage and the Civil: Dr John Gregory’s Natural History of Femininity.” Knott and Taylor, *Women, Gender and Enlightenment*, pp. 8-29.
- Myers, Mitzi. “Godwin’s *Memoirs* of Wollstonecraft: The Shaping of Self and Subject.” *Studies in Romanticism*, vol. 20, fall 1981, pp. 299-316.
- . “Mary Wollstonecraft’s Literary Reviews.” Johnson, *Cambridge Companion to Mary Wollstonecraft*, pp. 82-98.
- Nyström, Per. *Mary Wollstonecraft’s Scandinavian Journey*. Kungl. Vetenskaps-och Vitterhets-Samhället, 1980.
- O’Brien, Karen. *Women and Enlightenment in Eighteenth-Century Britain*. Cambridge UP, 2009.
- O’Dea, Gregory. “Framing the Frame: Embedded Narratives, Enabling Texts, and

- Frankenstein.*” *Romanticism on the Net*, 2004,  
[www.erudit.org/en/journals/ron/2003-n31ron738/008697ar/](http://www.erudit.org/en/journals/ron/2003-n31ron738/008697ar/).
- O’Neill, Daniel I. *The Burke-Wollstonecraft Debate: Savagery, Civilization, and Democracy*.  
 Pennsylvania State UP, 2007.
- Oxford Dictionary of National Biography Online (ODNB)*. [www.oxforddnb.com](http://www.oxforddnb.com).
- Oxford English Dictionary (OED)*. [www.oed.com](http://www.oed.com).
- Packham, Catherine. “Property Law.” Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp.  
 207-14.
- Perkins, Pamela. “Travel Writing.” Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp.  
 297-304.
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of  
 Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*. U of Chicago P, 1984.
- Rajan, Tilottama. “Framing the Corpus: Godwin’s ‘Editing’ of Wollstonecraft in 1798.”  
*Studies in Romanticism*, vol. 39, winter 2000, pp. 511-31.
- Raven, James. “Historical Introduction: The Novel Comes of Age.” *The English Novel  
 1770-1829: A Bibliographical Survey of Prose Fiction Published in the British Isles*,  
 edited by Peter Garside, James Raven, and Rainer Schöwerling, vol. 1, Oxford UP, 2000,  
 pp. 15-121.
- Richardson, Alan. “Mary Wollstonecraft on Education.” Johnson, *Cambridge Companion to  
 Mary Wollstonecraft*, pp. 24-41.
- Robinson, Nicholas K. *Edmund Burke: A Life in Caricature*. Yale UP, 1996.
- Rousset, Jean. *Forme et Signification: Essais sur les structures littéraires de Corneille à  
 Claudel*. Librairie José Corti, 1962.
- Ryall, Anka, and Catherine Sandbach-Dahlström, editors. *Mary Wollstonecraft’s Journey to*

- Scandinavia: Essays*. Almqvist and Wiksell International, 2003.
- Singer, Godfrey Frank. *The Epistolary Novel: Its Origin, Development, Decline, and Residuary Influence*. Russell and Russell, 1963.
- Spencer, Jane. Introduction. *Millenium Hall*, by Sarah Scott, Virago, 1986, pp. v-xv.
- Tancock, Leonard. Introduction. *Selected Letters*, by Madame de Sévigné, translated with an introduction by Leonard Tancock, Penguin, 1982, pp. 7-17.
- Taylor, Barbara. *Mary Wollstonecraft and the Feminist Imagination*. Cambridge UP, 2003.
- Todd, Janet, editor. *The Collected Letters of Mary Wollstonecraft*. Allen Lane, 2003.
- . *Death and the Maidens: Fanny Wollstonecraft and the Shelley Circle*. Profile Books, 2007. [トッド, ジャネット 『死と乙女たち—ファニー・ウルストンクラフトとシェリー・サークル』 平倉菜摘子訳, 音羽書房鶴見書店, 2016年]
- . Introduction. *The Collected Letters of Mary Wollstonecraft*, pp. ix-xxix.
- . Introduction. *Female Education in the Age of Enlightenment*, vol. 1, William Pickering, 1996, pp. vii-xxiii.
- . Introduction. *Mary, Maria, Matilda*, by Mary Wollstonecraft and Mary Shelley, edited by Janet Todd, Penguin, 2004, pp. vii-xxviii.
- . *Mary Wollstonecraft: A Revolutionary Life*. Weidenfeld and Nicolson, 2000.
- . *Sensibility: An Introduction*. Methuen, 1986.
- Tomalin, Claire. *The Life and Death of Mary Wollstonecraft*. 1974. Reprinted with revisions, illustrations and revised notes and bibliography, Penguin, 1992.
- Verhoeven, Wil. *Gilbert Imlay: Citizen of the World*. Pickering and Chatto, 2008.
- Walker, Lesley H. "Sweet and Consoling Virtue: The Memoirs of Madame Roland." *Eighteenth-Century Studies*, vol. 34, no. 3, spring 2001, pp. 403-19.
- Wardle, Ralph M. *Mary Wollstonecraft: A Critical Biography*. U of Kansas P, 1951.

Watson, Nicola J. *Revolution and the Form of the British Novel, 1790-1825: Intercepted Letters, Interrupted Seductions*. Clarendon Press, 1994.

Weiss, Deborah. *The Female Philosopher and Her Afterlives: Mary Wollstonecraft, the British Novel, and the Transformations of Feminism, 1796-1811*. Palgrave Macmillan, 2017.

Widdowson, H. G. *Stylistics and the Teaching of Literature*. Longman, 1975.

Wiseman, Susan. "Catharine Macaulay: History, Republicanism and the Public Sphere." Eger et al., *Women, Writing and the Public Sphere, 1700-1830*, pp. 181-99.

ヘルムス, ニコリーネ・マリーイ 『デンマーク国民をつくった歴史教科書』 村井誠人・大溪太郎訳, 彩流社, 2013年。

安達みち代 『近代フェミニズムの誕生—メアリ・ウルストンクラフト』 世界思想社, 2002年。

阿部美春 『『フランケンシュタイン』から『ロドア』へ—近代批判者としてのメアリー・シェリー』 木村晶子編 『メアリー・シェリー研究—「フランケンシュタイン」作家の全体像』 鳳書房, 2009年, 146-76頁。

梅垣千尋 『女性の権利を擁護する—メアリ・ウルストンクラフトの挑戦』 白澤社, 2011年。

---. 「女性のための歴史とフィクション—メアリ・ヘイズが試みたジャンルの再編」 見市雅俊編 『近代イギリスを読む—文学の語りと歴史の語り』 法政大学出版局, 2011年, 113-50頁。

---. 「『人間の権利の擁護』の研究史」 ウルストンクラフト 『人間の権利の擁護』, 234-61頁。

- . 「『娘達の教育について』 訳者解説」 ウルストンクラフト 『娘達の教育について』, 262-75 頁。
- . 「メアリ・ウルストンクラフトは『キャビネット』に寄稿したか? 〈後〉—1790年代イギリスの急進主義・慈善論・非国教徒サークル」 『一橋論叢』 第 129 巻 2 号, 2003 年, 121-39 頁。
- 大石和欣 「境界線上のルポルタージュ—あるイギリス人女性とフランス革命」 見市雅俊編 『近代イギリスを読む—文学の語りと歴史の語り』 法政大学出版局, 2011 年, 151-91 頁。
- . 「優柔で、不安な女性の慈善—Mary Wollstonecraft の *Mary* とその背景」 『英文学研究』 第 83 巻, 2006 年, 1-14 頁。
- 小川公代 「ウルストンクラフトとオースティンのゴシック表象」 『オースティン研究』 第 7 号, 2013 年, 89-99 頁。
- 川津雅江 「訳者解説」 ウルストンクラフト 『女性の虐待、あるいはマライア』, 239-66 頁。
- 木村晶子 「『マチルダ』における自伝的物語の深層」 木村晶子編 『メアリー・シェリー研究』, 202-25 頁。
- 後藤浩子・清水和子 「『人間の権利の擁護』 訳者解説」 ウルストンクラフト 『人間の権利の擁護』, 209-33 頁。
- 清水和子・後藤浩子・梅垣千尋 「訳者からのメッセージ」 ウルストンクラフト 『人間の権利の擁護』, iii-v 頁。
- 鈴木美津子 「メアリ・ウルストンクラフトを擁護する—アメリカ・オーピーの『父と娘』に潜む急進主義的要素」 『東北大学国際文化研究科論集』 第 13 号, 2005 年, 35-46 頁。
- 時実早苗 『手紙のアメリカ』 南雲堂, 2008 年。

中川信 「書簡体小説」 福井芳男編 『フランス文学講座 1—小説 I』 大修館書店, 1976年, 330-51 頁。

中里まき子 「ロラン夫人獄中記の再読—フランス革命の証言として」 『岩手大学人文社会科学部紀要』 第 105 号, 2019 年, 35-42 頁。

中澤信彦 「1790 年代英語圏における《革命》概念—バーク対ペイン論争の一断面」 『關西大學經濟論集』 第 49 卷 4 号, 2000 年, 339-52 頁。

新見肇子 『シャーロット・スミスの詩の世界—ミューズへの不満』 国文社, 2010年。

橋本淳編 『デンマークの歴史』 創元社, 1999 年。

半澤孝麿 「解説」 バーク 『フランス革命の省察』, 391-417 頁。

平倉菜摘子 「『不完全な文明化』の先に—メアリ・ウルストンクラフトのフランス革命論」 『英語英文学叢誌』 第 48 号, 2019 年, 37-47 頁。

---. 「『フランケンシュタイン』の書簡性」 『イギリス・ロマン派研究』 第 43 号, 2019年, 17-29 頁。

星名定雄 『郵便の文化史—イギリスを中心として』 みすず書房, 1982 年。

松本伊瑳子 「訳者あとがき」 シクスー 『メデューサの笑い』, 355-74 頁。

横山安由美 「〈補説〉書簡文学者としてのエロイーズ」 『アベラールとエロイーズ 愛の往復書簡』 沓掛良彦・横山安由美訳, 岩波文庫, 2009 年, 309-17 頁。



## 参考文献 (Works Consulted)

### 一次文献 (Primary Works)

Abelard and Heloise. *The Letters of Abelard and Heloise*. Translated by Betty Radice,

Penguin, 2003. [『アベラールとエロイーズ 愛の往復書簡』 沓掛良彦・横山安由美訳, 岩波文庫, 2009年]

Aikin, Lucy. *Epistles on Women and Other Works*. 1810. Edited by Anne K. Mellor and Michelle Levy, Broadview Press, 2010.

Arnim, Bettina von. *Goethes Briefwechsel mit einem Kinde*. 1835. [アルニム, ベッティナー・フォン 『ゲーテとある子供との往復書簡 1』 竹内英之助訳, 日本評論社, 1949年]

Astell, Mary. *A Serious Proposal to the Ladies*. 1695. Edited by Patricia Springborg, Broadview Press, 2002.

Austen, Jane. *Jane Austen's Letters*. Edited by Deirdre Le Faye, 3rd ed., Oxford UP, 1995.

[オースティン, ジェイン 『ジェイン・オースティンの手紙』 新井潤美編訳, 岩波文庫, 2004年]

---. *The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*. Janet Todd, general editor, Cambridge UP, 2005-08. 9 vols.

---. *Lady Susan*. 1794 (1871). *Later Manuscripts*, edited by Janet Todd and Linda Bree, *The*

*Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*, vol. 8, pp. 3-78. [オースティン, ジェイン 『レイディ・スーザン—書簡体小説の悪女をめぐる』 惣谷美智子訳著, 英宝社, 1995年]

Austen-Leigh, J. E. *A Memoir of Jane Austen and Other Family Recollections*. Edited by

Kathryn Sutherland, Oxford UP, 2002. [オースティン=リー, J. E. 『ジェイン・オ

- ースティンの思い出』 中野康司訳, みすず書房, 2011 年]
- Bage, Robert. *Hermesprong; or, Man As He Is Not*. 1796. Edited by Pamela Perkins, Broadview Press, 2002.
- Balzac, Honoré de. *Mémoires de deux jeunes mariées*. 1841-42. [バルザック, オノレ・ド 『二人の若妻の手記』 加藤尚宏・芳川泰久訳, 水声社, 2016 年]
- Beaumarchais, Pierre-Augustin Caron de. *Le mariage de Figaro*. 1784. [ボーマルシェ, ピエール=オーギュスタン・カロン・ド 『新訳 フィガロの結婚』 鈴木康司訳, 大修館書店, 2012 年]
- Behn, Aphra. *Love-Letters between a Nobleman and his Sister*. 1684. *The Works of Aphra Behn*, edited by Janet Todd, vol. 2, William Pickering, 1993.
- Blair, Hugh. *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*. 1787.
- British Critic* ns 9, Apr. 1818.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Edited by Margaret Smith, Oxford UP, 1993. [ブロンテ, シャーロット 『ジェイン・エア』 河島弘美訳, 岩波文庫, 2013 年]
- Brooke, Frances. *The History of Lady Julia Mandeville*. 1763. Edited by Enit Karafili Steiner, Routledge, 2012.
- Brown, William Hill. *The Power of Sympathy; or, The Triumph of Nature*. 1789.
- Burney, Frances. *Camilla; or, a Picture of Youth*. 1796. Edited by Edward A. Bloom and Lillian D. Bloom, Oxford UP, 2009.
- . *Cecilia; or, Memoirs of an Heiress*. 1782. Edited by Peter Sabor and Margaret Anne Doody, Oxford UP, 2009.
- . *The Wanderer; or, Female Difficulties*. 1814. Edited by Robert L. Mack and Peter Sabor, with an Introduction by Margaret Anne Doody, Oxford UP, 1991.
- Cadalso, José de. *Cartas marruecas*. 1789. [カダルソ, ホセ・デ 『モロッコ人の手紙』

富田広樹訳, 現代企画室, 2017 年]

Cavendish, Margaret. *Sociable Letters*. 1664. Edited by James Fitzmaurice, Broadview Press, 2004.

Chapone, Hester. *Letters on the Improvement of the Mind*. 1773.

Chesterfield, Philip Dormer Stanhope, Earl of. *Letters Written by the late Right Honourable Philip Dormer Stanhope, Earl of Chesterfield, to his son, Philip Stanhope, Esq.* 1774.

Colette, Sidonie-Gabrielle. *Mitsou; ou, comment l'esprit vient aux filles*. 1919. Arthème Fayard, 1928.

Collins, Wilkie. *The Woman in White*. 1860. [コリンズ, ウィルキー 『白衣の女』 中島賢二訳, 岩波文庫, 1996 年]

Crèvecoeur, J. Hector St John de. *Letters from an American Farmer*. 1782. Edited by Albert E. Stone, Penguin, 1981. [クレヴクール, ミシェル・ギヨーム・ジャン・ド (フランス名)、クレヴクール, J. ヘクター・セント・ジョン・ド (アメリカ名) 『アメリカ農夫の手紙』 秋山健・後藤昭次訳, 『アメリカ古典文庫2 クレヴクール』 秋山健・後藤昭次・渡辺利雄訳, 研究社, 1982 年, 35-246 頁]

Day, Thomas. *The History of Sandford and Merton*. 1783-89. Edited by Stephen Bygrave and Stephen Bending, Broadview Press, 2009.

Defoe, Daniel. *The Storm*. 1704. Edited by Richard Hamblyn, Penguin, 2005.

Dickens, Charles. *Great Expectations*. 1861. Edited by Graham Law and Adrian J. Pinnington, Broadview Press, 1998. [ディケンズ, チャールズ 『大いなる遺産』 佐々木徹訳, 河出書房新社, 2011 年]

Dostoevsky, Fyodor. *Бедные люди* [*Poor Folk*]. 1846. [ドストエフスキー, フョードル 『貧しき人々』 米川正夫訳, 河出書房, 1956 年]

Diderot, Denis. “Éloge de Richardson.” *Contes et romans*. 1762.

Edgeworth, Maria. *Leonora*. 1806.

---. *Letters of Julia and Caroline*. 1795.

Edgeworth, Maria, and Richard Lovell Edgeworth. *Practical Education*. 1798. Cambridge UP, 2012.

Ferrier, Susan. *Marriage*. 1818. Edited with Notes by Herbert Foltinek, with an Introduction by Kathryn Kirkpatrick, Oxford UP, 1997.

Fielding, Henry. *An Apology for the Life of Mrs. Shamela Andrews*. 1741. Edited by Catherine Ingrassia, Broadview Press, 2004.

Fielding, Sarah. *The History of Ophelia*. 1760. Edited by Peter Sabor, Broadview Press, 2004.

Foscolo, Ugo. *Ultime lettere di Jacopo Ortis*. 1802. Tascabili Bompiani, 1988. [フォスコロ, ウーゴ 『最後の手紙』 丸弘訳, 本の友社, 2001 年]

Fuseli, Henry. *The Collected English Letters of Henry Fuseli*. Edited by D. H. Weinglass, Kraus International Publications, 1982.

*The Gentleman's Magazine*.

Genlis, Stéphanie Félicité, comtesse de. *Adèle et Théodore; ou, Lettres sur l'éducation*. 1782.

---. *Les petits émigrés; ou, Correspondance de quelques enfans; ouvrage fait pour servir à l'éducation de la jeunesse*. 1798.

Ginzburg, Natalia. *La famiglia Manzoni*. Einaudi, 1983. [ギンズブルグ, ナタリア 『マンゾーニ家の人々』 須賀敦子訳, 白水社, 1998 年]

Godwin, William. *An Enquiry Concerning Political Justice*. 1793. [ゴドウィン, ウィリアム 『政治的正義 (財産論)』 白井厚訳, 陽樹社, 1973 年]

---. *Fleetwood; or, The New Man of Feeling*. 1805. Edited by Gary Handwerk and A. A.

- Markley, Broadview Press, 2000.
- . *Italian Letters; or, The History of the Count de St. Julian*. 1784.
- . *St. Leon: A Tale of the Sixteenth Century*. 1799. Edited by William D. Brewer, Broadview Press, 2006.
- . *William Godwin's Diary*. godwindiary.bodleian.ox.ac.uk.
- Graffigny, Françoise de. *Lettres d'une Péruvienne*. 1747.
- Grant, Anne MacVicar. *Letters from the Mountains*. Edited by J. P. Grant, Cambridge UP, 2011.
- Hamilton, Elizabeth. *Memoirs of Modern Philosophers*. 1800. Edited by Claire Grogan, Broadview Press, 2000.
- . *Translation of the Letters of a Hindoo Rajah*. 1796. Edited by Shannon Russell and Pamela Perkins, Broadview Press, 1999.
- Hays, Mary. *The Victim of Prejudice*. 1799. Edited by Eleanor Ty, Broadview Press, 1998.
- Hazlitt, William. *Liber Amoris; or, The New Pygmalion*. 1823. Woodstock Books, 1992.
- Hogg, James. *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner*. Edited by Adrian Hunter, Broadview Press, 2001.
- Holcroft, Thomas. *A Letter to the Right Honourable William Windham*. 1795.
- Inchbald, Elizabeth. *Emily Herbert; or, Perfidy Punished. A Novel. In a Series of Letters*. 1786.
- . *Every One Has His Fault*. 1793. *The Broadview Anthology of Romantic Drama*, edited by Jeffrey N. Cox and Michael Gamer, Broadview Press, 2003, pp. 39-74.
- . *Nature and Art*. 1796. Edited by Shawn Lisa Maurer, Broadview Press, 2004.
- Ishiguro, Kazuo. *Klara and the Sun*. Faber and Faber, 2021. [イシグロ, カズオ 『クララとお日さま』 土屋政雄訳, 早川書房, 2021年]

---. *Never Let Me Go*. Faber and Faber, 2005. [イシグロ, カズオ 『わたしを離さないで』 土屋政雄訳, 早川書房, 2008 年]

---. *The Remains of the Day*. Faber and Faber, 1989. [イシグロ, カズオ 『日の名残り』 土屋政雄訳, 早川書房, 2001 年]

Karamzin, Nikolai. *Письма русскогопутешественника* [*Letters of a Russian Traveller*]. 1797. [カラムジン, ニコライ 『ロシア人の見た十八世紀パリ』 福住誠訳, 彩流社, 1995 年 / 『ロシア人旅行者の手紙』 コンコーダンス, 浦井康男編, 北海道大学文学部ロシア語ロシア文学研究室, 2000 年]

*Lady's Magazine*.

La Roche, Sophie von. *Geschichte des Fräuleins von Sternheim*. 1771. Edited by James Lynn, Pickering and Chatto, 1991.

Lee, Sophia. *The Recess; or, a Tale of Other Times*. 1785.

Lennox, Charlotte. *The Female Quixote; or, The Adventures of Arabella*. 1752. Edited with an Introduction by Margaret Dalziel, Oxford UP, 1970.

Lewis, Matthew Gregory. *The Monk, A Romance*. 1796. Edited by D. L. MacDonald and Kathleen Scherf, Broadview Press, 2003.

Locke, John. *A Letter Concerning Toleration*. 1689. Edited by Kerry Walters, Broadview Press, 2013. [ロック, ジョン 『寛容についての手紙』 加藤節・李静和訳, 岩波文庫, 2018 年]

Lockhart, John Gibson. *Peter's Letters to His Kinsfolk*. 1819. 3 vols.

Mackenzie, Henry. *Julia de Roubigné*. 1777.

---. *The Man of Feeling*. 1771. Edited by Brian Vickers, Oxford UP, 2002. [マッケンジー, ヘンリー 『感情の人』 久野陽一・細川美苗・向井秀忠訳, 音羽書房鶴見書店, 2008 年]

- Malthus, Thomas Robert. *An Essay on the Principle of Population*. 1798. [マルサス, トマス・ロバート 『人口論』 永井義雄訳, 中公文庫, 改版, 2019年]
- Marivaux, Pierre Carlet de Chamblain de. *La vie de Marianne*. 1731-41.
- Montagu, Mary Wortley. *The Turkish Embassy Letters*. 1763. Edited by Teresa Heffernan and Daniel O'Quinn, Broadview Press, 2012.
- Montolieu, Isabelle de. *Caroline de Lichtfield*. 1786. Translated by Thomas Holcroft, 1786. Edited by Laura Kirkley, Pickering and Chatto, 2014.
- Monthly Magazine*.
- Monthly Review*.
- More, Hannah. *Coelebs in Search of a Wife*. 1809. Edited by Patricia Demers, Broadview Press, 2007.
- . *Strictures on the Modern System of Female Education*. 1799.
- Morgan, Sydney Owenson. *The Wild Irish Girl*. 1806. Edited by Kathryn Kirkpatrick, Oxford UP, 2008.
- Opie, Amelia. *The Father and Daughter with Dangers of Coquetry*. 1790, 1801. Edited by Shelley King and John B. Pierce, Broadview Press, 2003.
- Polwhele, Richard. *The Unsex'd Females: A Poem Addressed to the Author of the Pursuits of Literature*. 1798.
- Radcliffe, Ann. *The Italian; or, The Confessional of the Black Penitents. A Romance*. 1797. Edited by Frederick Garber, with an Introduction by E. J. Clery, Oxford UP, 2008. [ラドクリフ, アン 『イタリアの惨劇』 野畑多恵子訳, 国書刊行会, 1978年]
- Reeve, Clara. *The School for Widows*. 1791.
- Riccoboni, Marie-Jeanne. *Lettres de Milady Juliette Catesby à Milady Henriette Campley*. 1760.

- . *Les lettres de Mistriss Fanni Butlerd*. 1757.
- Richardson, Samuel. *The History of Sir Charles Grandison*. 1753.
- Robinson, Mary. *Angelina, A Novel. In a Series of Letters*. 1796.
- . *Hubert de Sevrac, A Romance of the Eighteenth Century*. 1796.
- . *A Letter to the Women of England and The Natural Daughter*. 1799. Edited by Sharon M. Setzer, Broadview Press, 2003.
- . *Selected Poems*. Edited by Judith Pascoe, Broadview Press, 2000.
- Rowson, Susanna. *Charlotte Temple: A Tale of Truth*. 1791. Edited by Ann Douglas, Penguin, 1991.
- Scott, Sarah. *The Letters of Sarah Scott*, edited by Nicole Pohl, Pickering and Chatto, 2014. 2 vols.
- Scott, Walter. *Redgauntlet: A Tale of the Eighteenth Century*. 1824. Edited by Kathryn Sutherland, Oxford UP, 2011.
- Sheridan, Frances. *Conclusion of the Memoirs of Miss Sidney Bidulph*. 1767. Edited by Heidi Hutner and Nicole Garret, Broadview Press, 2013.
- . *The Memoirs of Miss Sidney Bidulph*. 1761. Edited by Heidi Hutner and Nicole Garret, Broadview Press, 2011.
- Smith, Charlotte. *Celestina*. 1791. Edited by Loraine Fletcher, Broadview Press, 2004.
- . *D'Arcy, A Novel*. 1796.
- . *Emmeline*. 1788. Edited by Loraine Fletcher, Broadview Press, 2003.
- . *The Letters of a Solitary Wanderer*. 1800-02.
- . *Marchmont, A Novel*. 1794.
- . *The Old Manor House*. 1794. Edited by Jacqueline M. Labbe, Broadview Press, 2002.
- . *The Poems of Charlotte Smith*. Edited by Stuart Curran, Oxford UP, 1993. [スミス, シ



シャーロット 『シャーロット・スミスの詩の世界—ミューズへの不満』 新見肇子  
訳著, 国文社, 2010年]

Smollett, Tobias. *The Expedition of Humphrey Clinker*. 1771. Edited with an Introduction by  
Lewis M. Knapp, revised by Paul-Gabriel Boucé, Oxford UP, 1984.

Staël, Anne Louise Germaine de. *Corinne; ou, L'Italie*. 1807. [スタール, アンヌ・ルイー  
ズ・ジェルメーヌ・ド 『コリンナー—美しきイタリアの物語』 佐藤夏生訳, 国書  
刊行会, 1997年]

---. *Delphine*. 1802. Edited by Lucia Omacini and Simone Balayé, Honoré Champion, 2004.

Voltaire. *Lettres philosophiques*. 1734. [ヴォルテール 『哲学書簡』 林達夫訳, 岩波  
文庫, 1951年]

Walker, Alice. *The Color Purple*. 1982. The Woman's Press, 1983. [ウォーカー, アリス  
『カラーパープル』 柳沢由実子訳, 集英社文庫, 1986年]

Webster, Jean. *Daddy-Long-Legs*. Hodder and Stoughton, 1912. [ウェブスター, ジーン  
『あしながおじさん』 岩本正恵訳, 新潮文庫, 2017年]

Wilson, Harriette. *Memoirs of Harriette Wilson*. 1825. *Whore Biographies, 1700-1825*,  
edited by Julie Peakman, vol. 7, Pickering and Chatto, 2006.

## 二次文献 (Secondary Works)

Bahar, Saba. *Mary Wollstonecraft's Social and Aesthetic Philosophy: An Eve to Please Me*.  
Palgrave, 2002.

Ballaster, Ros. *Seductive Forms: Women's Amatory Fiction from 1684 to 1740*. Clarendon  
Press, 1992.

Barker-Benfield, G. J. "Mary Wollstonecraft: Eighteenth-Century Commonwealthwoman."  
*Journal of the History of Ideas*, vol. 50, no. 1, Jan.- Mar. 1989, pp. 95-115.

- Battersby, Christine. *Gender and Genius: Towards a Feminist Aesthetics*. Indiana UP, 1990.
- Bennet, Betty T. "Mary Shelley's Letters: the public/private self." Schor, *Cambridge Companion to Mary Shelley*, pp. 211-25.
- Bigold, Melanie. *Women of Letters, Manuscript Circulation, and Print Afterlives in the Eighteenth Century: Elizabeth Rowe, Catherine Cockburn, and Elizabeth Carter*. Palgrave Macmillan, 2013.
- Black, Jeremy. "Britain and the 'Long' Eighteenth Century, 1688-1815." *The Practice of Strategy: From Alexander the Great to the Present*, edited by John Andreas Olsen and Colin S. Gray, Oxford UP, 2011, pp. 155-74.
- Blakemore, Steven. *Crisis in Representation: Thomas Paine, Mary Wollstonecraft, Helen Maria Williams, and the Rewriting of the French Revolution*. Fairleigh Dickinson UP, 1997.
- Blamires, David. *Telling Tales: The Impact of Germany on English Children's Books 1780-1918*. Open Book Publisher, 2009.
- Blanc, Olivier. *Marie-Olympe de Gouges, une humaniste à la fin du XVIIIe siècle*. Éditions René Viénet, 2003. [ブラン, オリヴィエ 『オランプ・ドゥ・グージューフランス革命と女性の権利宣言』 辻村みよ子・太原孝英・高瀬智子訳, 信山社, 2010年]
- Bohls, Elizabeth A., and Ian Duncan, editors. *Travel Writing, 1700-1830: An Anthology*. Oxford UP, 2008.
- Booth, Wayne C. *The Rhetoric of Fiction*. 2nd ed., U of Chicago P, 1983.
- Botting, Eileen Hunt. Introduction. *Original Stories from Real Life*, by Mary Wollstonecraft, edited by Eileen Hunt Botting, U of Illinois P, 2016, pp. v-xlvi.
- Brailsford, Henry Noel. *Shelley, Godwin, and Their Circle*. Williams and Norgate, 1919. [ブレイルズフォード, H. N. 『フランス革命と英国の思想・文学』 岡地嶺訳, 中

央大学出版, 1982 年]

Braithwaite, Helen. *Romanticism, Publishing, and Dissent: Joseph Johnson and the Cause of Liberty*. Palgrave Macmillan, 2003.

Bray, Joe. *The Epistolary Novel: Representations of Consciousness*. Routledge, 2003.

Brewer, John, and Susan Staves, editors. *Early Modern Conceptions of Property*. Routledge, 1995.

Brindle, Kym. *Epistolary Encounters in Neo-Victorian Fiction: Diaries and Letters*. Palgrave Macmillan, 2013.

Britton, Jeanne M. "Novelistic Sympathy in Mary Shelley's *Frankenstein*." *Studies in Romanticism*, vol. 48, 2009, pp. 3-22.

Broadie, Alexander, editor. *The Cambridge Companion to the Scottish Enlightenment*. Cambridge UP, 2003.

Bromwich, David. "Wollstonecraft as a Critic of Burke." *Political Theory*, vol. 23, no. 4, Nov. 1995, pp. 617-34.

Brown Ford K. *The Life of William Godwin*. Dent, 1926.

Buss, Helen M., et al., editors. *Mary Wollstonecraft and Mary Shelley: Writing Lives*. Wilfrid Laurier UP, 2001.

Butler, Marilyn. *Burke, Paine, Godwin, and the Revolution Controversy*. Cambridge UP, 1984.

Byrne, Paula. *Perdita: The Literary, Theatrical, Scandalous Life of Mary Robinson*. HarperCollins, 2004. [バーン, ポーラ 『パーディターメアリ・ロビンソンの生涯』 桑子利男・時実早苗・正岡和恵訳, 作品社, 2012 年]

Cameron, Kenneth Neill, editor. *Shelley and His Circle*. Harvard UP, 1961.

Carey, Brycchan. *British Abolitionism and the Rhetoric of Sensibility: Writing, Sentiment,*

- and Slavery, 1760-1807*. Palgrave MacMillan, 2005.
- Chandler, Anne. "Wollstonecraft's *Original Stories*: Animal Objects and the Subject of Fiction." *Eighteenth-Century Novel*, vol. 2, 2002, pp. 325-51.
- Civale, Susan. *Romantic Women's Life Writing: Reputation and Afterlife*. Manchester UP, 2019.
- Coffee, Alan. "Mary Wollstonecraft, Freedom and the Enduring Power of Social Dominion." *European Journal of Political Theory*, vol. 12, no. 2, Apr. 2013, pp. 116-35.
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. Yale UP, 1992.
- Conniff, James. "Edmund Burke and His Critics: The Case of Mary Wollstonecraft." *Journal of the History of Ideas*, vol. 60, no. 2, Apr. 1999, pp. 299-318.
- Cook, Daniel, and Amy Culley. *Women's Life Writing, 1700-1850: Gender, Genre and Authorship*. Palgrave Macmillan, 2012.
- Cooper, Joy A. Palmer, editor. *The Routledge Encyclopaedia of Educational Thinkers*. Routledge, 2016.
- Craciun, Adriana. *British Women Writers and the French Revolution: Citizens of the World*. Palgrave Macmillan, 2005.
- . *Fatal Women of Romanticism*. Cambridge UP, 2003.
- . "Frankenstein's Politics." Smith, *Cambridge Companion to Frankenstein*, pp. 84-97.
- Cruise, James. "A House Divided: Sarah Scott's *Millenium Hall*." *Studies in English Literature, 1500-1900*, vol. 35, no. 3, 1995, pp. 555-73.
- Culley, Amy. *British Women's Life Writing, 1760-1840: Friendship, Community, and Collaboration*. Palgrave Macmillan, 2014.
- Curran, Stuart, editor. "Mary Shelley's Reading." *Frankenstein: A Romantic Circles Electronic Edition*, 2009, [www.rc.umd.edu/editions/frankenstein/MShelley/reading](http://www.rc.umd.edu/editions/frankenstein/MShelley/reading).

- Davidoff, Lenore, and Catharine Hall. *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class, 1780-1850*. U of Chicago P, 1987.
- Davies, Kate. *Catharine Macaulay and Mercy Otis Warren: The Revolutionary Atlantic and the Politics of Gender*. Oxford UP, 2005.
- Day, Robert Adams. *Told in Letters: Epistolary Fiction Before Richardson*. U of Michigan P, 1966.
- Derrida, Jacques. *The Post Card: from Socrates to Freud and Beyond*. Translated by Alan Bass, U of Chicago P, 1987.
- Didier, Béatrice. *La littérature de la Révolution française*. 2e éd., PU de France, 1989. [ディイェ, ベアトリス 『フランス革命の文学』 小西喜幸訳, 白水社, 1991年]
- Eckert, Penelope, and Sally McConnell-Ginet. *Language and Gender*. 2nd ed., Cambridge UP, 2013.
- Eger, Elizabeth, and Lucy Peltz, editors. *Brilliant Women: 18th-Century Bluestockings*. National Portrait Gallery, 2008.
- Faubert, Michelle. Introduction. *Mary, A Fiction and The Wrongs of Woman; or, Maria*, by Mary Wollstonecraft, edited by Michelle Faubert, Broadview Press, 2012, pp. 11-50.
- Ferguson, Frances. *Solitude and the Sublime: Romanticism and the Aesthetics of Individuation*. Routledge, 1992.
- Foreman, Amanda. *Georgiana, Duchess of Devonshire*. HarperCollins, 1998.
- Foster, Shirley, and Sara Mills, editors. *An Anthology of Women's Travel Writing*. Manchester UP, 2002.
- Fowler, James, editor. *New Essays on Diderot*. Cambridge UP, 2014.
- Fulkerson, Laurel. *The Ovidian Heroine as Author: Reading, Writing, and Community in the Heroides*. Cambridge UP, 2005.

- Furet, François, and Mona Ozouf, editors. *Dictionnaire critique de la Révolution française*. Flammarion, 1988. [フュレ, フランソワ, 及びモナ・オズーフ編 『フランス革命事典』 河野健二・阪上孝・富永茂樹監訳, みすず書房, 1998-2000年]
- Furniss, Tom. "Mary Wollstonecraft's French Revolution." Johnson, *Cambridge Companion to Mary Wollstonecraft*, pp. 59-81.
- Goodman, Dena. "Epistolary Property: Michel de Servan and the Plight of Letters on the Eve of the French Revolution." Brewer and Staves, *Early Modern Conceptions of Property*, pp. 339-62.
- Goodman, Robin Truth, editor. *Literature and the Development of Feminist Theory*. Cambridge UP, 2015.
- Goring, Paul. *The Rhetoric of Sensibility in Eighteenth-Century Culture*. Cambridge UP, 2005.
- Gravil, Richard. *Romantic Dialogues: Anglo-American Continuities, 1776-1862*. 2nd ed., Humanities-Ebooks, 2015.
- Gregory, Jeremy, and John Stevenson, editors. *The Routledge Companion to Britain in the Eighteenth Century, 1688-1820*. Routledge, 2007.
- Grenby, M. O. *The Child Reader, 1700-1840*. Cambridge UP, 2011.
- Grenby, M. O., and Andrea Immel, editors. *The Cambridge Companion to Children's Literature*. Cambridge UP, 2009.
- Hagstrum, Jean H. *Sex and Sensibility: Ideal and Erotic Love from Milton to Mozart*. U of Chicago P, 1980.
- Haldenius, Lena. "Political Theory." Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 182-88.
- Harkness, Nigel. *Men of Their Words: The Poetics of Masculinity in George Sand's Fiction*.

- Legenda, 2007.
- Hewitt, Rachel. *A Revolution of Feeling: The Decade that Forged the Modern Mind*. Granta, 2017.
- Hill, Bridget. "The Links between Mary Wollstonecraft and Catharine Macaulay: New Evidence." *Women's History Review*, vol. 4, no. 2, 1995, pp. 177-92.
- . *The Republican Virago: The Life and Times of Catharine Macaulay, Historian*. Clarendon Press, 1992.
- Hirakura, Natsuko. (平倉菜摘子) "A Mother's Legacy to her Daughters: Wollstonecraft's *The Wrongs of Woman*." *Essays in English Romanticism*, vol. 33, 2009, pp. 1-11.
- Hoeveler, Diane Long. *Gothic Feminism: The Professionalization of Gender from Charlotte Smith to the Brontës*. Pennsylvania State UP, 1998.
- Horrocks, Ingrid. *Women Wanderers and the Writing of Mobility, 1784-1814*. Cambridge UP, 2017.
- How, James. *Epistolary Spaces: English Letter-Writing from the Foundation of the Post Office to Richardson's Clarissa*. Ashgate, 2003.
- Hughes, Derek, and Janet Todd, editors. *The Cambridge Companion to Aphra Behn*. Cambridge UP, 2004.
- Hunt, Lynn. *The Family Romance of the French Revolution*. Routledge, 1992.
- Iser, Wolfgang. *The Implied Reader: Patterns of Communication in Prose Fiction from Bunyan to Beckett*. Johns Hopkins UP, 1974.
- Jack, Belinda. *George Sand: A Woman's Life Writ Large*. Chatto and Windus, 1999.
- James, Felicity, and Julian North, editors. *Writing Lives Together: Romantic and Victorian Auto/biography*. Routledge, 2019.
- Johnson, Claudia L. *Equivocal Beings: Politics, Gender, and Sentimentality in the 1790s*.

- Wollstonecraft, Radcliffe, Burney, Austen*. U of Chicago P, 1995.
- Jones, Chris. *Radical Sensibility: Literature and Ideas in the 1790s*. Routledge, 1993.
- Keefe, Simon P. “‘No Kind of Reading Is So Generally Interesting as Biography’: Establishing Narratives for Haydn and Mozart in the Second and Third Decades of the Nineteenth Century.” *19th Century Music*, vol. 44, no. 2, fall 2020, pp. 67-79.
- Kelly, Gary, general editor. *Bluestocking Feminism: Writings of the Bluestocking Circle, 1738-1785*. Pickering and Chatto, 1999. 6 vols.
- . Introduction. *Mary and The Wrongs of Woman*, by Mary Wollstonecraft, edited by Gary Kelly, Oxford UP, 1998, pp. vii-xxi.
- King, Rachael Scarborough, editor. *After Print: Eighteenth-Century Manuscript Cultures*. U of Virginia P, 2020.
- Kirkley, Laura. “Jean-Jacques Rousseau.” Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 155-63.
- Knox-Shaw, Peter. *Jane Austen and the Enlightenment*. Cambridge UP, 2004.
- Koehler, Martha J. *Models of Reading: Paragons and Parasites in Richardson, Burney, and Laclos*. Blacknell UP, 2005.
- Labbe, Jacqueline M. “Selling One’s Sorrows: Charlotte Smith, Mary Robinson, and the Marketing of Poetry.” *The Wordsworth Circle*, vol. 25, no. 2, 1994, pp. 68-71.
- Langford, Paul. *A Polite and Commercial People: England 1727-1783*. Oxford UP, 1989.
- Lawrence, Karen R. *Penelope Voyages: Women and Travel in the British Literary Tradition*. Cornell UP, 1994.
- Leask, Nigel. *Curiosity and the Aesthetics of Travel-Writing, 1770-1840*. Oxford UP, 2002.
- Leech, Geoffrey N., and Michael H. Short. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. Longman, 1981.



- Lindheim, Sara H. *Mail and Female: Epistolary Narrative and Desire in Ovid's Heroides*. U of Wisconsin P, 2003.
- Lokke, Kari. "Charlotte Smith's *Desmond*: The Historical Novel as Social Protest." *Women's Writing*, vol. 16, no. 1, 2009, pp. 60-77.
- Looser, Devoney, editor. *The Cambridge Companion to Women's Writing in the Romantic Period*. Cambridge UP, 2015.
- Löschnigg, Maria, and Rebekka Schuh, editors. *The Epistolary Renaissance: A Critical Approach to Contemporary Letter Narratives in Anglophone Fiction*. De Gruyter, 2018.
- Lucas, E. V. Introduction. *Mary Wollstonecraft's Original Stories from Real Life with Five Illustrations by William Blake*, edited by E. V. Lucas, Henry Frowde, 1906. The Project Gutenberg eBook, 2011, [www.gutenberg.org/files/36507/36507-h/36507-h.htm](http://www.gutenberg.org/files/36507/36507-h/36507-h.htm).
- Lyons, John D. *The Cambridge Companion to French Literature*. Cambridge UP, 2016.
- Major, Emma. *Madam Britannia: Women, Church, and Nation, 1712-1812*. Oxford UP, 2012.
- Mandal, Anthony. "Fiction." Looser, *Cambridge Companion to Women's Writing in the Romantic Period*, pp. 16-31.
- Markman, Ellis. *The History of Gothic Fiction*. Edinburgh UP, 2000.
- . *The Politics of Sensibility: Race, Gender and Commerce in the Sentimental Novel*. Cambridge UP, 1996.
- Maza, Sara. *Private Lives and Public Affairs: The Causes Célèbres of Pre-Revolutionary France*. U of California P, 1993.
- McGann, Jerome. *The Poetics of Sensibility: A Revolution in Literary Style*. Clarendon Press, 1996.
- McKendrick, Neil, et al. *The Birth of a Consumer Society: The Commercialization of*

- Eighteenth-Century England*. Indiana UP, 1982.
- Mee, Jon. "The Novel Wars of 1790-1804." *English and British Fiction 1750-1820*, edited by Peter Garside and Karen O'Brien, Oxford UP, 2015, pp. 199-215.
- Mitchell, Orm. "Blake's Subversive Illustrations to Wollstonecraft's *Stories*." *Mosaic*, vol. 17, no. 4, 1984, pp. 17-34.
- MLA Handbook*. 9th ed., Modern Language Association of America, 2021.
- Moody, Jane. *Illegitimate Theatre in London, 1770-1840*. Cambridge UP, 2000.
- Morello, Ruth, and A. D. Morrison, editors. *Ancient Letters: Classical and Late Antique Epistolography*. Oxford UP, 2007.
- Mornet, Daniel. *La pensée française au XVIIIe siècle*. Armand Colin, 1969. [モルネ, ダニエル 『18 世紀フランス思想—ヴォルテール、ディドロ、ルソー』 市川慎一・遠藤真人訳, 大修館書店, 1990 年]
- Mulvey-Roberts, Marie. "The Corpse in the Corpus: *Frankenstein*, Rewriting Wollstonecraft and the Abject." *Mary Shelley's Fictions: From Frankenstein to Falkner*, edited by Michael Eberle-Sinatra, Palgrave Macmillan, 2000, pp. 197-210.
- O'Brien, Eliza. "Recent Critical Reception." Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 64-72.
- O'Brien, Karen. *Narratives of Enlightenment: Cosmopolitan History from Voltaire to Gibbon*. Cambridge UP, 1997.
- O'Donnell, Katherine. "Effeminate Edmund Burke and the Masculine Voice of Mary Wollstonecraft." *Journal of Gender Studies*, vol. 28, no. 7, Oct. 2019, pp. 789-801.
- Overton, Bill. *The Eighteenth-Century British Verse Epistle*. Palgrave Macmillan, 2007.
- Park, Roberta J., and Patricia Vertinsky, editors. *Women, Sport, Society: Further Reflections, Reaffirming Mary Wollstonecraft*. Routledge, 2011.

- Parker, Lindsay A. H. *Writing the Revolution: A French Woman's History in Letters*. Oxford UP, 2013.
- Paulson, Ronald. *Representations of Revolution, 1789-1820*. Yale UP, 1983.
- Phillips, Mark Salber. *Society and Sentiment: Genres of Historical Writing in Britain, 1740-1820*. Princeton UP, 2000.
- Porter, Roy. *Enlightenment: Britain and the Creation of the Modern World*. Allen Lane, 2000.
- Purves, Maria. *The Gothic and Catholicism: Religion, Cultural Exchange and the Popular Novel, 1785-1829*. U of Wales P, 2009.
- Rendall, Jane. "The Grand Causes Which Combine to Carry Mankind Forward': Wollstonecraft, History and Revolution." *Women's Writing*, vol. 4, no. 2, 1997, pp. 155-72.
- Richardson, Alan. *Literature, Education, and Romanticism: Reading as Social Practice, 1780-1832*. Cambridge UP, 1994.
- Riskin, Jessica. *Science in the Age of Sensibility: The Sentimental Empiricists of the French Enlightenment*. U of Chicago P, 2002.
- Rosenmeyer, Patricia. A. *Ancient Epistolary Fictions: The Letter in Greek Literature*. Cambridge UP, 2001.
- Rubin-Detlev, Kelsey. *The Epistolary Art of Catherine the Great*. Liverpool UP on behalf of Voltaire Foundation, 2019.
- Rumbold, Valerie. *Women's Place in Pope's World*. Cambridge UP, 1989.
- Sabor, Peter, editor. *The Cambridge Companion to Frances Burney*. Cambridge UP, 2007.
- Sapiro, Virginia. *A Vindication of Political Virtue: The Political Theory of Mary Wollstonecraft*. U of Chicago P, 1992.

- Schofield, Mary Anne, and Cecilia Macheski, editors. *Fetter'd or Free? British Women Novelists, 1670-1815*. Ohio UP, 1986.
- Schor, Esther, editor. *The Cambridge Companion to Mary Shelley*. Cambridge UP, 2003.
- Selvik, Randi Margrete, et al. *Relevance and Marginalisation in Scandinavian and European Performing Arts 1770-1860: Questioning Cannons*. Routledge, 2020.
- Silver, Marie-France, and Marie-Laure Girou Swiderski, editors. *Femmes en toutes lettres: les épistolières du XVIIIe siècle*. Voltaire Foundation, 2000.
- Smith, Andrew, editor. *The Cambridge Companion to Frankenstein*. Cambridge UP, 2016.
- Sol, Antoinette Marie. *Textual Promiscuities: Eighteenth-Century Critical Rewriting*. Bucknell UP, 2002.
- Spencer, Samia I., editor. *French Women and the Age of Enlightenment*. Indiana UP, 1985.
- Spender, Dale, editor. *Living by the Pen: Early British Women Writers*. Teachers College Press, 1992.
- Spentzou, Efrossini. *Readers and Writers in Ovid's Heroides: Transgressions of Genre and Gender*. Oxford UP, 2003.
- St. Claire, William. *The Godwins and the Shelleys*. Faber and Faber, 1989.
- Stabler, Jane. *The Artistry of Exile: Romantic and Victorian Writers in Italy*. Oxford UP, 2013.
- Starobinski, Jean. *Le remède dans le mal. Critique et légitimation de l'artifice à l'âge des Lumières*. Gallimard, 1989. [スタロバンスキー, ジャン 『病のうちなる治療薬—啓蒙の時代の人為に対する批判と正当化』 小池健男・川那部保明訳, 法政大学出版局, 1993 年]
- Steiner, Enit Karafili, editor. *Called to Civil Existence: Mary Wollstonecraft's A Vindication of the Rights of Woman*. Rodopi, 2014.

- . *Jane Austen's Civilized Women: Morality, Gender and the Civilizing Process*. Routledge, 2012.
- . "Lessons of Skin: Solidary Cosmopolitanism." *Women's Writing*, vol. 27, no. 2, 2020, pp. 46-62.
- . "Mary Wollstonecraft's 'Love of Mankind' and Cosmopolitan Suffering in *Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*." *Studies in Romanticism*, vol. 58, no. 1, 2019, pp. 3-26.
- Stone, Lawrence. *Broken Lives: Separation and Divorce in England 1669-1857*. Oxford UP, 1993.
- Taylor, Barbara, et al., speakers. "Mary Wollstonecraft." *In Our Time*, BBC, 31 Dec. 2009, [www.bbc.co.uk/programmes/b00pg5dr](http://www.bbc.co.uk/programmes/b00pg5dr).
- Tillyard, Stella. *A Royal Affair: George III and His Scandalous Siblings*. Random House, 2006.
- Todd, Janet. *Daughters of Ireland: The Rebellious Kingsborough Sisters and the Making of a Modern Nation*. Ballantine Books, 2005.
- . *Feminist Literary History: A Defence*. Polity Press, 1988.
- . *Gender, Art and Death*. Polity Press, 1993.
- , editor. *Jane Austen in Context. The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*, vol. 9, 2005.
- . *The Secret Life of Aphra Behn*. André Deutsch, 1996.
- . *The Sign of Angellica: Women, Writing and Fiction, 1660-1800*. Columbia UP, 1989.
- , et al., speakers. "The Sublime." *In Our Time*, BBC, 12 Feb. 2004, [www.bbc.co.uk/programmes/p004y23j](http://www.bbc.co.uk/programmes/p004y23j).
- . *Women's Friendship in Literature*. Columbia UP, 1980.

- Tomaselli, Sylvana. "The Death and Rebirth of Character in the Eighteenth Century." *Rewriting the Self: Histories from the Renaissance to the Present*, edited by Roy Porter, Routledge, 1997, pp. 84-96.
- . *Wollstonecraft: Philosophy, Passion, and Politics*. Princeton UP, 2020.
- Vargo, Lisa. "Contextualizing Sources." Smith, *Cambridge Companion to Frankenstein*, pp. 26-40.
- Verhoeven, Wil. *Americomania and the French Revolution Debate in Britain, 1789-1802*. Cambridge UP, 2013.
- Vickery, Amanda. *The Gentleman's Daughter: Women's Lives in Georgian England*. Yale UP, 1998.
- Ward, Candace. *Desire and Disorder: Fevers, Fictions, and Feeling in English Georgian Culture*. Bucknell UP, 2007.
- Warren, Karen J., editor. *An Unconventional History of Western Philosophy: Conversations between Men and Women Philosophers*. Rowman and Littlefield Publishers, 2009.
- Yeo, Eileen Janes, editor. *Mary Wollstonecraft and 200 Years of Feminisms*. Rivers Oram Press, 1997. [ヨー, アイリーン・ジェインズ編 『フェミニズムの古典と現代—蘇るウルストンクラフト』 永井義雄・梅垣千尋訳, 現代思潮新社, 2002年]
- 井上 櫻子 「『新エロイーズ』—パトスの解放を志向する「貞淑な」女性の物語」 桑瀬章二郎編 『ルソーを学ぶ人のために』 世界思想社, 2010年, 94-116頁。
- 上野千鶴子 『生き延びるための思想—ジェンダー平等の罨』 岩波書店, 2006年。
- 梅垣千尋 「アナ・バーボールドの女子教育論—学問・女性・家庭」 『総合文化研究所年報』 第19号, 2011年, 87-110頁。
- . 「ウルストンクラフトのフェミニズム—理性・徳・知識における平等」 『青山

学院女子短期大学紀要』第 73 号, 2019 年, 1-16 頁。

---. 「書く女たちの野望—出版という自己実現」伊藤航多・佐藤繭香・菅靖子編著『欲張りな女たち』彩流社, 2013 年, 19-54 頁。

---. 「女性思想家の〈マイナー性〉—「愛」をめぐるウルストンクラフトのバーク批判を事例として」『政治思想研究』第 21 号, 2021 年, 100-30 頁。

---. 「『女性の権利の擁護』と 18 世紀末イングランドの理性的非国教徒」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』第 23 号, 2003 年, 41-55 頁。

---. 「メアリ・ウルストンクラフトにおける平等の希求—1790 年代イングランドの「パンフレット合戦」という文脈から」『一橋論叢』第 123 巻 2 号, 2000 年, 361-79 頁。

---. 「メアリ・ウルストンクラフトの『愛国心』」『社会思想史研究』第 26 号, 2002 年, 75-89 頁。

---. 「メアリ・ウルストンクラフトは『キャビネット』に寄稿したか? 〈前〉—1790 年代イギリスの急進主義・慈善論・非国教徒サークル」『一橋論叢』第 128 巻 2 号, 2002 年, 153-73 頁。

大石和欣 「女性の慈善とバーボールドの曖昧な『公共心』—ユニタリアン文化のジェンダー問題」『放送大学研究年報』第 23 号, 2005 年, 65-78 頁。

川津雅江 『サッポータちの 18 世紀—近代イギリスにおける女性・ジェンダー・セクシュアリティ』音羽書房鶴見書店, 2012 年。

桑瀬章二郎 『嘘の思想家ルソー』岩波書店, 2015 年。

--- 編 『書簡を読む』春風社, 2009 年。

酒井健 『ゴシックとは何か—大聖堂の精神史』筑摩書房, 2006 年。

坂本達哉 『社会思想の歴史—マキアヴェリからロールズまで』名古屋大学出版会, 2014 年。

鈴木美津子 『ルソーを読む英国作家たち—「新エロイーズ」をめぐる思想の戦い』  
国書刊行会, 2002 年。

田口紀子・吉川一義編 『文学作品が生まれるとき—生成のフランス文学』 京都大  
学学術出版会, 2010 年。

富田広樹 「ちょうど真ん中の海、中庸の海—ホセ・デ・カダルソ『モロッコ人の手  
紙』における地中海」 『北九州市立大学国際論集』第 18 号, 2020 年, 105-21 頁。

西井奨 「オウィディウス『名高き女たちの手紙』におけるギリシア神話の諸相」 未  
出版博士論文, 京都大学, 2014 年。

西尾治子 「ジョルジュ・サンドの女性思想—その両義性と現代性」 『慶応義塾大  
学日吉紀要』第 54 号, 2012 年, 33-60 頁。

平倉菜摘子 「ウルストンクラフトの『北欧からの手紙』における「男性性」の両義  
性」 『英語英文学叢誌』第 50 号, 2021 年, 31-47 頁。

---. 「『人間の権利の擁護』におけるウルストンクラフトのレトリック」 『秀明大学  
紀要』第 18 号, 2021 年, 77-88 頁。

---. 「ルソーを読むウルストンクラフト—『マライア』に響く『新エロイーズ』」 『英  
語英文学叢誌』第 47 号, 2018 年, 31-41 頁。

廣野由美子 『一人称小説とは何か—異界の「私」の物語』 ミネルヴァ書房, 2011 年。

前野みち子 『恋愛結婚の成立—近世ヨーロッパにおける女性観の変容』 名古屋大  
学出版会, 2006 年。

米本弘一 『フィクションとしての歴史—ウォルター・スコットの語りの技法』 英  
宝社, 2007 年。

渡邊洋子 『ドイツ「書簡文化」と女性』 同学社, 2006 年。